県道高松志度線及び県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

花池尻北遺跡

西久保谷遺跡

2005．10

香 川 県 教 育 委 員 会

県道高松志度線及び県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

花池尻北遺跡
西久保谷遺跡

2005. 10

香川県教育委員会

序　　文

花池尻北遺跡は、県道高松志度線建設に伴い発掘調査を行った香川県さぬき市志度に所在する遺跡です。香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成11年度に発掘調査を実施し、主として中世の集落跡を検出することができました。

また、西久保谷遺跡は、県道丸亀詫間豊浜線建設に伴い発掘調査を行った香川県三豊郡三野町大見に所在する遺跡です。香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成12年度に発掘調査を実施し、弥生時代以前と見られる石器製作跡、古墳時代後期の集落跡、奈良時代の集落跡を検出することができました。特に、奈良時代の製塩土器を大量に含む溝状遺構を検出し、この集落において製塩が生業の中心として行われていたことが明らかになりました。

整理作業は、平成15年度末に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが解散したことから、この事業を引き継いだ香川県埋蔵文化財センターが、西久保谷遺跡については平成16年11月～平成17年1月、花池尻北遺跡については平成17年2月～3月に実施し、「県道高松志度線及び県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　花池尻北遺跡・西久保谷遺跡」として刊行することとなりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県長尾土木事務所・西讃土木事務所及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年10月

香川県埋蔵文化財センター
所長　渡部明夫

花池尻北遺跡

例　言

1. 本報告書は、県道高松志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県さぬき市志度に所在する花池尻北遺跡（はないけじりきたいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、平成11年10月1日～平成12年1月31日で実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。
主任技師　香西　亮、技師　小野秀幸、調査技術員　山坂浩樹

4. 調査に当って、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、志度町教育委員会（当時）
地元自治会、地元水利組合

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の編集は小野が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。また、遺構は下記の略号により表示している。

ＳＢ	掘立柱建物跡	ＳＤ	溝状遺構	ＳＥ	井戸跡		
ＳＫ	土坑	ＳＰ	柱穴跡	ＳＸ	性格不明遺構	ＳＲ	自然河川

7. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1997年度版』による。

8. 写真図版（添付CD-ROM）のビューワーは、株式会社トリワークス（http://www.kuraemon.com/）の「蔵衛門2005 Professional」を使用した。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……1

第２章　立地と環境……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……4

第３章　調査の成果……6
　第１節　地形……6
　第２節　土層序……6
　第３節　遺構と遺物……10
　　1. Ⅰ区の遺構と遺物 ……10
　　2. Ⅱ区の遺構と遺物 ……34

第４章　まとめ……52
　1. 出土遺物について ……52
　2. 遺構の変遷 ……54

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺地形図
第３図　遺跡分布図
第４図　調査区全体図
第５図　Ⅰ・Ⅱ区全体土層図
第６図　Ⅰ区　北壁土層図及び遺構配置図
第７図　土層序模式図
第８図　Ⅰ区　ＳＢ01　平・断面図及び出土遺物実測図
第９図　Ⅰ区　ＳＢ02　平・断面図及び出土遺物実測図
第10図　Ⅰ区　ＳＢ03　平・断面図及び出土遺物実測図
第11図　Ⅰ区　柱穴　平・断面図
第12図　Ⅰ区　柱穴　出土遺物実測図
第13図　Ⅰ区　土坑　平・断面図（1）
第14図　Ⅰ区　土坑　平・断面図（2）及び出土遺物実測図
第15図　Ⅰ区　井戸　平・断面図及び出土遺物実測図
第16図　Ⅰ区　溝状遺構　断面図
第17図　Ⅰ区　溝状遺構　出土遺物実測図
第18図　Ⅰ区　性格不明遺構　平・断面図（1）
第19図　Ⅰ区　性格不明遺構　平・断面図（2）
第20図　Ⅰ区　土器溜り１平面図及び出土遺物実測図
第21図　Ⅰ区　自然河川ＳＲ01　断面図及び出土遺物実測図
第22図　Ⅰ区　包含層出土遺物実測図
第23図　Ⅱ区　北壁及び東壁土層図及び遺構配置図
第24図　Ⅱ区　試掘トレンチ土層図
第25図　Ⅱ区　ＳＢ04　平・断面図及び出土遺物実測図
第26図　Ⅱ区　ＳＢ05　平・断面図及び出土遺物実測図
第27図　Ⅱ区　ＳＢ06　平・断面図
第28図　Ⅱ区　柱穴　平・断面図（1）
第29図　Ⅱ区　柱穴　平・断面図（2）
第30図　Ⅱ区　柱穴　出土遺物実測図
第31図　Ⅱ区　土坑　平・断面図
第32図　Ⅱ区　井戸　平・断面図及び出土遺物実測図
第33図　Ⅱ区　溝状遺構　断面図及び出土遺物実測図（1）
第34図　Ⅱ区　溝状遺構　断面図及び出土遺物実測図（2）
第35図　Ⅱ区　自然河川ＳＲ01　断面図
第36図　Ⅱ区　自然河川ＳＲ02　断面図及び出土遺物実測図
第37図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（1）
第38図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（2）
第39図　Ⅰ・Ⅱ区　各遺構出土石器実測図
第40図　Ⅰ区　各遺構出土火打石実測図
第41図　Ⅱ区　各遺構出土火打石実測図
第42図　Ⅰ・Ⅱ区　鉄滓類出土遺構分布図及び金属製品実測図
第43図　出土遺物集成図１
第44図　出土遺物集成図２
第45図　出土遺物集成図３

付　図　目　次

付図１　花池尻北遺跡遺構配置図

Ｃ　Ｄ　目　次

観察表
遺構・遺物写真

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

当遺跡の発掘調査は平成11年度に実施されたが、香川県教育委員会（以下県教委）と財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下埋文センター）との間において、平成11年４月１日付けで締結された「埋蔵文化財発掘調査契約」には含まれておらず、県道丸亀詫間豊浜線三野町西久保谷遺跡の発掘調査が予定されていた。ところが、県教委が平成11年５月に実施した県道高松志度線建設事業に伴う試掘調査の結果を受け、県土木部道路建設課から県教委に対し、当遺跡について年度内での本調査実施の依頼があった。しかし、埋文センターの調査工程は上記の「埋蔵文化財発掘調査契約」により決定しており、新規の調査を埋文センターが受託するのは困難であった。そこで、県土木部道路建設課と県教委の間で協議が行われ、道路建設課のほかの事業との入れ替えを行うことで合意がなされ、西久保谷遺跡の発掘調査は次年度送りとし、花池尻北遺跡の発掘調査を実施することとなった。これを受けて、平成11年７月に長尾土木事務所と県教委との間で条件整備のため協議が行われ、平成11年10月からの発掘調査の実施が決定した。

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成11年10月１日から平成12年１月31日までの４ヶ月間、2,017㎡を対象として直営方式で実施した。基準点は旧国土座標第Ⅳ系を用いて、任意の点に設置した。調査区割りは、対象地内に認められた南北方向の段丘崖を境に東側をⅠ区、西側をⅡ区と設定し、さらに隣接耕作地への進入路確保のため、各調査区内で東西に分割して調査を行った。

発掘調査の体制は下記の通りである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総　括	課　長	小原克己
	課長補佐	小国史郎
	副主幹	廣瀬常雄
総　務	係　長	中村禎伸
	主　査	三宅陽子
	主　査	松村崇史
埋蔵文化財	係　長	西村尋文
	文化財専門員	森　格也
	主任技師	塩崎誠司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　括	所　長	菅原良弘
	次　長	川原裕章
総　務	副主幹（事務）	田中秀文
	係　長	新　一郎（6.1～）
	主　査	長尾寿江子（～5.31）
	主　査	山本和代（6.1～）
	主任主事	細川信哉（～5.31）
調　査	参　事	長尾重盛
	主任文化財専門員	藤好史郎
	文化財専門員	香西　亮
	技　師	小野秀幸
	調査技術員	山坂浩樹

整理作業期間は２ヶ月で、平成17年２月１日から開始し、平成17年３月31日に終了した。
整理作業の体制は下記のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総　括	課　長	北原和利
総務・	課長補佐	森岡　修
芸術文化グループ	主　任	香川浩章
	主　査	堀本由紀
	主任主事	八木秀憲
文化財グループ	課長補佐	大山眞充
	主　任	山下平重
	文化財専門員	佐藤竜馬
	主任技師	松本和彦

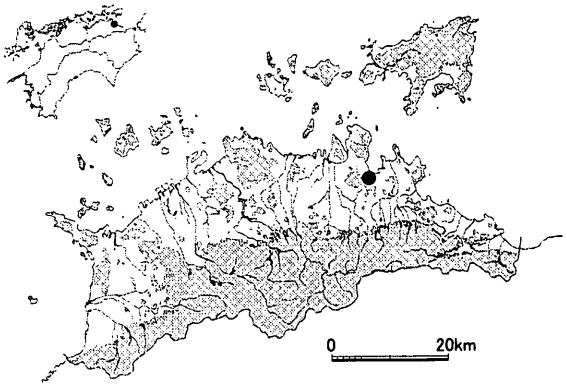
香川県埋蔵文化財センター

総　括	所　長	中村　仁
	次　長	渡部明夫
総　務	課　長	野保昌弘
	係　長	松崎日出穂
	主　査	塩崎かおり
	主　査	田中千晶
資料普及	課　長（兼）	渡部明夫
	主任技師	小野秀幸
	臨時職員	小林里美
		北濱敦子
		前田好美
		磯崎福子

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

香川県は四国本島北東部に位置し、瀬戸内海に大きく半島状に突き出た部分を県域とすることから、北側はほとんど海に面した形となる。一方、南半の多くは徳島県と接し、西側の一部で愛媛県と接する。県南部はそのほとんどが讃岐山脈にかかることから、山地が連なり、徳島県との県境をなす。また、県北部はこれらの山地から流下する河川により形成された沖積平野が点在するが、その面積は狭く、傾斜もややきつい。県内の河川は流域面積も狭く、総延長も総じて短い。

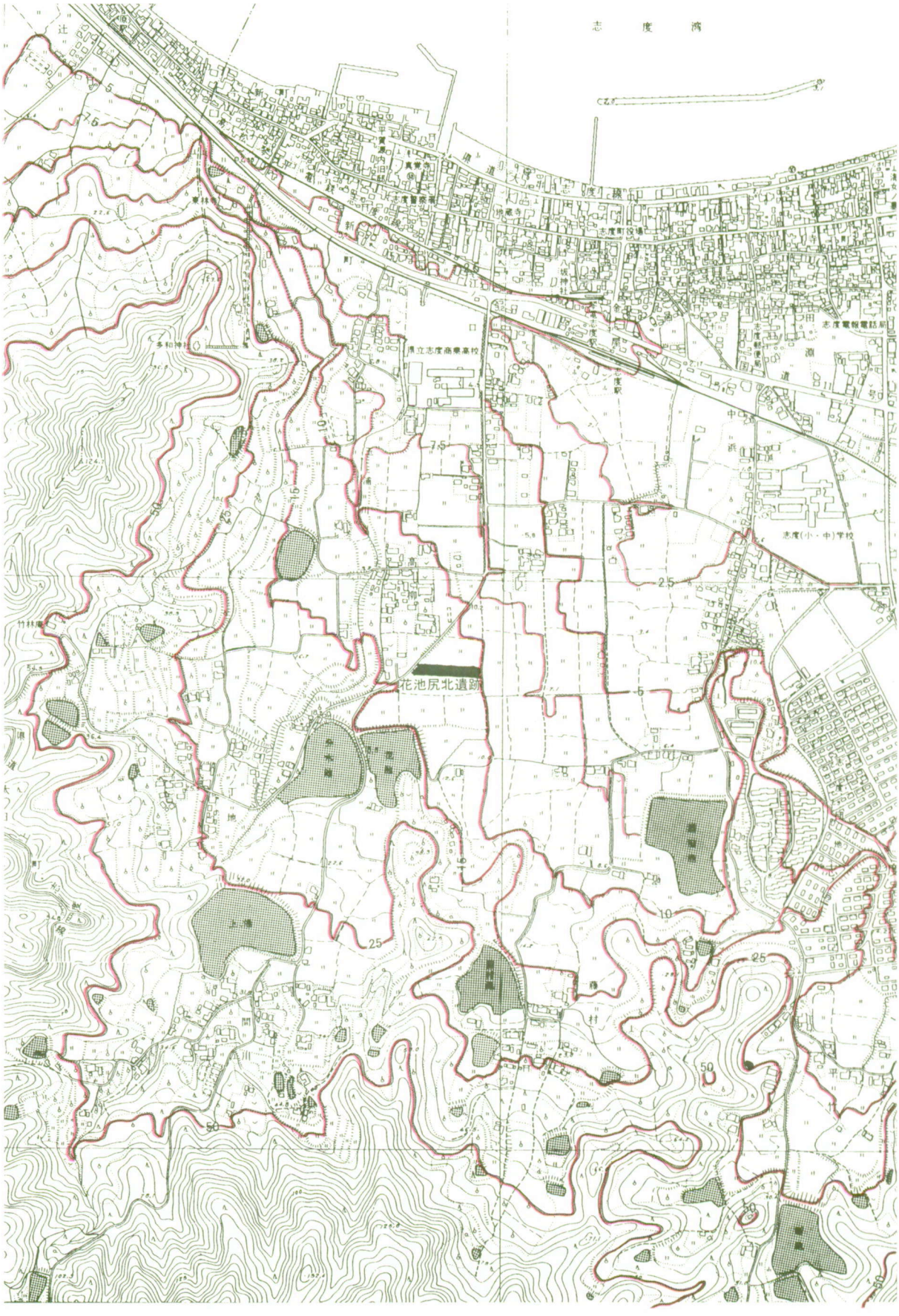


第１図　遺跡位置図

花池尻北遺跡が所在するさぬき市は2002（平成14）年４月１日、大川郡の津田町、大川町、志度町、寒川町、長尾町の５町が合併して成立した。県東部に位置し、市域は南北に長く、東は東かがわ市に、西は木田郡牟礼町・三木町にそれぞれ接する。北は瀬戸内海に面するほか、南は徳島県に接している。

地勢はそのほとんどが山地からなり、市南半は讃岐山脈とその裾部に当たる。また、北半は複数の山塊からなる。平野は市中央部へ讃岐平野東端が西から東へ入るほか、志度湾・津田湾等の沿岸部に海岸平野が形成される。河川は讃岐山脈に端を発する津田川及び鴨部川がある。

地質は南部の讃岐山脈の一部を除くと、その基盤は領家花崗岩からなる。



第２図　遺跡周辺地形図

第２節　歴史的環境

紙数の関係から、遺跡の所在する旧志度町を中心として記載する。なお、この地域に関しては花池尻北遺跡の西側で平成６・７年度に発掘調査が実施され、平成11年度に刊行された八丁地遺跡の報告書におおむね網羅されていることから、これを下敷きにして記載を進める。

同地域は、発掘調査事例の少ない地域であるが、近年、高松東道路建設や圃場整備等に伴う発掘調査が実施されてきた。鴨部川流域の沖積平野では、鴨部・川田遺跡、鴨部南谷遺跡、また末では末窯跡群等が挙げられる。

花池尻北遺跡の所在する志度湾沿岸平野及びそれらを囲む山塊付近ではほとんど遺跡の状況は知られていないが、花池尻北遺跡の調査と相前後して、八丁地遺跡・花池尻中遺跡・花池尻遺跡の発掘調査が実施されている。これらにより、この地域の状況が断片的ながら明らかとなりつつある。

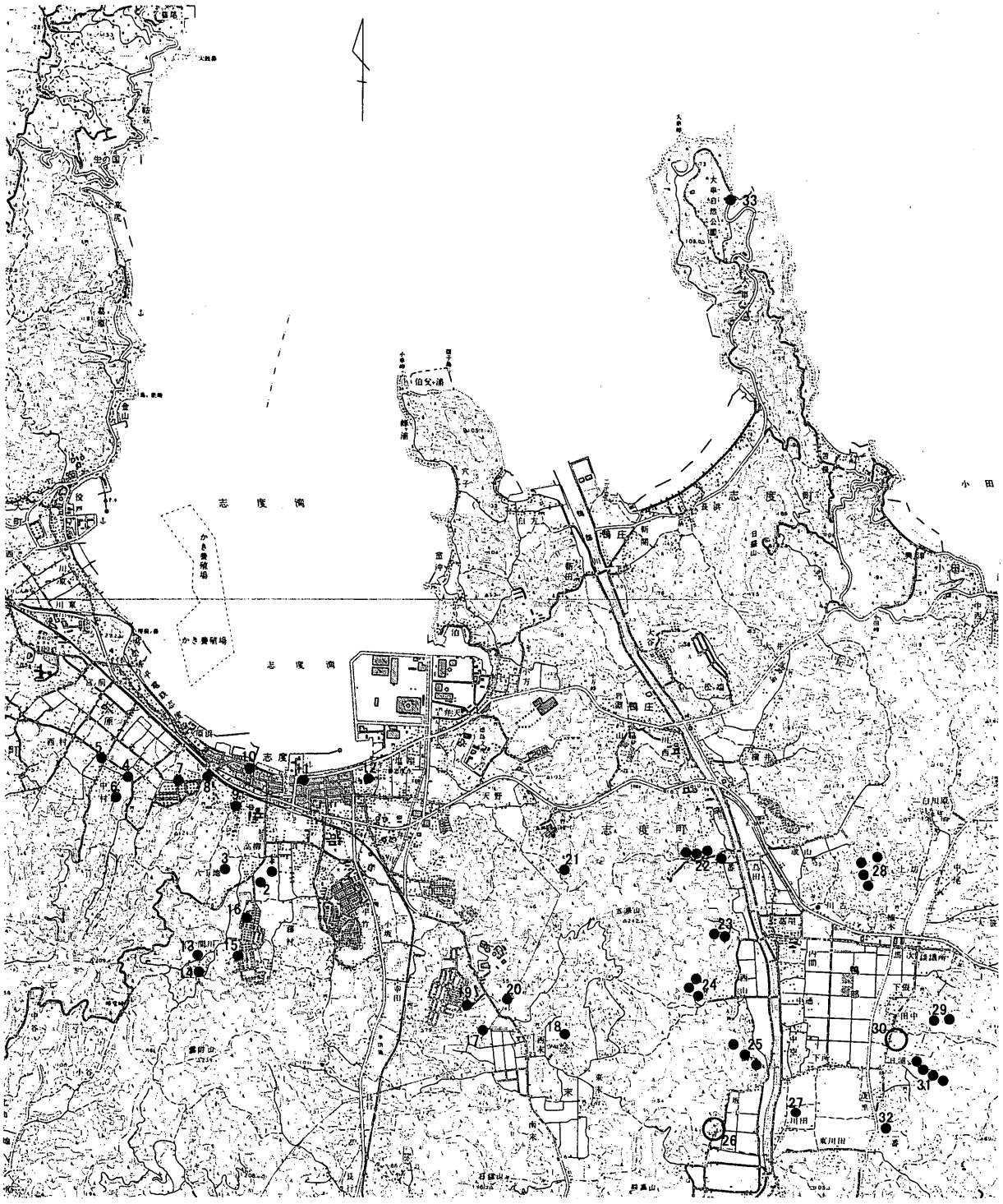
旧石器時代・縄文時代については明確な遺構を伴わず、混入資料として遺物が認められる例がわずかに八丁地遺跡、鴨部・川田遺跡で確認できる。八丁地遺跡からはサヌカイト製のナイフ形石器が１点出土しているほか、鴨部・川田遺跡で細石刃核と見られる資料が出土している。また、八丁地遺跡からは縄文時代後期～晩期の土器が出土しているほか、鴨部南谷遺跡でも縄文時代後期の遺物の出土が認められる。これらの状況から、少なくとも八丁地遺跡の周辺では旧石器時代に遡る遺跡の存在が想定される。

弥生時代については、前期～中期の遺跡として、先述の鴨部・川田遺跡で環濠集落の調査が行われている。中期末には製塩土器がまとまって出土した天野遺跡の存在が知られる。

後期は志度湾沿岸地域において八丁地遺跡・花池尻北遺跡等で当該期の遺物が出土している。特に八丁地遺跡においては溝状遺構・旧河道等から比較的多量の遺物の出土が見られ、近隣に集落跡の存在が想定できる。また、花池尻北遺跡西方の丘陵の裏側、牟礼町所在の原遺跡・原中村遺跡でも当該期の集落跡の存在が、発掘調査により判明している。

古墳時代については大規模古墳群の存在は知られない。隣接する高松平野や津田湾沿岸部に展開する大規模古墳群の存在に規制され、築造し得なかったものと考えられる。花池尻北遺跡西側の丘陵先端部、志度湾に面する位置で丸山古墳・越窓古墳（共に消滅）や、多和神社古墳が、遺跡南方の丘陵先端部に茶臼山古墳（消滅）がそれぞれ所在したが、いずれも実態不明なものばかりである。鴨部川流域では西岸北方から順に、五所古墳群・六番古墳群・西山古墳群・坂子古墳群・坂子若宮古墳群が、東岸では北方から順に成山古墳群・田中古墳群・日浦古墳群がそれぞれ存在する。実態不明なものが多いが、横穴式石室を持たないこと、形状不明なものが多いものの石棺が露出している例が多いことから、前期古墳の可能性が想定されるものが多いようである。大半が円墳と見られ、坂子１号墳のみが前方後円墳とされ、全長約30ｍを測り、主体部に竪穴式石槨が想定されている。また、成山古墳群１号墳（円墳）からは組合式箱形石棺が２基検出され、そのうち１基からは鉄剣・仿製内行花文鏡・勾玉・管玉等の出土が認められたようである。また、坂子若宮古墳群は横穴式石室が認められるようで、後期古墳が主体となるようである。中でも、若宮神社後方墳からは四注式屋根形と見られる陶棺が出土しているようである。大串半島の東部先端付近に立地する長蛇ヶ谷遺跡は、多量の製塩土器が出土しており、古墳時代の製塩遺跡であると想定される。

古代に入ると、花池尻北遺跡周辺は寒川郡造田郷に属する。この時期の遺跡周辺は明瞭な遺跡に乏しく、実態不明である。八丁地遺跡で７世紀中葉頃の遺物が出土した溝状遺構の存在が認められるほか、鎌倉時代の自然河川等から７～８世紀代の遺物の出土は見られることから、遺跡南方及び



1. 花池尻北遺跡
2. 花池尻中遺跡
3. 八丁池遺跡
4. 原中村遺跡
5. 原中村遺跡
（原路拡幅部分）
6. 原遺跡
7. 丸山古墳（消滅）
8. 多和神社
9. 越窓古墳（消滅）
10. 岡の松遺跡
11. 志度城館跡
12. 志度寺
13. 間川遺跡A
14. 間川遺跡B
15. 間川遺跡C
16. 茶臼山古墳（消滅）
17. 西末古墳
18. 末1号窯跡
19. 末2号窯跡
20. 末3号窯跡
21. 天野遺跡
22. 五所古墳群
23. 六番古墳群
24. 西山古墳群
25. 坂子古墳群
26. 坂子若宮古墳群
27. 鴨部・川田遺跡28. 末2号窯跡
28. 成山古墳群
29. 田中古墳群
30. 鴨部南谷遺跡
31. 日浦古墳群
32. 二番遺跡
33. 長蛇ヶ谷跡

第３図　遺跡分布図

第４図　調査区全体図

周辺に当該期の遺跡の存在が想定できる。生産遺跡は末で７世紀前半の志度末３号窯跡が調査されている。

古代末から中世にかけては、遺跡周辺が比較的発展した地域となる。当遺跡の北方に所在する四国霊場第86番札所である志度寺は平安時代前期頃の創建とされる。中世前半期には志度荘が成立していたものと想定される。当該期の集落が八丁地遺跡・花池尻遺跡・花池尻中遺跡等で確認されており、志度荘との関連が想定される。

中世後半期にはいると、志度は湊町としても発展したようで、『兵庫北関入舩納帳』に記載が見える。

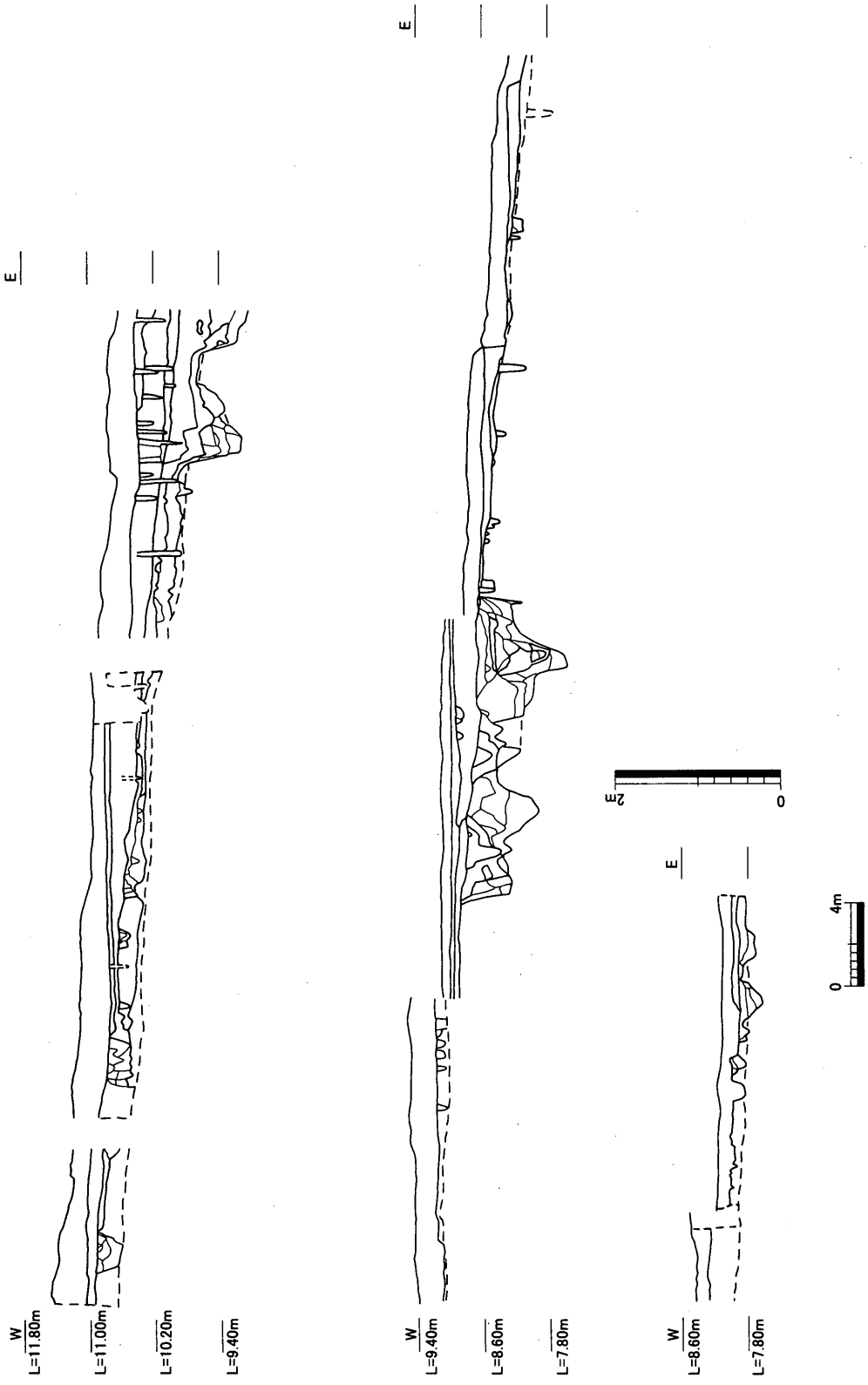
第３章　調査の成果

第１節　地形

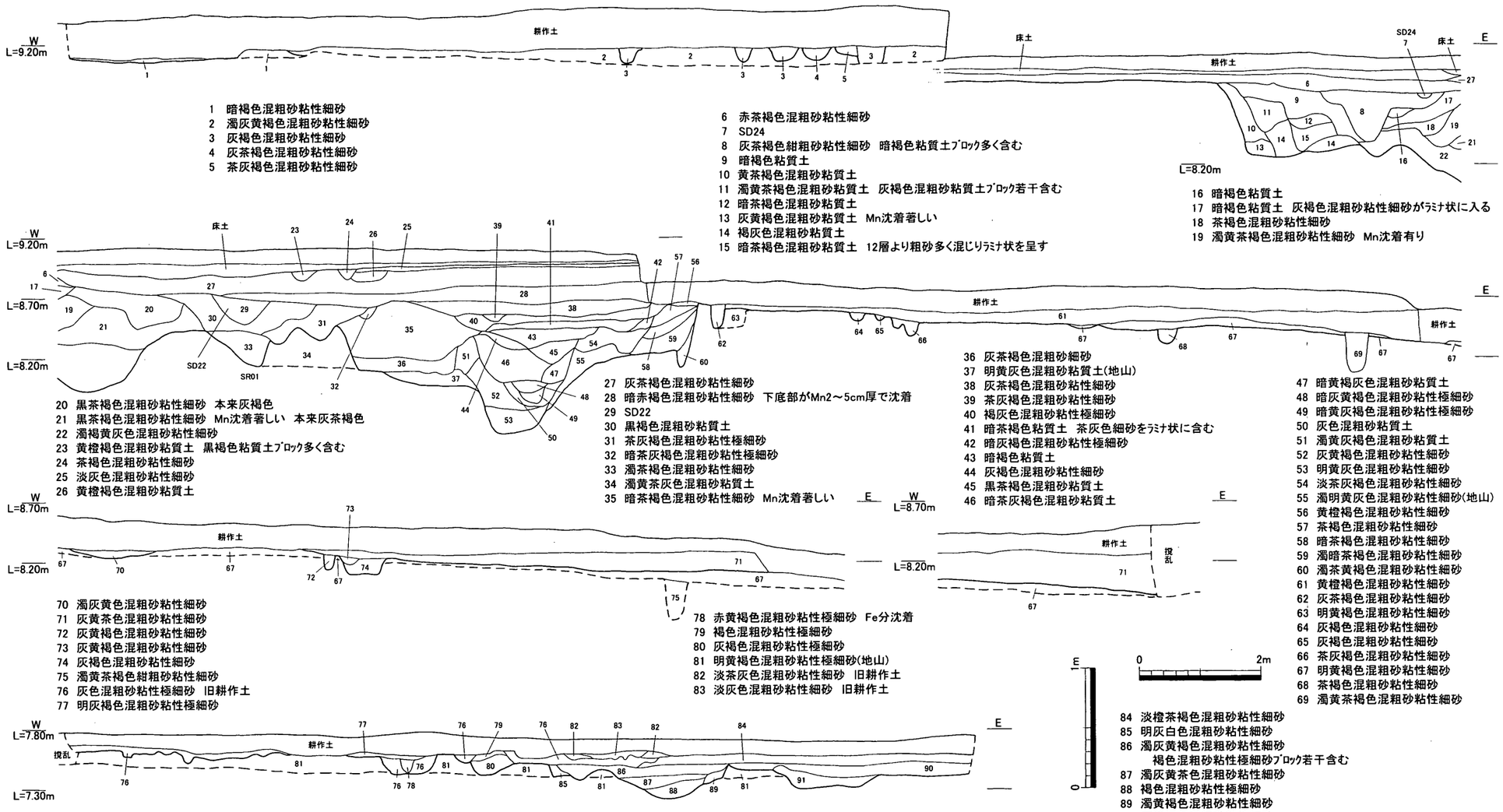
調査対象地は、雲附山から北へ派生する丘陵の裾、南西から北東へ延びる緩傾斜面上に立地する。対象地は東西に長く、約140ｍを測るが、西端と東端では現地表面の比高差が約3.70ｍあり、西が高く、東側が低い。また、対象地の中央西寄りには比高差約1.20ｍの段差が認められる。この段差を基準に対象地を西と東に分けて、調査区を設定した。各調査区内においても、耕地化が行なわれた際に段カットが成されたらしく、約0.30～0.40ｍの段差が認められる。

第２節　土層序

対象地は西側が高く東側へ向けて低くなっており、耕地化に伴う平坦化の影響で全体的に耕地の単位西側で堆積環境が不明瞭になっている。著しいところは耕作土直下で地山層に至る。したがって堆積層の連続性が十分に追えない部分があるものの、全体の堆積環境を模式化して概観する。なお、土層観察は全て調査区北壁（第５～７・23図）を用いた。最上層は耕作土で調査区全面に共通する。その下層には一部で②層の灰色系粗砂混じり粘性細砂の堆積が認められる。耕作土との境界部分は平坦で、耕地化に伴う平坦化が成されたものか旧耕作土の可能性がある。さらにその下では③層の橙・茶褐色系粗砂混じり粘性細砂の堆積が認められる。調査区の大半では耕作土直下でこの土が認められるが、部分的に模式図において下層に位置付けた④層の赤褐色系粗砂混じり粘性細



第5図　Ⅰ・Ⅱ区全体土層図



1 暗褐色混粗砂粘性細砂
2 濁灰黄褐色混粗砂粘性細砂
3 灰褐色混粗砂粘性細砂
4 灰茶褐色混粗砂粘性細砂
5 茶灰褐色混粗砂粘性細砂

6 赤茶褐色混粗砂粘性細砂
7 SD24
8 灰茶褐色紺粗砂粘性細砂 暗褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多く含む
9 暗褐色粘質土
10 黄茶褐色混粗砂粘質土
11 濁黄茶褐色混粗砂粘質土 灰褐色混粗砂粘質土ﾌﾞﾛｯｸ若干含む
12 暗茶褐色混粗砂粘質土
13 灰黄褐色混粗砂粘質土 Mn沈着著しい
14 褐灰色混粗砂粘質土
15 暗茶褐色混粗砂粘質土 12層より粗砂多く混じりﾗﾐﾅ状を呈す

16 暗褐色粘質土
17 暗褐色粘質土 灰褐色混粗砂粘性細砂がﾗﾐﾅ状に入る
18 茶褐色混粗砂粘性細砂
19 濁黄茶褐色混粗砂粘性細砂 Mn沈着有り

20 黒茶褐色混粗砂粘性細砂 本来灰褐色
21 黒茶褐色混粗砂粘性細砂 Mn沈着著しい 本来灰茶褐色
22 濁褐黄灰色混粗砂粘性細砂
23 黄橙褐色混粗砂粘質土 黒褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多く含む
24 茶褐色混粗砂粘性細砂
25 淡灰色混粗砂粘性細砂
26 黄橙褐色混粗砂粘質土

27 灰茶褐色混粗砂粘性細砂
28 暗赤褐色混粗砂粘性細砂 下底部がMn2～5cm厚で沈着
29 SD22
30 黒褐色混粗砂粘質土
31 茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
32 暗茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
33 濁茶褐色混粗砂粘性細砂
34 濁黄茶灰色混粗砂粘質土
35 暗茶褐色混粗砂粘性細砂 Mn沈着著しい

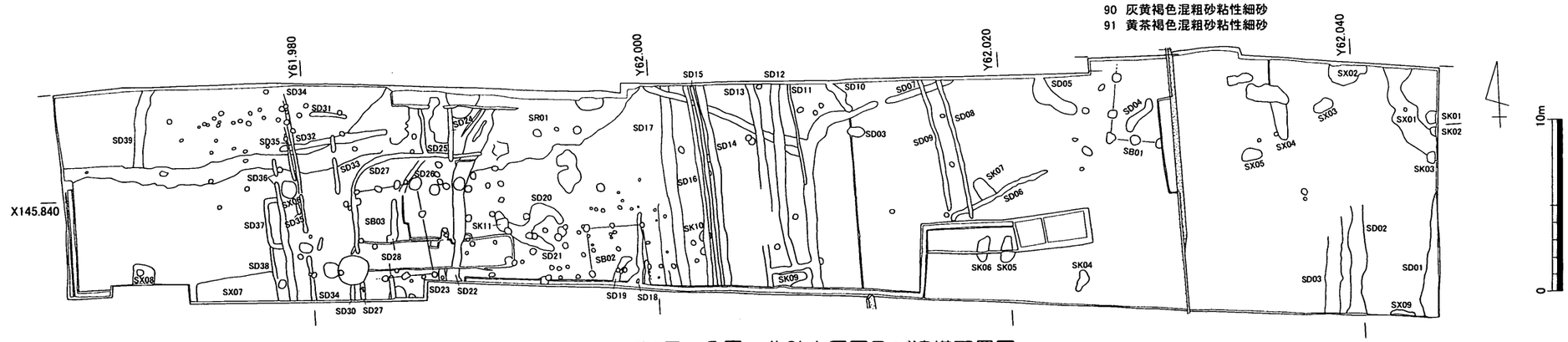
36 灰茶褐色混粗砂細砂
37 明黄灰色混粗砂粘質土(地山)
38 灰茶褐色混粗砂粘性細砂
39 茶灰褐色混粗砂粘性細砂
40 褐灰色混粗砂粘性極細砂
41 暗茶褐色粘質土 茶灰色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
42 暗灰褐色混粗砂粘性極細砂
43 暗褐色粘質土
44 灰褐色混粗砂粘性細砂
45 黒茶褐色混粗砂粘質土
46 暗茶灰褐色混粗砂粘質土

47 暗黄褐灰色混粗砂粘質土
48 暗灰黄褐色混粗砂粘性極細砂
49 暗黄灰褐色混粗砂粘性極細砂
50 灰色混粗砂粘質土
51 濁黄灰褐色混粗砂粘質土
52 灰黄褐色混粗砂粘性細砂
53 明黄灰色混粗砂粘性細砂
54 淡茶灰褐色混粗砂粘性細砂
55 濁明黄灰色混粗砂粘性細砂(地山)
56 黄橙褐色混粗砂粘性細砂
57 茶褐色混粗砂粘性細砂
58 暗茶褐色混粗砂粘性細砂
59 濁暗茶褐色混粗砂粘性細砂
60 濁茶黄褐色混粗砂粘性細砂
61 黄橙褐色混粗砂粘性細砂
62 灰茶褐色混粗砂粘性細砂
63 明黄褐色混粗砂粘性細砂
64 灰褐色混粗砂粘性細砂
65 灰褐色混粗砂粘性細砂
66 茶灰褐色混粗砂粘性細砂
67 明黄褐色混粗砂粘性細砂
68 茶褐色混粗砂粘性細砂
69 濁黄茶褐色混粗砂粘性細砂

70 濁灰黄色混粗砂粘性細砂
71 灰黄茶色混粗砂粘性細砂
72 灰黄褐色混粗砂粘性細砂
73 灰黄褐色混粗砂粘性細砂
74 灰褐色混粗砂粘性細砂
75 濁黄茶褐色紺粗砂粘性細砂
76 灰色混粗砂粘性極細砂 旧耕作土
77 明灰褐色混粗砂粘性極細砂

78 赤黄褐色混粗砂粘性極細砂 Fe分沈着
79 褐色混粗砂粘性極細砂
80 灰褐色混粗砂粘性極細砂
81 明黄褐色混粗砂粘性極細砂(地山)
82 淡茶灰色混粗砂粘性細砂 旧耕作土
83 淡灰色混粗砂粘性細砂 旧耕作土

84 淡橙茶褐色混粗砂粘性細砂
85 明灰白色混粗砂粘性細砂
86 濁灰黄褐色混粗砂粘性細砂
褐色混粗砂粘性極細砂ﾌﾞﾛｯｸ若干含む
87 濁灰黄茶色混粗砂粘性細砂
88 褐色混粗砂粘性極細砂
89 濁黄褐色混粗砂粘性細砂
90 灰黄褐色混粗砂粘性細砂
91 黄茶褐色混粗砂粘性細砂



第6図 Ⅰ区 北壁土層図及び遺構配置図

砂と逆転する箇所が認められる。遺構面は基本的に③層上面で捉えているが、同層は模式図中で触れたとおり、細分が可能であり、細分した層境上面から遺構の掘り込みが認められる。この傾向は西側のⅡ区東半において顕著である。④層は東側のⅠ区においては③層の下で検出しているが、Ⅱ区では②層の下で検出している。同系色だが、堆積の時期が異なるものと想定する。④層の下は⑤層の黒・暗褐色系粗砂混じり粘質土が堆積する。Ⅰ区では⑤層は旧河道内の一埋土として捉えられるが、Ⅱ区では広範囲にわたって堆積し、旧河道の最終埋没層に近い存在である。一部ではこの⑤層上面に掘り込み面を持つ遺構が認められることから、調査時ではここを第２面に設定した。しかし、土層観察の結果、この⑤層と③層の間に間層があり、その間層上面から掘り込みが認められる遺構もあることから、実際はこの面に遺構面を設定する必要があったようである。⑥層の灰青色系粗砂混じり粘性細砂は⑤層同様、旧河道の一埋土である。⑦層は黄褐色系の粗砂混じり粘質土で当遺跡の地山を成す。Ⅰ区東半部において遺構面から約2.20ｍの深さまで下層確認トレンチを掘削した。この際、⑦層は約1.70ｍの厚さで堆積しており、下部においてはグライ化し、黄灰青色を呈することを確認した。さらにその下では黒褐色粘質土・灰色混礫粗砂の堆積が認められ、著しい湧水が確認できた。詳細な記録は、湧水に伴う崩落の可能性があったため、実施できなかった。

①層	耕作土・床土
②層	灰色系粗砂混じり粘性細砂（旧耕作土か）
③層	橙・茶褐色系粗砂混じり粘性細砂（２ないし３層に細分可）
④層	赤褐色系粗砂混じり粘性細砂
⑤層	黒・暗褐色系粗砂混じり粘質土
⑥層	灰青色系粗砂混じり粘性細砂
⑦層	黄褐色系粗砂混じり粘質土（地山）

第７図　土層序模式図
（波線は遺構面を、太線は地山面を示す。）

第３節　遺構と遺物

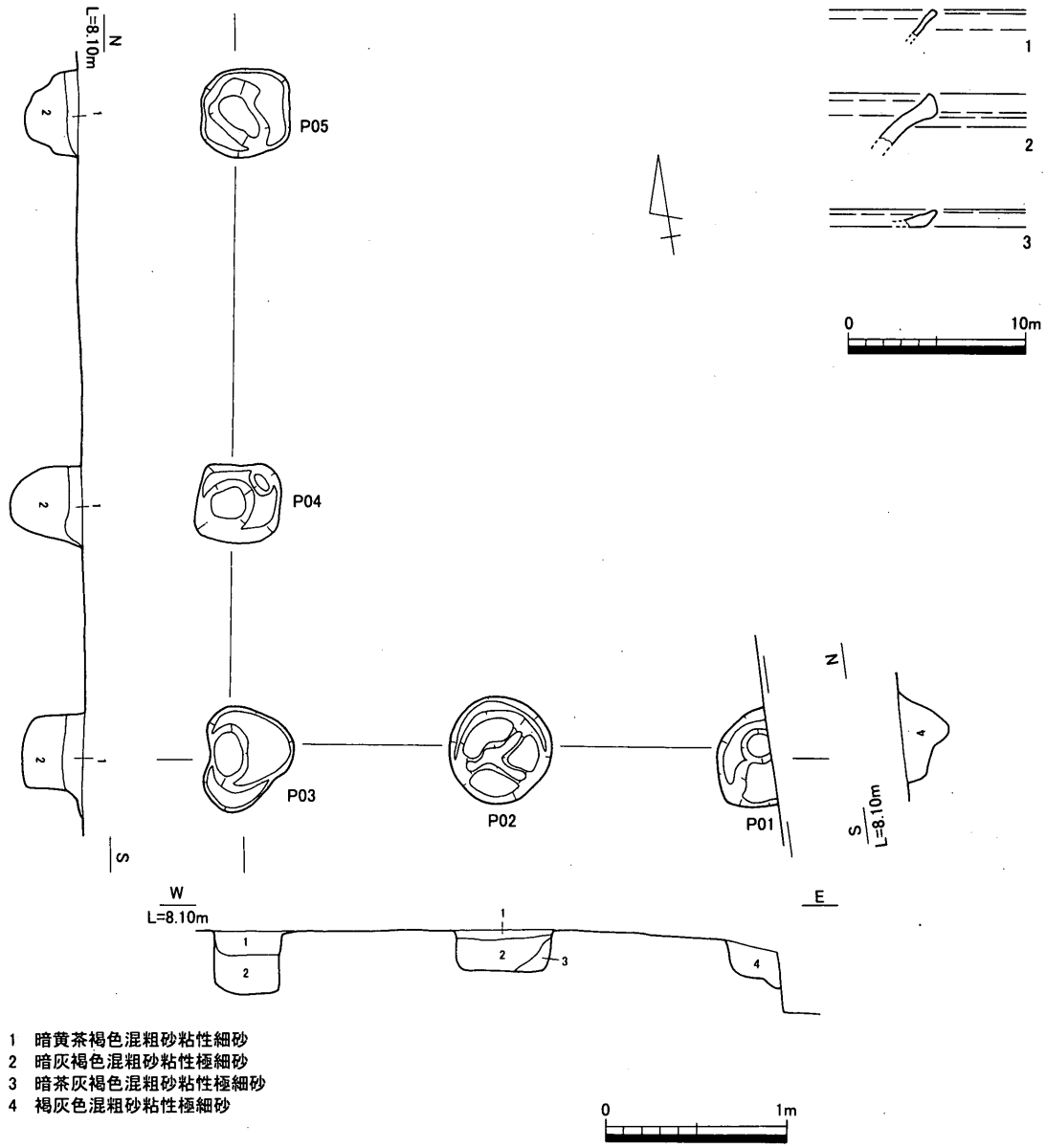
１．Ⅰ区の遺構と遺物

掘立柱建物

ＳＢ01（第８図）

Ⅰ区東半北寄りで検出した遺構である。現状で５基の柱穴が確認できた。北側はＰ05以北が調査対象地外へ延び、東側はＰ01がコンクリート畦畔によって削平され、これ以東は耕地化に伴い著しい削平を受けて遺存していない。このため、建物の詳細な規模は不明であるが、南壁及び西壁の一部を検出したものと考えられる。現状で梁行2.90ｍ（２間）以上、桁行3.50ｍ（２間）以上の規模の建物が想定できる。柱穴Ｐ01～Ｐ04は芯々間距離が概ね1.40ｍを測るが、Ｐ04・Ｐ05間は約2.10ｍを測り、やや距離が異なる。柱穴の平面形状は円形ないし隅丸方形を呈し、規模は0.50～0.60ｍ程度である。また、深さは約0.22～0.40ｍでややばらつきがある。埋土は概ね暗灰褐色の粗砂混じり粘性細砂ないし極細砂を主体とする。

出土遺物は少量で、辛うじて図化に耐え得る３点を掲載した。いずれもＰ01からの出土である。１は須恵器椀である。器壁はやや薄く、口縁端部がやや肥厚し丸くおさめられたものである。２は須恵器鉢に分類した。口縁部の小片であることからほかの器種である可能性もある。３は土師質土器小皿である。底部の一部から口縁部が遺存するが、小片のため詳細な器形が判別し難い。遺物の形状から中世のものと想定するが、詳細な時期については不明である。

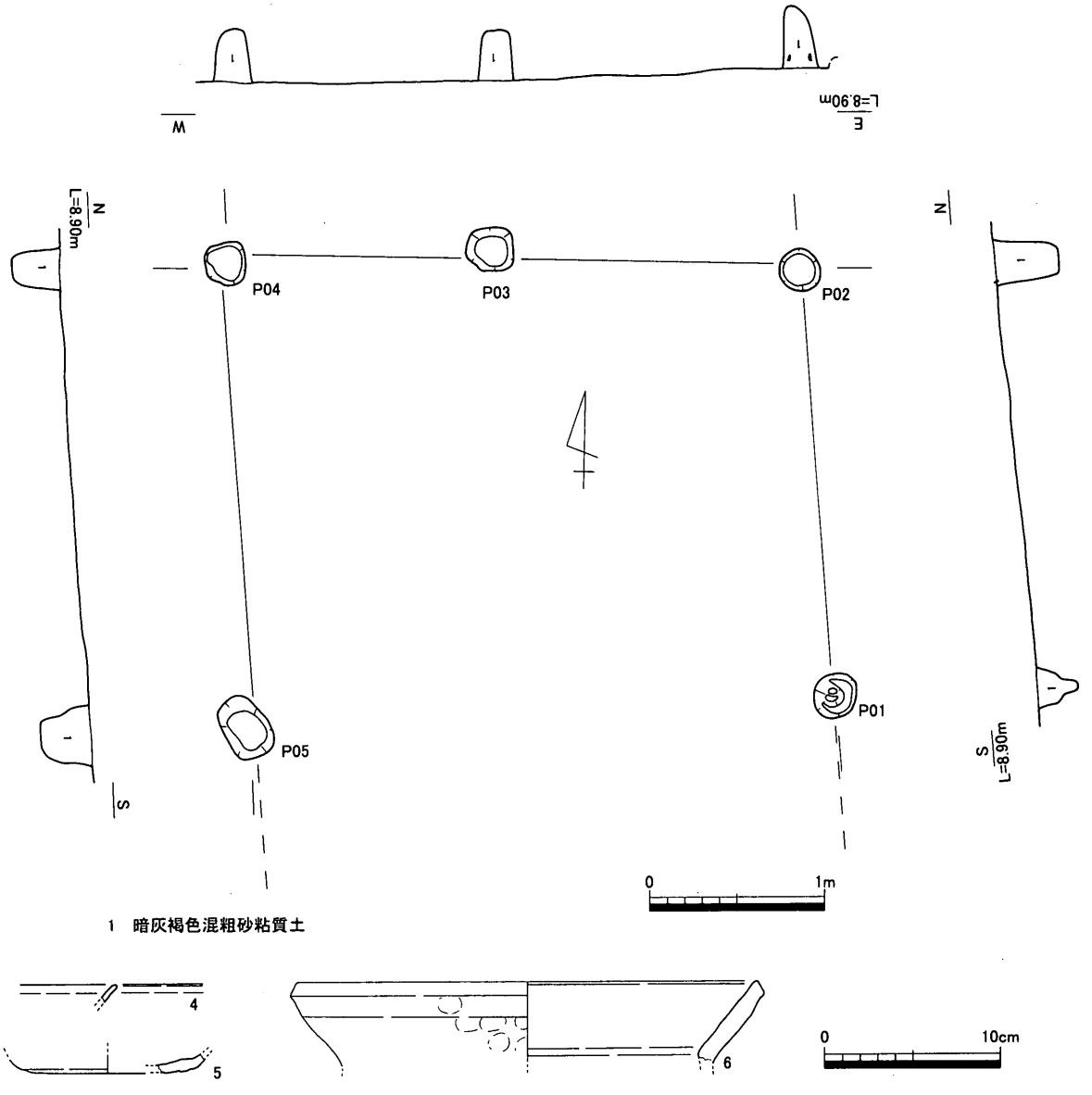


第８図　Ⅰ区　ＳＢ01　平・断面図及び出土遺物実測図

ＳＢ02（第９図）

調査区中央南寄りで検出した遺構である。現状で５基の柱穴が確認できた。南側が調査区外へ延びるため、詳細な規模については不明である。現状で梁行 3.20 m（２間）以上、桁行 2.40 m（１間）以上の規模の建物が想定できる。柱穴Ｐ 02・03 間の芯々間距離は約 1.80 m、Ｐ 03・04 間は約 1.50 mを測るが、Ｐ 01・02 間は約 2.40 m、Ｐ 04・05 間は約 2.60 mを測り、梁行と桁行で柱間が異なる。柱穴の平面形状は円形ないしは隅丸方形を呈し、規模は約 0.20 ～ 0.4 mを測る。深さは約 0.20 ～ 0.35 mを測り、埋土はいずれも暗灰褐色の粗砂混じり粘質土である。

出土遺物は少量で、辛うじて図化に耐え得る３点を図化した。４は土師質土器小皿に分類した。口縁部の小片であり、詳細不明である。５は土師質土器坏底部である。小片のため、全体の器形については不明であるが、外面に粘土紐巻き上げの痕跡が認められ、底部切り離しはヘラ切りによる

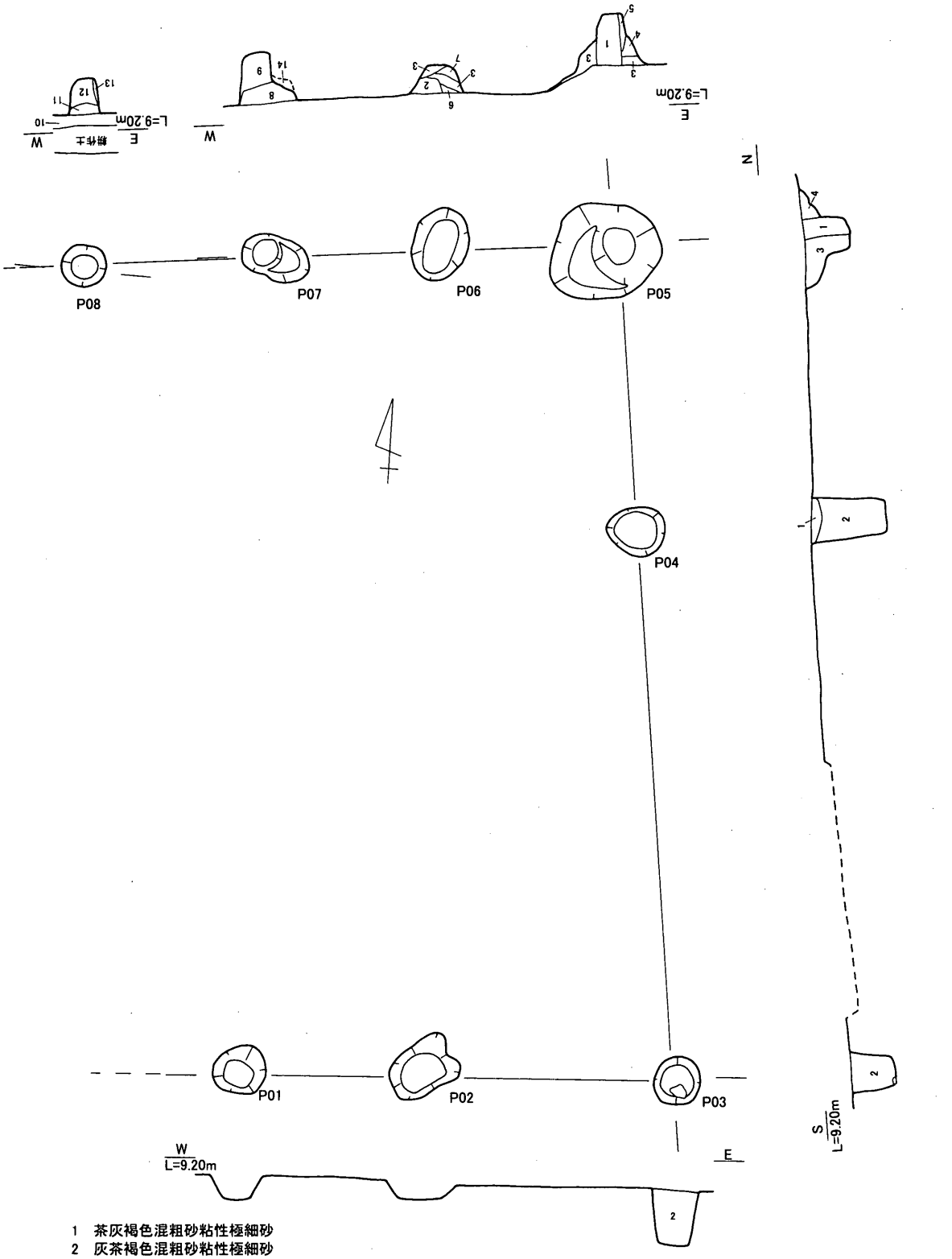


第9図　Ⅰ区　ＳＢ02　平・断面図及び出土遺物実測図

と見られる。内面は回転指ナデが施される。６は土師質土器土鍋に分類した。小片であることから詳細は不明である。これらのほかに土師質土器坏・土鍋、黒色土器椀等の小片が出土している。以上の状況から、当遺構は中世期のものと想定するが詳細な時期については不明である。

ＳＢ03（第10図・第40図）

調査区西半中央の南寄りで検出した遺構である。現状で８基の柱穴が確認できた。西壁を構成するための柱穴が確認できなかったほか、Ｐ03・04間においても柱穴の存在が確認できなかった。周辺の状況から見ると、西壁が本来存在した位置は後世の著しい削平を受けていることから、柱穴が削平されたものと想定できる。現状では梁行3.50ｍ（３間）以上、桁行5.40ｍ（３間）程度の規模の建物が想定できる。柱穴は北壁及び南壁を構成するものについては芯々間距離が概ね1.20ｍを測



1　茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
2　灰茶褐色混粗砂粘性極細砂
3　灰茶褐色混粗砂粘性極細砂
　黄褐色混粗砂粘質土(地山)ﾌﾞﾛｯｸ若干含む
4　濁黄灰色混粗砂粘性極細砂
5　灰色混粗砂粘性極細砂
6　濁黄茶褐色混粗砂粘性極細砂
7　暗灰色粘性極細砂
8　灰黄褐色混粗砂粘性細砂
9　灰茶褐色混粗砂粘性細砂
10　暗赤褐色混粗砂粘性細砂
11　茶褐灰色混粗砂粘性細砂
12　褐色混粗砂粘性細砂
13　濁黄茶褐色混粗砂粘性極細砂(地山)
14　黄褐色混粗砂粘質土(地山)

第10図　Ⅰ区　ＳＢ03　平・断面図及び出土遺物実測図

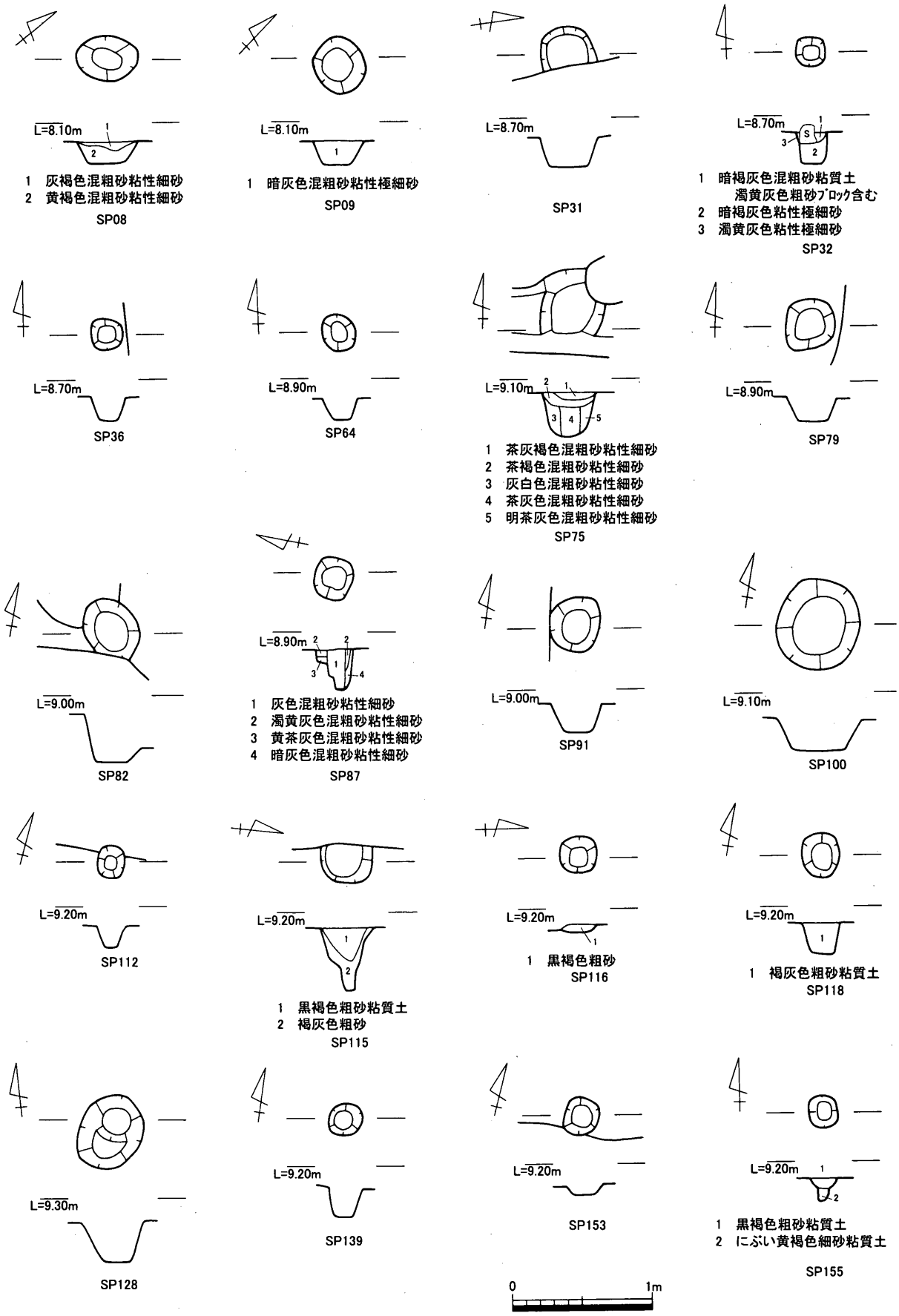
るが、東壁では概ね1.80ｍの距離をとり、桁行方向でやや長く柱間を置くものと想定できる。Ｐ03・04間では試掘トレンチが掘削されており、遺構検出面から約0.05～0.10ｍ掘り下がっていることから、削平された可能性も想定できるが、周辺の柱穴の深さが浅くとも0.15ｍを測ることから、もし存在してもその痕跡は残るものと想定でき、この部位においては元から柱穴の存在がなかった可能性がある。柱穴の平面形状はやや不整な円形ないし長楕円形を呈し、深さは約0.15～0.50ｍとばらつきがある。Ｐ05・07は掘り込みが二段になっており、前者では柱痕が認められる。いずれの建物も柱は抜き取られたものと想定できる。埋土は灰茶褐色系の粗砂混じり粘性極細砂を主体とする。

出土遺物は少量で、辛うじて図化に耐え得るものを２点掲載した。７は土師質土器小皿である。底部の小片であることから詳細は不明であるが、底部切り離しはヘラ切りで、内面は回転指ナデにより仕上げられる。また、図化していないがＰ04・05からは鉄片及び鉄滓が少量出土している。これ以外には土師質土器・瓦器の小片が出土している。第40図195はＰ04出土の火打石である。厚さ１㎝程度の剥片を素材とし、その周縁部ほぼ全てを使用したものである。石材は赤色チャートである。

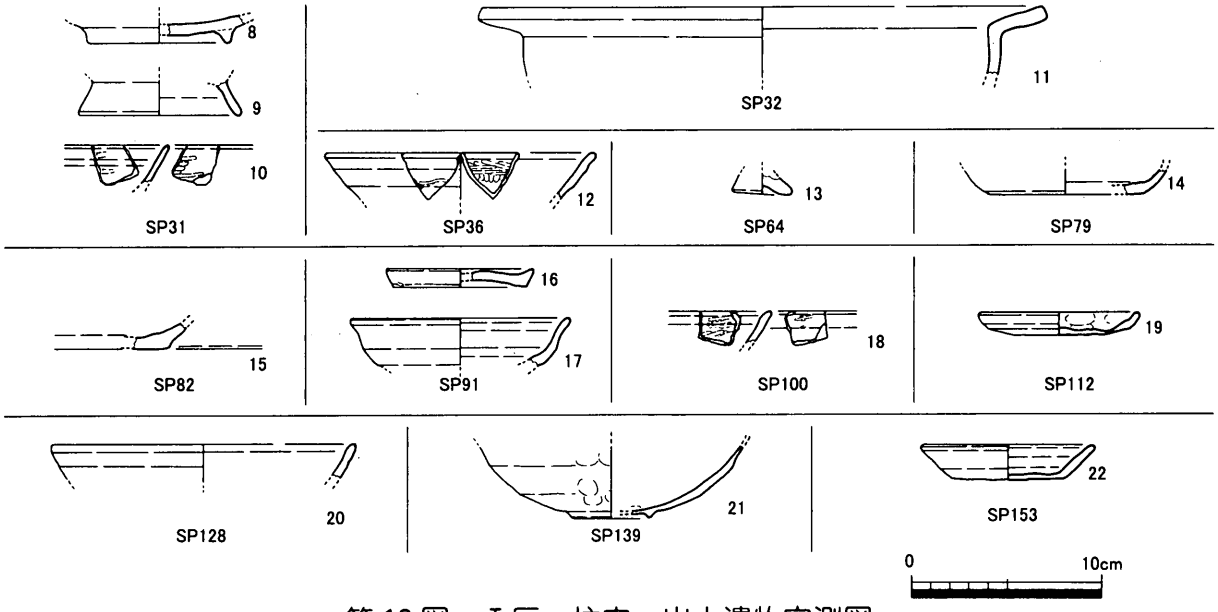
以上から当遺構は中世頃の所産と想定できるが、詳細な時期については不明である。

柱穴（第11・12図）

138基検出した。分布は調査区中央西寄りに集中し、西端及び東半ではまばらになる。ただし、調査区が耕地化に伴い段カットされていることを考えると、本来的にはもう少し密度の濃い分布を示していた可能性も想定できる。平面形状は概ね円形を呈するものが多く、直径は0.20～0.60ｍを測る。深さは0.05～0.45ｍとバラつきがあるものの、多くが0.30ｍ程度を測る。第11図は遺物が出土した柱穴のみを図化した。各遺構の位置については付図１を参照されたい。第12図は各柱穴出土遺物を図化した。総じて遺物の出土量は少なく、器形が判別できるものも限られる。８～10はＳＰ31出土遺物である。８は須恵器椀である。底部の小片であり、全体の器形については不明であるが、高い高台がやや直立気味に底部に貼り付けられる。内外面の調整はやや摩滅が進み詳細不明であるが、内面見込みは比較的平滑に仕上げられている。９は土師質土器足高高台椀である。高台部のみのため全体の器形については不明であるが、高く踏ん張った形状を取る。10は黒色土器椀である。内外面を黒色処理する。口縁部の小片であり全体の器形については不明であるが、体部からやや直線的に外上方へ延びる形状と想定できる。口縁端部はわずかに外反する。内外面共に横位のヘラ磨きが認められる。以上の資料から片桐編年（片桐　1992）のⅠ－④期（10世紀末）～Ⅱ－⑥期（12世紀末）と幅を持たせた年代を置いておく。11はＳＰ32出土の土師質土器土鍋である。小片であり、全体の器形は不明である。12はＳＰ36出土の須恵器椀である。小片であることから詳細不明な点が多いが、体部から口縁部へやや直線的に延び、口縁直下でわずかに外反させる。外面は回転指ナデにより調整後、回転ヘラミガキと見られるミガキ痕が一条認められる。内面は比較的密な横位を基本とするヘラミガキが施される。13はＳＰ64出土の製塩土器脚部である。体部が遺存しないため詳細不明であるが、倒杯形の脚台である。14はＳＰ79出土の土師質土器坏底部である。小片のため詳細不明であるが、底部切り離しを回転ヘラ切りによって行い、板ナデを行なったと見られる痕跡が認められる。内面は回転指ナデである。15はＳＰ82出土の土師質土器坏底部である。円盤状高台を持つものと想定できる。10世紀後半頃のものか。16・17はＳＰ91出土遺物である。共に土師質土器である。16は小皿。底部は平底で、体部は斜め上方へ短く立ち上がり、浅い器形をな



第11図　Ⅰ区　柱穴　平・断面図



第12図　Ⅰ区　柱穴　出土遺物実測図

す。底部と体部の境は強く屈曲し明瞭な稜線をなす。内面と体部外面は回転指ナデである。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を留める。17は坏。底部を欠損し全体の器形は不明であるが、体部は内湾気味に立ち上がり、中央付近で反転する。18はＳＰ100出土の須恵器椀である。小片であることとやや摩滅が進んでいることから詳細は不明であるが、内面口縁直下に横位ないしは斜位のヘラミガキが認められる。19はＳＰ112出土の土師質土器小皿である。底部は平底で、体部との境は不明瞭である。体部から口縁部にかけて斜め上方へ緩やかに立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切りによる切り離し痕が認められる。内面と体部は回転指ナデが施される。20はＳＰ128出土の土師質土器坏である。口縁部の小片であることから詳細は不明である。21はＳＰ139出土の和泉型瓦器椀である。口縁部を欠損するほか、やや摩滅が進んでいることから調整が不明瞭である。内面は比較的平滑に仕上げられる。断面逆三角形の高台が取り付く。13世紀前半頃のものか。22はＳＰ153出土の土師質土器小皿である。平底の底部から斜め上方へ直線的に体部が延びる。底部は回転ヘラ切りにより切り離されたもので、板状圧痕を留める。内面と体部外面は回転指ナデにより仕上げられる。

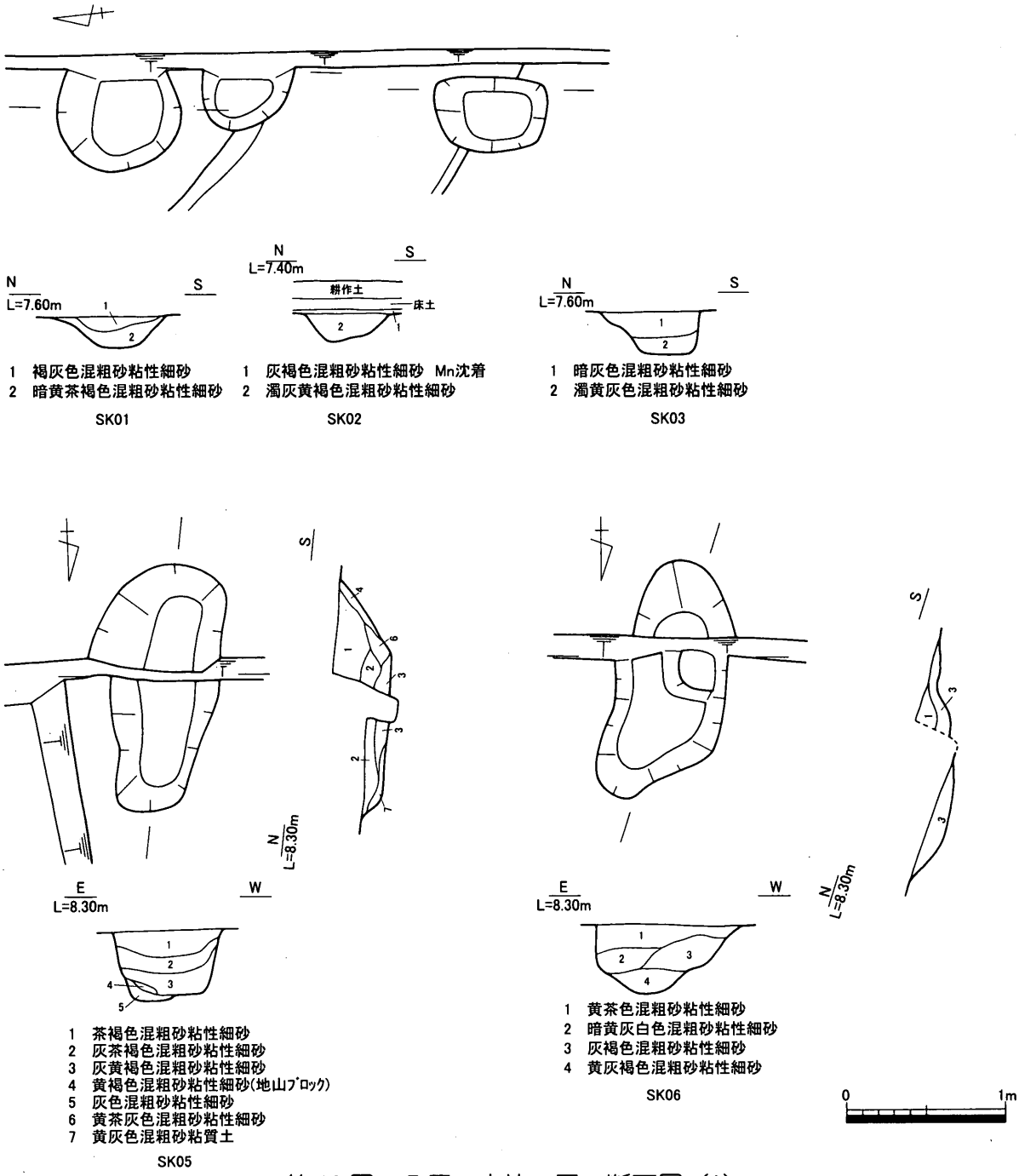
土坑

ＳＫ01（第13図）

調査区東端北寄りで検出した遺構である。東側がわずかに調査区外へ出るが、直径約0.75ｍの円形を呈する土坑である。断面形状は椀形を呈し、深さは最深部で0.20ｍを測る。埋土は褐灰色粗砂混じり粘性細砂の上層と暗黄茶褐色粗砂混じり粘性細砂の下層に分かれる。出土遺物が皆無で、帰属する時期は不明である。

ＳＫ02（第13図）

ＳＫ01の南で検出した遺構である。後述するＳＸ01に後出する。東側がわずかに調査区外へ出るが、直径0.50ｍのやや不整な円形を呈する土坑である。断面形状はやや不整な椀状を呈し、深さは最深部で約0.16ｍを測る。埋土は濁灰黄褐色粗砂混じり粘性細砂の単層である。出土遺物が皆無で、帰属する時期は不明である。



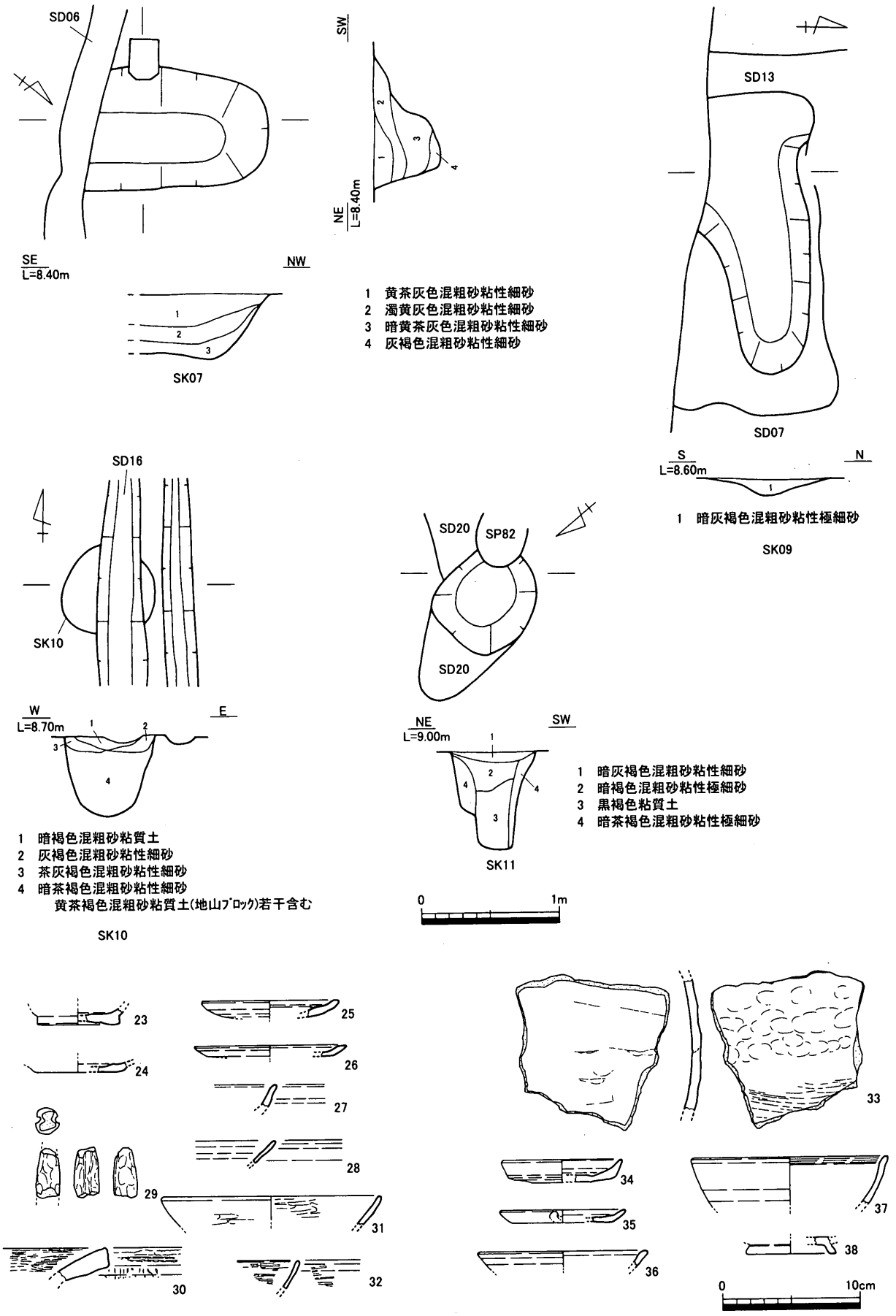
第13図　Ⅰ区　土坑　平・断面図（1）

ＳＫ 03（第 13 図）

ＳＫ 02 の南側で検出した遺構である。後述するＳＸ 01 に後出する。平面形は長軸約 0.70 m、短軸 0.45 mの不整な長方形を呈し、断面形状は箱型を呈する。北側は二段の掘り込みが認められる。深さは最深部で約 0.25 mを測る。埋土は上層で暗灰色、下層で濁黄灰色の粗砂混じり粘性細砂からなる。出土遺物が皆無で、帰属する時期は不明である。

ＳＫ 05・06（第 13 図）

調査区中央東寄りで検出した遺構である。北側が試掘トレンチにかかり削平されるが、ＳＫ 05 は長軸約 1.50 m以上、短軸約 0.80 mの不整な長方形を、ＳＫ 06 は長軸約 1.50 m以上、短軸約 0.70 mの不整形な形状を呈する。断面形状はＳＫ 05 が長軸方向では逆台形を、短軸方向では箱型を呈し、



第14図　Ⅰ区　土坑　平・断面図（2）及び出土遺物実測図

深さは最深部で約 0.40 mを測る。ＳＫ 06 は断面形状もやや不整形で、深さは最深部で約 0.40 mを測る。共に埋土は複数に細分できる。出土遺物が皆無で、帰属する時期は不明である。

ＳＫ 07（第 14 図）

ＳＫ 06 の北側で検出した遺構である。ＳＤ 06 に切られており、これに先行する遺構であることが分かる。南半分を完全に掘削していないため詳細不明であるが、平面形は長軸約 1.30 m、短軸約 0.90 mの隅丸方形を呈すると見られる。断面形状もやや不整形である。深さは最深部で約 0.50 mを測る。出土遺物がほぼ皆無で、帰属する時期は不明である。

ＳＫ 09（第 14 図）

調査区南壁中央付近で検出した遺構である。ＳＤ 07 に囲まれた浅い落ち込み状の遺構で、南側を調査区の側溝掘削時に削平してしまっているほか、ＳＤ 13 に西側を削平されるため、詳細な規模は不明であるが、長軸２m以上、短軸最大 0.70 mを測る不整形土坑である。断面形状は浅い皿状で、深さは最深部で約 0.10 mを測る。埋土は暗灰褐色粗砂混じり粘性極細砂の単層である。出土遺物がほぼ皆無で、帰属する時期は不明である。

ＳＫ 10（第 14 図）

調査区中央南寄りで検出した遺構である。ＳＤ 16 により切られ、これに先行する遺構である。平面形は直径約 0.70 mのやや不整な円形を呈し、断面形状は深鉢状を呈し、深さは最深部で約 0.60 mを測る。埋土は上面約 0.10 mにおいて暗褐色粗砂混じり粘質土等の３層がレンズ状堆積し、その下に地山ブロックを若干含む暗茶褐色粗砂混じり粘性細砂が約 0.50 mの厚さで堆積する。

出土遺物は小片がほとんどで、量もあまり多く認められない。第 14 図 23 ～ 32 に図示し得るものを掲載した。23 は須恵器椀底部である。体部を欠損するため詳細は不明であるが、円盤状の高台を持つ器形が想定できる。24 は土師器坏底部である。小片であり全体の器形は不明である。やや底径が小さいことから小皿と誤認している可能性がある。25 ～ 27 は土師質土器小皿である。共に小片であることから詳細な器形は不明であるが、底部と体部の境が不明瞭な器形が想定できる。27 はほかの２例に比べると深めの器形であると想定できる。28 は土師器坏に分類した。小片であることからほかの器種と誤認している可能性もある。29 は有溝土錘。30 は土師質土器土鍋。31・32 は黒色土器椀である。共に内外面黒色処理されたものであるが、小片のため詳細な形状は不明である。内外面共に比較的密な横位のヘラミガキが認められる。

ＳＫ 11（第 14 図）

調査区中央東寄りで検出した遺構である。ＳＰ 82 に切られ、ＳＤ 20 を切って検出した。平面形状は長辺約 0.75 m、短辺約 0.60 mの不整な隅丸の長方形を呈する。深さは約 0.70 mを測る。断面形状は東側で二段の掘り込みを呈するが、西側は比較的直線的に落ち込む状況を呈する。埋土は概ね４層に細分でき、埋没状況は一見柱穴を思わせるが、同規模の遺構が周辺に認められず、単独で所在することから土坑として扱った。

出土遺物（第 14 図 33 ～ 38）は周辺の遺構と比較するとやや多いものの、大半が小片化しているため、形状を把握し得るものは少ない。33 は土師器甕体部片である。やや摩滅が進むが、内面は板ナデにより比較的平滑に仕上げられる。粘土紐巻き上げによる成型と見られ、下端に粘土紐の単位

が若干確認できる。外面は上端で指押さえの痕跡が比較的顕著に見られ、下端にはタタキ調整の痕跡が残る。破片であることから詳細は不明であるが、長胴形を呈するものの底部付近と想定する。ＳＤ 21 出土の破片との接合が認められ、本来はＳＤ 21 に属する遺物が巻き上げられた可能性がある。34・35 は土師質土器小皿である。34 はやや径が小さく深めの器形である。底部外面には回転ヘラ切りの後、板ナデが施された痕跡を留め、外面体部から内面は回転指ナデにより仕上げられたものである。体部はやや直立気味である。35 はやや扁平な器形を呈する。体部の立ち上がりは弱い。36 は土師質土器坏に分類した。口縁端部の小片であることから他器種との誤認の可能性もある。やや肥厚し、外反する形状を取る。37 は土師質土器椀である。内湾気味の体部が口縁直下で反転し、外反気味の口縁部を成すものである。口縁部は若干肥厚する。38 は内外面黒色処理された黒色土器椀底部である。体部を失い、全体の器形は不明である。平底の椀底部にやや高い高台が踏ん張り気味に取り付く。これらのほかにも土師質土器足高高台付椀・坏・土鍋等の小片が伴うほか、両黒の黒色土器椀の小片がやや多く出土している。

井戸

ＳＥ 01（第 15・40 図）

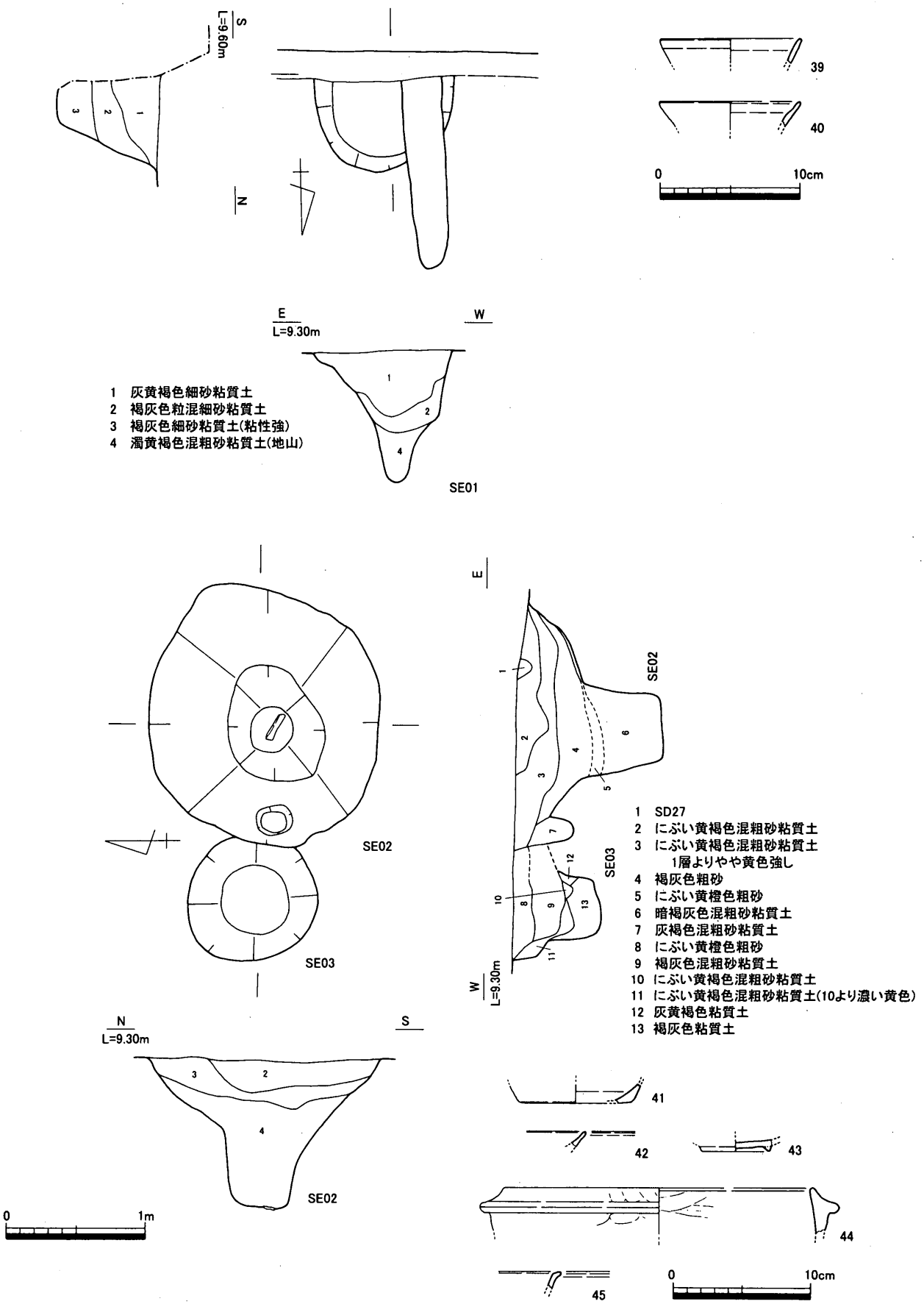
調査区南壁東半中央付近で検出した遺構である。概ね半分近くが調査区外へ延びることから詳細な形状は不明であるが、直径１ｍほどの円形を呈していたものと想定する。断面形状はやや不整な深鉢状を呈する。埋土は概ね３層に細分できる。完掘した段階で底部からの湧水が確認できたことから井戸としたが、井戸枠等の施設は確認できなかった。素掘りの井戸と想定する。

出土遺物は微細なものが多く、形状を把握できるものは少ない。また、最下層からの遺物出土は認められず、１・２層からのみの出土である。39・40 は土師質土器坏である。小片であることから詳細は不明であるが、やや小型の器形が想定できる。このほかに１層出土の三足土釜の口縁部と見られるものや、器種不明の瓦器等が小片で出土している。また、鉄滓が若干量出土している。第 40 図 196 は火打石に分類した。敲石の可能性も想定できるが、風化がほとんど進まない面を有し、その面を切って潰れ痕が認められること、本来存在したであろう稜線が全て潰れ痕に覆われること等から、同器種に分類した。

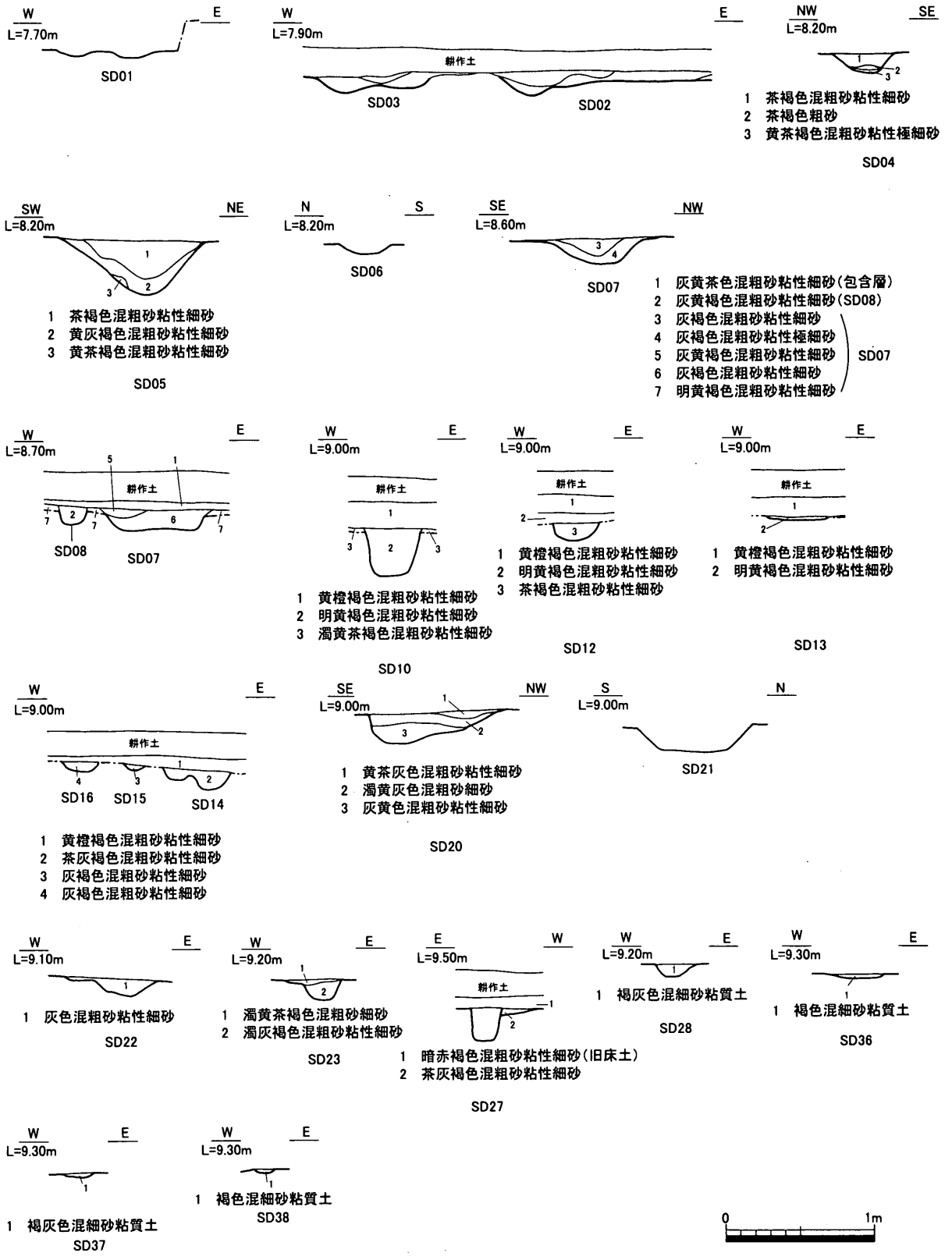
ＳＥ 02（第 15・42 図）

ＳＥ 01 の西側で検出した遺構である。ＳＤ 27 に切られることから、これに先行する遺構である。平面形は長軸約 1.80 ｍ、短軸約 1.60 ｍを測るやや不整な楕円形を呈する。断面形状は上半が浅い椀状を呈し、下半は箱型を呈する。深さは最深部で約 1.05 ｍを測る。埋土の記録は東西断面では３層以下を３層に細分しているが、南北断面は図化直前に４・５層が湧水によって崩落したため、３層以下の細分が行なえなかった。このように３層以下では湧水が顕著であることから、透水層まで達する掘削が行なわれていた井戸であると判断した。断面箱状を呈する部分が水溜部になると考えられるが、これに伴う枠は検出できなかった。

出土遺物は周辺と比較してやや多いものの、小片を主体とし、形状を把握し得るものは少ない。41・42 は土師質土器小皿である。共に小片であることから詳細な器形は不明であるほか、ほかの器種と誤認している可能性もある。43 は土師質土器椀である。底部のみの小片で詳細不明であるが、やや矮小化した断面三角形の高台が弱く踏ん張って底部に取り付く。44 は土師質土器土釜である。図示していないが脚部片も出土していることから、三足土釜の口縁部であると想定できる。45 は白



第15図　Ⅰ区　井戸　平・断面図及び出土遺物実測図



第16図　Ⅰ区　溝状遺構　断面図

磁椀口縁部である。小片であることから詳細な器形は不明であるが、12 世紀後半頃のものか。ほかに鉄釘（第 42 図 204）・鉄片・鉄滓類が若干出土している。

溝状遺構

ＳＤ 01 ～ 03（第 16・17 図）

調査区南東隅で検出した遺構である。規模はいずれも似た状況を示し、ＳＤ 01 で検出長は約７ｍ、ＳＤ 02 で約 0.65 ｍ、ＳＤ 03 で約 5.50 ｍ、幅は最大約 0.90 ｍを測る。主軸の方向はそろっており、近接した時期のものと想定できる。ほぼ耕作土直下での検出であることからかなり削平を受けているものと想定できる。検出面からの最深部までの深さは約 0.05 ～ 0.10 ｍを測り、かなり浅い。出土遺物はＳＤ 01 から第 17 図 46 の須恵器椀底部が認められる。円盤状高台を持つ形状のものと想定でき、外面に底部糸切り痕が認められる。内面見込みがやや窪ませてある。胎土中に１点のみであるが、３×１㎜程の暗灰青色チャート礫が認められ、他県産の個体である可能性が考えられる。ほかの遺物は土師質土器の小片を主体とする。また、ＳＤ 02 からは土師質土器坏（47）の小片が出土しているほか、肥前系陶器等の施釉陶器類の小片・フイゴの羽口片と見られるものが出土している。近世頃の所産と想定する。

ＳＤ 04・05（第 16 図）

調査区北壁東半中央付近で検出した遺構である。共にやや検出長は短く、ＳＤ 04 で検出長は約 2.50 ｍ、ＳＤ 05 で約３ｍを測る。幅はＳＤ 04 で最大約 0.50 ｍ、ＳＤ 05 で約１ｍを測る。深さはＳＤ 04 が約 0.12 ｍ、ＳＤ 05 が約 0.35 ｍを測り、後者がやや深い。出土遺物は認められず、帰属時期は不明である。

ＳＤ 06（第 16・17 図）

調査区中央東寄りで検出した遺構である。検出長は約６ｍ、幅は約 0.30 ｍである。深さは検出面から約 0.05 ｍで浅い。ＳＤ 08 に切られるほか、ＳＫ 07 を切って検出している。

出土遺物は極わずかで、図示した土師質土器土鍋片（48）のほかに土師器甕小片が認められるのみである。

ＳＤ 07（第 16 図）

調査区中央で検出した遺構である。南側は調査対象地外へのびており、調査区内では南壁中央付近から、北壁中央手前まで北進し、その後「く」の字に折れ、東北東の方向へ延びて調査区外へ延びる。また、屈曲点南側及び南端付近で西ないし西北西方向から延びる溝が合流する。両者の関係は調査時の所見では切り合いが認められなかったことから同一遺構として報告する。ＳＤ 08 ～ＳＤ 16 に切られており、これらに先行する遺構であることが分かる。

出土遺物は土師器の小片が少量出土しているのみで、詳細は不明である。

ＳＤ 08（第 16・17 図）

調査区中央東寄りで検出した遺構である。南北方向に延びる溝で、周辺に遺存する条里型地割にほぼ並行する。検出長は約 8.50 ｍ、検出幅は最大約 0.25 ｍである。深さは最深部で約 0.12 ｍを測る。出土遺物は須恵器片・土師質土器土釜片・瓦器椀片等が小片で出土しているが、図示に耐え得

るものではない。辛うじて図化できたのが第17図49の須恵器壺口縁部片である。ただし、これも小片であることから他器種との誤認の可能性がある。

ＳＤ10（第16図）

調査区北壁中央付近で検出した遺構である。先に触れたＳＤ04・05と同様の形状を呈する。現状で２ｍほどを検出したが、これ以上延びる要素は認められなかった。深さは最深部で約0.30ｍを測り、断面形状は箱状を呈する。

ＳＤ12・13（第16・17図）

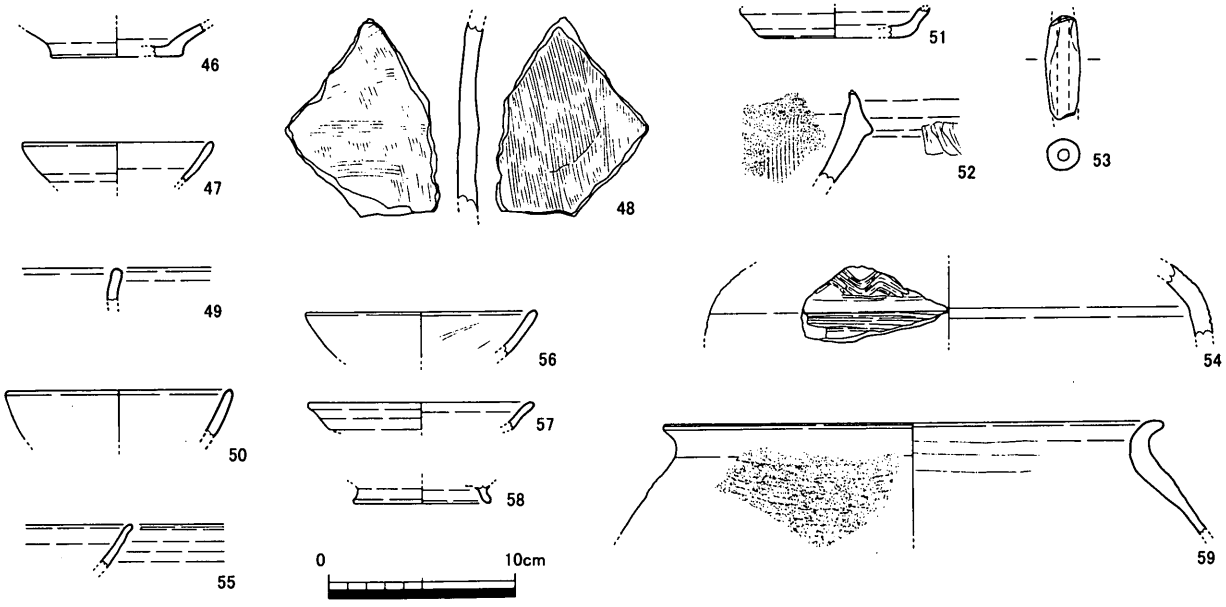
共に調査区中央で検出した遺構である。南北方向に延びる溝で、周辺に遺存する条里型地割に並行する。ＳＤ12は南端でＳＤ07につながる溝と交わるが、北側での切り合いから見るとＳＤ12が後出するものと想定できる。ＳＤ13も南端付近でＳＤ07と交わるが、上記の理由から後出する遺構であると判断する。検出長はＳＤ12が約11ｍ、ＳＤ13が途中中断はあるものの約12ｍを測る。検出幅は共に概ね0.50ｍを測る。深さはＳＤ12がやや深く約0.10ｍを測るが、ＳＤ13は約0.03ｍと浅い。

ＳＤ12からは遺物の出土は認められなかったが、ＳＤ13は第17図50の土師質土器坏を含め、土師質土器の小片がわずかに出土している。

ＳＤ14～16（第16・17・39図）

いずれも調査区中央で検出した遺構である。南北方向に延びる溝で、周辺に遺存する条里型地割に並行する。互いに近接した関係にある。検出長は約12ｍを測り、幅はＳＤ14の約0.45ｍが最も広く、ＳＤ15の約0.15ｍが最も狭い。深さは最深部で約0.15～0.50ｍを測る。遺物の出土はＳＤ14でややまとまるが、小片を主体とする点では周辺諸遺構と大差ない。ＳＤ15・16でも少量の遺物が認められるが、図示に耐え得るものではない。

第17図51～54はＳＤ14出土遺物である。51は土師質土器小皿である。小片のため詳細不明で



第17図　Ｉ区　溝状遺構　出土遺物実測図

あるが、平坦な底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部は反転し外反する形状である。52は管状土錘である。53は備前系陶器擂鉢の口縁部である。口縁端部はやや長く上方へ摘み上げる。54は備前系陶器壷の肩部である。外面器壁体部寄りに４条の平行沈線が、頚部寄りに４条の波状文が施される。53・54共に15世紀中頃のものか。第39図186は砥石片である。ややきめの細かい砂岩を用いる。全体的に赤化が著しく、一部に受熱に伴うと見られるクレーター状の剥落痕を伴うことから、火中に投じられた可能性がある。これらのほかに図示していないが白磁の皿底部・椀口縁部の小片が認められるほか、土師質土器の小片が出土している。55はＳＤ16出土の須恵器椀である。口縁部の小片であることと、摩滅が著しいことから詳細は不明である。ＳＤ15からは図示し得なかったが、施釉陶器片が出土しており、近世のものに位置付けられる可能性がある。

ＳＤ20・21（第16・17図）

調査区中央西寄りで検出した遺構である。平面形「く」の字に折れ曲がるＳＤ20の南端と、やや直線的に延びるＳＤ21の中央部が接合する状況で検出した。両者の先後関係は調査時の所見では確認できなかった。深さは共に最深部で約0.20ｍを測る。ＳＤ20は遺構の切り合いは認められないが、ＳＤ21はＳＫ11・ＳＰ82等に切られる。

出土遺物はＳＤ20では認められなかったが、ＳＤ21では少量出土している。第17図56～58に掲載した。56は土師質土器坏、57は土師器皿、58は土師質土器椀にそれぞれ分類した。57は精製された精良な胎土を用いる。58は高台部分のみであるが、長く外方へ踏ん張った形状を取る。この他に土師器甕片等の小片が出土している。甕は図示し得なかったが、ＳＫ11出土のものと接合し、ＳＤ21のものが巻き上げられた可能性がある。

ＳＤ22（第16・17・39図）

調査区中央西寄りで検出した遺構である。概ね南北方向に延びる溝状遺構である。検出長は約10ｍ、幅は最大約１ｍを測る。深さは約0.10ｍ程度である。ＳＲ01を切っており、これに後出する遺構であるほか、ＳＤ27による削平を受けることからこれに先行するものと判断する。

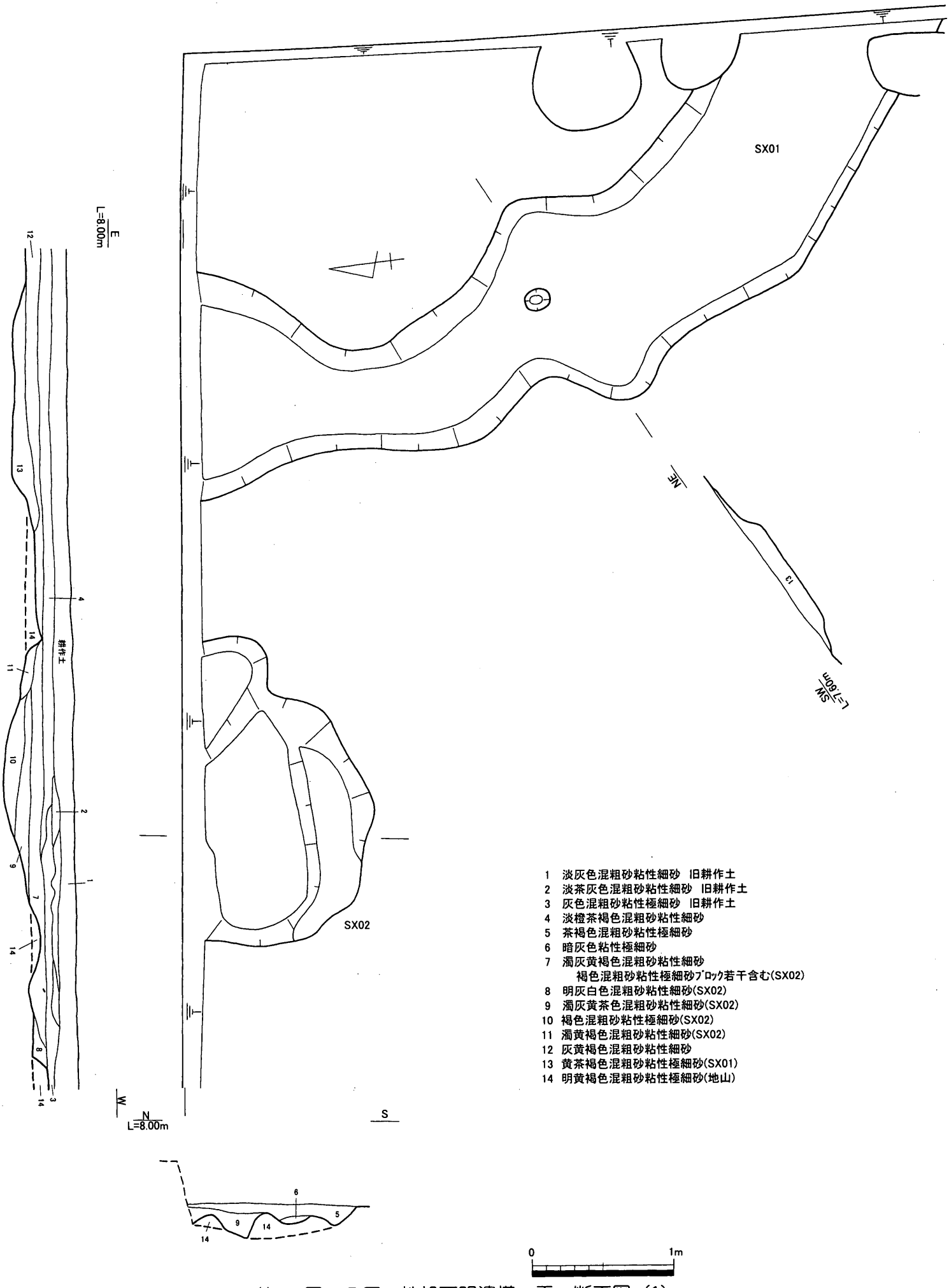
出土遺物は極わずかで、土師器・須恵器の小片が散見されるのみである。59は須恵器甕である。軟質の焼き上がりで、外面頚部から体部にかけてタタキ調整が施されていたようであるが、器壁の剥落がやや著しく不明瞭である。また、口縁部も完形で復元しているが、剥落の痕跡があり、本来的にはもう少し肥厚するような器形が想定できるかもしれない。第39図187は石鏃である。厚さ約３㎜の剥片を素材とし、その周縁部に調整加工を施したものである。基部を欠損するが先端がやや不整な形状を取ることから未製品の可能性もある。サヌカイト製。

ＳＤ23（第16図）

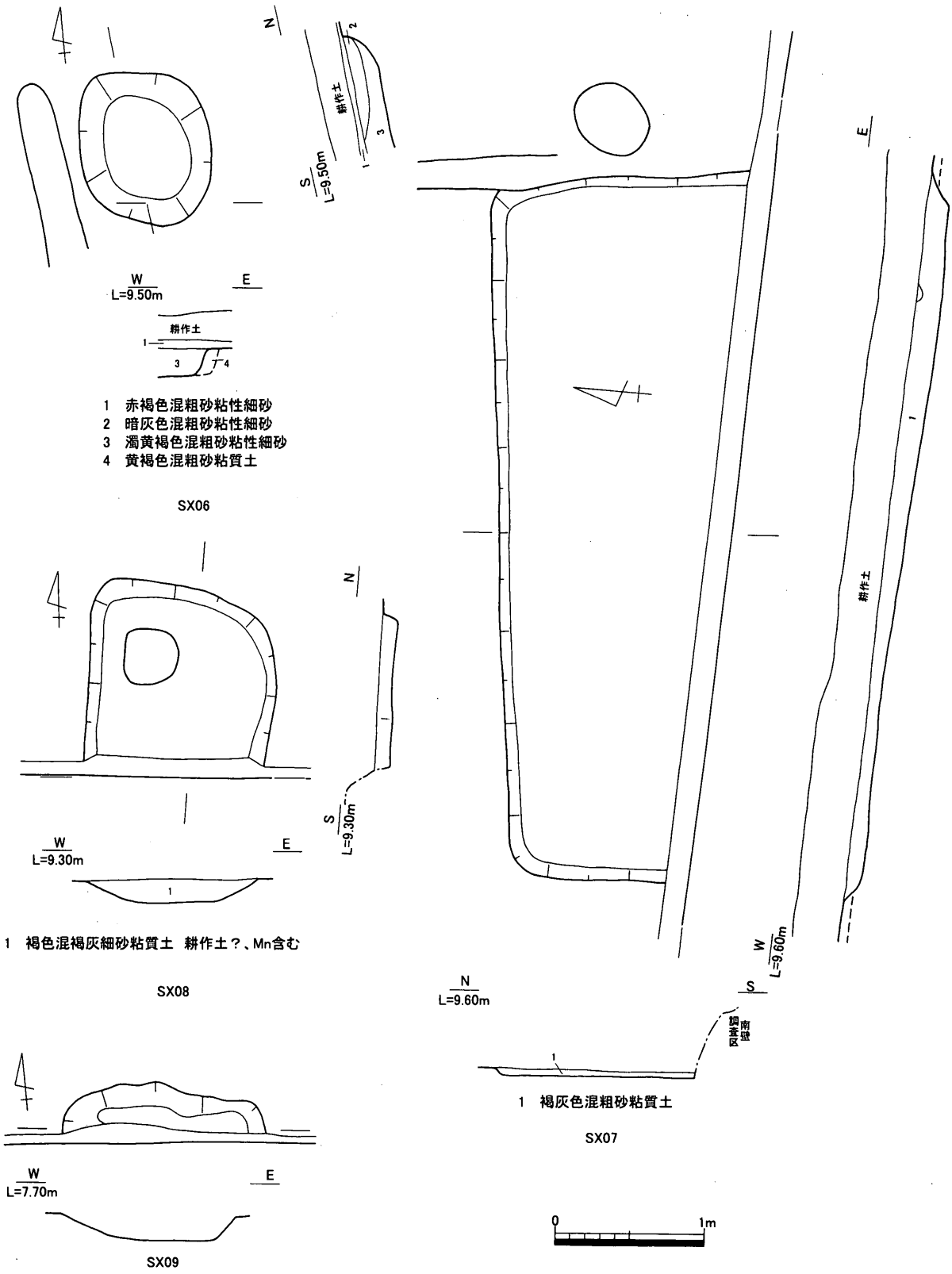
調査区南壁中央西寄りで検出した遺構である。概ね南北方向に延びる溝と想定できるが、検出長約３ｍ、幅約0.40ｍを測る。出土遺物は極わずかである。

ＳＤ27（第16図）

調査区西半中央付近で検出した遺構である。南壁西半中央付近から見え始め、調査区西半中央北寄りまで北進した後、緩やかに弧を描きながら90°方向を変え、東進する。主軸は周辺の条里型地割に概ね平行する。先端はＳＲ01の上面で途切れる。ＳＥ02を切ることからこれに後出し、ＳＢ



第18図　Ⅰ区　性格不明遺構　平・断面図（1）



第19図　Ⅰ区　性格不明遺構　平・断面図（2）

03 P 08に切られることからこれに先行する遺構である。出土遺物は土師器・須恵器の小片がわずかに出土したのみである。遺構の形状から何らかの区画施設である可能性も想定できるが、これに伴う掘立柱建物跡等の施設は不明瞭である。

ＳＤ 28（第 16 図）

調査区西半中央付近で検出した遺構である。南壁西半中央付近から見え始め、調査区西半中央北寄りまで北進し、途切れる。途中、試掘トレンチにより分断されるが、検出長約７ｍ、幅は約0.30ｍ、深さ約 0.10 ｍを測る。

ＳＤ 31（第 16 図）

調査区北壁西半中央付近で検出した東西方向の遺構である。検出長約２ｍ、幅約 0.35 ｍ、深さ約 0.03 ｍを測る。遺構の主軸は周辺の条里型地割と異なり、調査区東半のＳＢ 01・ＳＤ 01 ～ 03 の主軸と近似する。出土遺物は認められない。

ＳＤ 36 ～ 38（第 16 図）

調査区西半中央西寄りで検出した遺構である。ＳＤ 36 は検出長約８ｍ、幅約0.40ｍを測る。ＳＤ 37 は長辺約３ｍ、短辺約 0.80 ｍの長方形状を呈する。東端はＳＤ 36 に削平される。ＳＤ 38 はＳＤ 37 南端から南へ伸び、ＳＸ 07 に南端を削平される。これらはいずれも浅い遺構で、調査時の所見を元にＳＤ 38・37・36 の順に掘削されたものと想定するが、詳細は不明である。いずれも出土遺物は認められない。

性格不明遺構

ＳＸ 01（第 18・39 図）

調査区北東隅で検出した遺構である。形状の安定しない溝状の落ち込みとして検出した。第 39 図 188 は凹基無茎式の石鏃である。厚さ２㎜ ほどの剥片を素材とし、背面はほぼ全周に、腹面は側縁及び脚部にそれぞれ調整加工を施したものである。サヌカイト製。

ＳＸ 02（第 18 図）

調査区北東隅で検出した遺構である。不整形な落ち込みとして検出した。

ＳＸ 06（第 19 図）

調査区西半中央で検出した遺構である。長辺約１ｍ、短辺約 0.90 ｍ、深さ約 0.18 ｍの不整な方形状の落ち込みとして検出した。図示し得なかったが、備前系陶器壷と見られる小片微量と土師質土器片微量が出土している。

ＳＸ 07（第 19 図）

調査区南壁西半中央西寄りで検出した遺構である。大半が調査区外南方へ広がるものと思われるが、現状で長辺約 4.50 ｍ、短辺約 1.70 ｍ以上の規模を持つ方形の竪穴状遺構である。深さは最深部で約 0.15 ｍを測る。床面は平坦で、わずかに東へ向かって傾斜する。出土遺物は図示し得なかったが、土師質土器小片と共に染付の小片が出土しており、近世の所産と想定する。

ＳＸ 08（第 19 図）

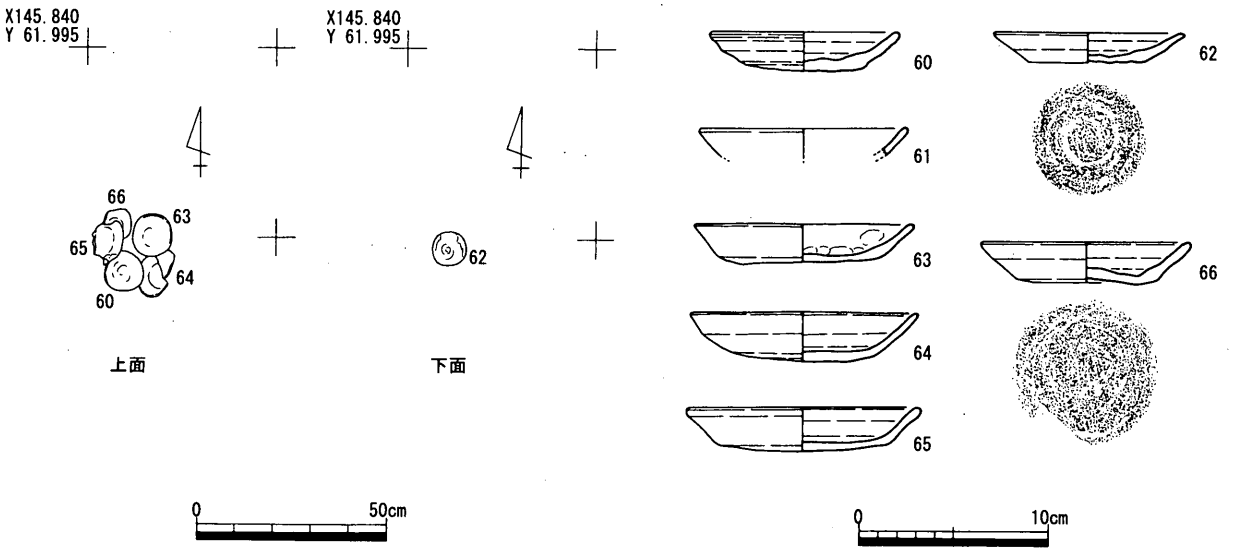
調査区南西隅で検出した遺構である。南端が調査区外へ延びることから詳細は不明であるが、現状で一辺約 1.20 ｍのやや不整な隅丸方形を呈する。断面形状は浅い皿状で、深さは最深部で 0.15 ｍを測る。出土遺物は極わずかで、土師質土器の小片と瓦器椀底部の小片が出土したのみである。

ＳＸ 09（第 19・40 図）

調査区南東隅で検出した遺構である。南側の大半が調査区外へ延びることから詳細は不明である。現状では、長軸 1.35 ｍ、短軸 0.30 ｍの範囲を確認した。出土遺物は極わずかである。第 40 図 197 は火打石である。明瞭な使用痕は図上面に認められるのみで、比較的しっかりした稜線が残る。稜線再生直後に近いものか。石材は黒灰色チャートである。これ以外の出土遺物は土師器の小片 1 点である。

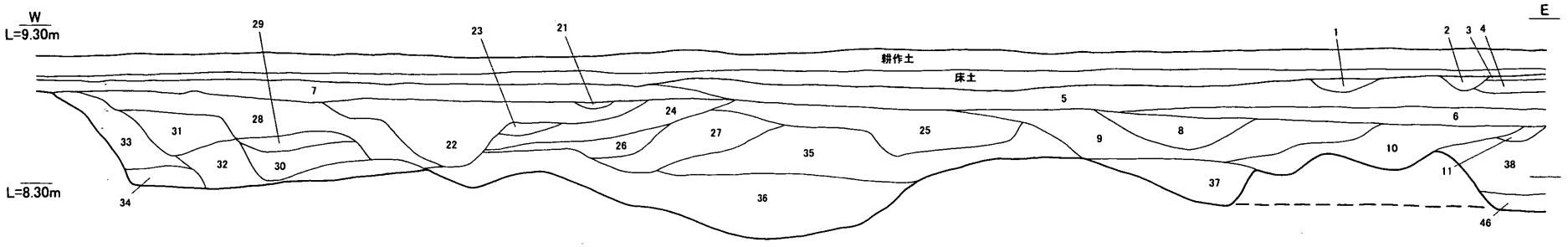
土器溜り 1（第 20 図）

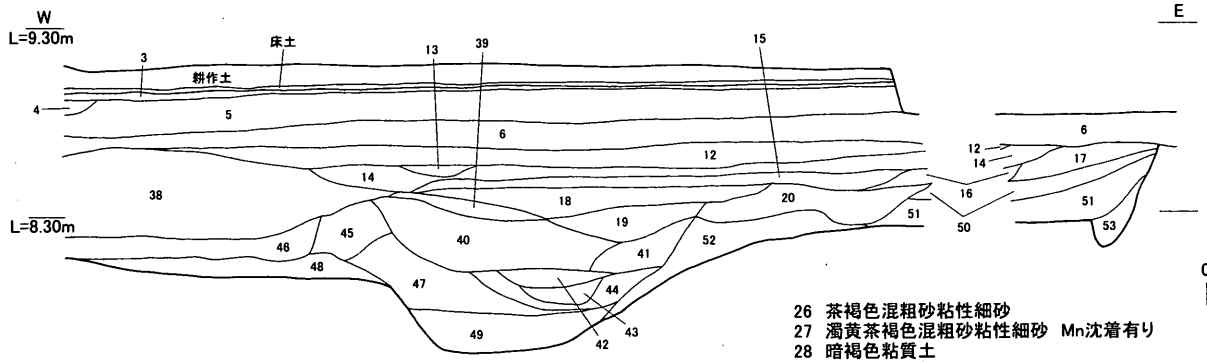
調査区中央西寄りで検出した土師器 6 点、須恵器 1 点からなる遺構である。機械掘削中に土師器坏 5 点及び須恵器小皿 1 点が平面的にまとまって出土したため、周辺を精査したが明瞭な掘り込みは確認できなかった。これらを取上げた後、さらに 1 点土師器小皿の出土を見た。うち 1 点は口縁部の小片のみであったが、残りはほぼ完形を呈するものばかりである。60 は須恵器小皿である。底部はやや丸みを帯びた平底で、回転ヘラ切りによる底部切り離しの後、弱い不定方向の指ナデで整形する。「－」形のヘラ記号が認められる。外面体部及び内面は回転指ナデによる調整が施され、外面体部は 2 段の明瞭な稜線が形成される。体部から口縁部にかけて内湾する形状である。61・62 は土師器小皿である。61 は口縁部のみの出土である。体部から口縁部にかけて直線的に外上方へ延びる。62 は平坦な底部からやや内湾気味の体部が低く立ち上がる。底部と体部の境は明瞭な稜をなす。

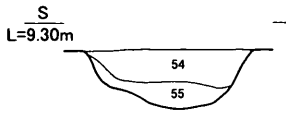


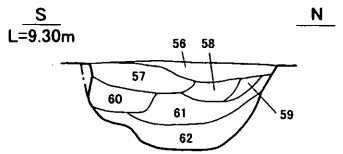
第 20 図　Ｉ区　土器溜り 1 平面図及び出土遺物実測図

体部中央付近で反転し口縁部は外反する。これに伴い外面体部中央には弱い稜線が形成される。底部切り離しは回転ヘラ切りによる。63 ～ 66 は土師器坏である。63・65 の内面は底部から体部へ内湾気味に立ち上がり体部中央ないしは口縁部直下で外反するが、外面では底部と体部の境に弱い稜線をなし、体部は外反気味に仕上げられる。外面全体にマンガン分と砂粒が顕著に沈着し、調整の

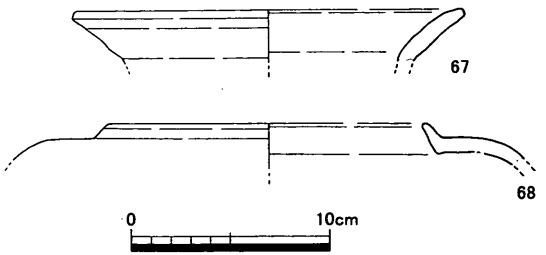








1 黄橙褐色混粗砂粘質土　黒褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多く含む
2 茶褐色混粗砂粘性細砂
3 淡灰色混粗砂粘性細砂
4 黄橙褐色混粗砂粘質土
5 灰茶褐色混粗砂粘性細砂
6 暗赤褐色混粗砂粘性細砂　下底部Mn2～5cm厚で沈着
7 赤茶褐色混粗砂粘性細砂
8 SD22
9 黒褐色混粗砂粘質土
10 茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
11 暗茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
12 灰茶褐色混粗砂粘性細砂
13 茶灰褐色混粗砂粘性細砂
14 褐灰色混粗砂粘性極細砂
15 暗茶褐色粘質土　茶灰色細砂をﾗﾐﾅ状に含む
16 暗灰褐色混粗砂粘性極細砂
17 茶褐色混粗砂粘性細砂
18 暗褐色粘質土
19 黒茶褐色混粗砂粘質土
20 淡茶灰褐色混粗砂粘性細砂
21 SD24
22 灰茶褐色混粗砂粘性細砂　暗褐色粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多く含む
23 暗褐色粘質土
24 暗褐色粘質土　灰褐色混粗砂粘性細砂がﾗﾐﾅ状に入る
25 黒茶褐色混粗砂粘性細砂　本来灰褐色
26 茶褐色混粗砂粘性細砂
27 濁黄茶褐色混粗砂粘性細砂　Mn沈着有り
28 暗褐色粘質土
29 暗茶褐色混粗砂粘質土
30 暗茶褐色混粗砂粘質土　29層より粗砂多く混じりﾗﾐﾅ状を呈す
31 濁黄茶褐色混粗砂粘質土　灰褐色混粗砂粘質土ﾌﾞﾛｯｸ若干含む
32 褐灰色混粗砂粘質土
33 黄茶褐色混粗砂粘質土
34 灰黄褐色混粗砂粘質土　Mn沈着著しい
35 黒茶褐色混粗砂粘性細砂　Mn沈着著しい　本来灰茶褐色
36 濁褐黄灰色混粗砂粘性細砂
37 濁茶褐色混粗砂粘性細砂
38 暗茶褐色混粗砂粘性細砂　Mn沈着著しい
39 灰褐色混粗砂粘性細砂
40 暗茶灰褐色混粗砂粘質土
41 暗黄褐灰色混粗砂粘質土
42 暗灰黄褐色混粗砂粘性極細砂
43 暗黄灰褐色混粗砂粘性極細砂
44 灰色混粗砂粘質土
45 濁黄灰褐色混粗砂粘質土
46 灰茶褐色混粗砂細砂
47 灰黄褐色混粗砂粘性細砂
48 明黄灰色混粗砂粘質土(地山)
49 明黄灰色混粗砂粘性細砂
50 暗茶褐色混粗砂粘性細砂
51 濁暗茶褐色混粗砂粘性細砂
52 濁明黄灰色混粗砂粘性細砂(地山)
53 濁茶黄褐色混粗砂粘性細砂
54 黒色細砂粘質土
55 にぶい黄褐色細砂
56 黒色混粗砂粘質土
57 暗茶灰褐色混粗砂粘質土
58 茶灰褐色混粗砂粘性細砂
59 暗灰色混粗砂粘性極細砂
60 灰色粗砂
61 灰黄色粗砂
62 赤褐色粗砂



第21図　I区　自然河川SR01断面図及び出土遺物実測図

観察が困難である。64は底部と体部の境がやや不明瞭で丸みを帯びた底部である。体部はやや内湾し口縁部はわずかに外反する。66は底部と体部の境に明瞭な稜をなし、体部下半はやや外反する。口縁部は直線的に外上方へ延びる。底部切り離しは回転ヘラ切りにより、板状圧痕が認められる。

土師器坏の法量は口径11.0～12.5cm、器高は2.0～2.6cm を測る。また、須恵器小皿・土師器小皿は共に口径10.0cm を測り、器高は前者が2.0cm、後者が1.5cm を測る。片桐編年のⅡ－①期頃の土師器坏Cに分類できるものと考える。11世紀第2四半期の所産か。

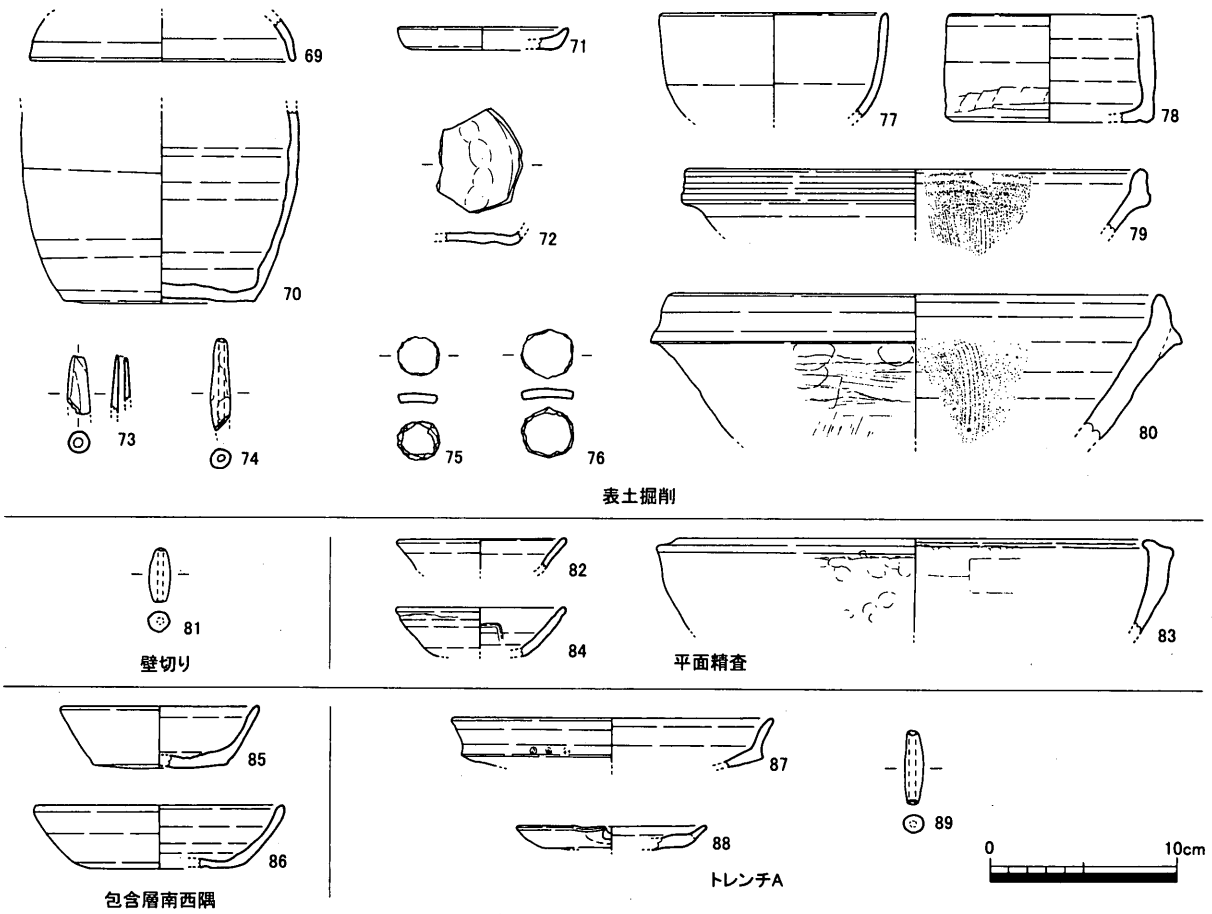
自然流路

ＳＲ01（第21図）

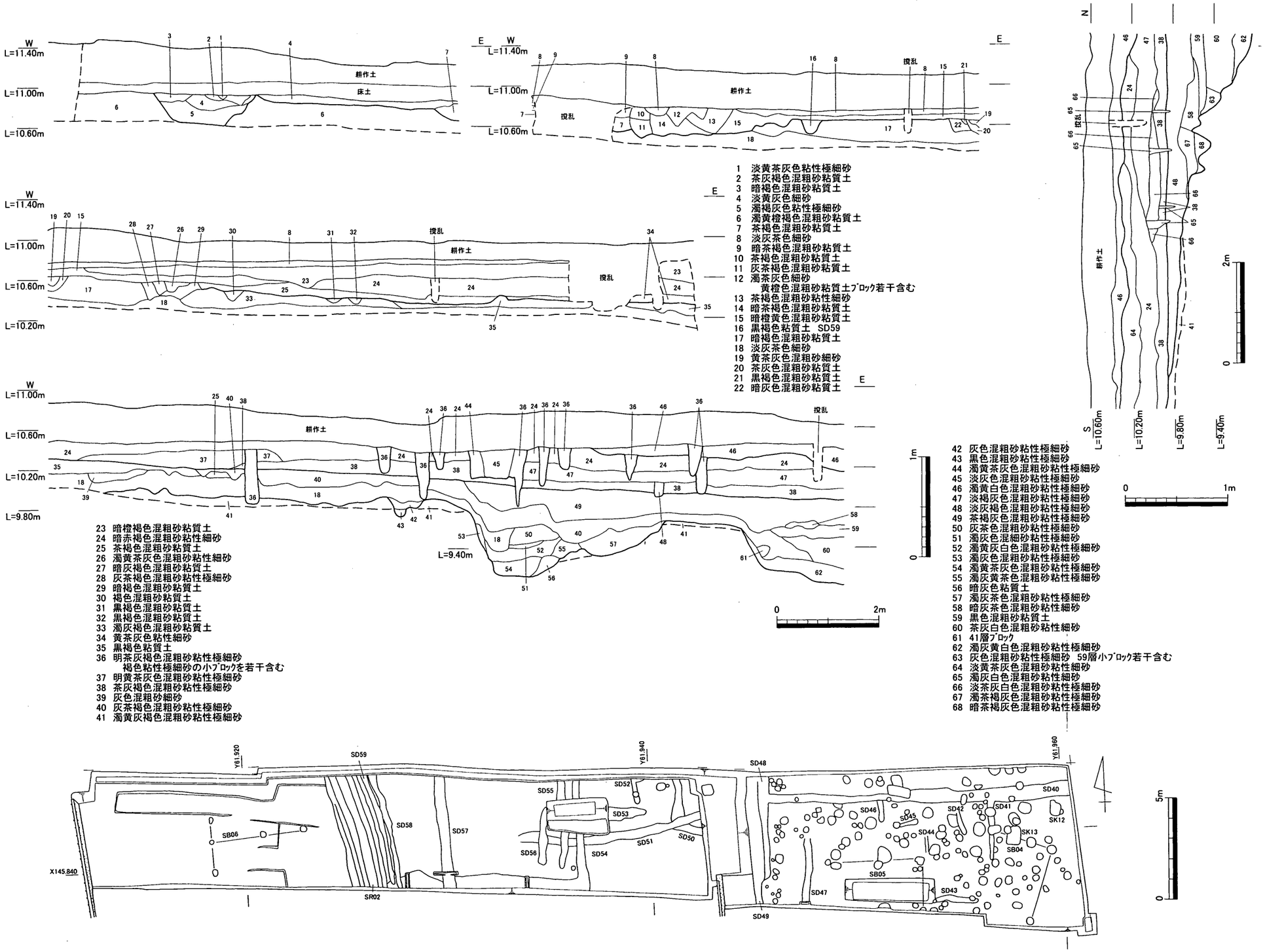
調査区北西１／４の範囲で検出した遺構である。西壁中央付近に端を発し、北壁西半中央付近で調査区外へ出る。西半の上流側での流路幅は約0.50～0.80ｍと狭く、北壁との交点付近では約５ｍを測ることから、流路の大半は上層が大きく削平を受けたものと想定する。

埋土は上層においては暗褐色系の粗砂混じり粘質土を主体とし、下層では灰褐色・黄茶褐色・茶褐色等の粗砂混じり粘性細砂を主体とする。

67は弥生土器壷である。暗褐色系粗砂混じり粘質土中からの出土である。68は瓦質土器羽釜の口縁部である。中世期の撹乱からの出土と見られる。



第22図　Ⅰ区　包含層出土遺物実測図



1 淡黄茶灰色粘性極細砂
2 茶灰褐色混粗砂粘質土
3 暗褐色混粗砂粘質土
4 淡黄灰色細砂
5 濁褐灰色粘性極細砂
6 濁黄橙褐色混粗砂粘質土
7 茶褐色混粗砂粘質土
8 淡灰茶色細砂
9 暗茶褐色混粗砂粘質土
10 茶褐色混粗砂粘質土
11 灰茶褐色混粗砂粘質土
12 濁茶灰色細砂
黄橙色混粗砂粘質土ﾌﾞﾛｯｸ若干含む
13 茶褐色混粗砂粘性細砂
14 暗茶褐色混粗砂粘質土
15 暗橙黄色混粗砂粘質土
16 黒褐色粘質土 SD59
17 暗褐色混粗砂粘質土
18 淡灰茶色細砂
19 黄茶灰色混粗砂細砂
20 茶灰色混粗砂粘質土
21 黒褐色混粗砂粘質土
22 暗灰色混粗砂粘質土

23 暗橙褐色混粗砂粘質土
24 暗赤褐色混粗砂粘性細砂
25 茶褐色混粗砂粘質土
26 濁黄茶灰色混粗砂粘性細砂
27 暗灰褐色混粗砂粘質土
28 灰茶褐色混粗砂粘性極細砂
29 暗褐色混粗砂粘質土
30 褐色混粗砂粘質土
31 黒褐色混粗砂粘質土
32 黒褐色混粗砂粘質土
33 濁灰褐色混粗砂粘質土
34 黄茶灰色粘性細砂
35 黒褐色粘質土
36 明茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
褐色粘性極細砂の小ﾌﾞﾛｯｸを若干含む
37 明黄茶灰色混粗砂粘性極細砂
38 茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
39 灰色混粗砂細砂
40 灰茶褐色混粗砂粘性極細砂
41 濁黄灰褐色混粗砂粘性極細砂

42 灰色混粗砂粘性極細砂
43 黒色混粗砂粘性極細砂
44 濁黄茶灰色混粗砂粘性極細砂
45 淡灰色混粗砂粘性極細砂
46 濁黄白色混粗砂粘性極細砂
47 淡褐灰色混粗砂粘性極細砂
48 淡灰褐色混粗砂粘性極細砂
49 茶褐灰色混粗砂粘性極細砂
50 灰茶色混粗砂粘性極細砂
51 濁灰色混細砂粘性極細砂
52 濁黄灰白色混粗砂粘性極細砂
53 濁灰色混粗砂粘性極細砂
54 濁黄茶灰色混粗砂粘性極細砂
55 濁灰黄茶色混粗砂粘性極細砂
56 暗灰色粘質土
57 濁灰茶色混粗砂粘性極細砂
58 暗灰茶色混粗砂粘性細砂
59 黒色混粗砂粘質土
60 茶灰白色混粗砂粘性細砂
61 41層ﾌﾞﾛｯｸ
62 濁灰黄白色混粗砂粘性極細砂
63 灰色混粗砂粘性極細砂 59層小ﾌﾞﾛｯｸ若干含む
64 淡黄茶灰色混粗砂粘性細砂
65 濁灰白色混粗砂粘性細砂
66 淡茶灰白色混粗砂粘性極細砂
67 濁茶褐灰色混粗砂粘性極細砂
68 暗茶褐灰色混粗砂粘性極細砂

第23図　Ⅱ区　北壁及び東壁土層図及び遺構配置図

包含層（第22・39・40図）

調査区内は後世の削平等に伴い、遺構を被覆する状態での明瞭な包含層は顕著には認められない。ただし、遺構面を地山と判断した濁黄茶褐色粗砂混じり粘質土に設定したため、機械掘削の段階でわずかに遺存していたであろう包含層を全て除去している。調査区の北壁において辛うじてそれが確認できるに過ぎない。ここで報告する遺物は機械による表土掘削及び壁面・平面精査に伴って出土したものである。

69～80は表土掘削時出土遺物である。69は須恵器坏蓋。古墳時代後期後半頃のものか。70は須恵器壷。71・72は土師質土器小皿。73・74は管状土錘片。75・76は円盤状土製品である。75は18世紀前半頃の肥前系陶器椀を、76は磁器を転用したものである。共に表裏から周縁を打ち欠き、平面形態を円形に仕上げる。また、共に凸面側に不定方向の擦痕が若干認められるが、凹面側にはほとんど認められない。77は肥前系陶器椀。18世紀前半頃のものか。78は備前系陶器鉢。79・80は備前系陶器擂鉢。79は18世紀中葉頃、80は15世紀中葉頃のものか。81は壁面精査時出土の管状土錘である。第40図198は壁面精査時に出土した火打石である。厚さ5㎜程度の剥片を素材とし、その側縁部を使用する。かなりの小型品であることから、稜線の再生時に生じた剥片を素材としたものと想定できる。石材は青灰緑色チャートである。

82～84は平面精査時に出土した遺物である。82は土師質土器小皿である。底部を欠くため詳細不明であるが、やや深い器形となり、小型の坏の可能性もある。83は土師質土器鉢。84は備前系陶器坏である。小片であることから詳細不明であるが、内面に淡灰緑色の自然釉がかかる。また、体部内面に現状で鍵形の線刻らしきものを認める。第39図189は石鏃である。厚さ4㎜ほどの剥片を素材とし、背面側のほぼ全周に調整加工を施す。素材腹面はほぼ未加工である。サヌカイト製。

85・86はＳＢ03周辺の包含層から出土した土師質土器坏である。85は底部と体部の境に明瞭な稜線をなし、若干内湾して直立気味に立ち上がる体部を持つ。口縁端部はわずかに外反する。底部切り離しはヘラ切りで、後にナデ調整が施される。86は底部と体部の境は鈍い稜線を持ち、体部から口縁部にかけて内湾してやや直立気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられ、わずかに肥厚させる。底部切り離しはヘラ切りで、後の調整はわずかに板ナデで調整される。

87～89はＳＲ01内に掘削したトレンチ内出土遺物である。87は弥生土器高坏。小片であることと摩滅がやや進んでいることから詳細は不明であるが、内面見込み部にヘラミガキの痕跡がわずかに認められる。外面の調整は不明瞭であるが、口縁部と体部の境に円形の刺突文が認められる。88は土師質土器小皿である。平坦な体部を持ち、体部の立ち上がりは弱い。89は管状土錘である。

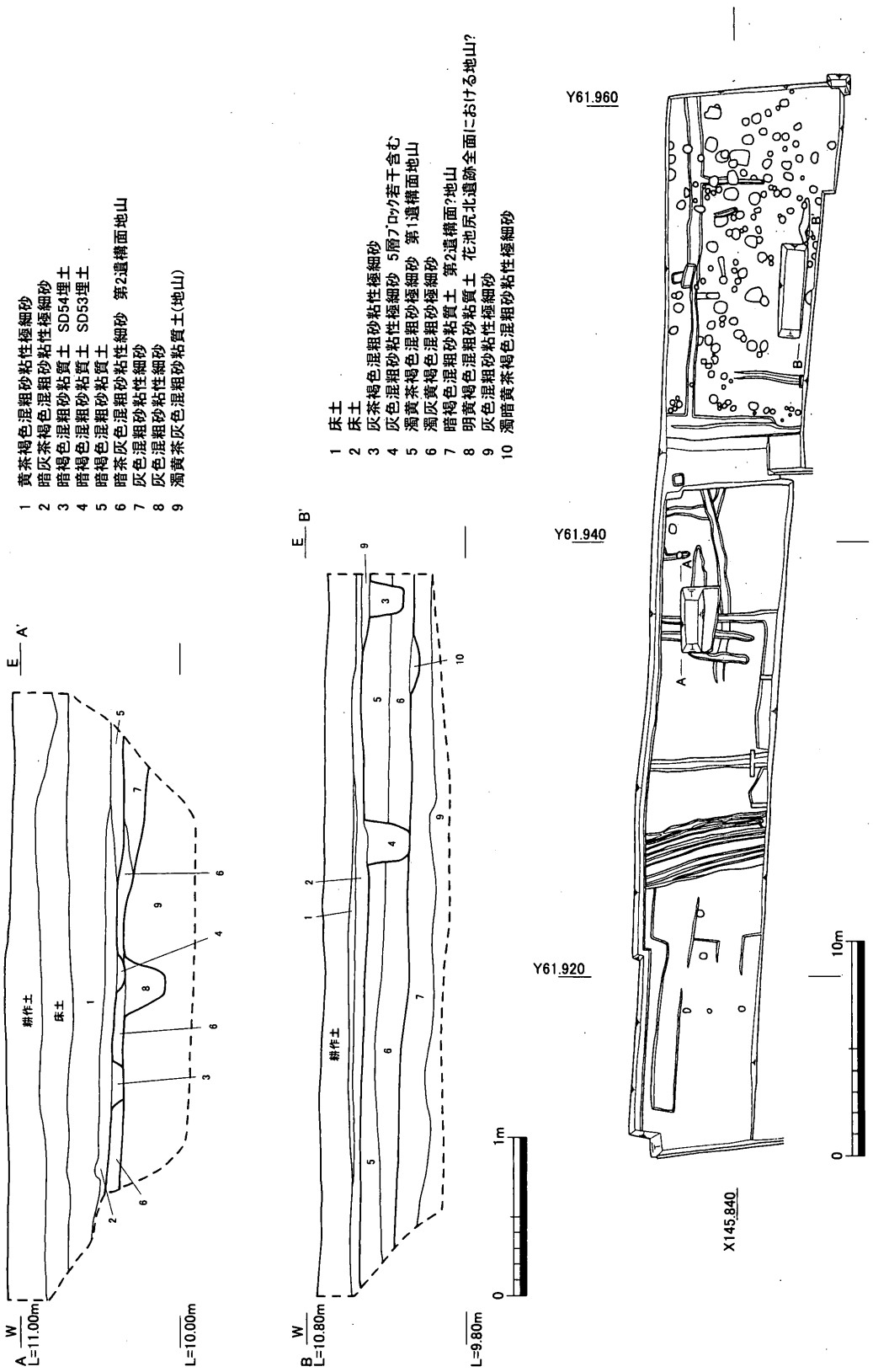
全体的に出土遺物を概観すると、ＳＲ01内に掘削したトレンチ出土遺物を除くと、概ね中世～近世のものが主体となる。なお、ほとんど図示し得なかったが、調査区全面において、量は多くないものの、鞴の羽口片・鉄滓・鉄片等の鍛冶関連と見られる遺物が散見される。

2．Ⅱ区の遺構と遺物

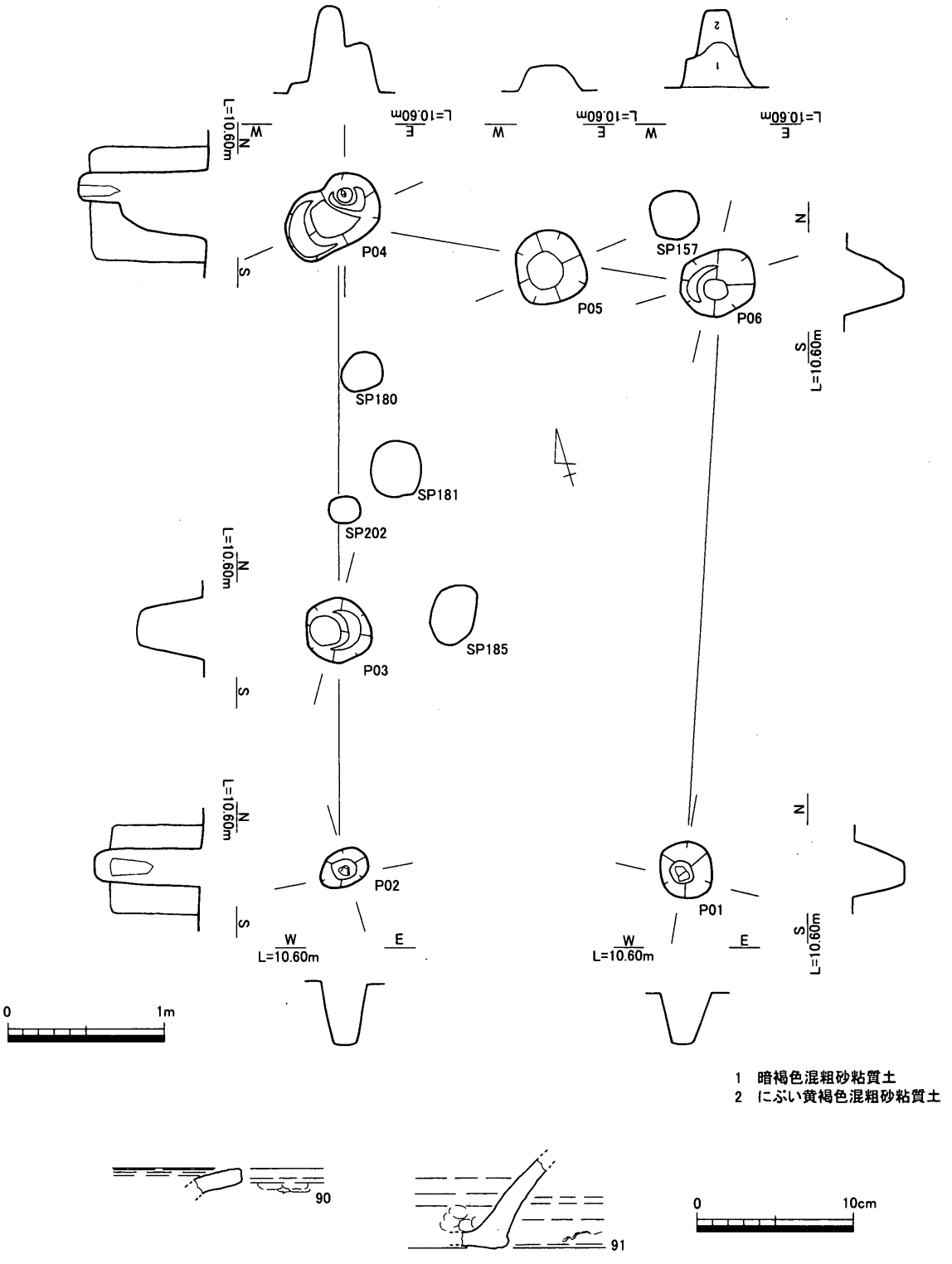
掘立柱建物

ＳＢ04（第25図）

調査区東端で検出した遺構である。現状で６基の柱穴が確認できた。南側が調査区外へ延びることから全体の形状は不明であるが、桁行約4.20ｍ以上（２間）、梁行約2.50ｍ（２間）の建物が想定できる。各柱穴の芯々間距離はばらつきがあり、約1.10（Ｐ05・06間）～3.70ｍ（Ｐ01・06間）



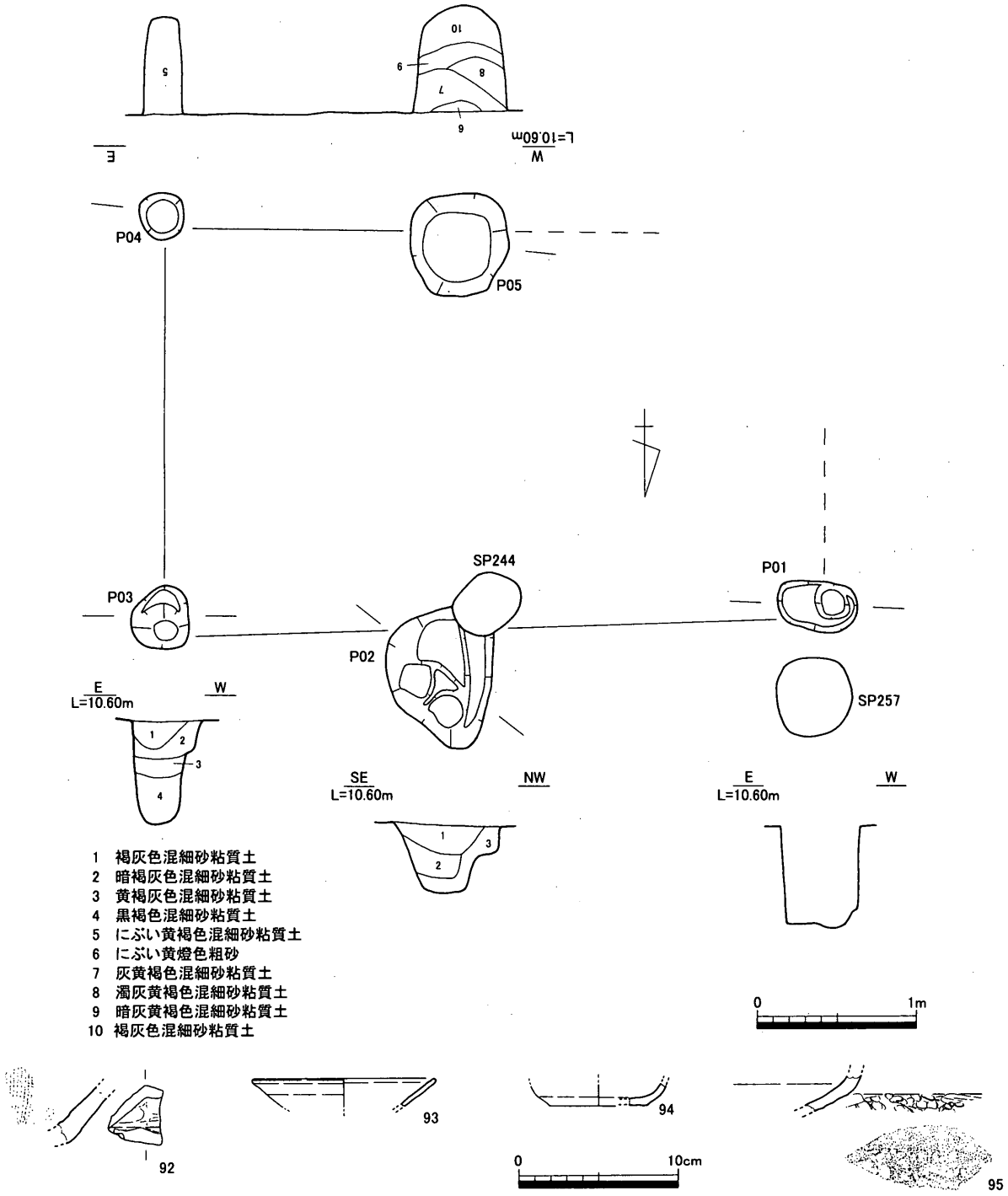
第24図　Ⅱ区　試掘トレンチ土層図



第25図　Ⅱ区　ＳＢ04　平・断面図及び出土遺物実測図

を測る。柱穴の平面形状は概ね不整な円形ないしは隅丸方形を呈し、規模は直径約0.30～0.60ｍ、深さは約0.15～0.80ｍを測る。この中でＰ05は深さにおいて周辺のものよりも浅く、イレギュラーな存在となる。当建物は柱穴の規模等から復元したが、建物にするにはやや無理があるかもしれない。なお、Ｐ02・04において柱根が遺存していたがかなり腐食が進んでおり、詳細な情報は得られなかった。

出土遺物は微細なものがほとんどで、形状の把握できるものは少ない。90はＰ05出土の土師質土



第26図　Ⅱ区　ＳＢ05　平・断面図及び出土遺物実測図

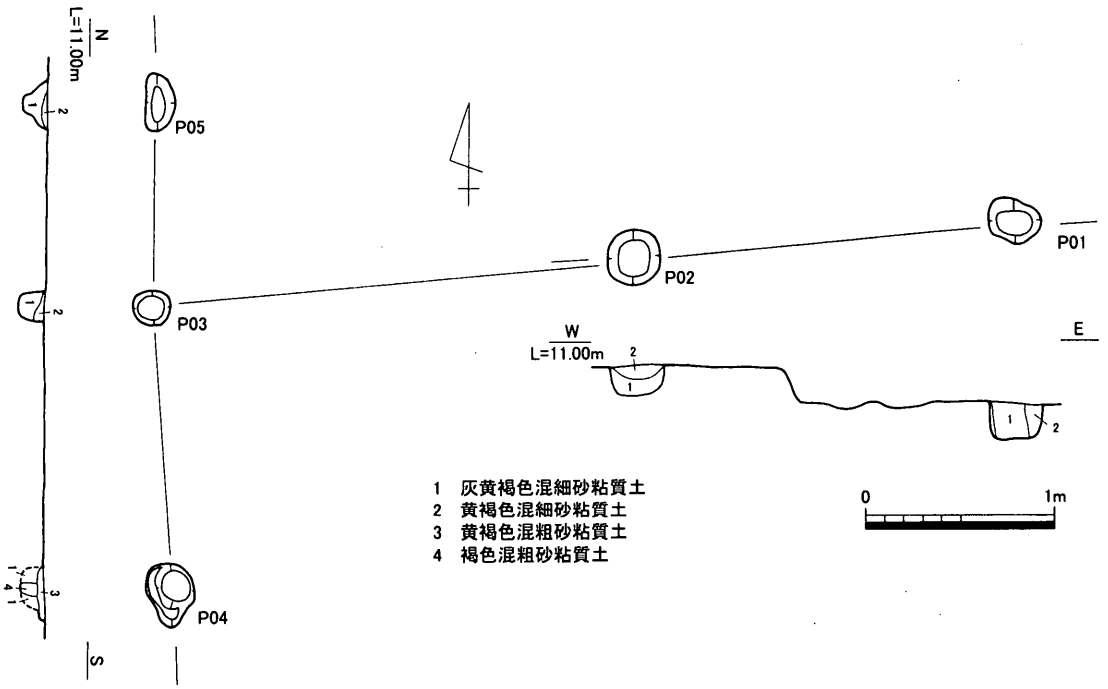
器土鍋口縁部。91はＰ03出土の須恵器である。壷に分類したが、体部が外に開くことから鉢の可能性もある。

ＳＢ05（第26図）

調査区南壁東半中央で検出した遺構である。現状では５基の柱穴を確認できた。壁際に位置するため、建物全体が検出できているか定かではないが、桁行約4.20ｍ（２間）、梁行約2.40ｍ（１間）の建物が復元できる。柱穴の平面形状は円形ないしは長楕円形を呈し、直径約0.30～0.90ｍを測る。深さは約0.40～0.70ｍとばらつきがあるが、多くは約0.60ｍを測る。柱穴の規模から見ると、Ｐ

02 は本来この建物には伴わない可能性がある。

出土遺物は小片が主体であり、形状が把握できるものは少ない。92 は備前系陶器擂鉢底部である。内面は使用に伴いかなりの度合いで摩滅する。93 は土師質土器坏である。やや横方向へ開く直線的な体部を持つ。94 は土師質土器小皿である。小片であることから、他器種と誤認している可能性もある。平坦な底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。95 は土師質土器土釜底部である。底部と体部の境界付近の破片で、外面は底部側に格子目タタキが認められる。第 39 図 190 はＰ 02 出土の平基無茎式の石鏃である。サヌカイト製。やや厚みのある器体である。正面中央付近に摩滅痕が認められる。191 はＰ 05 出土の石鏃未製品。サヌカイト製。小型剥片の打面側を中心に調整加工を施したものである。素材の裏面側に加工は集中する。打面の対辺は折れている。



第 27 図　Ⅱ区　ＳＢ 06　平・断面図

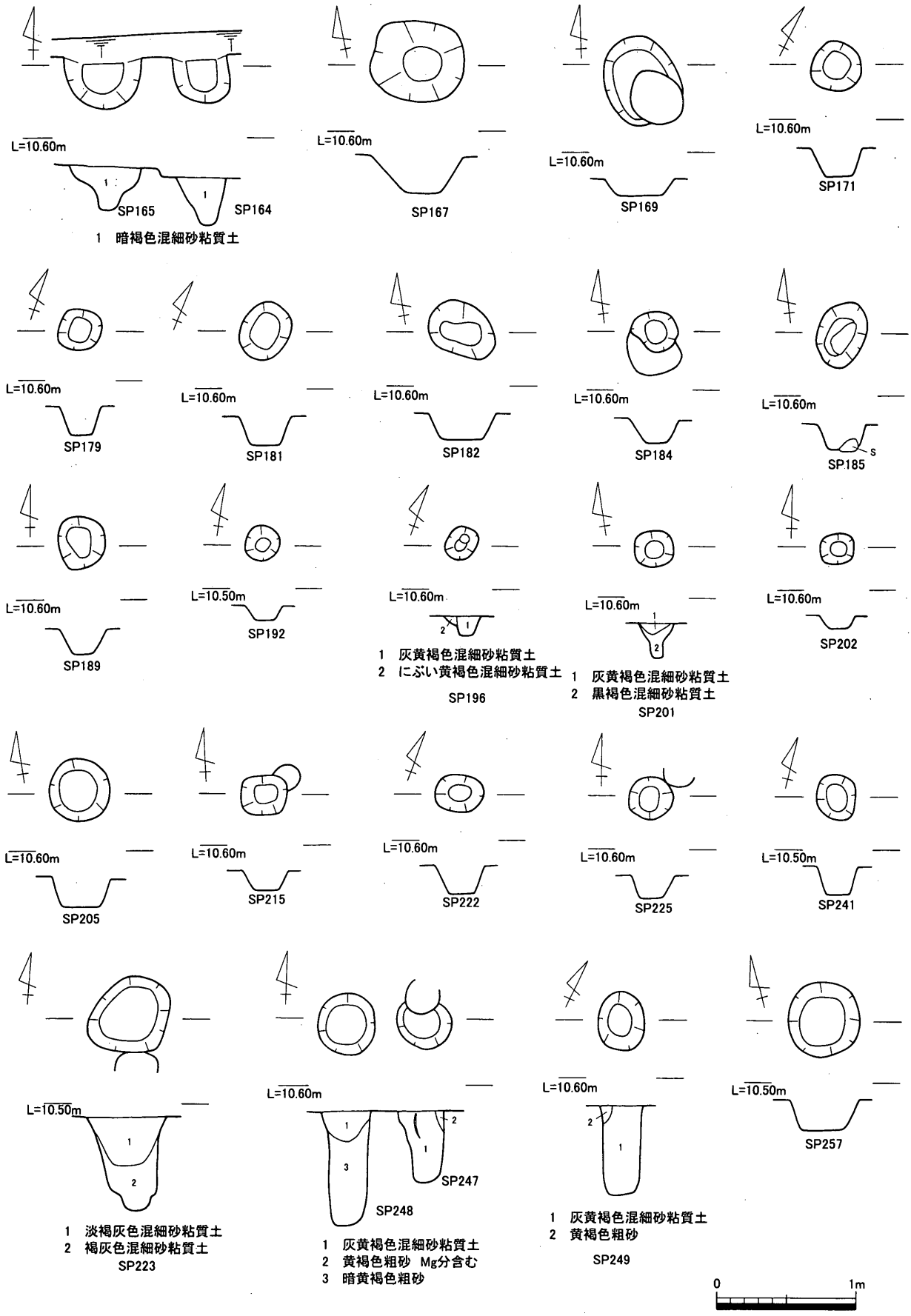
ＳＢ 06（第 27 図）

調査区西半中央付近で検出した遺構である。現状では５基の柱穴が確認できた。南北方向に一列に並ぶＰ 05・03・04 と、これに直交し東西方向に一列に並ぶＰ 03・02・01 の柱列の存在から掘立柱建物であると判断した。ただし、柱間の芯々間距離はかなりばらつきが認められる。特にＰ 03・05 間は約１ｍと最短である。P05 より東側の柱列状況は撹乱により不明であるが、庇に伴う柱穴の可能性が想定できる。柱穴の規模は直径約 0.20 ～ 0.30 ｍの不整な円形で、深さはいずれも約 0.20 ｍ以下である。

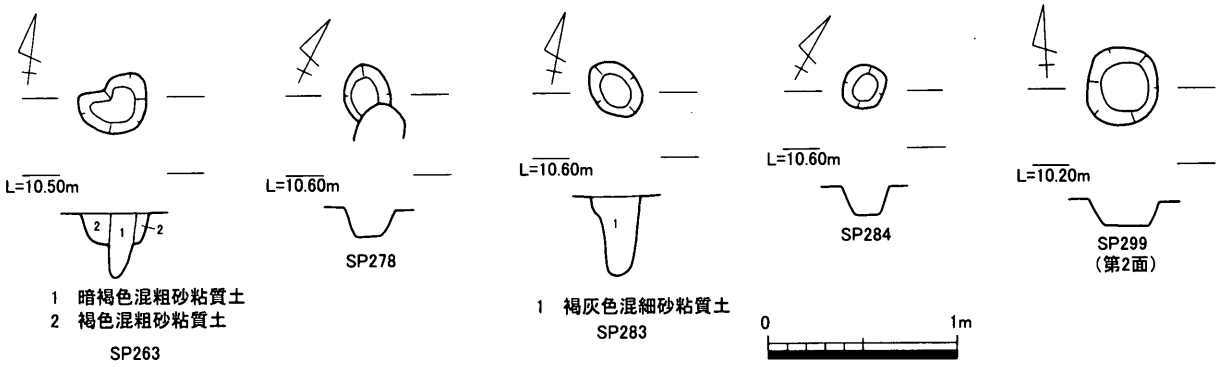
柱穴（第 28 ～ 30・41・42 図）

124 基検出した。分布の大半は調査区東１／３に偏っており、西側の大半が著しい削平を受けていることを裏付ける。建物を構成する可能性が皆無であるとはいえないが、現状で建物を構成しないもので、ある程度器形が想定できる遺物が出土したものをここで一括して報告する。

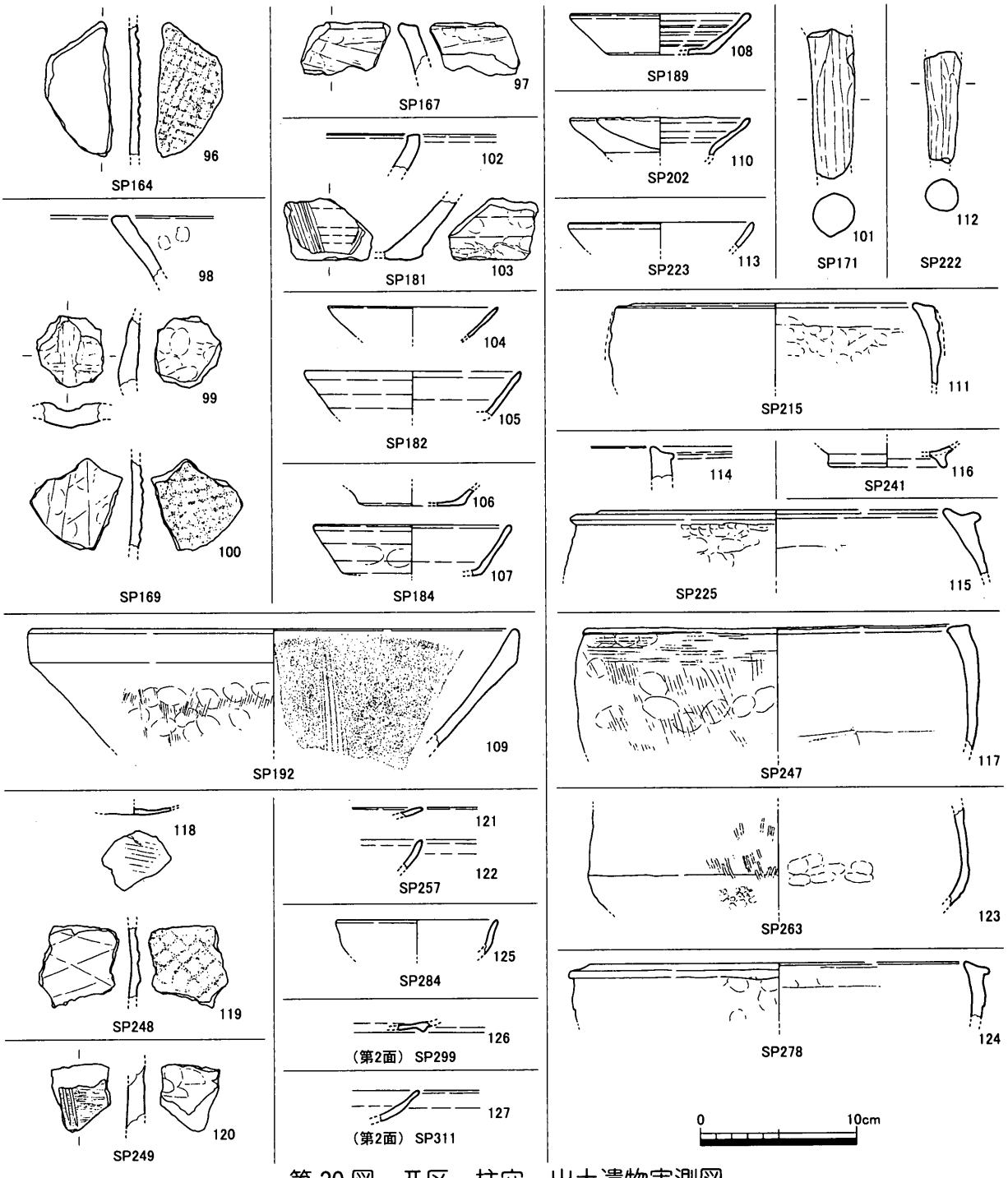
全体的に概観すると、柱穴の平面形状は円形を呈するものが主体である。直径は約 0.20 ｍ前後のものから約 0.60 ｍを測るものまで認められる。深さは約 0.10 ～ 0.20 ｍのやや浅いものが大半であるが、約 0.60 ～ 0.80 ｍ前後と深いものも散見される。いずれにしても、建物を構成した柱穴の規模



第28図 Ⅱ区 柱穴 平・断面図（1）



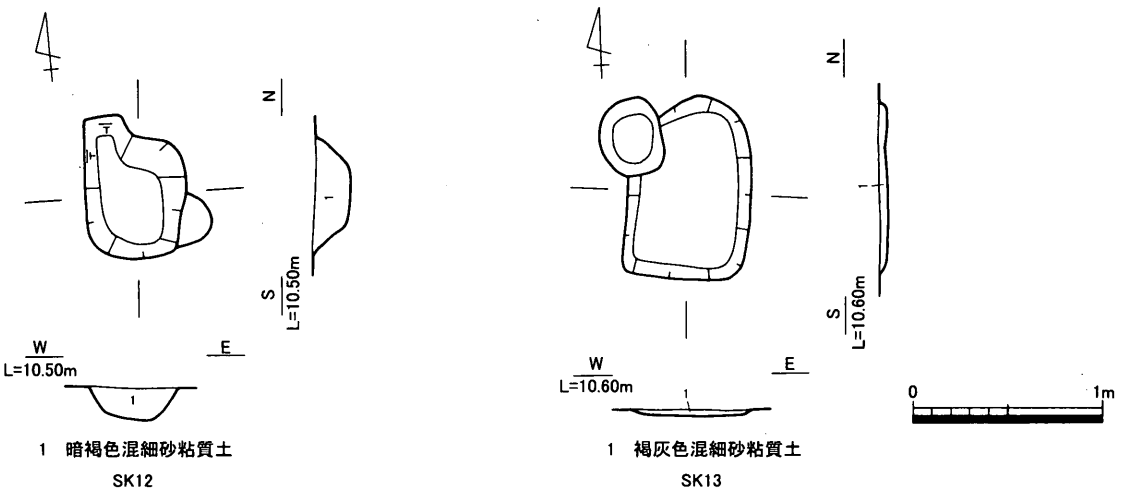
第29図　Ⅱ区　柱穴　平・断面図（2）



第30図　Ⅱ区　柱穴　出土遺物実測図

と概ね似た規模である。

次に各柱穴の出土遺物を見てゆく。96はＳＰ164出土の土師質土器土釜底部片である。外面に格子目タタキが認められる。97はＳＰ167出土の土師質土器土釜。98～100はＳＰ169出土の土師質土器である。98は羽釜、99は擂鉢、100は土鍋に分類した。99は片口部のみの小片であることから、他器種の誤認である可能性もある。101はＳＰ171出土の土師質土器土釜脚部。102･103はＳＰ181から出土。102は土師質土器土鍋口縁部。片桐Ⅲ-⑥期か。103は備前系陶器擂鉢底部片。小片であることから詳細不明であるが、乗岡編年中世５期頃のものか。104・105はＳＰ182出土の土師質土器坏。共に体部片であることから詳細不明であるが、直線的な体部をもつ。104はやや小型の部類か。105は口縁部外面がやや直立する。106・107はＳＰ184出土の土師質土器である。106は小皿、107は坏に分類した。106は小片であることから詳細不明であるが、平坦な底部から外反気味に立ち上がる体部を持つ。107は直線的に斜め上方へ立ち上がる体部を持ち、口縁端部はわずかに肥厚する。108はＳＰ189出土の土師質土器坏である。平坦な底部から直線的に延びる体部を持つ。口縁端部は肥厚し、丸く収められる。109はＳＰ192出土の須恵器擂鉢である。直線的な体部を持ち、口縁部は肥厚する。国分寺楠井遺跡での編年Ⅱ－３期（佐藤　1995）のものか。110はＳＰ202出土の土師質土器坏である。小片のため詳細不明であるが、外反しながら浅く立ち上がる体部をもち、口縁端部は口縁部直下で反転し内湾する形状である。底部は円盤状高台を持つものと想定できるが、内面見込みは大きく窪むようである。当遺跡においてはやや異質な器形である。111はＳＰ215出土の土師質土器土鍋。外面が著しく剥落する。112はＳＰ222出土の土師質土器土釜脚部。113はＳＰ223出土の土師質土器坏。114・115はＳＰ225出土の土師質土器土鍋。115は楠井編年Ⅱ－２期頃のものか。第42図205は鉄釘である。116はＳＰ241出土の土師質土器椀。高台部分のみの小片で詳細不明であるが、高めの高台が外方へ踏ん張って取り付く。117はＳＰ247出土の土師質土器土鍋。118・119はＳＰ248出土の土師質土器。118は小皿。ヘラ切りによる底部切り離しの後、板ナデを施したものと見られる。内面は回転指ナデ。119は土鍋底部。外面には格子目タタキが認められ、内面は板ナデにより仕上げられる。120はＳＰ249出土の備前系陶器擂鉢。小片化しているが、内面に顕著な使用痕が認められる。121・122はＳＰ257出土の土師質土器小皿。123はＳＰ263出土の土師質土器土釜。三足足釜の体部と想定する。底部には格子目タタキが認められ、体部は指オサエ後板ナデで仕上げられる。内面は板ナデにより平滑に仕上げられる。124はＳＰ278出土の土師質土器土鍋口縁部。125はＳＰ284出土の土師質土器坏。126はＳＰ299出土の土師質土器椀。断



第31図　Ⅱ区　土坑　平・断面図

面三角形の高台が直立気味に取り付く。127はＳＰ311出土の土師質土器坏。ＳＰ299・311は遺構面第２面での検出である。

第41図199はＳＰ179出土の火打石。正面から右側面にかけての稜線上に若干使用痕が認められるが、顕著ではない。裏面はバルブを大きく留める主要剥離面であることから、使用中に欠損したものか。裏面にも弱い使用痕が認められることから、欠損後も使用を試みたと見られる。共伴遺物が皆無で、帰属時期は不明。淡灰青色チャート。

土坑

ＳＫ12（第31図）

調査区北東隅付近で検出した遺構である。平面形は長辺約0.65ｍ、短辺約0.55ｍの隅丸方形を呈し、断面形は逆台形、深さは約0.15ｍを測る。

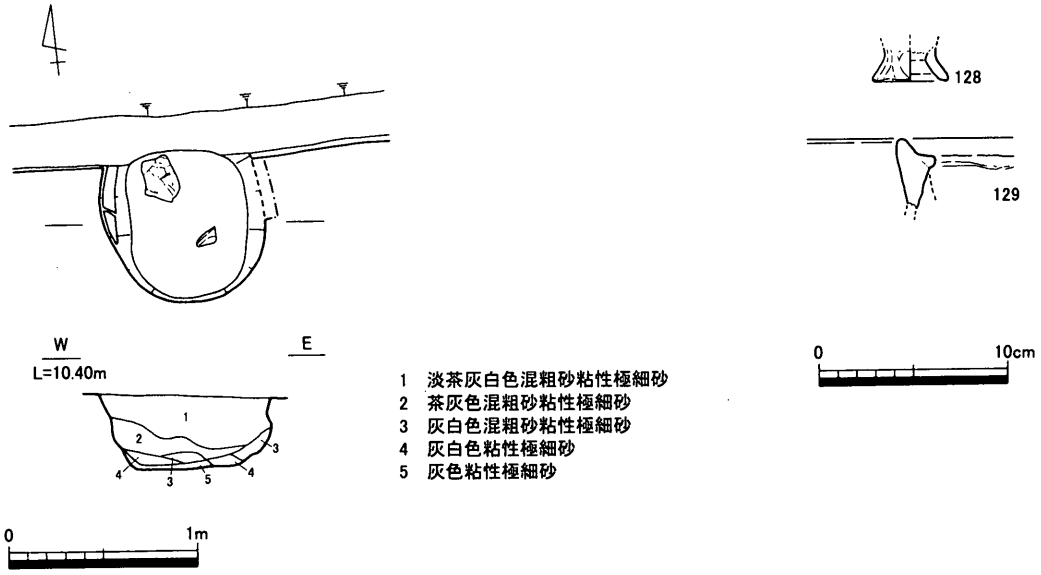
ＳＫ13（第31図）

調査区北東隅付近で検出した遺構である。平面形は長軸約１ｍ、短軸約0.60ｍの不整形を呈する。南側は方形を呈するが、北側がやや歪んだ形状となる。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは約0.05ｍである。

井戸

ＳＥ04（第32・39図）

第２面北壁中央西寄りで検出した遺構である。側溝掘削の際に検出したため、北側を損壊してい



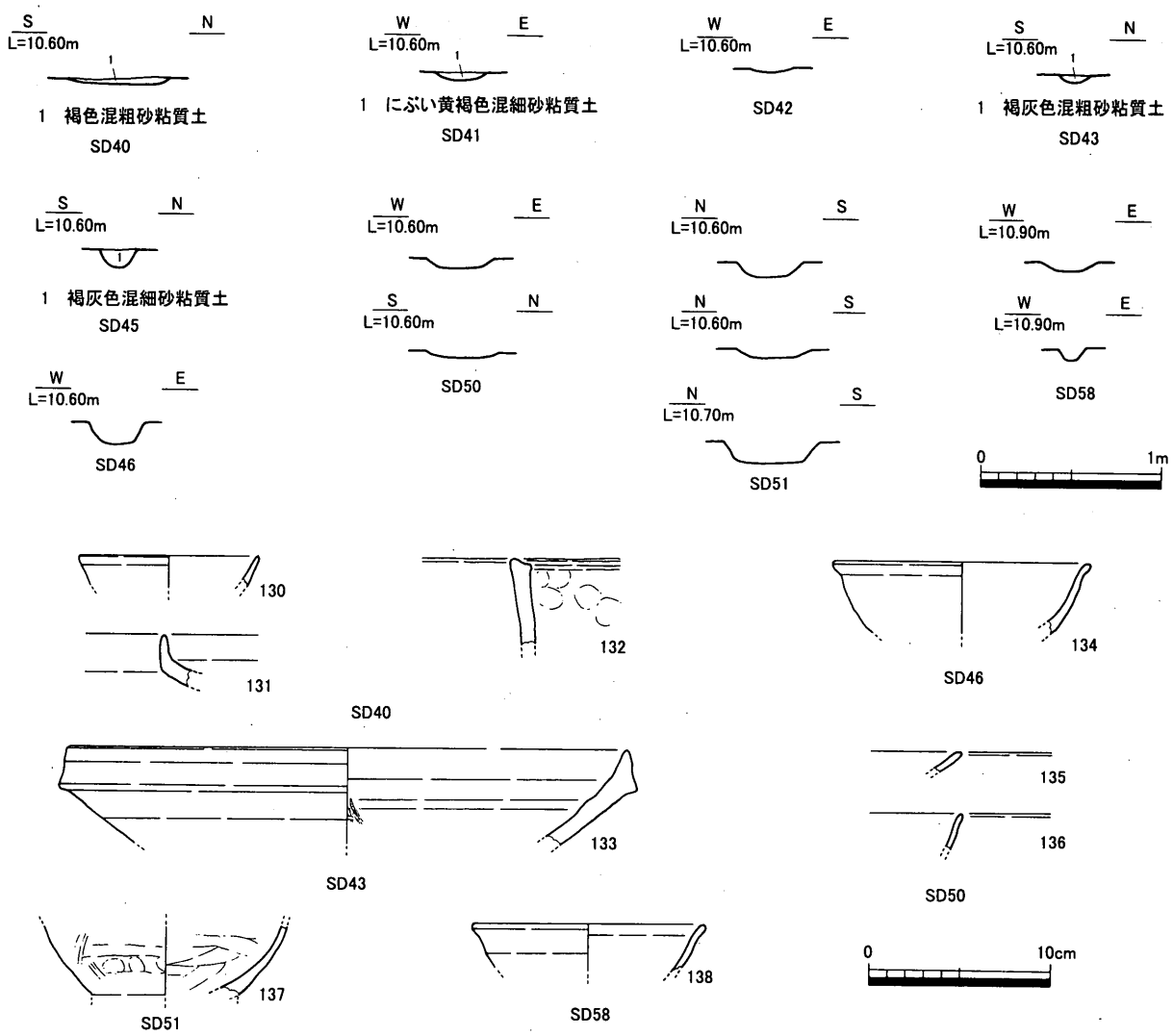
第32図　Ⅱ区　井戸　平・断面図及び出土遺物実測図

るが、平面形は直径約0.90ｍのやや不整な円形で、断面形状は深さ約0.40ｍのやや不整な椀形を呈する。底部から約0.30ｍ付近で壁面がオーバーハング気味に立ち上がり、滞水時に壁面が崩落したと想定する。ただし、顕著な湧水は認められず、一定期間滞水環境にあった堆積状況が認められないため、井戸というよりも天水溜めのようなものかもしれない。底部直上に礫２点が認められたが、用途は不明である。128は製塩土器底部、129は土師質土器土釜片である。また、第39図192は平基無茎式石鏃である。サヌカイト製。

溝状遺構

ＳＤ 40・41・48（第 33・41 図）

調査区東半で検出した遺構である。ほぼ正方位に設定された溝状遺構で、ＳＤ 40 が東西方向に、ＳＤ 41・48 が南北方向に主軸を取る。ＳＤ 41 は北端がＳＤ 40 と直交するが、南端は途切れる。また、ＳＤ 48 もＳＤ 40 西端と北側で直交するが、ＳＤ 49 及び撹乱に大きく削平されており、南側の



第 33 図　Ⅱ区　溝状遺構　断面図及び出土遺物実測図（1）

状況は不明である。北側は調査区外へ延びる。ＳＤ 40 の東側は調査区外へ延びるが、隣接するＩ区とは遺構面間のギャップが大きく、Ｉ区まで延びるかどうかは不明である。西側はＳＤ 48 と直交するが、撹乱西側で同じ軸を有する遺構はＳＤ 53 があるものの、その連続性は不明である。軸を違えるが、ＳＤ 51 へ連続する可能性も想定される。

130～132 はＳＤ 40 出土の土師質土器である。130 は小皿、131 は羽釜、132 は土鍋に分類した。また、第 41 図 200 は礫である。転磨の著しい扁平なもので、濃緑黄色を呈するチャートである。県内で産出しない石材であることから、搬入されたものと見られる。当遺跡では色調が異なるものの、チャートを用いた火打石が認められることから、火打石の素材として持ち込まれた可能性がある。出土遺物の状況から帰属時期を決定するのは困難であるが、中世段階のものと想定する。

ＳＤ 43（第 33 図）

調査区南壁東半中央付近で検出した遺構である。正方位に設定された溝状遺構であるが、東西両端が途切れる。出土遺物は極わずかである。133 は備前系陶器擂鉢の口縁部である。15 世紀中葉頃のものか。

ＳＤ 46（第 33 図）

調査区東半北寄りで検出した遺構である。ほぼ正方位に設定された溝状遺構であるが、検出長は極めて短い。出土遺物も少量で、134 の青磁椀片がある程度器形を想定できる資料である。

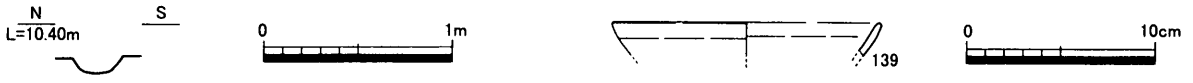
ＳＤ 50（第 33 図）

調査区北壁中央東寄り付近で検出した遺構である。現状で平面形Ｌ字を呈し、北側は調査区外へ、東側は撹乱により削平され、本来の状況は不明である。また、ＳＤ 51 により一部削平されており、これに先行すると想定できる。出土遺物は少なく、形状不明のものを主体とする。135 は土師質土器小皿、136 は須恵器椀である。

ＳＤ 51（第 33 図）

調査区中央やや東寄りで検出した遺構である。東西方向に掘られた遺構であるが、やや蛇行する。西端・東端共に削平されており、周辺遺構との関連は不明である。出土遺物も少ない。137 は黒色土器椀である。内外面黒色処理が施される。かなり摩滅が進むが、内面は板ナデの後ヘラミガキが施される。外面は回転指ナデによる整形である。下端に高台貼り付け痕が認められる。

ＳＤ 58（第 33 図）



第 34 図　Ⅱ区　溝状遺構　断面図及び出土遺物実測図（2）

調査区西半東寄りで検出した遺構である。南北方向に主軸を取り、周辺に見られる条里型地割の主軸と概ね一致する。出土遺物は少ない。138 は土師質土器椀。

ＳＤ 62（第 34 図）

第２面西端付近で検出した南北方向に正方位の主軸を持つ遺構である。中央付近でＳＤ 63 と直交する。

139 は黒色土器椀口縁部。内面及び外面口縁部を黒色処理する。口縁部内面には図示し得なかったが横位のヘラミガキが認められる。

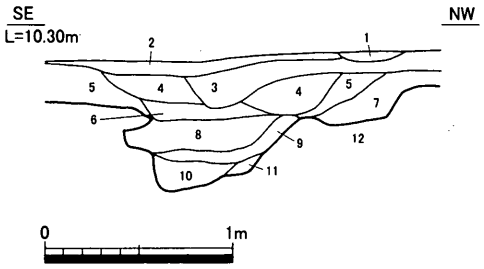
自然流路

ＳＲ 01（第 35 図）

調査区北東隅で検出した自然流路である。流路上面を遺構面第２面として認識していたため、明

瞭な遺構が確認できなかった部分に関してのみ掘削を行ったが、一部が調査区北の外側へ延びるほか、西端が第２面西半中央付近で先細りして途切れる。また、東端は東壁の外側へ延びるが、埋土の状況がＩ区ＳＲ 01 埋土に類似することから両者は同一流路と判断した。

当調査区で検出した流路幅は約 1.20 m、深さは最深部で約 0.90 mを測る。断面図作成位置では深さは約 0.60 mを測るが、上流の西側ではさらに浅くなる。埋土は上面に黒褐色系の粗砂混じり粘質土が堆積するが、これが最終埋没段階のものと想定する。ただし、堆積範囲は調査区ほぼ全面を覆い、検出した流路の幅を大きく超える。最終埋没段階では調査地周辺も含め、湿地状を呈していた可能性がある。下層は茶・灰色系の粗砂・細砂が堆積し、流水する環境にあったものと想定する。上層の堆積範囲と下層の堆積範囲は大きなギャップがあり、上層を除去した面は南西から北東へ緩やかに傾斜する平坦面をなすが、下層はこの平坦面を切り込むように堆積する。このことから、下層堆積後、ＳＲ 01 西端が削平・削剥を受ける環境を経た後、上層の堆積が開始された可能性が想定できる。出土遺物は皆無である。



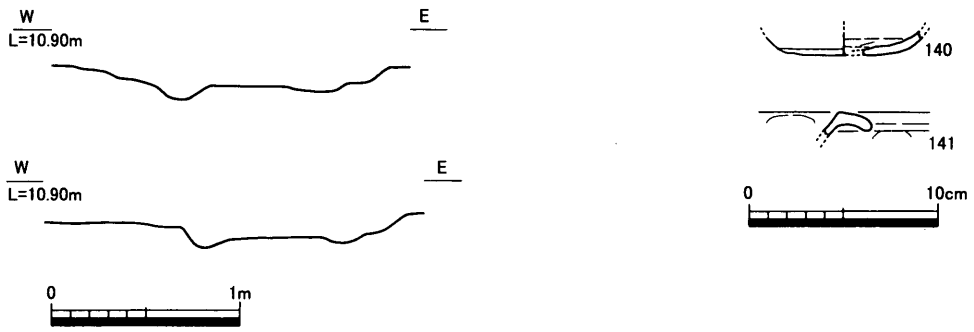
1 黄茶灰色混粗砂粘性極細砂 SD60埋土
2 黒茶褐色混粗砂粘性極細砂
3 黒灰褐色混粗砂粘性極細砂
暗灰色極細砂をﾗﾐﾅ状に含む
4 黒褐色混粗砂粘質土
5 暗茶褐色混粗砂粘性極細砂
6 黒褐色混粗砂粘性極細砂
4層に比べ粗砂多く含む
7 暗茶褐色混粗砂粘性極細砂
8 灰褐色混粗砂粘性細砂
濁黄灰色粘質土をﾗﾐﾅ状に含む
9 灰色混粗砂粘性細砂
10 灰色粗砂
11 灰色混粗砂粘質土
12 黄褐色混粗砂粘質土(地山)

第 35 図　Ⅱ区　自然河川ＳＲ 01　断面図

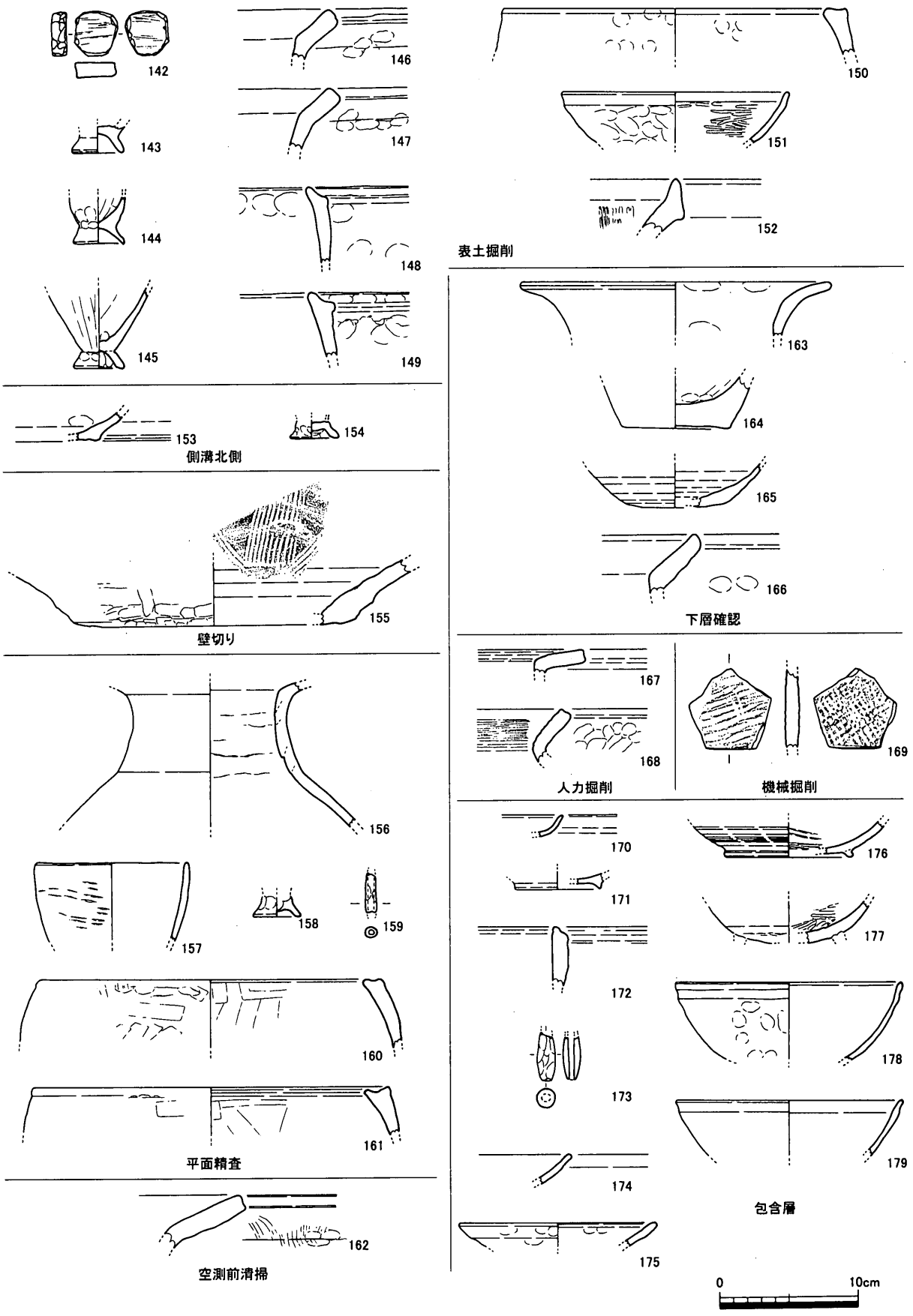
ＳＲ 02（第 36・42 図）

調査区西半で検出した遺構である。周辺の条里型地割の方位と概ね合致するが、やや西偏しながら弱い湾曲を示す。深さは最深部で約 0.15 mと浅いものの、検出幅が約 1.80 mと広いことから自然流路としたが、底部に３条ほどの凹みが認められることから、検出幅の範囲の中で複数の溝が繰り返し掘削された痕跡の可能性が高い。複数単位の埋土が調査区北壁の土層観察から窺えることも、その可能性を裏付けるといえる。

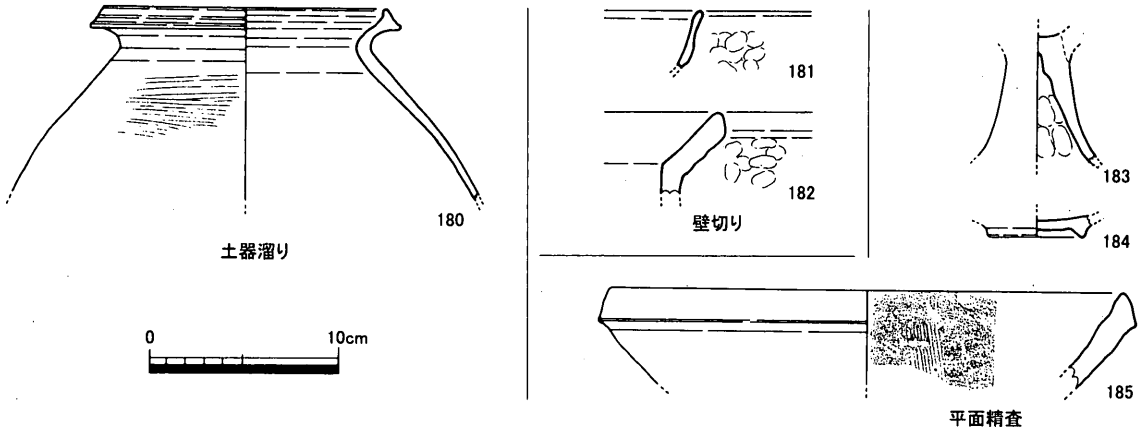
出土遺物はあまり多くは認められない。140 は土師質土器小皿。外面底部は比較的丁寧なナデ調整が施される。141 は瓦質土器焙烙口縁部。第 42 図 206 は寛永通宝。以上の遺物から当遺構は概ね 18 世紀後半頃のものか。



第 36 図　Ⅱ区　自然河川ＳＲ 02 断面図及び出土遺物実測図



第37図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（1）

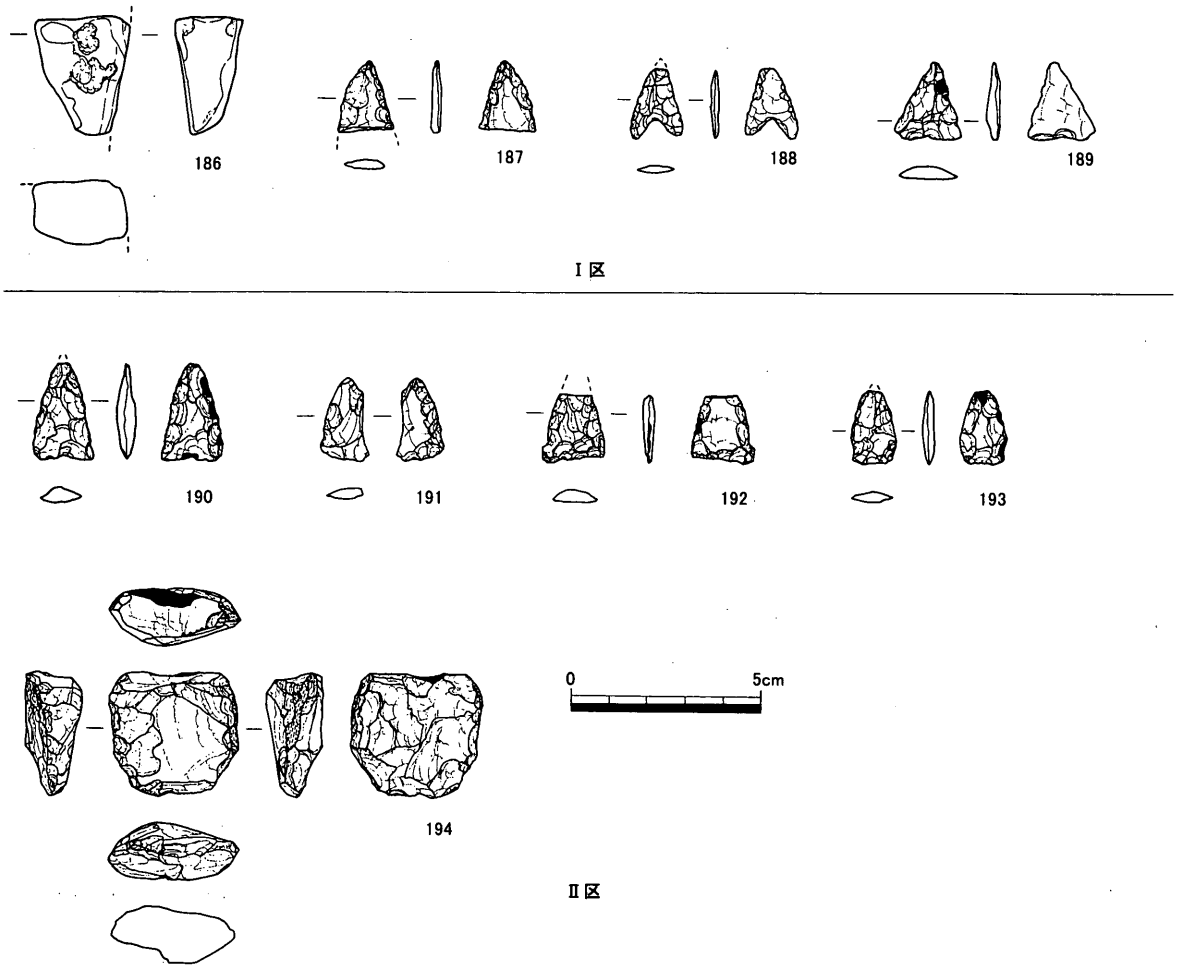


第38図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（2）

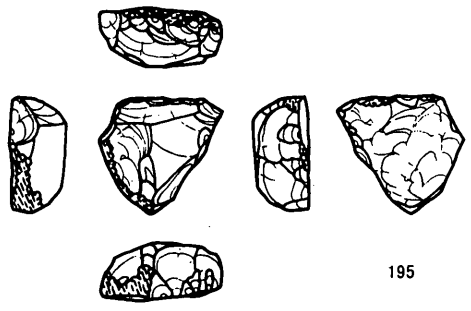
包含層（第37～39・41図）

当調査区においては、Ⅰ区と比較すると後世の削平の影響は少ない。第37・38図は、基本的に機械掘削・側溝掘削・平面精査等に伴って出土し、出土位置・層位の記録ができなかった遺物を一括で掲載している。なお、第1遺構面から第2遺構面へ掘り下げた際の、人力掘削によって出土した遺物についても包含層出土遺物として報告する。

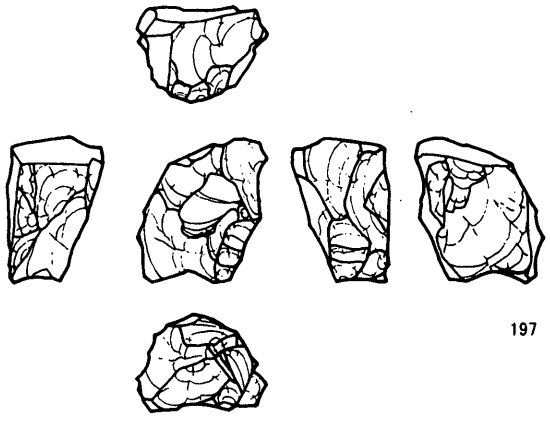
142～152・169は機械掘削に伴う表土掘削時出土遺物である。142は須恵器転用の円盤状土製品。143～145は製塩土器底部。144・145は胎土中に角閃石粒を大量に含む。143にはあまり顕著に認



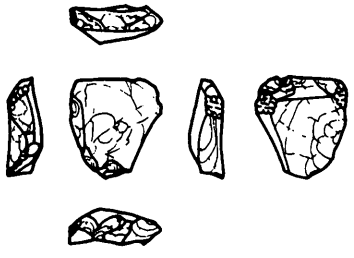
第39図　Ⅰ・Ⅱ区　各遺構出土石器実測図



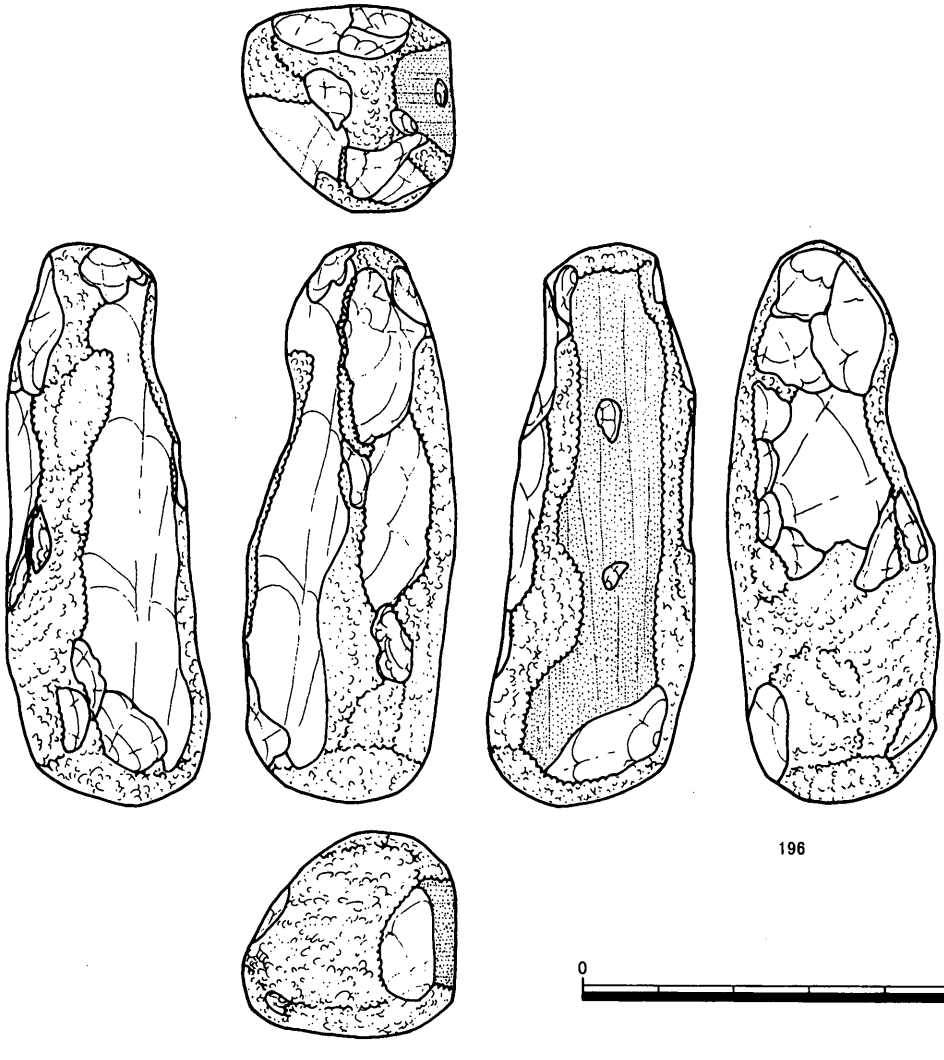
195



197



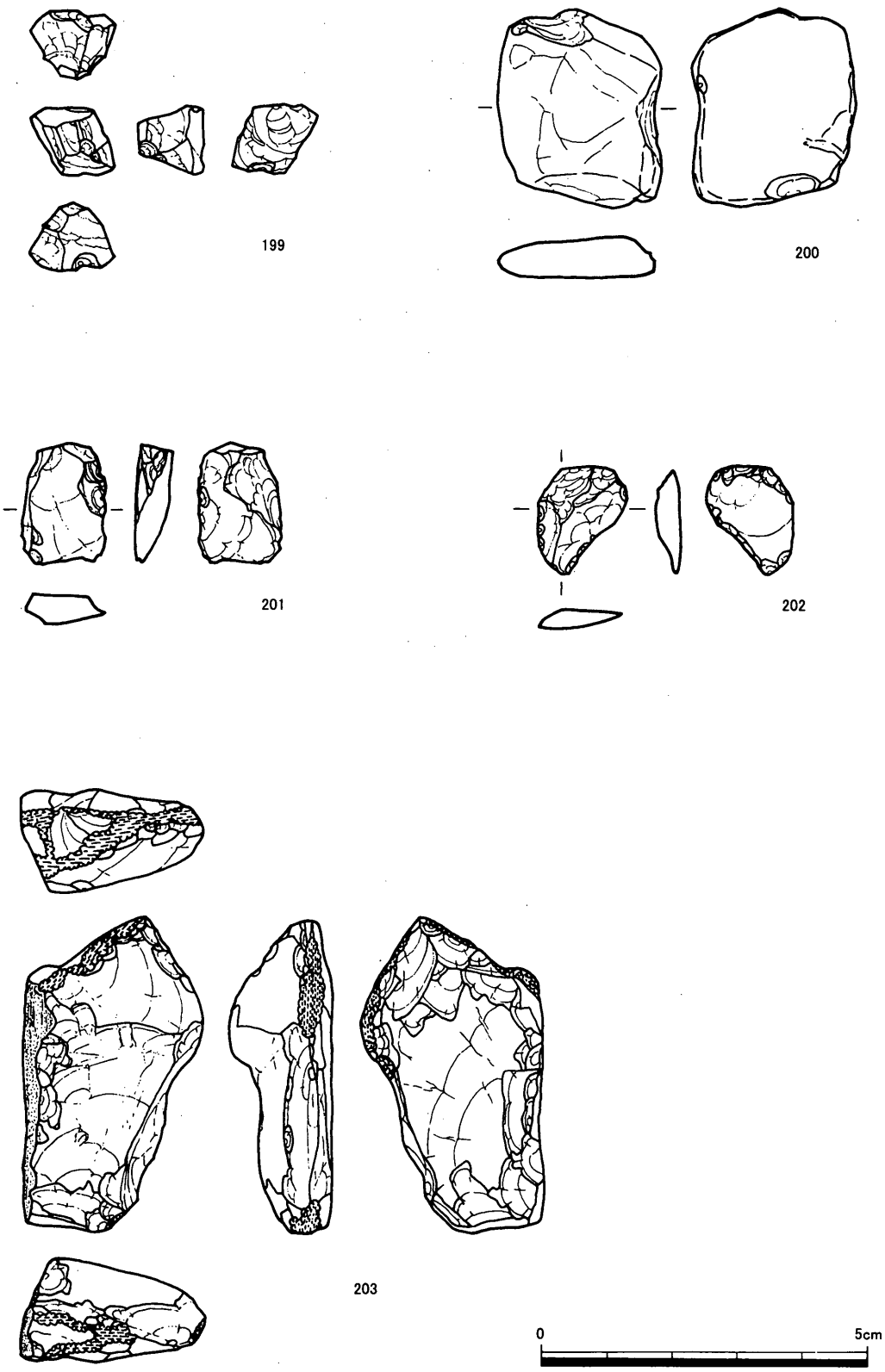
198



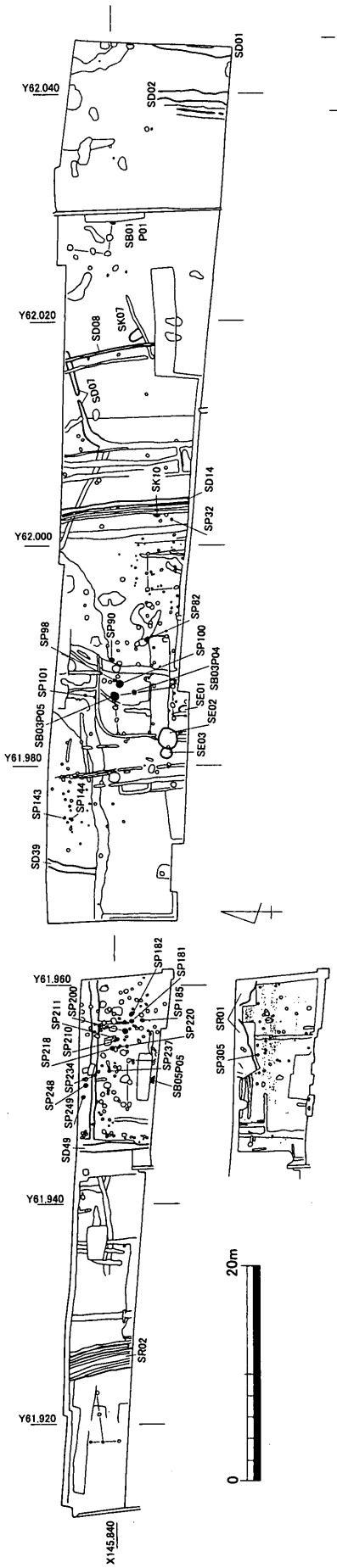
196

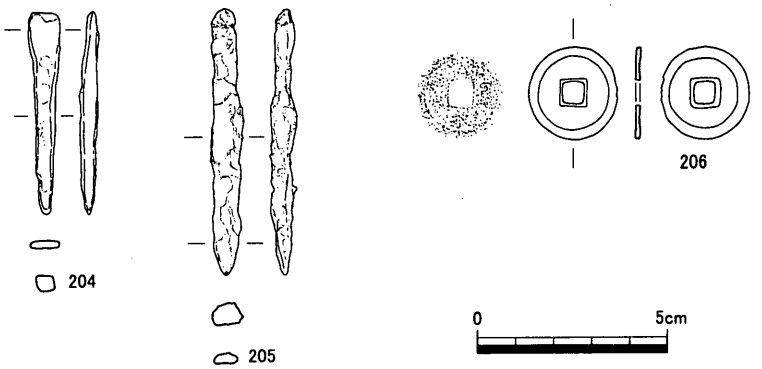
0 5cm

第40図　Ⅰ区　各遺構出土火打石実測図



第41図　Ⅱ区　各遺構出土火打石実測図





第42図 ㈢・㈣区　鉄滓類出土遺構分布図及び金属製品実測図

められない。脚台接合はいずれも粘土帯貼り付けによる。145においては体部外面にヘラ削りが認められる。大浦浜遺跡の製塩土器編年Ⅰ－6類に相当すると考えられる。146～149は土師質土器土鍋。150は土師質土器土釜。151は和泉型瓦器椀。内面は横位のヘラミガキが比較的精緻に施されるが、外面は口縁部に回転指ナデが施されるほかは、指オサエによる調整である。ヘラミガキは施されているものの十分に観察ができない。12世紀後半頃のものか。152は備前系陶器擂鉢口縁部。15世紀中頃のものか。

153・154は北壁側溝掘削時出土遺物である。153は須恵器椀。底部は円盤状高台を呈する。154は製塩土器脚台。胎土中に角閃石粒を大量に含む。155は壁面精査時出土の備前系陶器擂鉢。内面に重ね焼に伴うと見られる微小な粘土塊が付着する。外面は横ナデ調整が施される。

156～162は平面精査時出土遺物である。156は弥生土器壷。内外面ともに調整は摩滅により不明である。頸部内面には粘土紐接合痕が認められる。157・158は製塩土器である。157は底部を欠き全体の形状は不明であるが、体部外面にタタキの跡が認められる。158は脚台部である。胎土中に角閃石粒を大量に含む。159は管状土錘。上下端を欠く。160・161は土師質土器土釜。162は土師質土器土鍋。

163～166は黒褐色系粗砂混じり粘質土除去中出土遺物である。163・164は弥生土器壷に分類した。摩滅が著しい。165は須恵器坏。底部小片のため、詳細な器形は不明であるが、古墳時代後期のものか。166は土師質土器土鍋片。

167～179までは第1遺構面・第2遺構面間の包含層掘削時出土資料である。167・168は人力掘削時出土の土師質土器土鍋口縁部。169は機械掘削時出土の土師質土器土鍋底部。

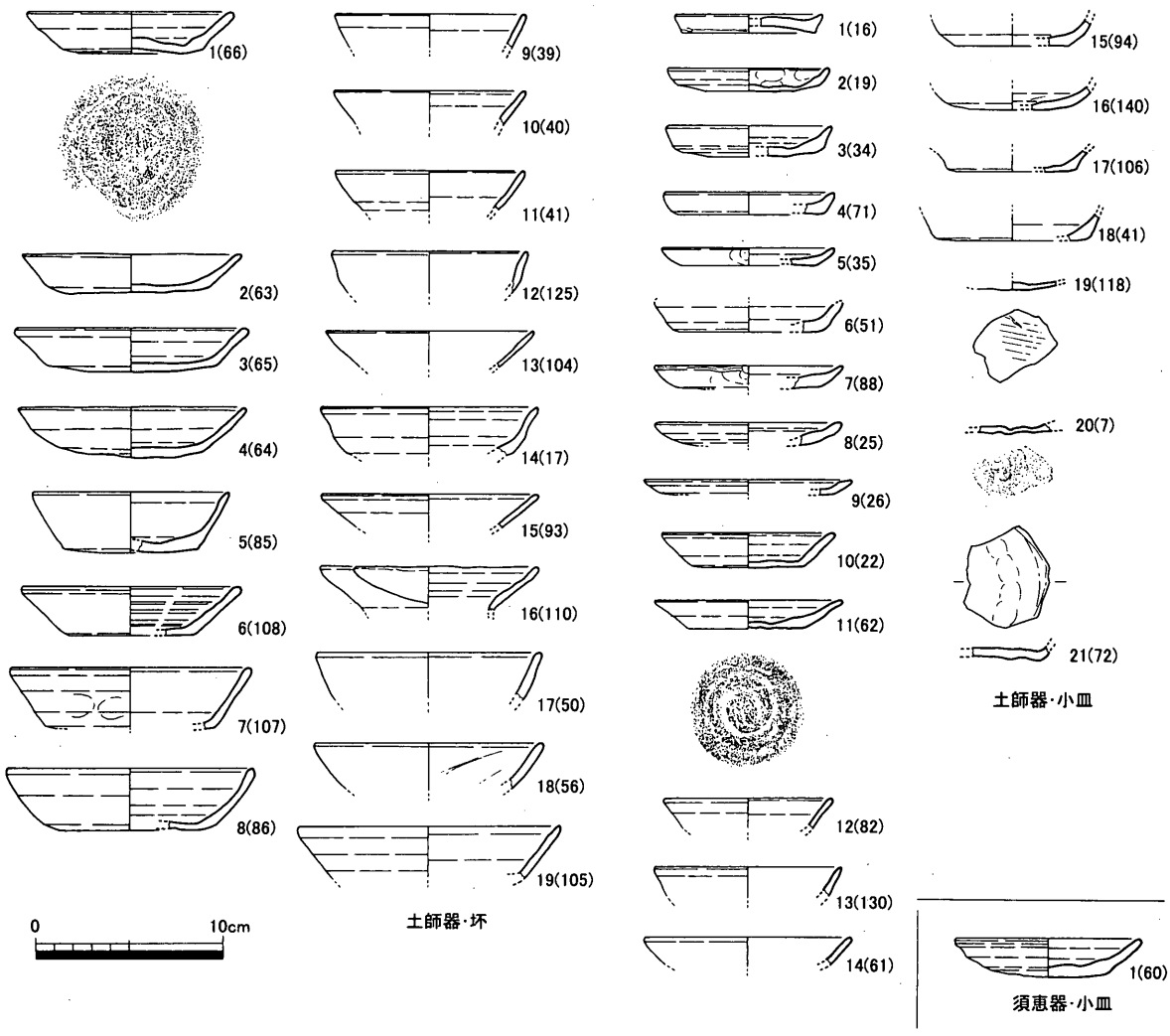
170～179は詳細な記録がないが、人力掘削時のものと考えられる出土遺物である。170は須恵器小皿。小片のため、他器種との誤認の可能性もある。171は土師質土器椀に分類した

が、瓦器椀の可能性もある。内面見込み部にヘラミガキの痕跡を認めるが、摩滅がやや著しい。172は土師質土器土鍋。173は管状土錘。174・175は土師質土器皿。176は土師質土器椀。177は黒色土器椀。高台が剥落する。178は和泉型瓦器椀と見られるが、摩滅がやや著しく詳細不明。179は中国産と見られる白磁椀。Ⅴ類か。

第38図は第2面出土遺物である。180は第2面直上で検出した土器溜り資料。弥生土器甕。弥生時代後期初頭のものか。181・182は壁面精査時出土遺物。181は須恵器椀。小片のため、詳細不明である。外面口縁部は明瞭な回転指ナデ、体部は指オサエを施す。内面は板ナデと見られる。182は土師質土器土鍋。183～185は第2面平面精査時出土遺物。183は弥生土器高坏。184は土師質土器椀。185は備前系陶器擂鉢。14世紀後半頃か。

第39図193は平基無茎式石鏃か。サヌカイト製。194は楔形石器。第41図201は壁面精査時出土の二次加工ある剥片。灰色チャート。202は火打石。稜線の再生時に生じた剥片を使用か。青緑色チャート。203は排土中から採集した火打石。サヌカイト製。顕著な使用痕が認められる。

また、図示していないものの、Ⅰ区同様、調査区のほぼ全面から鉄滓・鉄片・鞴の羽口等の鍛冶関連遺物が出土している。出土量は多くない。周辺での鉄鍛冶が想定されるが、詳細な場所等については不明である。



第43図　出土遺物集成図1

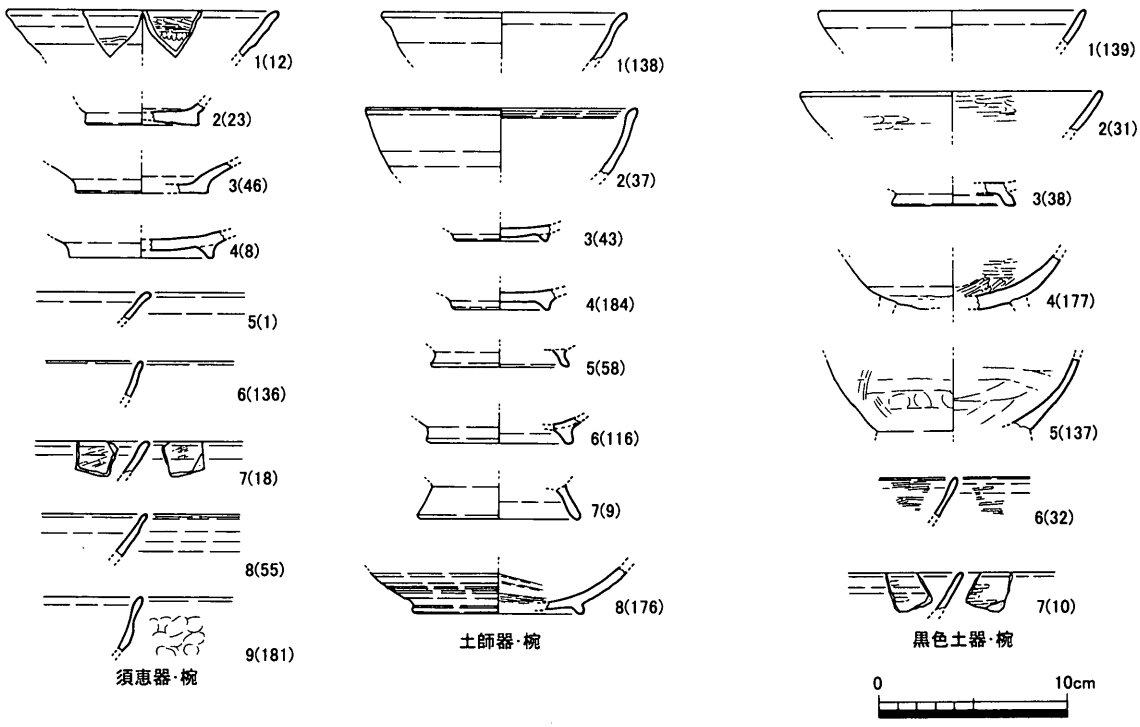
第４章　まとめ

１．出土遺物について

当遺跡から出土した遺物は、弥生時代後期頃から近世にかけてのものである。主体となるのは古代末から中世後半にかけてのものであるが、ほとんどが小片から図上で復元したものを主体としているうえ、各遺構出土遺物はまとまりが悪く、それぞれの遺構について時期決定を行うには困難な状況である。そこで、完形あるいはそれに近い状況で出土した遺物を軸として、各器種について集成し、遺跡全体を通じて認められる特徴を挙げるに留めておきたい。

土師器坏（第 43 図左１～19）

19 例集成した。うち、４例（１～４）はＩ区土器溜り出土の一括資料であるが、残りは調査区全体から集成している。１～８は比較的遺存状態の良いものである。土器溜り出土資料は全体的に浅めの器形を呈し、大きさも概ねそろう。５～８については形状にばらつきがある。底部は平底で回転ヘラ切りによる切り離しが成されたもののようである。体部は直線的に斜め上方へ立ち上がる５～７と、内湾気味に立ち上がる８がある。口縁端部は５がやや細くおさめられるのに対し、６～８は肥厚させて丸くおさめている。９～ 19 は底部を欠く。体部は口縁端部まで直線的に延びる９・13・15・19、やや内湾気味に延びる 10・17・18、内湾気味に立ち上がり口縁部が反転して外反する 12・14、底部から体部が一度直立した後、内湾気味に口縁端部まで延びる 16 等、バリエーションに富む。16 の底部は円盤状高台の範疇か。全体の数量が少ないため評価は困難であるが、当遺跡ではほかに類例がない資料である。底部の切り離しはいずれも回転ヘラ切りによるものと見られ、糸切りによるものは認められない。



第 44 図　出土遺物集成図２

土師器小皿（第 43 図右１～21）

21例集成した。これらのうち３・５はＩ区ＳＫ11、８・９はＩ区ＳＫ10、10・11はＩ区土器溜りからそれぞれ出土した一括資料であるが、残りは各遺構出土である。比較的全体の形状が把握しやすいのは１～11である。１及び３～５は底部と体部の境界が明瞭であるが、１・４の体部は立ち上がりが直立気味で短い。３は１・４に比べると体部の立ち上がりが長い。５はやや浅くやや口縁が開き気味である。２は底部と体部の境界がやや不明瞭。以上は口径が８～９cmでやや小型の部類である。６～９はやや口径が大きくなる。形状はやや深目の器形である６と扁平な７～９に分かれる。10・11は１～９と比較すると明らかに深い異なる形状を取る。底部を欠くものの、12～14も概ね同様の器形を呈するものと想定できる。15～21は底部のみの資料である。18については坏の可能性も残る。

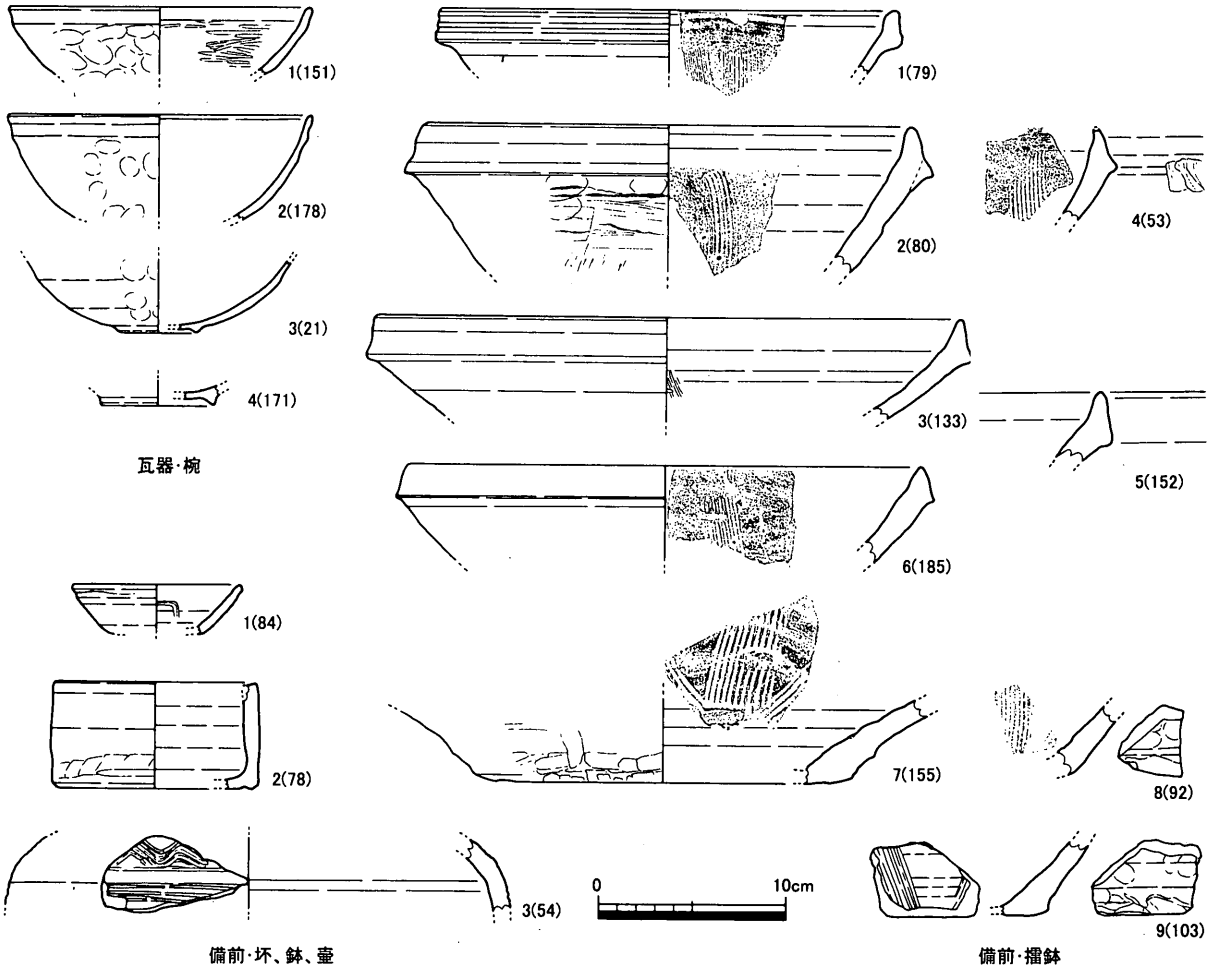
底部の切り離しはいずれも回転ヘラ切りによるものと見られ、糸切りによるものは認められない。

須恵器小皿（第43図右下１）

１例のみである。Ｉ区土器溜りからの出土である。

須恵器椀（第44図左１～９）

小片のみで、実態の把握は極めて困難である。１及び５～９は口縁部片である。１・７には内外面にヘラミガキが認められる。１は内面において密に施されるが、外面は粗い。７は内外面共に密に施される。５・６・８・９については不明瞭である。２～４は底部である。２・３は円盤状高台を呈し、４は輪高台を呈する。



第45図　出土遺物集成図３

土師器椀（第44図中央1～8）

小片のみで、実態の把握は極めて困難である。1・2は体部から口縁部にかけての破片である。共に内湾気味の体部から外反する口縁部を持つ。3～8は底部である。3・4はやや矮小化した断面三角形の高台を持つ。5～7は比較的高くしっかりと踏ん張った高台を呈する。8はやや低いが、断面方形の踏ん張った形状である。

黒色土器（第44図右1～7）

小片のみで、実態の把握は極めて困難である。1・2・6・7は口縁部片である。いずれも内外面に比較的精緻なヘラミガキを認める。

瓦器椀（第45図左上1～4）

図化したものは比較的遺存状態が良好である。1は内面に横位のヘラミガキが比較的密に施される。外面は指頭痕が目立つものの、ヘラミガキは施されない。

備前系陶器擂鉢（第45図右半1～9）

いずれも小片であり、全体の形状は不明なものが多い。1～6は口縁部のみである。1の口縁部はやや肥厚し、外面に2条の弱い凹線が認められる。乗岡編年の近世4期頃のものか。2～5はいずれも口縁端部を上方へ長く摘みあげたものである。15世紀代のものか。6は2～5に比べ摘みあげが弱い。14世紀後半頃のものか。7～9は底部であるが、卸目の間隔がまだ詰っておらず、乗岡編年近世2期以前のものと判断する。いずれも内面見込み部及び底部外面の状況が不明である。

2．遺構の変遷

対象地内はやや著しい削平を受けており、明瞭な遺構の変遷を追うことが困難である。また、変遷の基準となる遺物の出土が希薄であることからも、変遷を述べることが困難な一因となっている。従って、概略のみ記載しておく。なお、細分が困難であることから、変遷図は作成していない。

①古代以前

弥生時代後期の遺物が散見されるものの、明確に当該期の遺物が出土する遺構はない。Ⅱ区ＳＲ01最終埋没層上面において出土した遺物（第38図180）が認められることから、当流路は弥生時代後期以前のものである可能性はあるものの、出土遺物の裏付けが無く、詳細不明である。当遺跡西側に存在する八丁地遺跡においては古代以前の遺構・遺物が若干なりとも検出されているのに対し、花池尻北遺跡においてはほとんど認められず対照的なあり方である。

②鎌倉・室町時代

この遺跡での遺構・遺物はこの時期のものが主体となる。ただし、既に記載したとおり、掘立柱建物をはじめ、各遺構からの出土遺物がかなり希薄な状態で、実態の把握は困難である。建物を構成しない柱穴等から、当該期の遺物が出土しているものの、遺構の変遷を追う手掛かりとしてはやや不十分である。当該期の遺構・遺物は先述した八丁地遺跡や、花池尻北遺跡の南方に展開する花池尻中遺跡においてまとまった遺構あるいは遺物が確認されているのと比べると、やはり対照的なあり方であるといえる。

引用・参考文献

片桐孝浩　『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』 1992　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

大山眞充　『瀬戸大橋建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　大浦浜遺跡』 1988　香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団

中世土器研究会編　『概説　中世の土器・陶磁器』1995　中世土器研究会

佐藤竜馬編　「第５章　第２節　楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十八冊　国分寺楠井遺跡』 1995　香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

佐藤竜馬編　「第５章　第１節　高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』 2000　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社

山元素子　『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　八丁地遺跡　本村・横内遺跡』 2000　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

重根弘和・高畑知功　「第４章　まとめ」『一般県道磯上備前線道路改築に伴う発掘調査　山崎古窯跡』 2002　岡山県教育委員会

乗岡　実　「第Ⅴ章　第３節　近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡　表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査』 2002　岡山市教育委員会

乗松真也編　「第５章　第１節　14～15 世紀の土師質土器杯編年」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　浜ノ町遺跡』 2004　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

志度町史編さん委員会編　『新編志度町史　上巻』 1986　志度町

西久保谷遺跡

例　言

1. 本報告書は、県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県三豊郡三野町大字大見甲 6905 番地に所在する西久保谷遺跡（にしくぼたにいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、平成 12 年４月１日～平成 12 年７月 31 日で実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。
　主任技師　石原徹也、技師　小野秀幸、調査技術員　中村文枝

4. 調査に当って、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路建設課、西讃土木事務所、三野町教育委員会、地元自治会、地元水利組合

5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の編集は小野が担当した。

6. 報告書の作成に当っては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。
大久保徹也（徳島文理大学）、白川雄一（三野町教育委員会）

7. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。また、遺構は下記の略号により表示している。

ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＤ　溝状遺構	ＳＥ　井戸跡	ＳＨ　竪穴住居跡
ＳＫ　土坑	ＳＰ　柱穴跡	ＳＸ　性格不明遺構	

8. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1997 年度版』による。

9. 写真図版（添付 CD-ROM）のビューワーは、株式会社トリワークス（http://www.kuraemon.com/）「蔵衛門 2005 Professional」を使用した。

本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯と経過……56
　第１節　調査の経緯と経過……56
　第２節　発掘調査及び整理作業の体制……56

第２章　立地と環境……58
　第１節　地理的環境……58
　第２節　歴史的環境……58

第３章　検出された遺構と遺物……64
　第１節　Ⅰ区……64
　　1. Ⅰ区の概要 ……64
　　2. 土層序 ……64
　　3. 遺構と遺物 ……64
　第２節　Ⅱ区……83
　　1. Ⅱ区の調査概要 ……83
　　2. 土層序 ……83
　　3. 遺構と遺物 ……88

第４章　まとめ ……128
　第１節　出土遺物の検討 ……128
　第２節　遺構の帰属時期 ……132

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡分布図
第３図　調査区周辺旧状丈量図
第４図　調査区全体遺構配置図
第５図　Ⅰ区　遺構配置図
第６図　Ⅰ区　北壁及び東壁土層図
第７図　Ⅰ区　西壁土層図
第８図　Ⅰ区　ＳＨ01　平・断面図
第９図　Ⅰ区　ＳＨ02　平・断面図
第10図　Ⅰ区　ＳＨ01・02　出土遺物実測図
第11図　Ⅰ区　ＳＨ03　平・断面図
第12図　Ⅰ区　ＳＢ01　平・断面図
第13図　Ⅰ区　ＳＢ01　出土遺物実測図
第14図　Ⅰ区　柱穴　平・断面図
第15図　Ⅰ区　柱穴　出土遺物実測図
第16図　Ⅰ区　溝状遺構　断面図
第17図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（1）
第18図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（2）
第19図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（3）
第20図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（4）
及びＳＤ05・06出土遺物実測図
第21図　Ⅰ区　性格不明遺構　平・断面図（1）
第22図　Ⅰ区　性格不明遺構　出土遺物実測図
第23図　Ⅰ区　性格不明遺構　平・断面図（2）
第24図　Ⅰ区　包含層出土遺物実測図
第25図　Ⅱ区　遺構配置図
第26図　Ⅱ区　北壁土層図
第27図　Ⅱ区　西壁土層図
第28図　Ⅱ区　東壁土層図
第29図　Ⅱ区　柱穴　平・断面図
第30図　Ⅱ区　柱穴　出土遺物実測図
第31図　Ⅱ区　土坑　平・断面図
第32図　Ⅱ区　土坑　出土遺物実測図（1）
第33図　Ⅱ区　土坑　出土遺物実測図（2）
第34図　Ⅱ区　ＳＤ03　断面図
第35図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（1）
第36図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（2）
第37図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（3）
第38図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（4）
第39図　Ⅱ区　溝状遺構　断面図
第40図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（1）
第41図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（2）
第42図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（3）
第43図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（4）
第44図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（5）
第45図　Ⅱ区　性格不明遺構　平・断面図（1）
第46図　Ⅱ区　性格不明遺構　平・断面図（2）
第47図　Ⅱ区　性格不明遺構　平・断面図（3）
第48図　Ⅱ区　性格不明遺構　出土遺物実測図
第49図　Ⅱ区　溜池状遺構　平面図
第50図　Ⅱ区　溜池状遺構　土層図
第51図　Ⅱ区　溜池状遺構　出土遺物実測図
第52図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（1）
第53図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（2）
第54図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（3）
第55図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（4）
第56図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（5）
第57図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（6）
第58図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（7）
第59図　Ⅱ区　石器集中部遺物出土平面図
第60図　Ⅱ区　石器集中部土層図
第61図　Ⅱ区　石器集中部出土遺物実測図（1）
第62図　Ⅱ区　石器集中部出土遺物実測図（2）
第63図　Ⅱ区　石器集中部出土遺物実測図（3）
第64図　Ⅱ区　石器集中部個体識別資料分布
及び接合関係図
第65図　出土遺物集成図（1）
第66図　出土遺物集成図（2）
第67図　出土遺物集成図（3）
第68図　出土遺物集成図（4）
第69図　出土遺物集成図（5）
第70図　ＳＤ03出土遺物器種別比率グラフ

表　目　次

第１表　発掘調査及び整理作業の体制
第２表　ＳＤ 03 出土遺物器種別点数一覧

付　図　目　次

付図１　西久保谷遺跡遺構配置図

Ｃ　Ｄ　目　次

観察表
遺構・遺物写真

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

今回報告する西久保谷遺跡は、その周辺において昭和 58 年に実施された農業基盤整備事業の際、発見された遺跡として遺跡台帳に登録されていたが、その実態は不明なものであった。その後、観音寺土木事務所により県道丸亀詫間豊浜線建設が計画され、平成６年度から観音寺土木事務所と香川県教育委員会文化行政課（以下「県教委」と呼ぶ）の間で協議が実施された。平成７年度には県教委から事業実施前に遺跡の有無確認を要する範囲が提示されていた。平成 10 年度に入り、観音寺土木事務所から部分的に用地買収が進んだ旨の連絡を受けた県教委は、協議のうえ分布調査及び試掘調査を実施した。その結果、基盤整備により削平を免れた箇所が認められたことから、2,400㎡の範囲について文化財保護法に基づく事前の保護措置が必要であると判断された。

その後、平成 12 年４月１日付けで、香川県埋蔵文化財センターの前身である財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと県教委の間で「埋蔵文化財発掘調査契約」が締結され、西久保谷遺跡の発掘調査が実施された。

発掘調査期間は４ヶ月で、平成 12 年４月１日から開始し、７月 31 日に終了した。調査の方法は直営方式で実施した。調査の基準点は旧国土座標系第Ⅳ系に基づき、任意の点に設置した。調査区の設定は対象地の中央を南北に縦断する生活道が存在したことから、この道を基準に西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。遺構名は基本的に調査区単位で設定したが、連続することが明らかなものについては同一遺構名を設定した。

第２節　発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制は第１表のとおりである。なお、整理作業期間は３ヶ月で、平成 16 年 11 月１日から開始し、平成 17 年１月 31 日に終了した。

発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員　漆原陽子

普通作業員

饗庭澄夫、一藁直義、秋山凱生、桑島和茂、越智広二、森岡富明、泉谷　弘、大川幸男、中浦一憲

軽作業員

浦野房子、香川貞美、正嘉代子、横田八重子、香川紀美子、三井美智子、植野朝子、平井加寿美
松山枝美子、山田美佐江、山口ハルミ、池田敬子、小野理恵、香川芳子

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

小林里美、北濱敦子、前田好美、磯崎福子

香川県教育委員会　文化行政課					
	平成12年度		平成16年度		
総括	課　　長	小原克己	総括	課長	北原和利
	課長補佐	小国史郎		課長補佐	森岡　修
			総務・芸術文化		
総務	係　　長	中村禎伸	グループ	主任	香川浩章
	主　　査	三宅陽子		主査	堀本由紀
	主　　事	亀田幸一		主任主事	八木秀憲
			文化財		
埋蔵文化財	副 主 幹	廣瀬常雄	グループ	課長補佐	大山眞充
	係　　長	西岡達哉		主任	山下平重
	文化財専門員	森　格也		文化財専門員	佐藤竜馬
	文化財専門員	宮崎哲治		主任技師	松本和彦
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			香川県埋蔵文化財センター		
総括	所　　長	菅原良弘（～10.31）	総括	所長	中村　仁
		小原克巳（11.1～）			
	次　　長	川原裕章		次長	渡部明夫
総務	副 主 幹	六車正憲	総務課	課長	野保昌弘
	副 主 幹	大西誠治		係長	松崎日出穂
	係　　長	新　一郎		主査	塩崎かおり
	主　　査	山本和代		主査	田中千晶
	主任主事	高木康晴			
調査	主任文化財専門員	藤好史郎	資料普及課	課長（兼）	渡部明夫
	主任技師	石原徹也		主任技師	小野秀幸
	技　　師	小野秀幸			
	調査技術員	中村文枝			

第１表　発掘調査及び整理作業の体制（敬称略、順不同）

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

遺跡が所在する三野町は、県西部の三豊郡に属し、西側は詫間町・仁尾町と、南側は高瀬町と、東側は善通寺市及び仲多度郡多度津町とそれぞれ接する。主たる町域は四周が低い山々に囲まれており、主なものを挙げると、北から竜王山、毘沙古山、貴峰山、黒戸山、弥谷山、火上山、葛ノ山、爺神山、山条山、志保山、七宝山がある。これらの多くは隣接する町との境をなす。町の中心には海抜５ｍ以下の沖積平野及び海岸平野（三野津平野）が広がり、この平野の東側を高瀬川が蛇行しながら流れる。三野津平野の大半は江戸時代前期の干拓によるものである。町内には海に因む地名が点在し、これらの地名の分布から当時の海岸線が復元されている（第２図）。

第１図　遺跡位置図

遺跡は三野町大字大見甲 6905 番地に位置し、標高約 12 ｍを測る。遺跡南方にある毘沙古山から北方へ派生する丘陵の尾根筋先端部上に立地しており、遺跡の西側には同じく毘沙古山から派生する丘陵があり、その間には小さな谷地形が認められる。東側は、毘沙古山に隣接する貴峰山と更に東にある黒戸山の間から流下する久保谷川によって形成された谷地形が存在する。また、遺跡北側には瀬戸内海が遠浅に広がる。遺跡の立地する丘陵は現在、周辺も含め、昭和 58 年に実施された農業基盤整備事業の影響を受けて平坦化しているが、旧状は丘陵斜面を取り巻くように等高線に並行した細長い水田が棚田状に営まれていたことが、基盤整備事業の計画平面図から読み取れる（第３図）。

第２節　歴史的環境

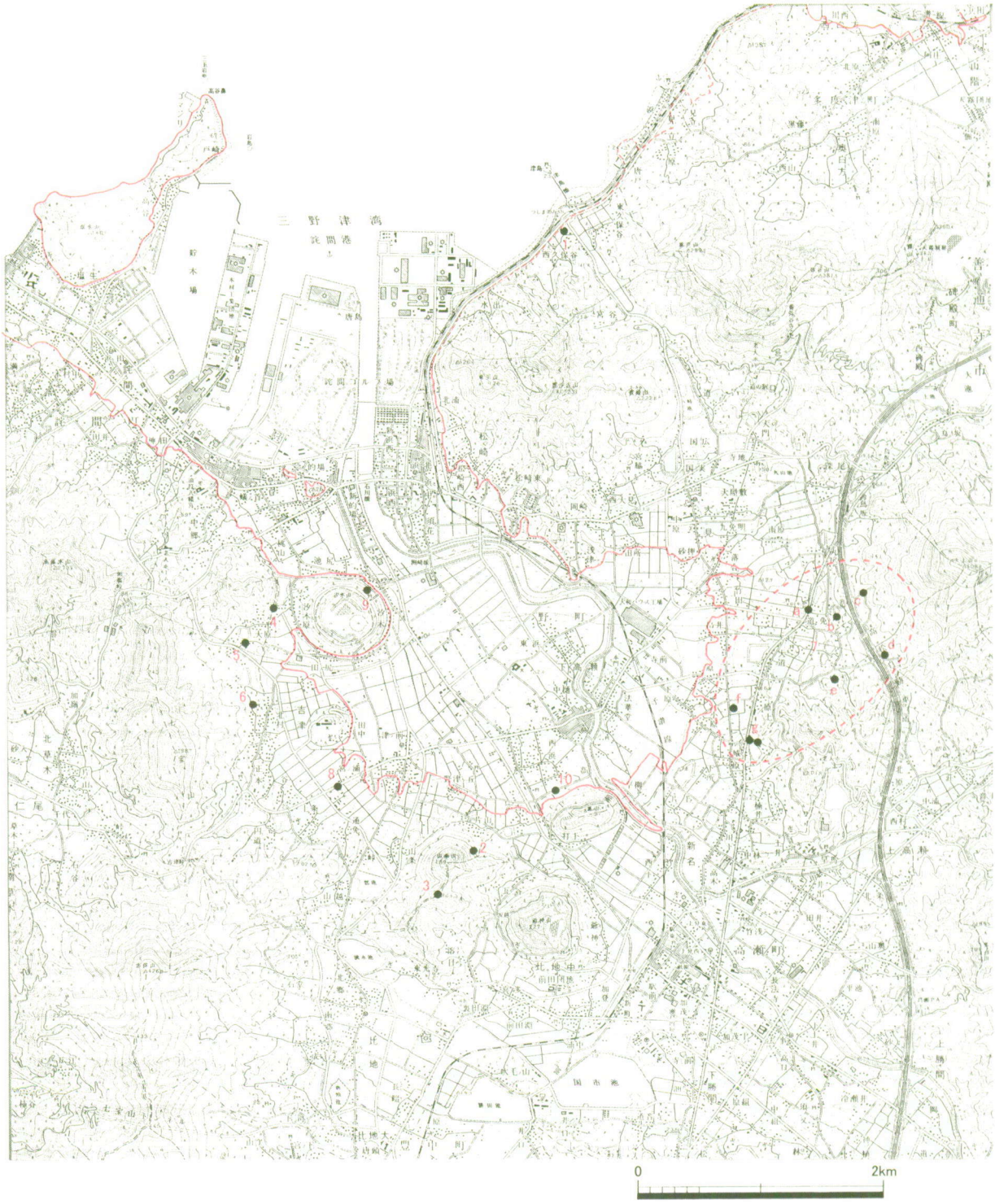
町内の歴史的環境に目を向けると、旧知の遺跡はあまり多くない。遺跡の分布の特徴としては、概ね標高５ｍ以上の位置で確認される点にある。これは、先に触れたように古三野津湾の存在が関係するものと想定できる。

旧石器時代・縄文時代

この時代の遺跡については皆無に近い。後述する宗吉瓦窯跡の発掘調査に伴い、横長剥片・横長剥片石核の出土が報告されている（三野町　1999）程度である。また、『三野町誌』（三野町誌編集委 1980）によると三野町吉津で結晶片岩製の磨製石斧が１点採取されており、縄文期のものと想定されているが、詳細は不明である。

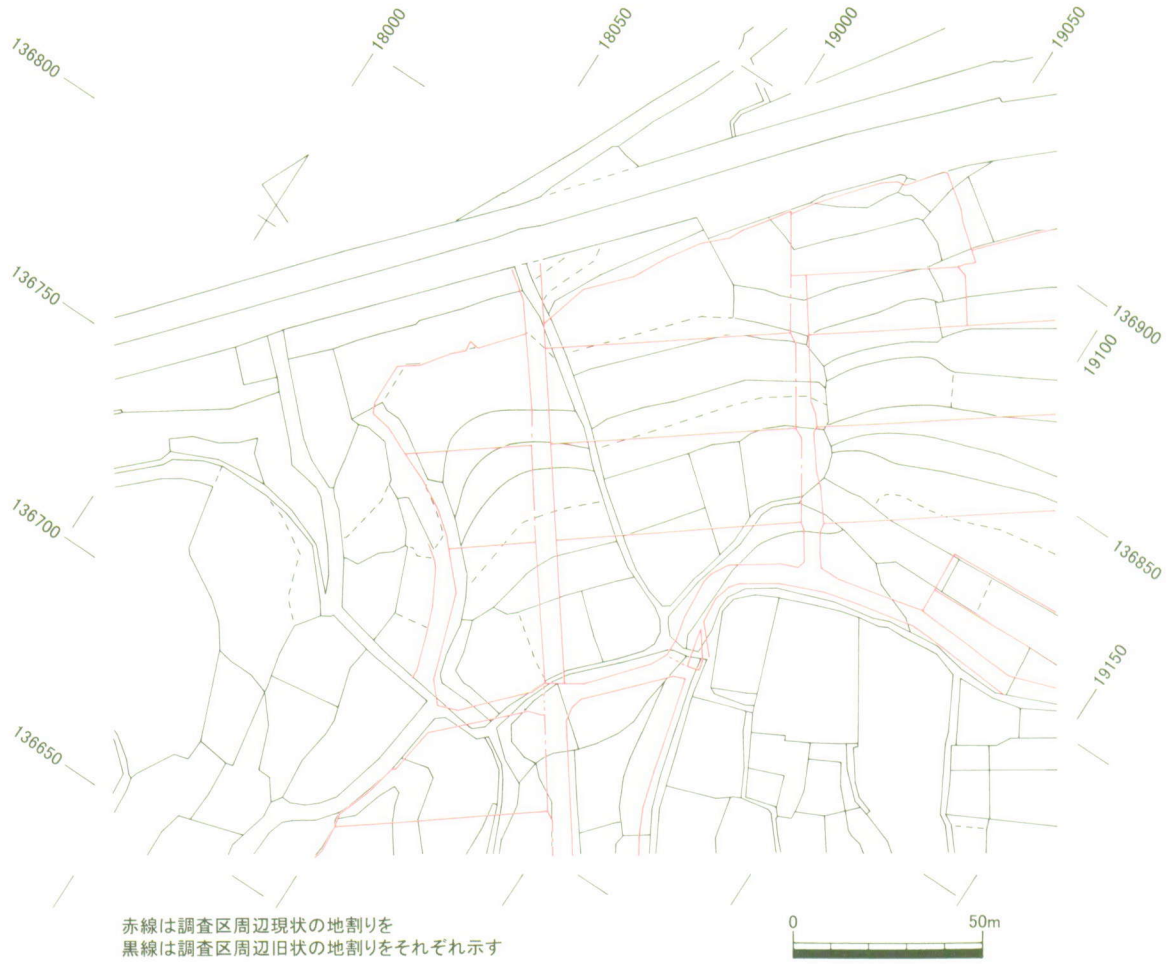
弥生時代

三野町大見に所在する弥谷山遺跡から平形銅剣が５口採集されているほか、町内数箇所で遺物の



1 西久保谷遺跡
2 宗吉瓦窯跡(瓦窯・白鳳)
3 瓦谷窯跡(須恵器窯・古墳後期)
4 汐木原古墳(円墳・後期)
5 大原塚古墳(円墳・後期)
6 金蔵古墳(横穴式石室)
7 三野古窯跡群(須恵器窯・古墳後期)
　a 道免1号窯跡　b 道免2号窯跡
　c 大平窯跡　d 手石場窯跡
　e 男谷窯跡　f 原上窯跡
　g 野田池東岸・北岸窯跡
8 伊予神社境内柱跡(平安時代？)
9 旧跡讃岐汐木港
10 銭神塚

第2図　周辺遺跡分布図



第３図　調査区周辺旧状丈量図

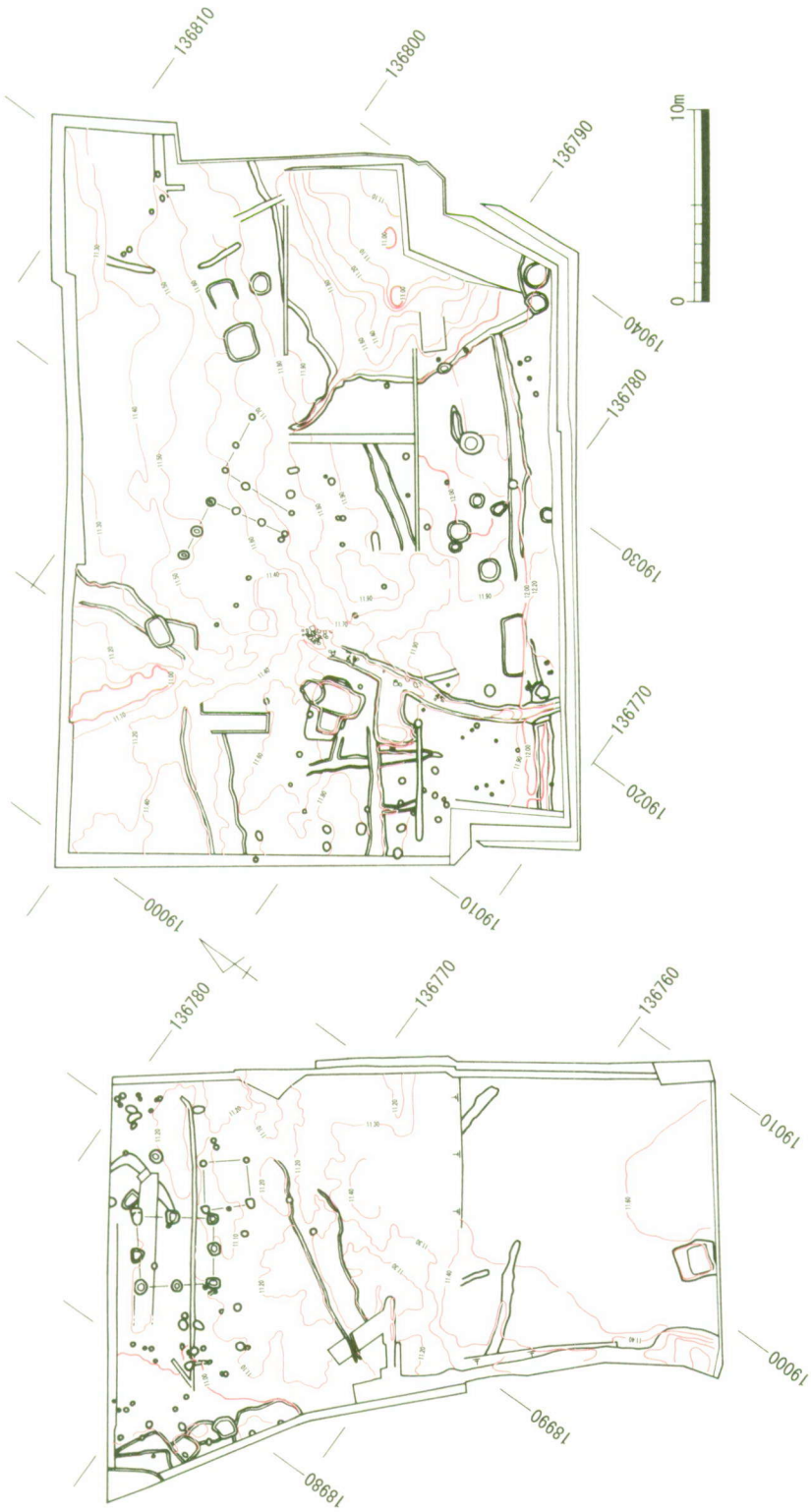
採取が伝えられる。

古墳時代

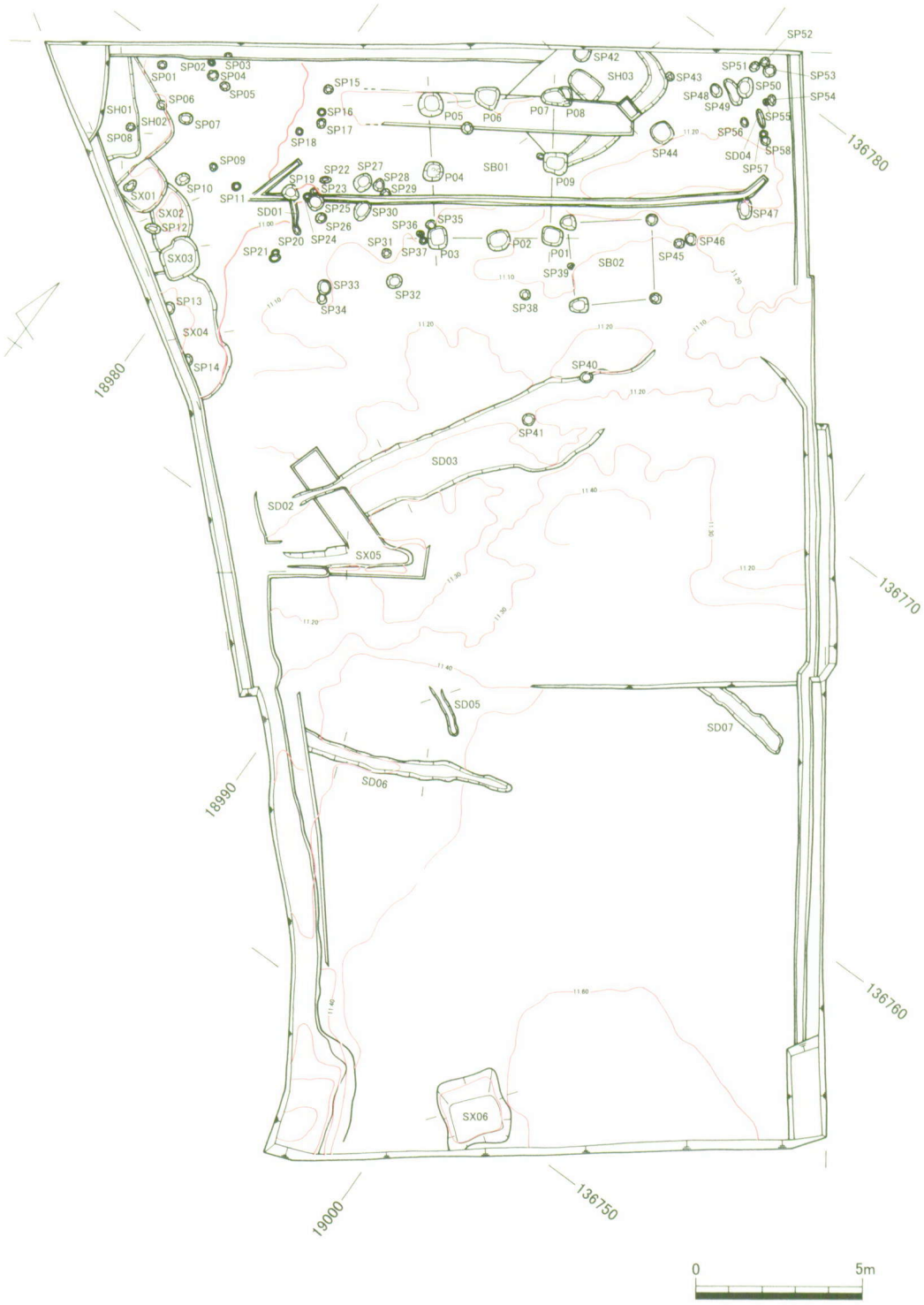
大原塚古墳・金蔵古墳等の後期古墳の小円墳が４基確認されている。また、古墳時代後期の窯業関連遺跡が、瀬戸内海歴史民俗資料館の分布調査により隣接する高瀬町比地中の瓦谷において確認されている（瓦谷窯跡）。山条山と爺神山の間に位置し、出土遺物により６世紀後半代のものとされる。また、７世紀代から８世紀初め頃まで操業されていたと見られる三野古窯跡群が火上山麓の三野町大見に存在する。道免１号・２号窯跡、大平窯跡、手石場窯跡、男谷窯跡、原上窯跡、野田池東岸・北岸窯跡からなるこれらの窯跡は、踏査に伴う表採資料をもとに変遷過程が推定されている（松本・岩橋　1984・1985）。

古代に入ると、当町は讃岐国三野郡に属する。三野郡は「和名類聚抄」記載の郷名から、勝間・大野・本山・高野・熊岡・高瀬・託間の七郷が知られ、現在の大見・下高瀬が高瀬郷に、吉津が詫間郷にそれぞれ比定されている。集落遺跡の存在は、吉津の津ノ前に所在する伊予神社境内から柱穴等が検出されるが、詳細不明である。一方、生産遺跡については藤原宮所用瓦を生産した宗吉瓦窯跡の存在が知られる。

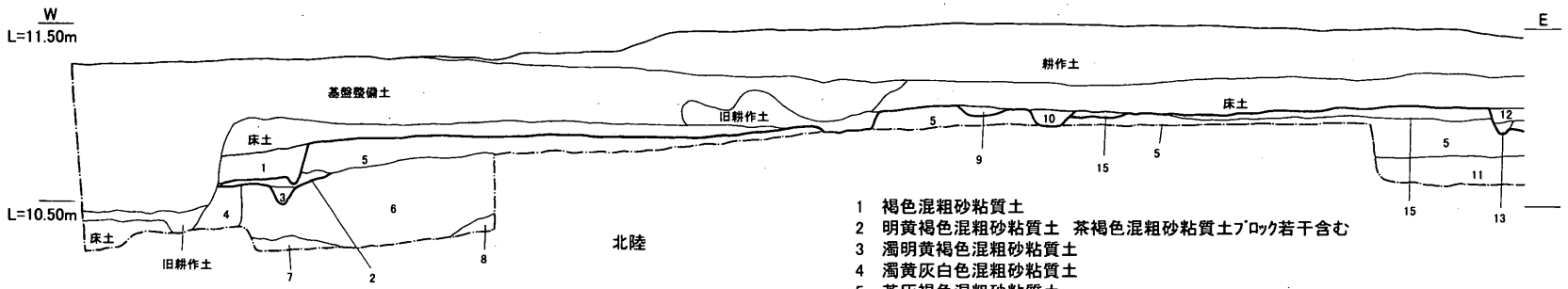
中世以降については不明瞭な点が多く、発掘調査の事例も皆無である。ただし、西久保谷遺跡周辺において五輪塔の存在が聞き取り調査によって確認されており、当該期の遺跡が想定される。

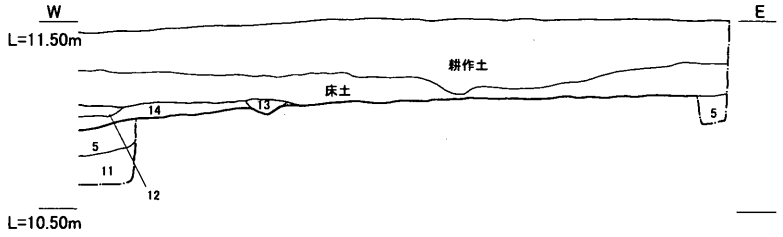


第４図　調査区全体遺構配置図

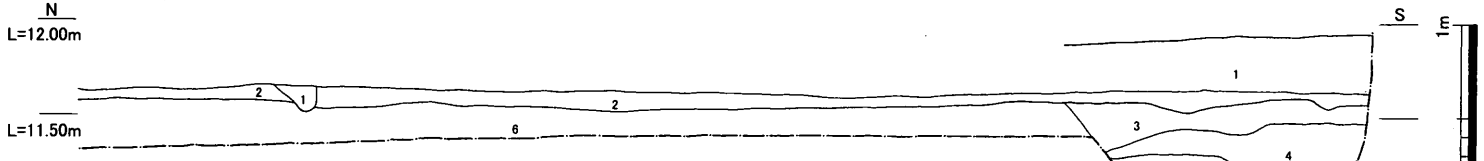

SP52
SP42
SP51
SP53
SP01
SP02
SP03
SP04
SP05
SP15
SH03
SP43
SP50
SP54
SP06
SP48
SP49
SH01
SH02
SP07
SP16
SP17
P05
P06
P07
P08
SP55
SP08
SP18
SP56
SP44
SD04
SP58
136780
SP09
SP22
SP27
SP28
SP19
SP23
SP29
P04
SB01
P09
SP57
SX01
SP10
SP11
SD01
SP25
SP30
SP47
SX02
SP12
SP26
SP36
SP35
SP20
SP24
SP31
SP37
P03
P02
P01
SP46
SP21
SP45
SX03
SP39
SB02
SP33
SP32
SP13
SP34
SP38
SX04
SP14
18980
SP40
SP41
SD03
SD02
SX05
136770
SD05
SD07
SD06
18990
136760
SX06
19000
136750
0
5m

第５図　Ⅰ区　遺構配置図





1 褐色混粗砂粘質土
2 明黄褐色混粗砂粘質土　茶褐色混粗砂粘質土ﾌﾞﾛｯｸ若干含む
3 濁明黄褐色混粗砂粘質土
4 濁黄灰白色混粗砂粘質土
5 茶灰褐色混粗砂粘質土
6 褐色混粗砂細砂
7 濁灰褐色細砂
8 濁黄茶褐色混粗砂粘質土
9 灰色混粗砂粘質土
10 黒褐色混粗砂粘質土
11 濁黄茶褐色粘質土
12 暗灰褐色混粗砂粘質土　炭化物若干含む
13 灰色混粗砂粘質土
14 濁黄灰褐色混粗砂粘質土
15 暗灰茶色混粗砂粘質土　包含層



東陸
Ⅰ区南半のみ

1 耕作土
2 床土
3 撹乱
4 撹乱
5 撹乱
6 濁褐色混粗砂粘質土

0　2m

第6図　Ⅰ区　北壁及び東壁土層図

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　Ⅰ区

１．Ⅰ区の概要（第４・５図）

当調査区で検出した遺構は竪穴住居跡３棟、掘立柱建物跡２棟、柱穴58基、溝状遺構７条、性格不明遺構６基である。遺構の大半は調査区北寄りに分布しており、南半は希薄である。また、各遺構の深さは浅いものが多い。ただし、これは基盤整備に伴う削平の影響によるものであり、本来的にはもう少し密度の高い遺跡であったと想定される。旧状は南から北へと階段状に下がる３筆の水田であったが、基盤整備前は等高線に並行する５筆の水田であった。

２．土層序（第６・７図）

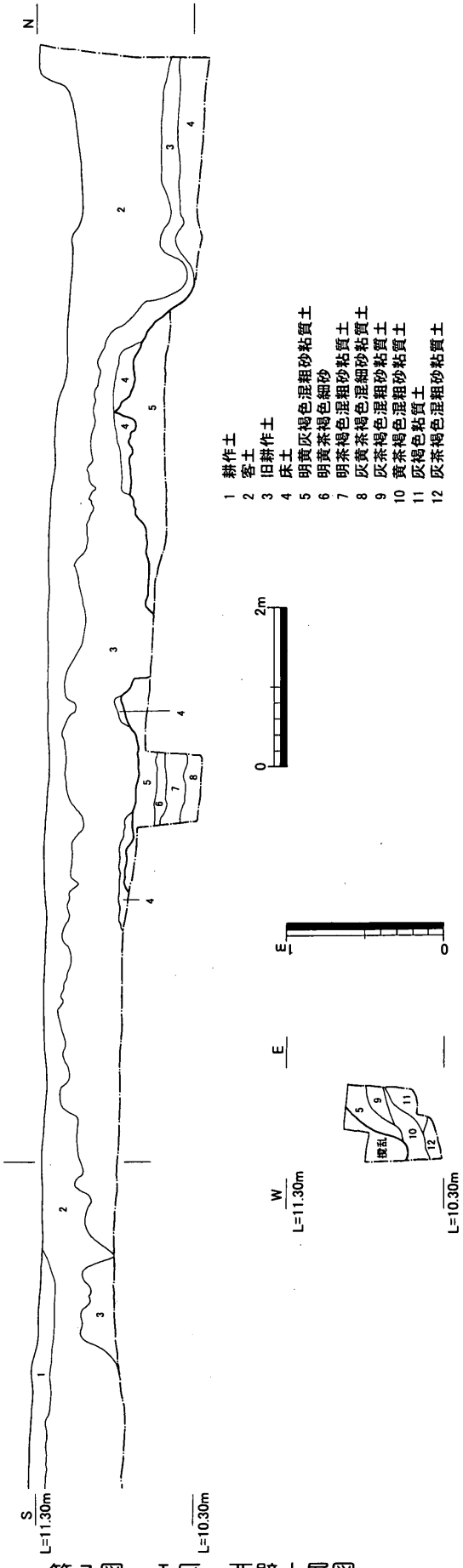
主として調査区北壁土層（第６図）を使用し、概観しておく。当調査区の遺構面は現地表面から平均約0.50ｍ下がった位置で、ほぼ耕作土直下である。西側を中心に、耕作土直下で基盤整備による客土が認められ、更にその下から旧耕作土が認められる状況である。遺構面は本来東から西へ、南から北へそれぞれ緩やかに傾斜していたものと想定されるが、後世の耕作及び基盤整備に伴い、著しくその旧状を改変されたと見られる。西壁から約1.50ｍ付近で約0.50ｍの遺構面の段差が認められるが、これは基盤整備前の水田の地筆境であると想定できる。

３．遺構と遺物

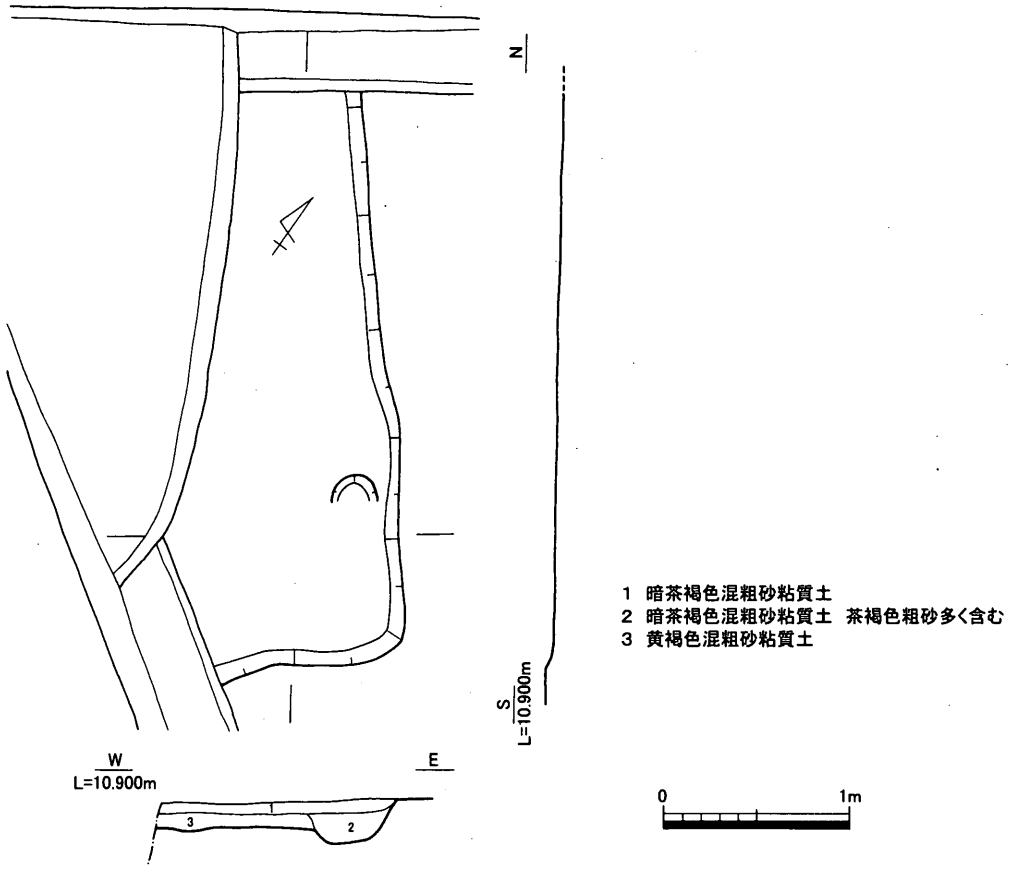
竪穴住居跡

ＳＨ01（第８・10図）

調査区北西隅で検出した遺構である。大半が調査区外へ延びることと、西側の



第７図　Ⅰ区　西壁土層図



第8図　Ⅰ区　ＳＨ01　平・断面図

撹乱によって削平されていることから、詳細な規模については不明であるが、南北約３ｍ、東西約1.30ｍの規模で遺存する方形と想定できる竪穴住居跡である。床面の深さは約0.20ｍ遺存していた。平面図では表していないが、土層断面及び写真で確認する限りでは南辺及び東辺南部に壁溝状の溝が確認できる。主柱穴の存在は不明である。

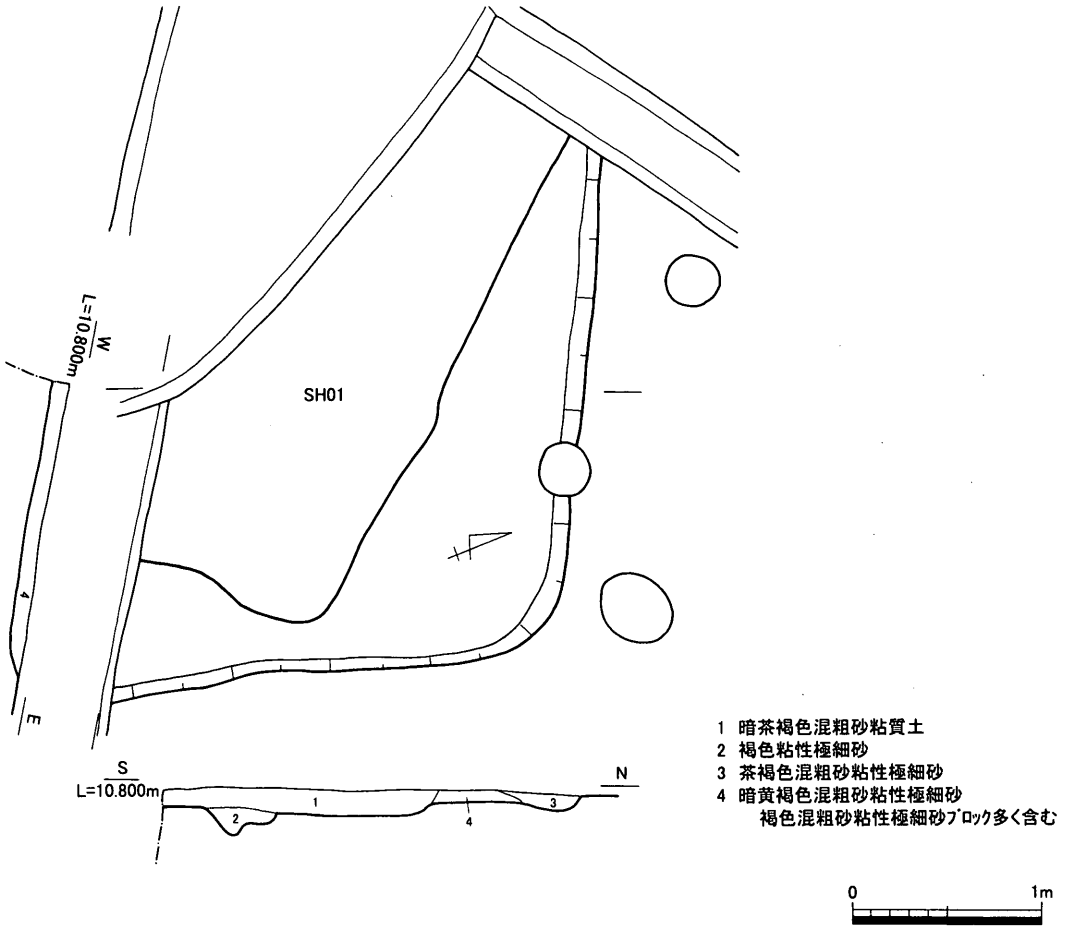
ところで、当遺構は、土層確認トレンチ掘削時には後述するＳＨ02と同一のものと想定していたが、ＳＨ02を掘り下げる過程で異なる平面プランを持つ落ち込みであることが判明し、ＳＨ01[i]として捉え直した。このため出土遺物はＳＨ02とかなり混在している可能性がある。検出状況から見るとＳＨ01が後出し、ＳＨ02が先行する遺構であると想定する。ＳＨ01出土遺物として確認できるものはごくわずかで、形状のわかるものは第10図１・２で図示した滑石製紡錘車及びガラス小玉のみである。６世紀後半頃の所産か。

ＳＨ02（第９・10図）

調査区北西隅で検出した遺構である。遺存状況はＳＨ01と同じであるが、規模は南北約2.50ｍ、東西約2.50ｍの範囲で遺存している方形の竪穴住居跡である。深さは約0.10ｍ遺存している程度であり、遺存状況は不良である。主柱穴は不明瞭であるが、ＳＨ01内に認められる柱穴ＳＰ08が、位置的に見るとＳＨ02に伴うかもしれない。

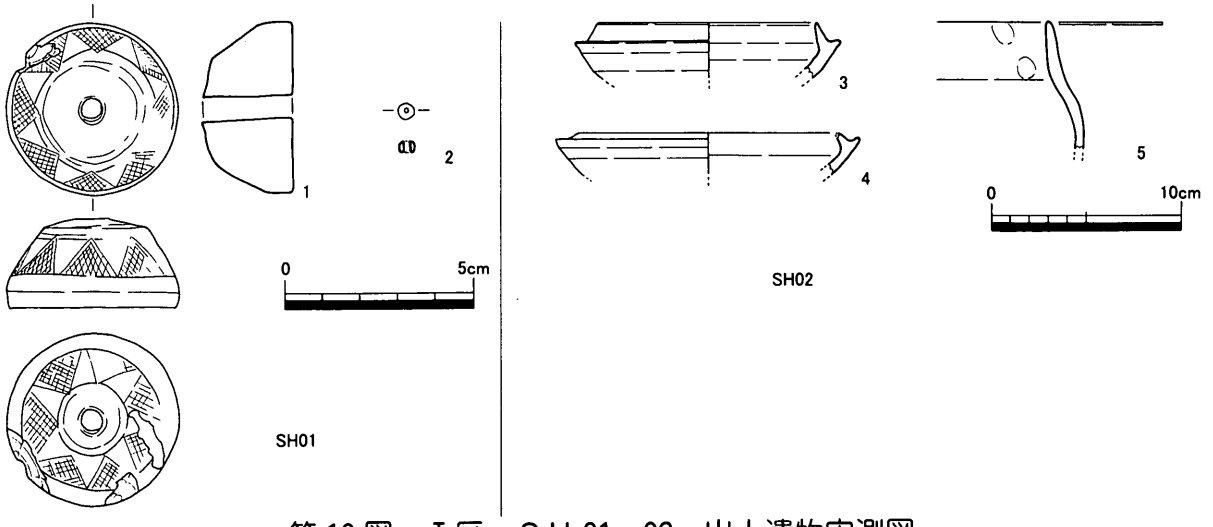
出土遺物は須恵器・土師器の小片が出土したのみである。形状の把握できるものを第10図３～５に挙げた。３・４は須恵器坏身である。３は受け部が長く直立気味に立ち上がる形状である。４は

i　調査時の遺構名はＳＨ02である。今回の報告にあたり遺構名を新規に付け直した。



第9図　Ⅰ区　ＳＨ02　平・断面図

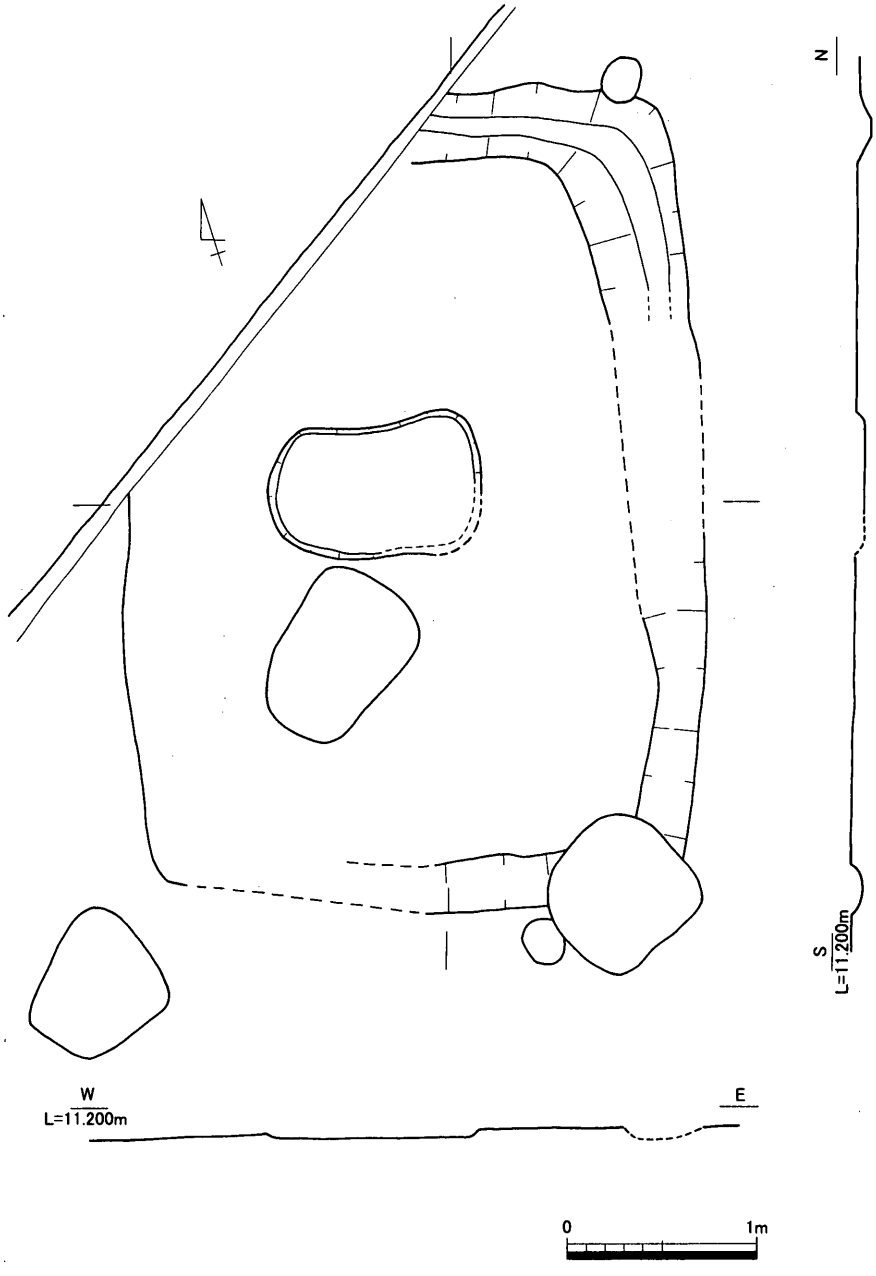
受け部が短く内傾気味に立ち上がる。資料がわずかであることから即断はできないものの、３がＳＨ02に帰属し、４はＳＨ01に帰属する可能性が想定できる。５は製塩土器片である。小片であることから詳細不明であるが、口縁が内傾気味に直立する器形であると想定する。外面にタタキ痕は認められない。内面は調整不明瞭ながらも比較的平滑に仕上げられる。出土遺物から、古墳時代後期後半期のものと想定する。



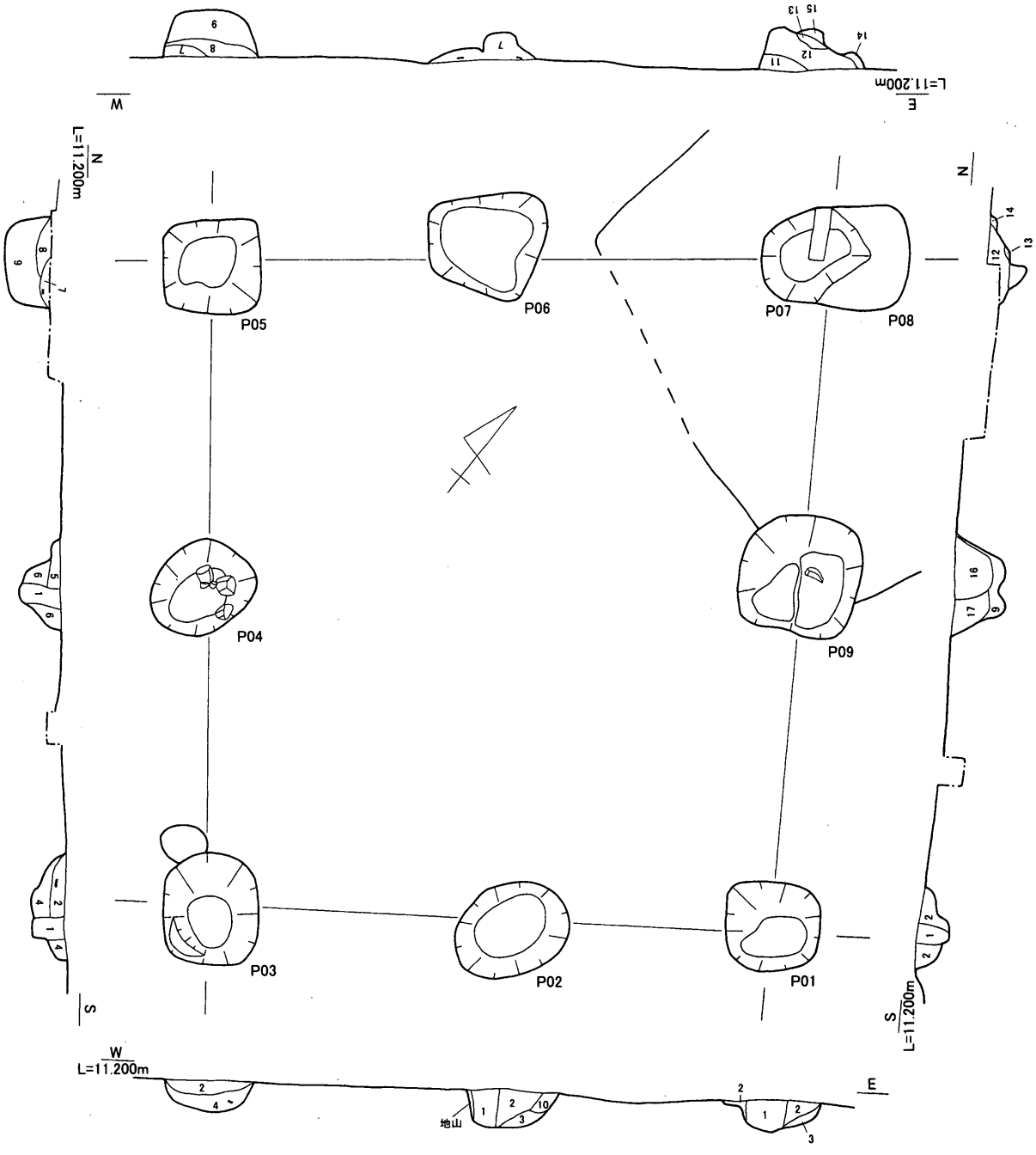
第10図　Ⅰ区　ＳＨ01・02　出土遺物実測図

ＳＨ 03（第 11 図）

調査区北壁際中央付近で検出した遺構である。北西隅が調査区外へ伸びることから全容は不明であるが、南北約 4.30 m×東西約 3.10 mの範囲で遺存している竪穴住居跡である。遺存状況は不良で、中央の土坑と壁溝と想定される溝状遺構が約 0.05 m遺存していたほか、床面に数 mm 程度の埋土が残っていたのみであった。このため、中央に遺存する土坑は、本来この竪穴住居に伴うものなのか、時期差を持つものなのか定かではない。床面直上・土坑・溝状遺構共に、埋土は黒色粗砂混じり粘質土であった。ＳＢ 01 と重複関係にあり、当遺構はＳＢ 01 柱穴により切られていることからＳＢ 01 に先行する遺構であることがわかる。出土遺物は小片のみで、詳細がわかるものは不明である。遺構の時期についても不明である。



第 11 図　Ⅰ区　ＳＨ 03　平・断面図



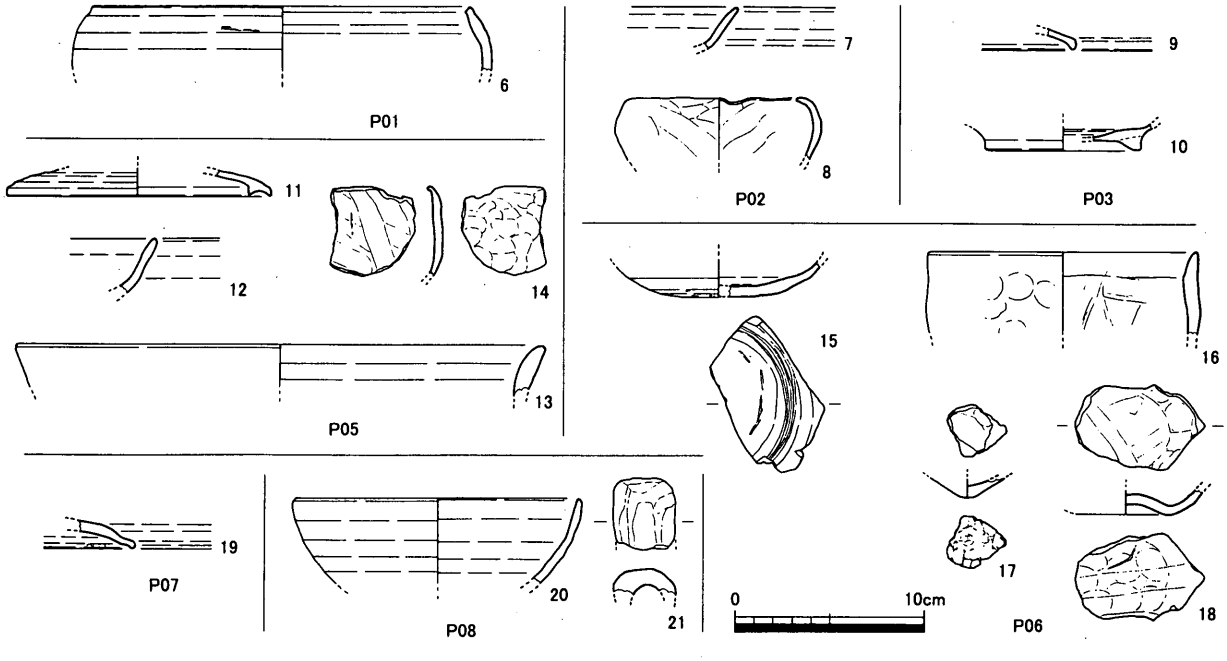
1 黒褐色混粗砂粘質土
2 暗灰褐色混粗砂粘質土
3 茶灰色混粗砂粘性細砂 地山
4 暗灰褐色混粗砂粘質土 濁黄褐色混粗砂粘質土ﾌﾞﾛｯｸ多く含む
5 濁黄褐色混粗砂粘質土
6 暗灰褐色混粗砂粘質土
7 暗褐色混粗砂粘質土
8 暗灰色混粗砂粘質土 黄褐色混粗砂粘質土ﾌﾞﾛｯｸ含む
9 黒褐色混粗砂粘質土
10 濁黄茶褐色混粗砂粘質土
11 暗褐色混粗砂粘質土
12 黒褐色混粗砂粘質土
13 濁黄茶褐色混粗砂粘質土
14 褐色混粗砂粘質土
15 灰色混粗砂粘質土
16 暗茶褐色混粗砂粘質土
17 暗茶灰褐色混粗砂粘質土

第12図 Ⅰ区 ＳＢ01 平・断面図

掘立柱建物跡

ＳＢ01（第12・13図）

調査区北半中央付近で検出した２間×２間の側柱の掘立柱建物跡である。南北約4.10ｍ、東西約3.60ｍを測るほぼ正方形の平面形を呈し、床面積は約14.8㎡を測る。柱穴は１辺約0.60ｍ四方の隅丸方形を呈しており、深さは0.20～0.30ｍを測る。土層断面では柱痕らしき埋土が認められるが、完掘した段階ではその痕跡は不明瞭である。ＳＨ03と重複関係にあり、遺構の切り合いから当遺構はＳＨ03に後出する遺構であることがわかる。第12図のＰ08は調査中のミスで記録が出来ていない。各柱穴からは須恵器・土師器が出土しているが、いずれも小片である。ある程度器形の判明するものについて第13図に掲載している。６はＰ01出土の須恵器鉢口縁部である。底部が遺存していないことから詳細な器形は不明であるが、鉄鉢形を呈する可能性がある。口縁端部は上方と内面の２方向へ摘み出すように仕上げられる。７・８はＰ02から出土した。７は須恵器皿である。小片であることから口径は不明であるが、体部から口縁部にかけて斜め上方へ緩やかに立ち上がる形状を取り、口縁端部は外反する。８は製塩土器である。口縁部の破片であり、全体の形状は不明であるが、かなり内湾する形状である。内外面共に指ナデにより仕上げられる。９・10はＰ03から出土した須恵器である。９は蓋である。端部はほぼ真下に折り返される。10は高台付坏の底部である。断面逆台形を呈する高台はやや踏ん張る形状を取る。11～14はＰ05から出土した。11は須恵器坏蓋である。内面に返りのつく形状を取る。12は須恵器坏である。小片であり詳細は不明である。13は須恵器甕の口縁部に分類した。やや直立気味の口縁であり、やや違和感を覚えるが、あるいは壷の口縁部か。14は製塩土器片である。小片であることから詳細は不明であるが、口縁端部が外面の指ナデ調整に伴い、内側へややめくれ込んでいる。15～18はＰ06から出土した。15は須恵器高台付坏の底部である。高台が剥落しており、その形状については不明であるが、坏部の底部はやや丸みを帯びる形状を取る。16～18は製塩土器である。16は口縁部であるが、やや厚みを持つ器壁を有し、口縁端部はほぼ真上に伸びる。調整は、外面に指押さえの痕跡を認め、内面は板ナデによる。



第13図　Ⅰ区　ＳＢ01　出土遺物実測図

17 及び 18 は底部である。17 は尖底を呈しているが、18 は上げ底となる。共に外面は指押さえの痕跡が顕著であるが、内面は 18 においては板ナデの痕跡が認められる。19 はＰ 07 出土の須恵器蓋である。端部は丸く治め、弱い折り返しが認められる。20・21 はＰ 08 から出土した。20 は須恵器鉢である。６とは異なり、内湾気味の体部を持つものの口縁端部は上方へ伸びる。21 は管状土錘である。以上の出土遺物から見て、当遺構は概ね７世紀末から８世紀初頭にかけてのものと想定する。

ＳＢ 02

調査区北端中央やや東寄りで検出した遺構である。約 2.50 m四方の方形プランを持つ１間×１間の掘立柱建物に復元した。出土遺物が細片ばかりで時期決定が困難であるが、ＳＢ 01 と概ね同時期のものの可能性がある。

柱穴（第 14・15 図）

掘立柱建物を構成するものを除き、58 基検出したが、いずれも調査区北側１／３に集中する。基盤整備に伴う削平の結果、生じた見かけ上の分布の偏りであり、本来は検出できなかった範囲にも存在したと想定できる。北側に残る柱穴も遺存状況は不良で、深いものでも 0.40 m以下である。ただし、検出面での平面規模が約 0.40 ～ 0.70 m程度のものが散見されることから、ＳＢ 01 程度の規模を持つ掘立柱建物が存在した可能性もある。特にＳＰ 44 は、深さは遺存状況の良好な部分で約 0.01 mと浅いが、平面が１辺約 0.60 mの隅丸方形を呈しており、底部から須恵器甕片が出土している。第 14 図は遺物が出土した柱穴のみを掲載した。出土遺物は第 15 図に掲載した。小片が中心であり、時期決定が困難である。出土遺物の多くは製塩土器片である。23・24・29・31 は製塩土器底部であるが、31 を除くと古墳時代後期頃のものと想定できる。31 は上げ底状を呈している。ＳＢ 01 Ｐ 06 に類例を認める。ＳＰ 44 からは先述したように 37 の須恵器甕体部片の出土が見られるほか、35・36 の須恵器が認められる。35 は蓋であるが、小片のため、詳細な器形は不明である。36 は高台付坏の底部である。坏部の底は平底で、底部と体部の境よりも底部中心寄りのところに、踏ん張り気味でやや長い高台が取り付く。高台の断面形状は不整な矩形を呈する。ＳＰ 48・55 からは漁撈具が出土している。38・39・44 は土師質のイイダコ壷片である。39 は 44 やほかの例と比較するとやや厚手で口径がやや小さいことから、異なる器種である可能性も想定できる。45 は棒状土錘片である。ＳＰ 50 出土の 40 は弥生土器壷口縁部である。以上の状況から見ると、遺構の時期は、混入したものである可能性はあるものの、概ね弥生時代から古代までの範疇に収まると想定できる。

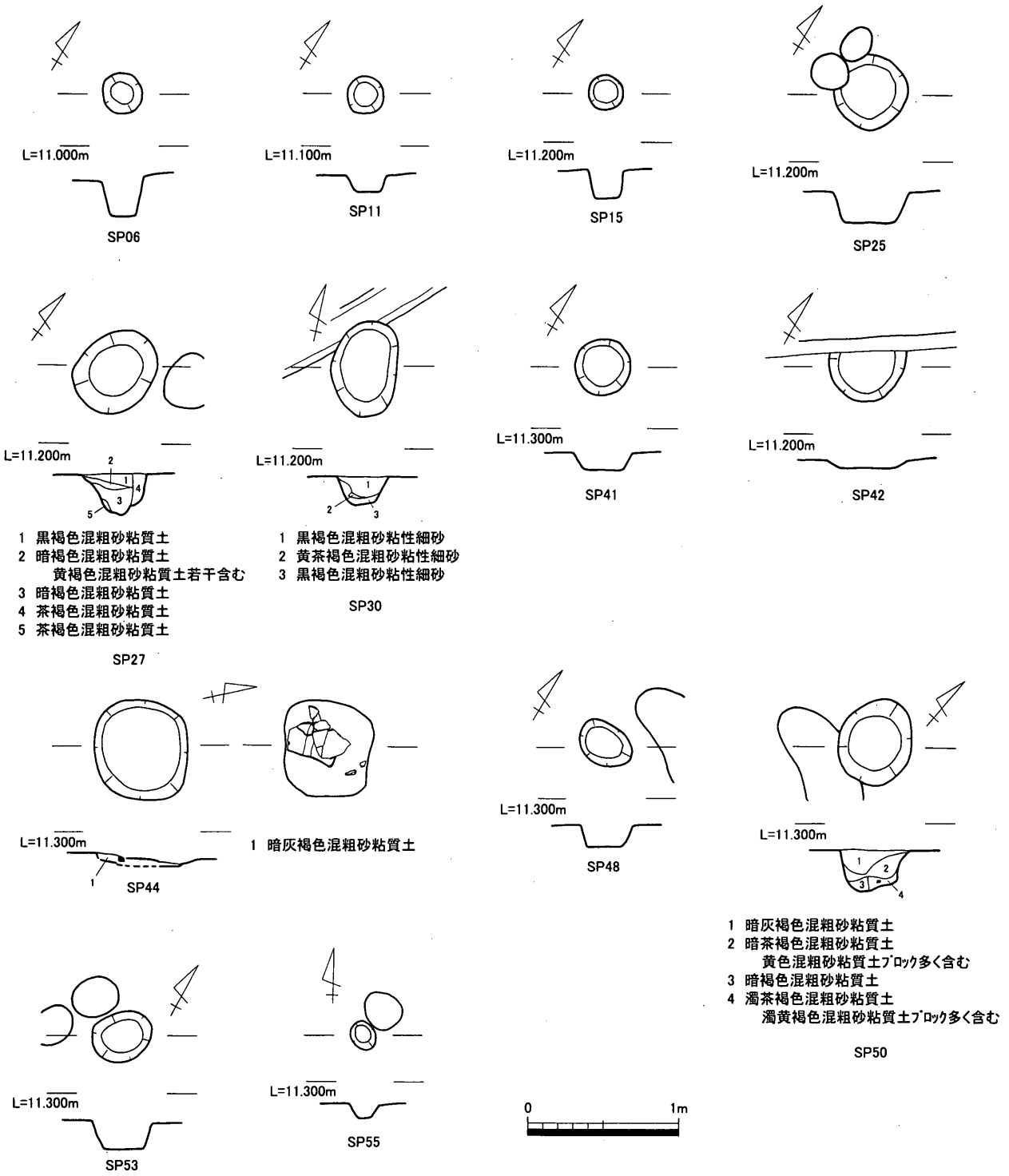
溝状遺構

ＳＤ 01

調査区北西隅付近で検出した遺構である。長さ約 1.10 m、幅約 0.20 mの規模で遺存する溝状遺構で、深さはほとんどない。

ＳＤ 02

調査区西壁付近で検出した遺構である。埋土の状況から、後述するＳＤ 03 と同一遺構である可能性が高い。



第14図　Ⅰ区　柱穴　平・断面図

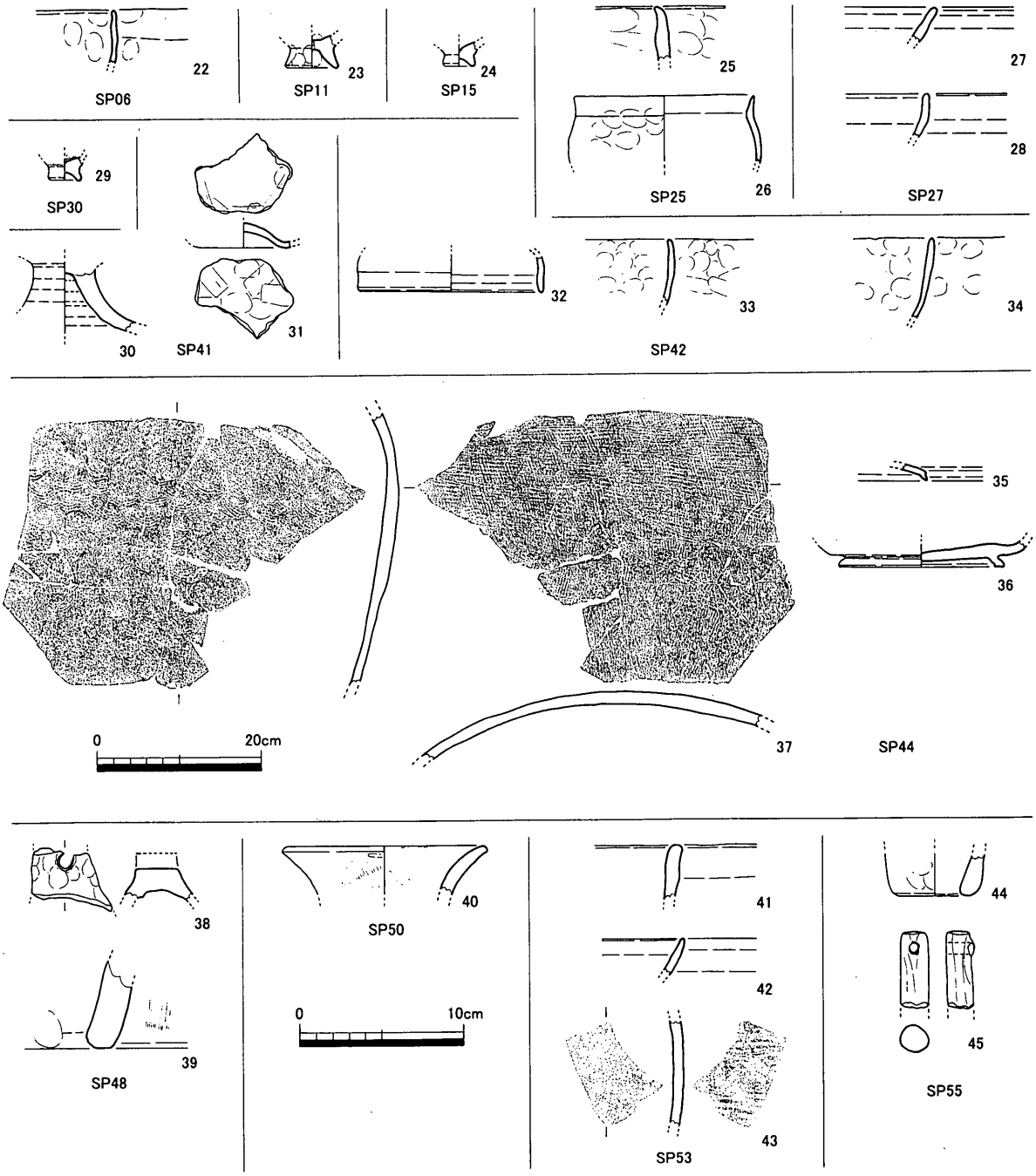
ＳＤ03（第16～20図）

調査区中央北寄りで検出した遺構である。長さ約10.0ｍ、幅約1.50～2.50ｍの規模で遺存する。両端が削平により消失しているが、北端を直線的に延伸させると、隣接するⅡ区ＳＤ03へつながることから、同一遺構であると想定できる。深さは最深部で約0.25ｍを測る。埋土は概ね３層からなる。①層は黒灰色混粗砂粘質土からなり、広く浅く堆積する。これを除去すると、②暗灰色混粗砂粘質土・③濁黄褐色混粗砂粘質土が堆積する。この２層はそれぞれ互いの埋土をブロック状に含む

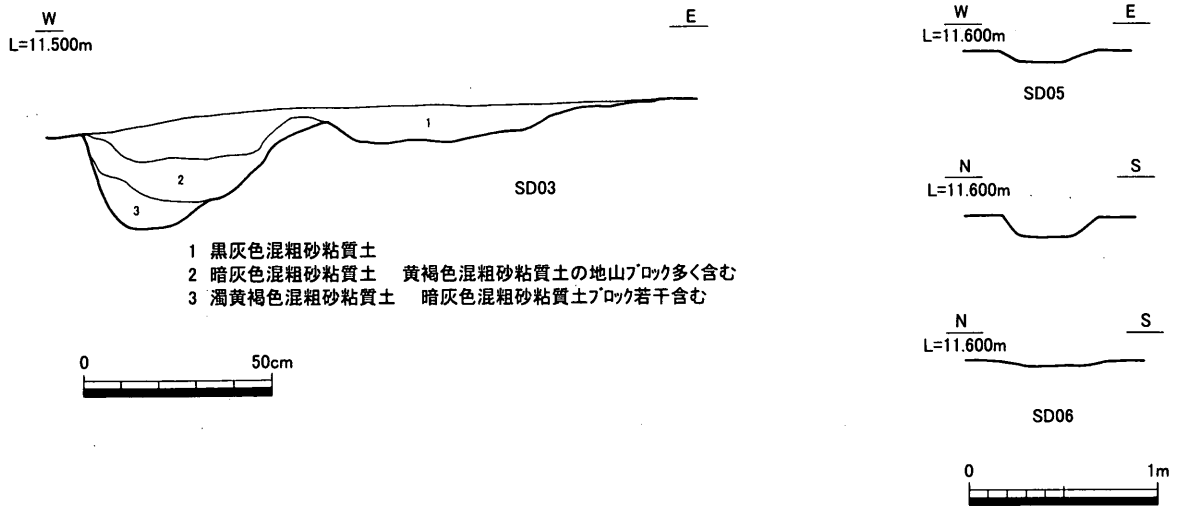
ことから、攪拌を受けている可能性があり、溝の掘り直しあるいは埋め戻しという行為が想定できる。この下層２層からは遺物の出土はほとんど見られない。溝全体を通じて、砂質土主体の埋土が認められず、常時水流のある環境ではなく、滞水した環境であったことが想定できる。また、丘陵の稜線に対して直交する形で掘削されている。

出土遺物はほとんど①層からの出土である。この①層内において視覚的に３箇所ほど遺物が集中する場所が認められたことから、遺物の取上げ単位を遺物集中単位で行なった。しかし、第 17 ～ 20 図に示したとおり、単位毎の遺物の偏りは認められなかった。出土遺物は圧倒的に製塩土器片が多く、次いで須恵器・土師器が続く。また、棒状土錘等の土製漁撈具も比較的目に付いた。ただし、製塩土器はその大半が小片化しており、形状をある程度判別できる個体は少ない。

第 17 図 46 ～ 53 は西端土器溜りの上層遺物である。46・47 は弥生土器壷である。48 は須恵器坏

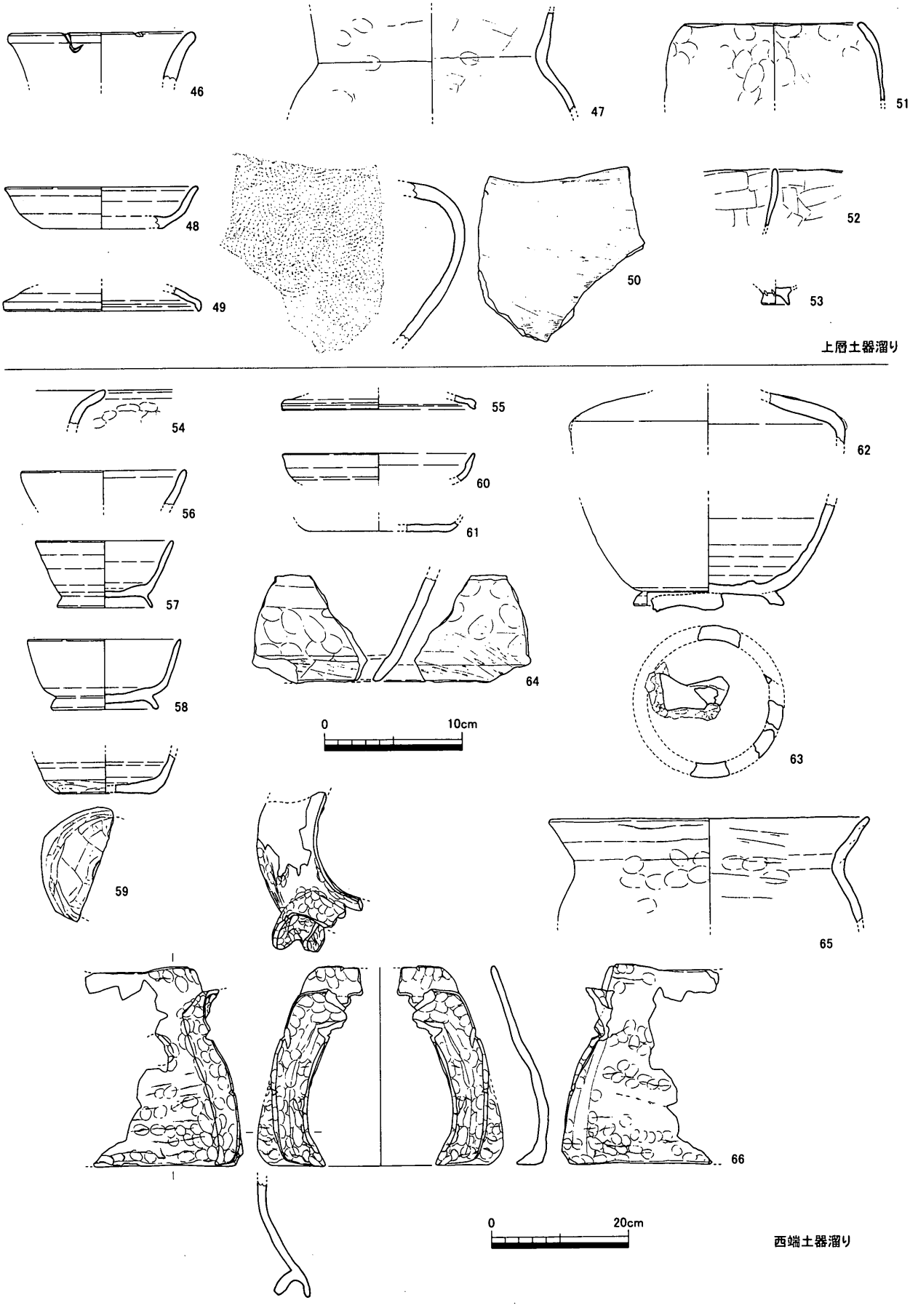


第 15 図　Ⅰ区　柱穴　出土遺物実測図

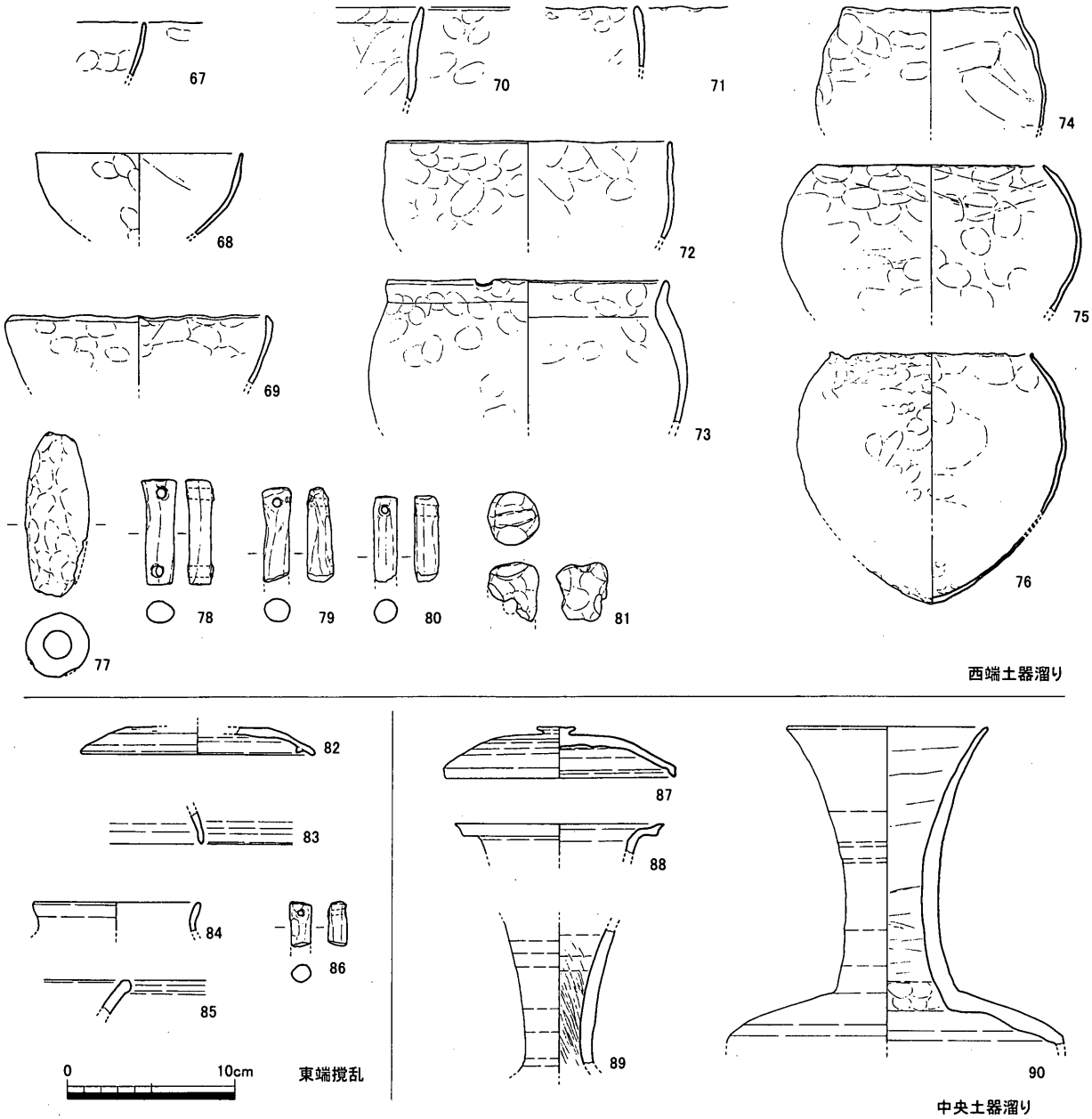


第16図　Ⅰ区　溝状遺構　断面図

である。49は須恵器蓋である。坏蓋と想定できるが、小片のため詳細不明である。50は須恵器甕体部片である。51～53は製塩土器片である。51・52は口縁部片で、前者は口縁が内湾する器形が想定できる。外面は指頭痕が顕著に認められるが、内面は板ナデの痕跡が若干認められる。52は口縁が直立する器形が想定できる。53は倒杯形の脚台部である。第17図54～第18図81は西端土器溜りとして取上げた遺物を掲載した。54は弥生土器甕口縁部である。55～61は須恵器である。55は坏蓋と想定する。56～59は坏に分類した。小片が多いことから器形が判別できるのは57～59である。57・58は共に口径10cm強、器高5cm（径高指数45～50）の小振りで深い器形を呈する。体部は直線的に上方へ延びる傾向にあり、高台はやや薄く踏ん張った形状を取る。59は無台の坏である。底部を手持ちヘラ削りにより調整している。口縁が遺存しないことから詳細不明であるが、底径から見ると、口径・器高共に57・58と近似すると想定できる。60・61は皿に分類した。小片であることから器形の詳細は不明である。62・63は壷である。底部から体部にかけての破片であることから詳細な器形は不明である。63は底部に焼き台が癒着する。64はごく一部の出土であり詳細な器形は不明であるが、甑の底部と想定した。65は土師器甕である。やや残りが悪く、調整が判別し難い。66は土師質カマドである。出土時には破線で囲っている部分の破片も存在していたが、土圧で細片化しており、接合が困難であった。全体の1／4ほどが遺存していたと見られるものを反転して復元している。第18図67～76は製塩土器である。比較的良好な遺存状況を呈するものが多い。器形は74～76のように鉢形を呈するものが主体と見られるが、68のような浅鉢形や73のような甕形を呈すると想定されるものも認められる。特に76は出土状況からみて、底部まで遺存していると判断できた一例である。甕形を呈するものはほかのものに比べると器壁がやや厚手で、製塩土器に含めることが妥当か検討を要するが、胎土がほかの薄手の製塩土器と酷似することから同器種へ含めた。77～81は土製漁撈具である。77は管状土錘、78～80は棒状土錘、81はイイダコ壷である。第18図82～86はＳＤ03東端で出土した遺物である。82～85は須恵器である。82は内面に返りの付く坏蓋である。83は古墳時代後期の坏蓋と想定する。小片のため、詳細不明である。84は



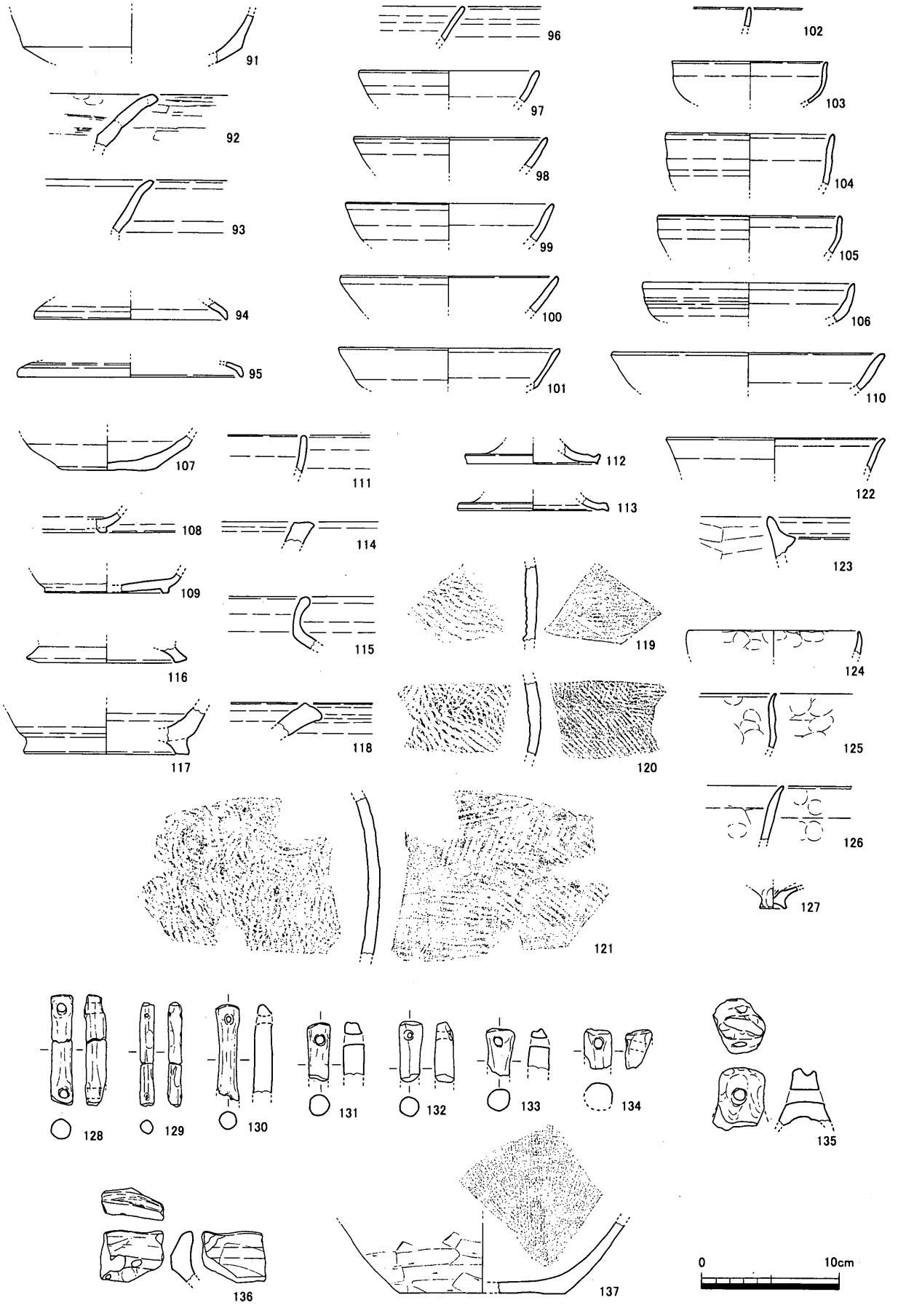
第17図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（1）



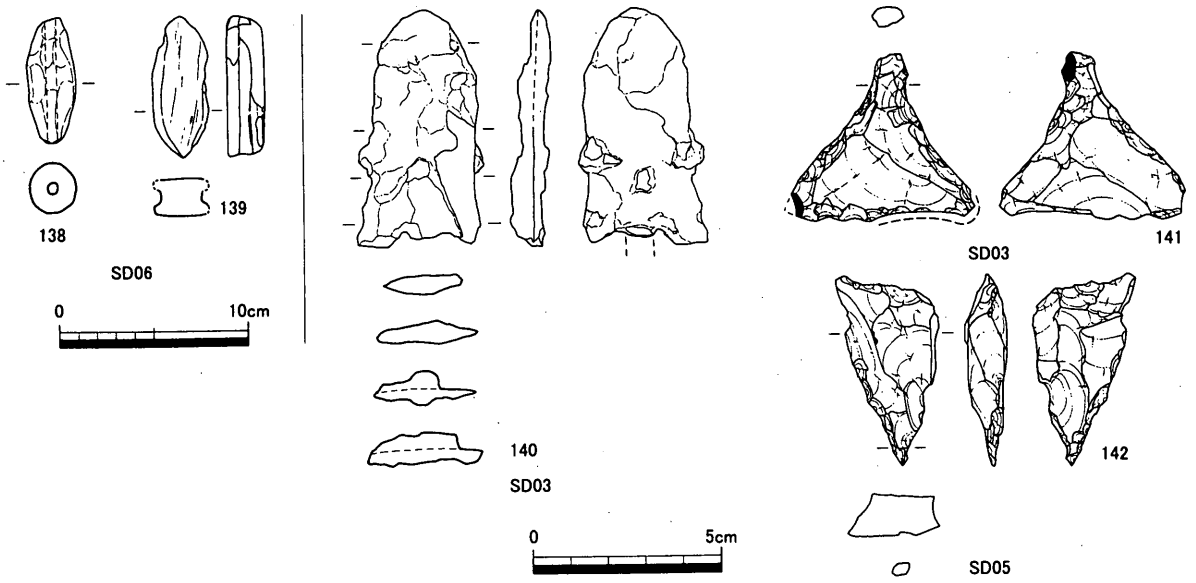
第18図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（2）

壷口縁部と想定する。85は鉢の口縁部と想定するが、小片のため詳細不明である。86は土師質の棒状土錘である。87～90は中央土器溜りとして取上げた遺物である。87は須恵器坏蓋である。88は壷口縁部と想定する。小片であることから高坏の脚端部を誤認している可能性もあるが、反転復元した際、脚部が当遺跡のほかの事例と比べ太くなり過ぎることから、壷に分類した。ほかの出土遺物に比べると新しく平安時代のものの可能性がある。89・90は長頸壷である。

第19図はＳＤ03全体から出土した遺物である。91～93は弥生土器である。91は高坏、92・93は壷口縁部片と判断した。94～121は須恵器である。ほとんどが小片であるため、詳細な器形は不明であるが、94・95は坏蓋、96～107までは坏身、108・109は高台付坏身、110は皿、111は椀、



第19図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（3）



第20図　Ⅰ区　ＳＤ03出土遺物実測図（4）及びＳＤ05・06出土遺物実測図

112・113は高坏脚端部、114は鉢、115～117は壷、118～121は甕と判断した。122は土師器坏としたが、かなり細砂粒を多く含む胎土で、異なる器種である可能性もある。123は土師質土器羽釜である。124～127は製塩土器である。128～134は棒状土錘、135はイイダコ壷である。136は土師質土器甕に分類した。137は陶器擂鉢である。第20図140は鉄鏃である。ほぼ全面が錆に覆われるが、図正面右下半は錆が剥落し、プライマリーな面が露出する。また、本来、茎があったようで、方形の断面が確認できる。先端がやや丸みを帯びており、正面右の脚が左に比べると若干短い。141はサヌカイト製石匙である。刃部が半分欠損している。

遺構の時期は、若干混入が認められるものの7世紀末～8世紀初頭頃のものが目立つことから、この時期の所産と考えられる。

ＳＤ05（第16・20図）

調査区中央西寄り付近で検出した遺構である。検出長は約1.60ｍ、幅は約0.50ｍである。深さは最深部で0.05ｍと浅い。遺物は第20図142のサヌカイト製石錐のみである。

ＳＤ06（第16・20図）

西壁中央付近で検出した遺構である。検出長は約6.50ｍ、幅は約0.50ｍである。深さは西の方でやや深く、約0.10ｍを測るが、東の方では約0.02ｍの深さとなる。この状況から見て、東の方が遺存状況が不良であることがわかり、同遺構が途切れる付近は著しい削平を受けていると判断できる。出土遺物はわずかで、器形の判別できるものを第20図138・139に挙げた。138は土師質の管状土錘、139は有溝土錘である。古代の所産と想定できるに留まる。

性格不明遺構

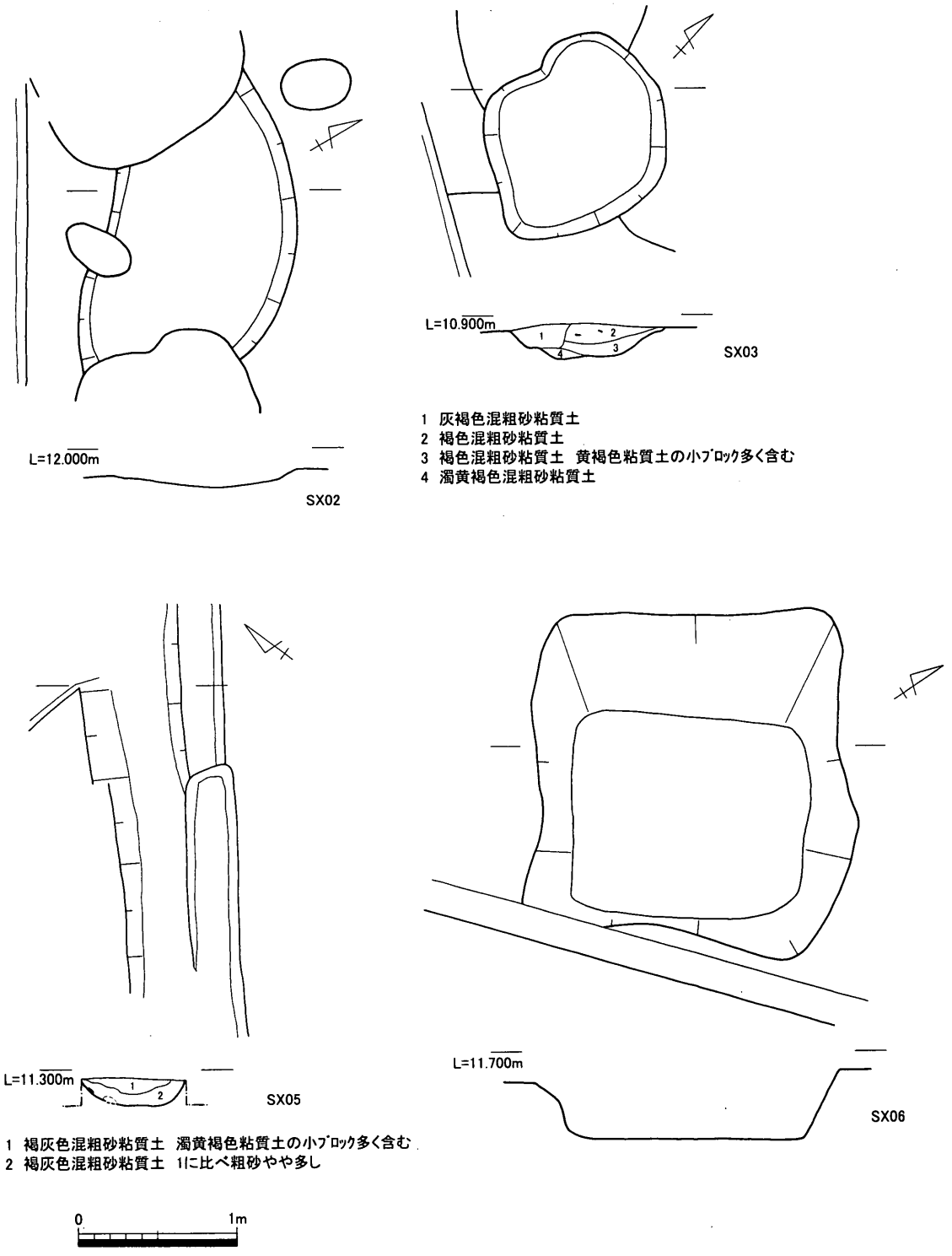
ＳＸ01

調査区北西隅で検出した遺構である。西端をＳＨ01に切られていることから、詳細な規模は不明

であるが、ＳＨ01に先行する遺構と想定できる。

ＳＸ02（第21・22図）

調査区北西隅で検出した遺構である。北端と南端をＳＸ01及びＳＸ03に、西端を撹乱にそれぞれ切られていることから詳細な規模は不明であるが、現状では長軸約２ｍ、短軸約1.20ｍを測る不整形な遺構である。深さも最深部で約0.10ｍと浅い。出土遺物は、第22図143に挙げた製塩土器脚部が、ある程度器形を想定できるのみである。



第21図　Ｉ区　性格不明遺構　平・断面図（1）

ＳＸ 03（第 21・22 図）

調査区北西隅付近で検出した遺構である。

深さは最深部で約 0.30 ｍを測り、短軸の断面形状は東にやや芯が寄った椀形を呈する。埋土は４層に細分できるが、概ね上層と下層に分けられる。上層は①層の灰褐色粗砂混じり粘質土で、微細な焼土塊及び炭化物を若干含む。下層は褐色粗砂混じり粘質土（②層）及び同色で濁黄褐色粘質土の小ブロックを含む土（③層）、濁黄褐色粘質土（④層）からなる。

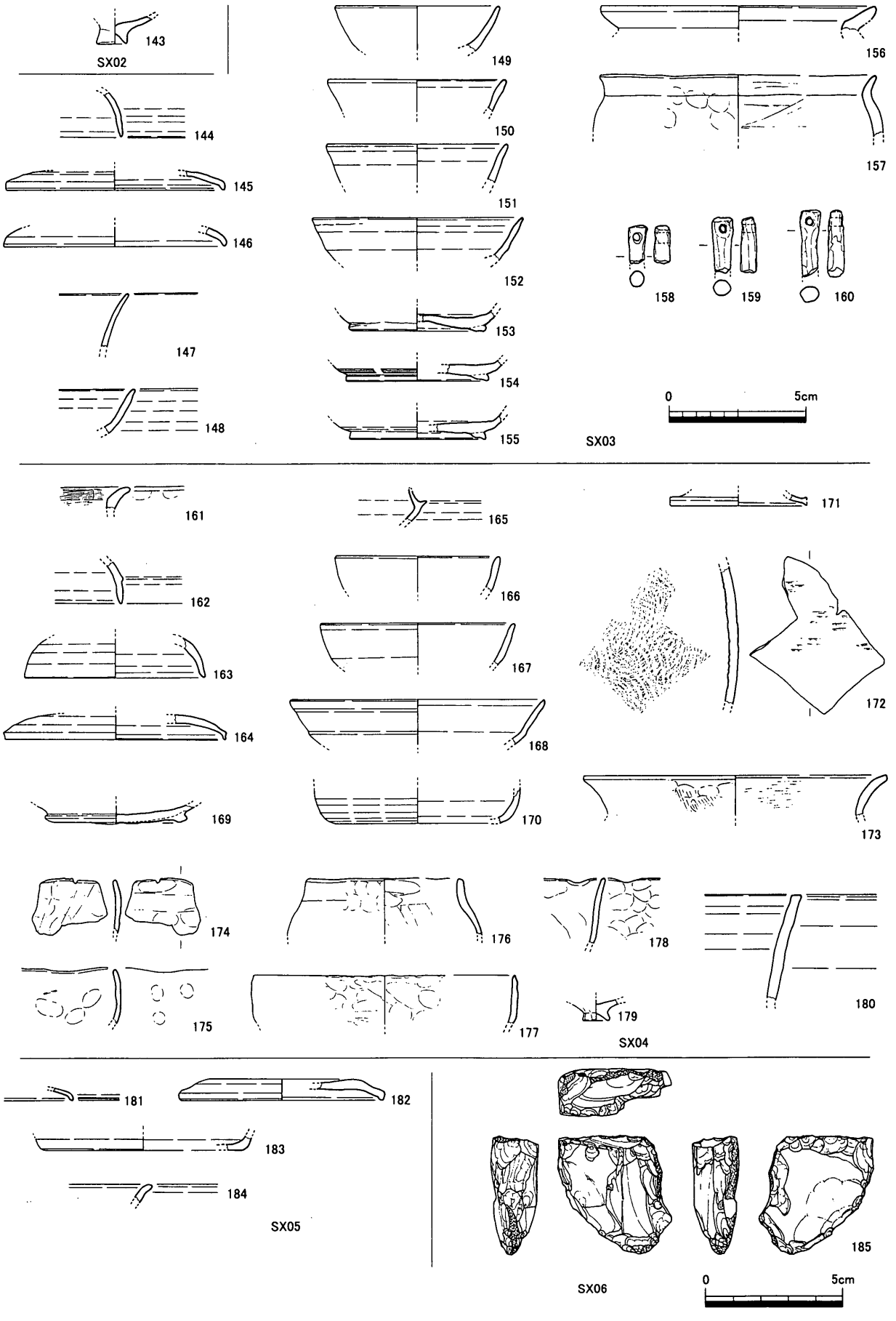
出土遺物は須恵器（第 22 図 144 ～ 155）・土師器（第 22 図 156・157）・棒状土錘（第 22 図 158 ～ 160）である。144 ～ 146 は坏蓋で、144 は古墳時代後期頃のもの。147 ～ 152 は体部から口縁部にかけて遺存するもので、147 のみ例外的に大きく外反する形状を取る。あるいは壷か。148 ～ 152 は内湾気味に立ち上がる体部と口縁部直下で反転し外反する口縁を持つ形状である。153 ～ 155 は高台付坏の底部であるが、いずれも断面形状が不整で扁平な形状を呈する高台を特徴とする。156・157 は甕に分類したが、口縁部が短く、全体の器形が判別し難い。157 のような口縁部を持つものはＳＤ 03 出土資料で製塩土器に分類したものの中にも認められることから、製塩土器片である可能性もある。

ＳＸ 04（第 22・23 図）

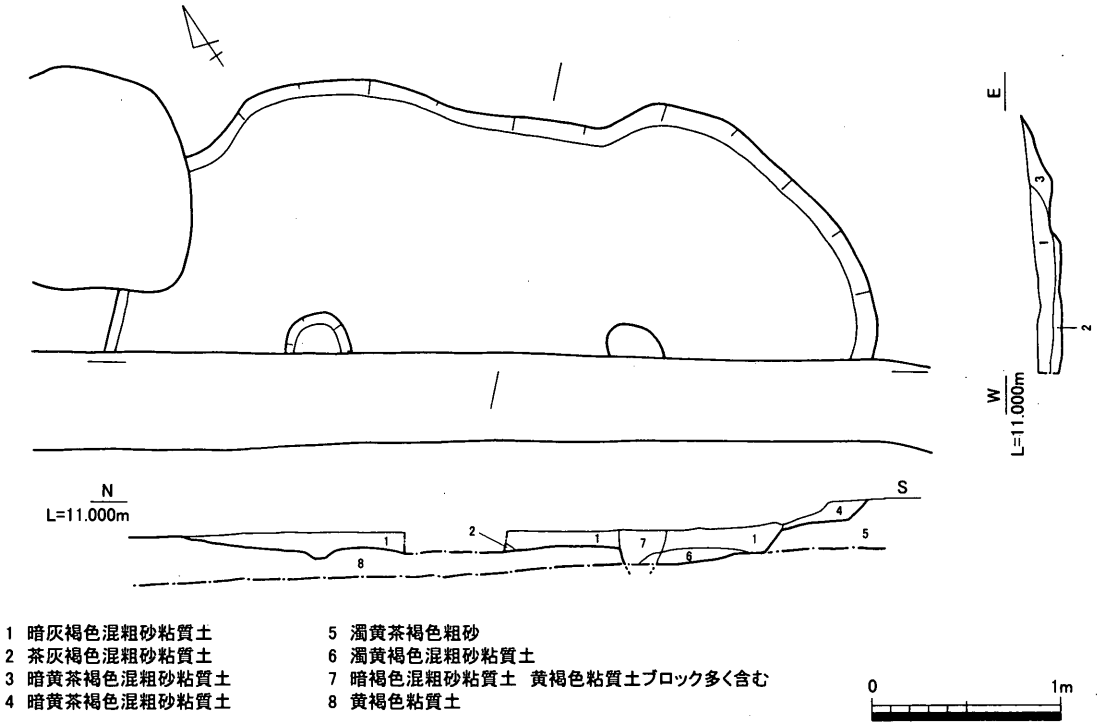
調査区北西隅付近で検出した遺構である。北端をＳＸ 03 に切られるほか、西半分が調査対象地外へ延びることから詳細は不明であるが、長軸約 4.10 ｍ、短軸約 1.40 ｍのやや不整形な長楕円形を呈するものと想定できる。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは最深部で約 0.20 ｍを測る。検出当初、竪穴住居跡の可能性を想定したが、やや不整な平面形状を取ることから性格不明遺構とした。埋土は 4 層に分かれるものの、①層の暗灰褐色混粗砂粘質土が主体をしめる。残りの埋土は①層に先行する堆積として中央付近の底部あるいは遺構内縁部で認められる。遺物の出土は、大半が①層からである。出土遺物は、比較的遺存状況の良いものを第 22 図 161 ～ 180 に挙げている。161 は弥生土器甕口縁部と判断した。162 ～ 172 は須恵器である。162 ～ 164 は坏蓋である。162・163 はその形状から古墳時代後期のものと想定する。162 は外面に稜を残すが 163 には認められず、それぞれ異なる時期のものと想定できる。164 は古代のものと想定する。165 ～ 170 は坏である。165 は受け部と立ち上がりを有する古墳時代後期の蓋坏坏身である。ＳＨ 01 と概ね同時期のものと想定できる。166 ～ 168 は底部が遺存しないため詳細は不明である。169 は高台付坏である。やや太く短い高台が踏ん張るように底部に取り付く。粘土紐貼り付けの痕跡が認められることから、貼り付け高台であることがわかる。171 は高坏脚端部である。172 は甕体部片である。173 は土師器甕に分類した。174 ～ 179 は製塩土器片である。内湾するか直立気味の口縁部片が中心であるが、176 のように内湾気味に立ち上がる体部から直立気味に延びる口縁部を有するものが認められ、162・163・165 等の時期と同じ古墳時代後期頃のものが若干混じっているようである。179 は古墳時代の製塩土器の脚部である。180 は土師器甑である。口縁部のみであることから、異なる器種と誤認している可能性がある。遺構の時期については、遺物が混在していることから詳細不明であるが、169 の高台付坏が認められる点から 7 世紀後半以降のものと想定できる。

ＳＸ 05（第 21・22 図）

調査区中央西寄りで検出した東西方向に主軸を持つ遺構である。撹乱等の削平を受けて両端が途切れる。検出長は約 4 ｍ、幅は約 0.70 ｍを測る。深さは約 0.16 ｍを測る。埋土は褐灰色混粗砂粘質



第22図　Ⅰ区　性格不明遺構　出土遺物実測図



SX04

第23図　Ⅰ区　性格不明遺構　平・断面図（2）

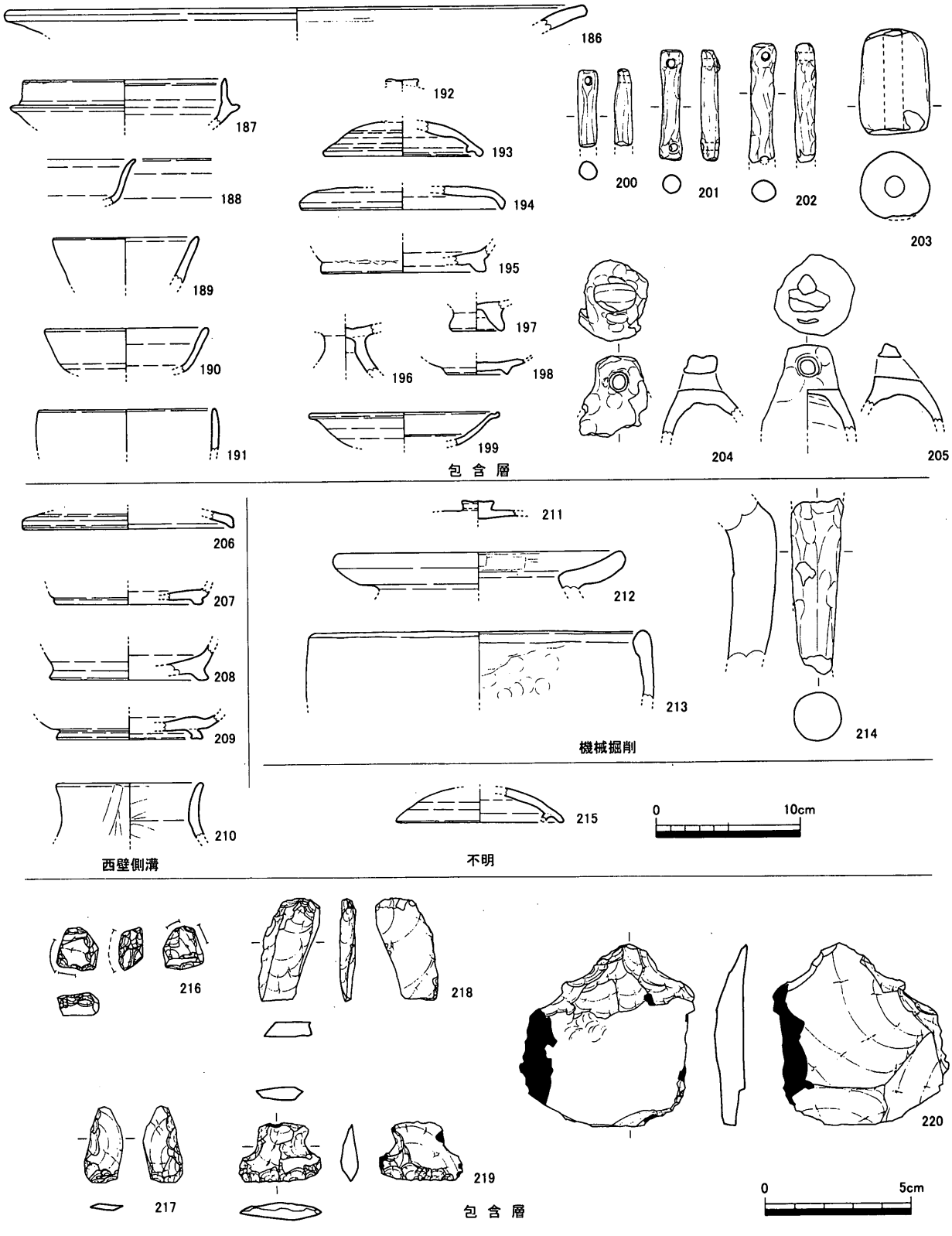
土であるが、濁黄褐色粘質土のブロックを多く含む上層と上層よりも粗砂を多く含む下層の２層に分かれる。出土遺物は若干出土しているが、小片を主体とし、その全容は不明である。ある程度器形が想定できる資料は第22図181～184である。181・182は須恵器坏蓋である。183は須恵器皿に分類した。184は磁器椀である。

ＳＸ06（第21・22図）

調査区南壁中央西寄りで検出した遺構である。平面形は１辺約1.90ｍ前後のやや不整な方形を呈する。また、断面形は箱型を呈し、深さは最深部で約0.50ｍを測る。当初、撹乱として掘削したために詳細な記録を行っていないが、比較的新しい時期の遺構であると想定する。出土遺物は第22図185のサヌカイト製火打石のみである。厚さ1.50㎝ほどの剥片を素材とし、そのほぼ全周を使用している。

包含層（第６・７・24図）

Ⅰ区においては基盤整備に伴う削平が著しく、明瞭な包含層が遺存する場所はごく僅かである。出土遺物は、大半が機械掘削及び平面精査時に本来帰属する遺構から遊離させた、あるいは基盤整備で客土された土の中に包含されていた可能性のあるものである。ある程度形状の把握できる遺物を第24図に図示した。186～205は主として機械掘削後の平面精査時及び機械の掘り残しを除去した際に出土した遺物である。186は土師質土器土鍋の口縁部と判断した。小片であることから詳細は不明である。187は須恵器蓋坏の身である。受け部を有し、立ち上がりはほぼ直立しながら長く



第24図　Ⅰ区　包含層出土遺物実測図

上方へ延びる。古墳時代後期前半頃のものと想定する。188 ～ 191 は底部が遺存しないことから詳細な器形は不明であるが、須恵器蓋坏の身である。191 は口縁がかなり直立気味であることから、異なる器種の可能性もある。195 は須恵器高台付坏の底部である。断面形状矩形を呈し、やや踏ん

張った形状で底部に取り付く。192 ～ 194 は須恵器坏蓋である。192 は摘み部分のみの出土である。かなり平坦な形状である。193 は内面に返りの付く形状である。196 は須恵器高坏脚部である。197 は製塩土器脚台である。198 は土師質土器椀である。断面三角形の高台が貼り付けられる。199 は施釉陶器皿である。200 ～ 205 は土製漁撈具である。200 ～ 202 の棒状土錘、203 の管状土錘、204・205 のイイダコ壷等が出土している。203 の管状土錘はやや太く短い形状を取る。206 ～ 210 は西壁際の側溝掘削時の出土遺物である。第７図を見てもわかるが、大半が基盤整備の客土中からの出土と見られる。206 ～ 209 は須恵器である。206 は蓋坏の蓋である。207 ～ 209 は高台付坏底部である。高台の形状にはバリエーションがあり、断面形状台形を呈し真下に延びる207、断面形状矩形を呈し踏ん張る 208・209 に分かれる。210 は製塩土器に分類したが、ほかの器種との誤認も想定できる。211 ～ 214 は機械掘削時出土遺物である。図化に耐え得るものは数少なく、概ね掲載したものが全てである。211 は須恵器坏蓋の摘みである。212 ～ 214 は土師質土器である。212 は甕、213 は鉢に分類した。214 は足釜の脚部である。215 は須恵器蓋坏の蓋である。内面に返りを有するタイプである。216 ～ 220 は包含層出土の石器である。216 は調査区壁から出土したチャート製の火打石である。青緑色を呈し、ほぼ全周に使用痕が認められる。217 は石鏃の未製品に分類した。薄手の横長剥片を素材とし、打面側に表裏から調整剥離を施し、基部側にも若干の調整痕が認められる。218 は下層確認トレンチから出土した剥片である。左側縁に微細な剥離痕を有し、使用痕の可能性がある。219 は石匙に分類したが、かなり小型である。刃部は表裏からの二次加工により作り出される。摘みは左側縁を片面から、右側縁は両面から二次加工を施して作り出すが、太く短い。220 は遺構面下の黄褐色粘質土から出土した剥片である。217 ～ 220 は全てサヌカイト製である。

第２節　Ⅱ区

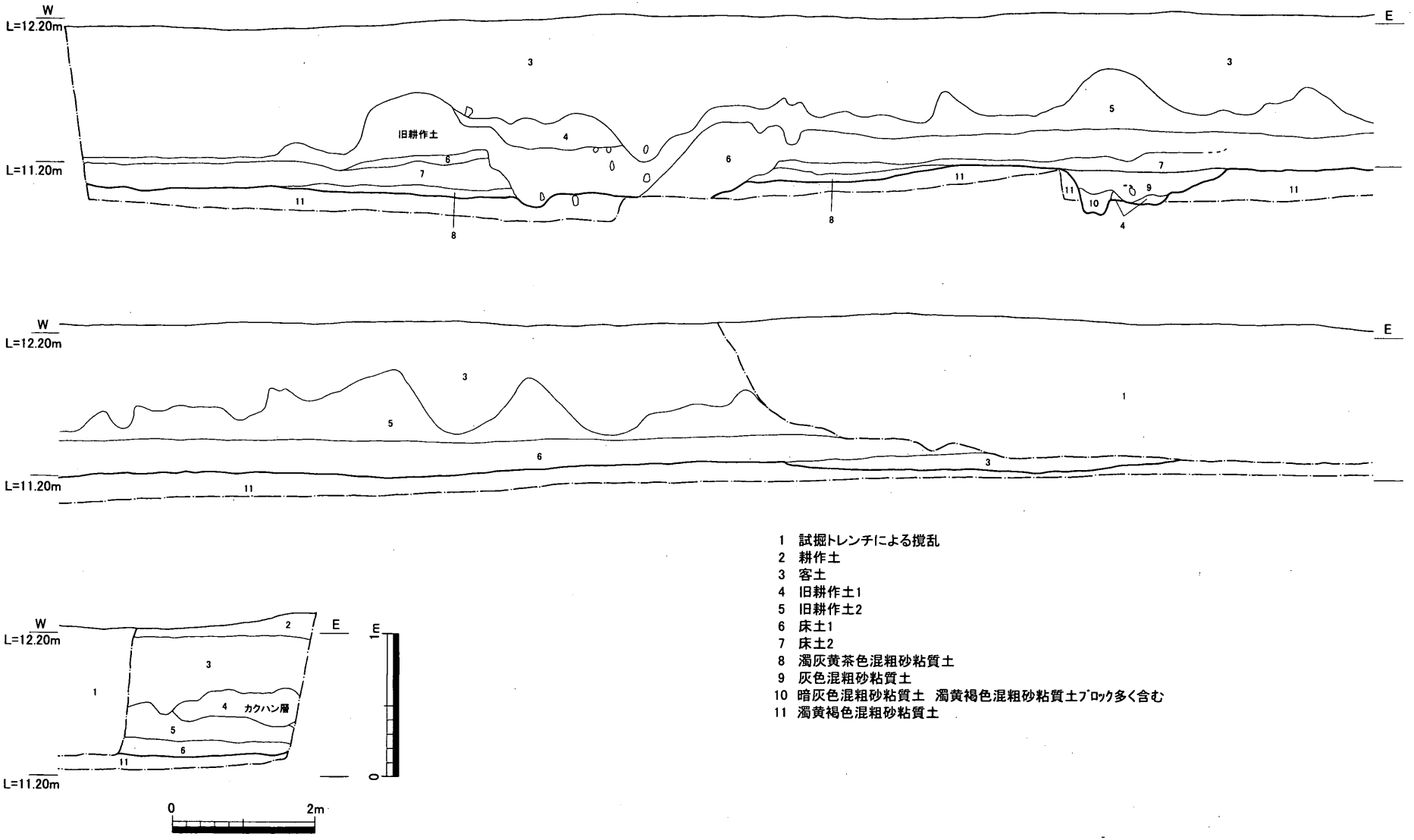
１．Ⅱ区の調査概要（第 25 図）

当調査区で検出した遺構は掘立柱建物跡２棟、柱穴 83 基、土坑６基、溝状遺構 11 条、性格不明遺構９基である。遺構の分布はほぼ調査区全面に広がり、見かけ上、あまり粗密は認められない。北側約１／４の範囲がやや密度が低いものの、それよりも南側は総じて均一な密度で遺構が分布するといえる。これは、基盤整備以前の耕作に伴う地形改変の結果生じたものと想定できる。土層序の項でも触れるが、調査区西壁の土層を観察すると、遺構密度がやや低い北側は基盤整備前の水田耕作土がベース面直上まで及ぶほか、一部はベース面を削平するところまで及ぶ。したがって、この部分に関しては基盤整備以前に削平を受けていたと判断できる。調査地の旧状は基盤整備により平坦化された水田２筆であったが、基盤整備前の丈量図を見ると 10 筆からなる等高線に並行して開かれた水田であったようである。また、この丈量図から、調査区中央西寄りに南北方向の農道があったことがわかり、この両側で水田が経営されていたようである。うち、西側５筆はⅠ区に存在した水田と同じものである。

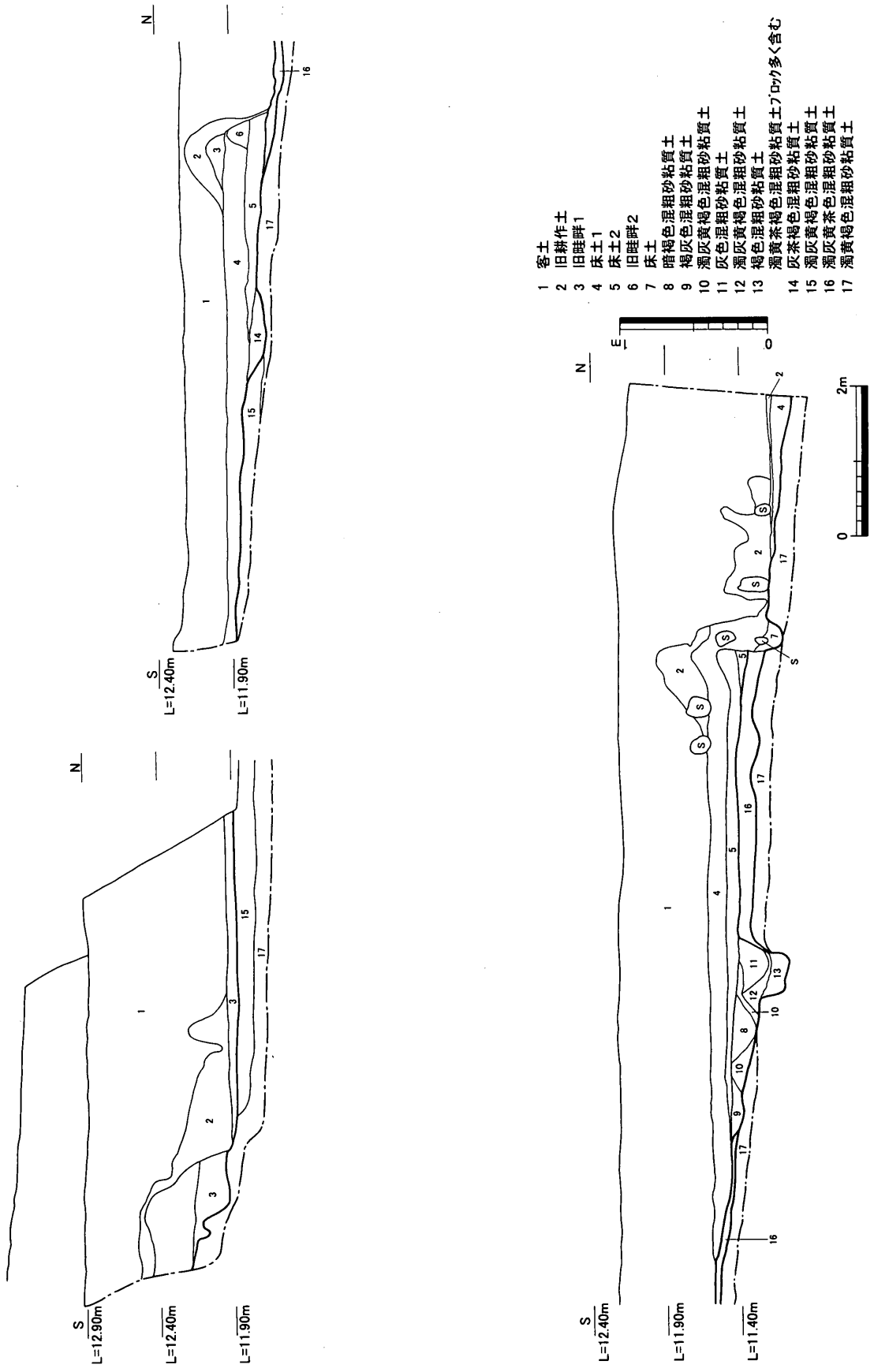
２．土層序（第 26 ～ 28 図）

当調査区は、現地表面から遺構面まで最大約 1.40 ｍを測るほど厚い土砂に覆われるが、そのうち６～９割が基盤整備に伴う客土ないしは旧耕作土と旧床土である。その直下から遺構が検出されることから、ほぼ遺構面まで後世の削平が及んでいると言える。地山は濁黄褐色あるいは茶褐色の砂混じり粘質土である。このため、堆積状況を記録したのは調査区西・北・東の各壁であり、南側は

第25図　Ⅱ区　遺構配置図



第26図　Ⅱ区　北壁土層図

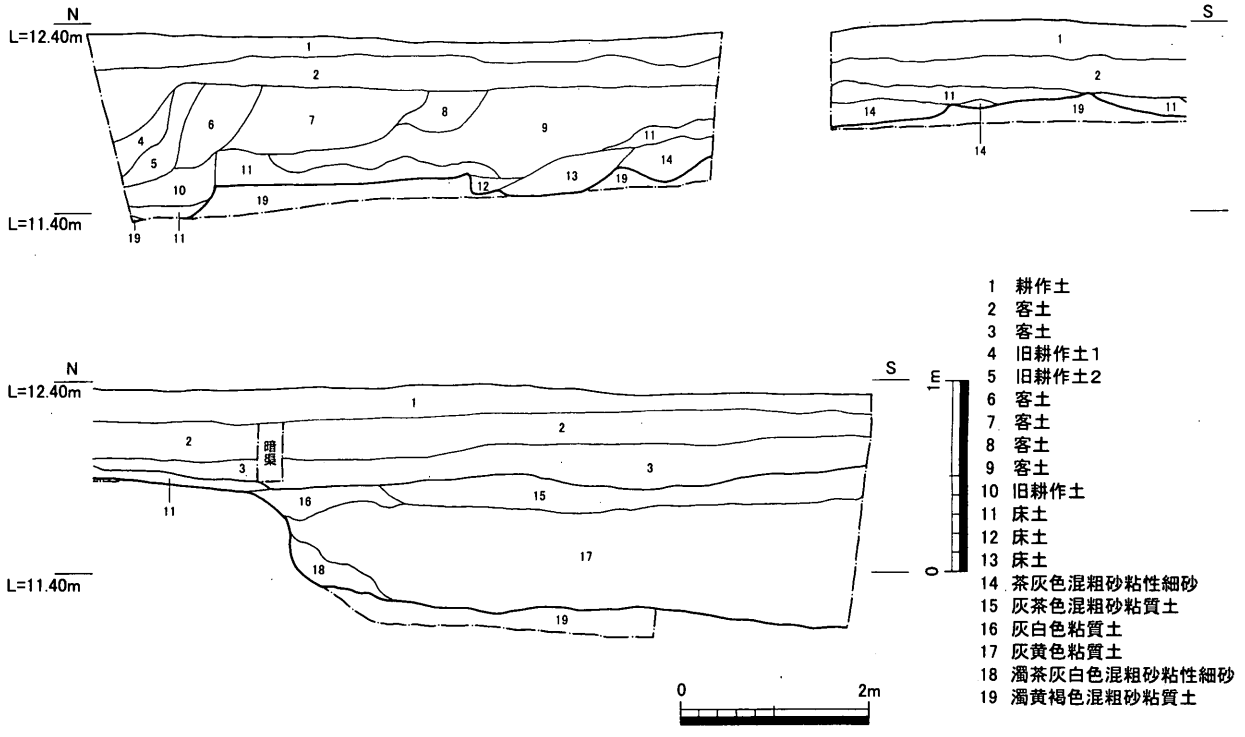


第27図　Ⅱ区　西壁土層図

ほぼ全面が基盤整備に伴う客土のみであったため、記録していない。以下、各壁を用いて堆積状況を概観する。

第26図は北壁土層である。状況は後述する西壁と大差はない。この壁では基盤整備前の耕作土がある程度残されており、客土との境が大きく攪拌される。西壁から約7mのところから約9mのところまで大きく窪む部分が認められるが、これは第3図の旧丈量図で認められる農道の痕跡である。ベース面はこの農道部分で若干窪み、その両側から徐々に東西へそれぞれ緩やかに上る。耕作等の地形改変を受けている可能性があり、これが旧地形を反映しているかどうかは不明である。東端は客土に伴う攪拌層が顕著である。

第27図は西壁土層図である。上段左側は南側の地筆の範囲を図化している。これを見てわかるとおり、調査前には北側の地筆と約1mのギャップがあったことがわかる。このギャップは基盤整備で客土された土（①層）に起因しており、基盤整備前の水田のギャップは概ね0.50mほどであったことがわかる。②層は基盤整備前の耕作土、③層がその床土であると判断した。この部分は床土直下でベース土が露出し、著しい削平を受けているようである。南端で辛うじてSD12の埋土が確認できる。上段右側から下段は北側の地筆に相当する部分の土層である。基盤整備に伴い現状では平坦化しているが、整備前には最低3筆の水田が0.30～0.40mほどのギャップをもちながら存在したことがわかる。基本的に、畦畔部分のみ残して旧床土上面まで耕作土を除去した後、客土した様子が認められる。旧床土は0.05～0.30mと厚さにばらつきがあるが、旧地形が南から北へ緩やかに傾斜しているため、低い部分をかさ上げしていることに起因する。結果的に、浅い部分は一部ベース面を削平して高さを揃える。本来遺構面を覆っていた包含層は、耕地化に伴い全て削平されてい



第28図　Ⅱ区　東壁土層図

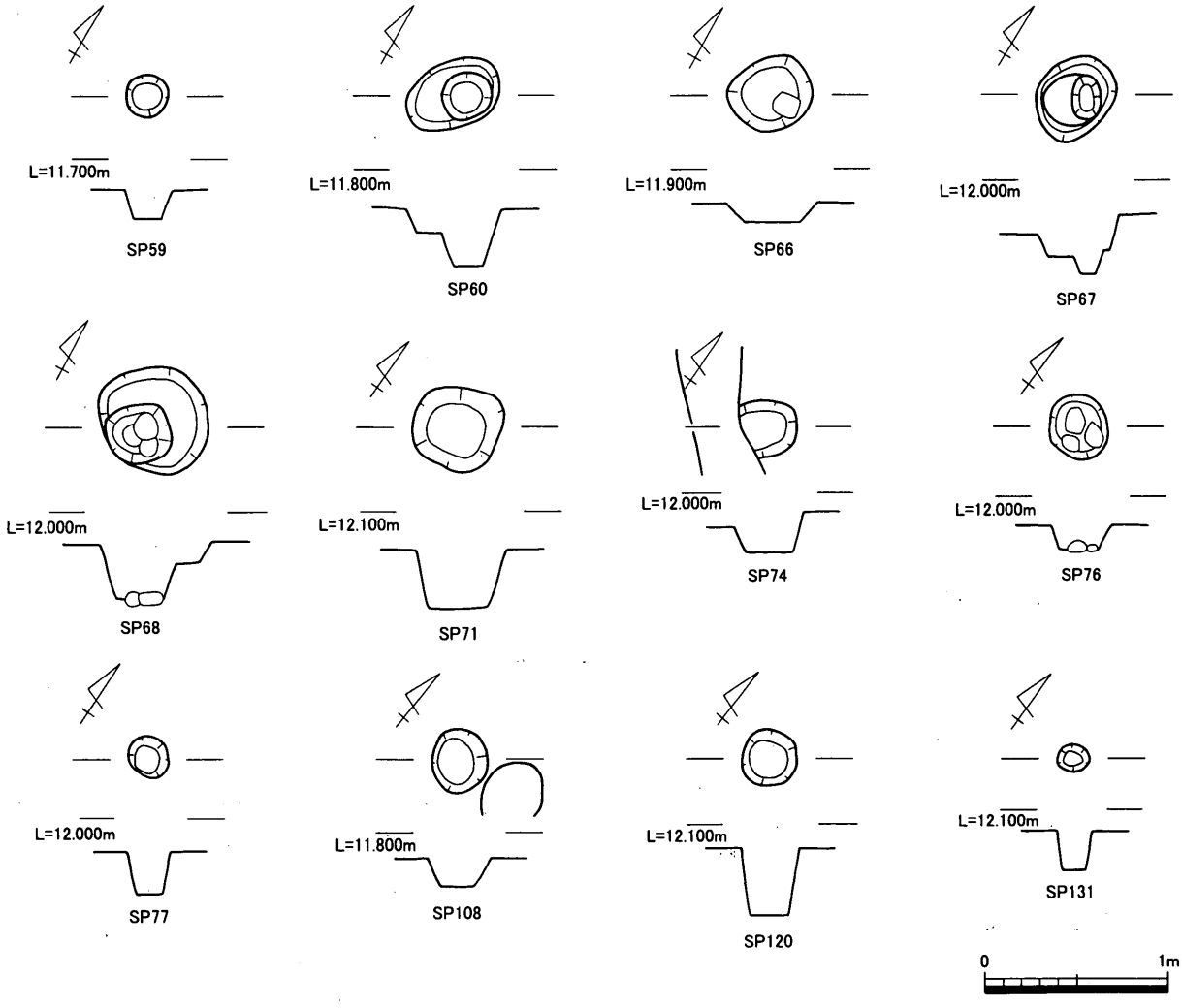
る。⑧層～⑭層は遺構埋土である。⑮～⑰層は下層の包含層で、ごく一部の範囲からサヌカイト製石器が出土している。

第28図は東壁土層である。調査区の壁が2ヶ所でクランクしていることから確実に連続した土層を追うことが若干困難であるが、ここでもやはり約0.80 mの厚さで客土がなされる。また、北半を中心にベース面が若干乱れており、耕地化に伴う地形改変の影響を受けたことが想定できる。ただし、北壁から約7 m付近において、北と南でベース面に約0.40 mのギャップを認めるが、ベース面直上に⑭層が認められ、その上に旧床土を認めることから、この部分においては旧地形を反映しているものと想定する。北壁から南へ約11 mの地点より南は、溜池に関連する堆積層である。詳細は後述する。

3．遺構と遺物

掘立柱建物

ＳＢ03･04の2棟を検出しているが、残存状況は不良である。共に調査区中央北寄りで検出したが、ＳＢ03は西壁・南壁を構成する柱穴が、ＳＢ04は南壁・東壁を構成する柱穴がそれぞれ検出できなかった。埋土は淡茶灰色粗砂混じり粘質土からなる。明瞭な出土遺物が無く、詳細不明であ



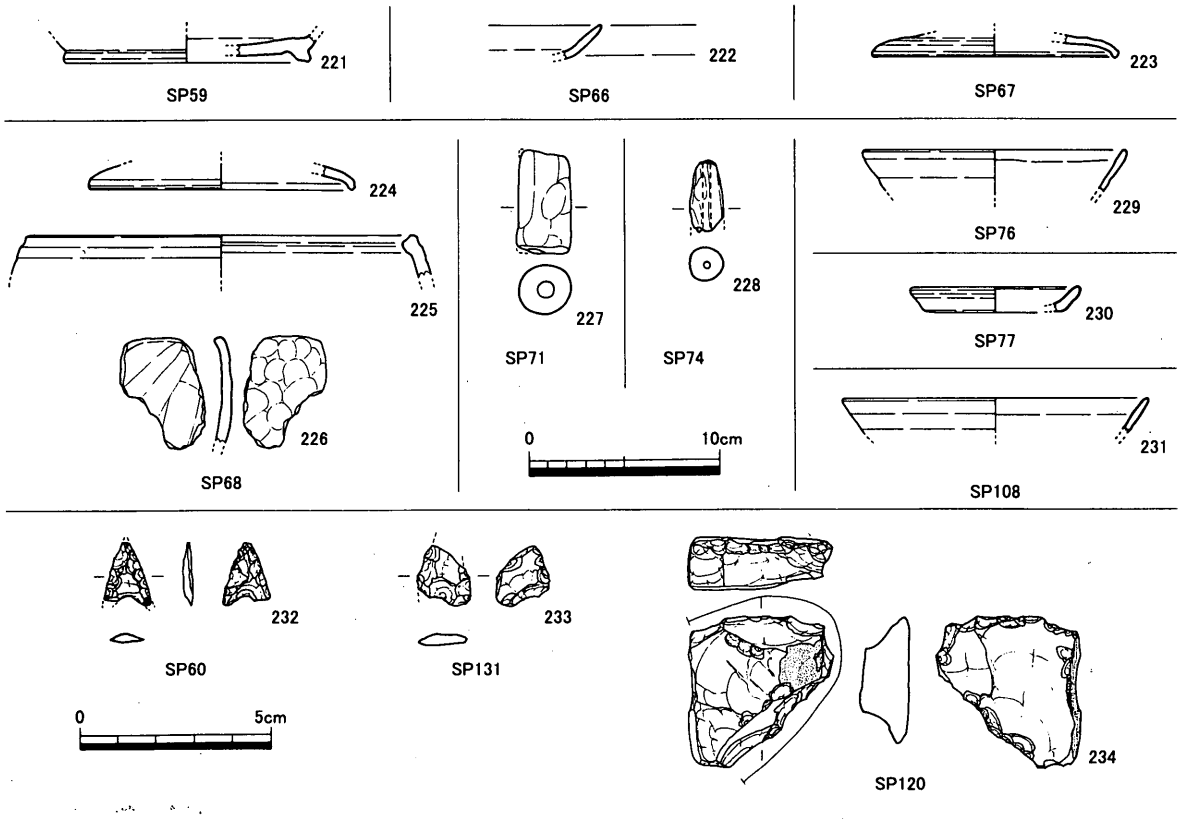
第29図　Ⅱ区　柱穴　平・断面図

る。埋土の状況から中世期のものと想定しているが、定かではない。

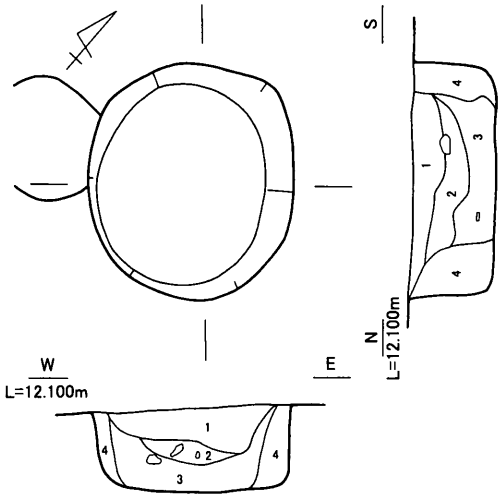
柱穴（第29・30図）

調査区のほぼ全面で散漫に分布している。調査区南西隅付近や中央付近でやや密集する傾向が認められるものの掘立柱建物を構成すると判断されるものはほとんど見られない。ＳＰ67・68・72が比較的等間隔に並んでいることから、掘立柱建物東壁を成す可能性は想定できるが、それぞれ単一の柱穴として扱う。今回掲載するのは遺物の出土が見られたもののうち、出土遺物の形状がある程度把握できたものを対象とした。平面プランはほぼ円形に近いものを中心とし、若干隅丸方形状を呈するものが認められる。規模は直径約0.15～0.60ｍとばらつきがあるが、概ね0.30～0.50ｍほどのものが主体となるようである。深さも同様にばらつきが認められ、約0.10～0.40ｍを測る。先に若干触れたＳＰ68やＳＰ76においては柱穴の底部に礫が認められ、根石を据えていたものと想定できる。

出土遺物は第30図に掲載した。先述したとおり、形状の把握できるものは限られている。221はＳＰ59出土の須恵器高台付坏である。小片であることから詳細不明であるが、断面形状矩形の踏ん張った高台を持つ。222はＳＰ66出土の土師質土器皿である。小片のため、詳細不明である。223はＳＰ67出土の須恵器坏蓋である。224～226はＳＰ68出土遺物である。224は須恵器坏蓋、225は須恵器鉢、226は製塩土器片である。ＳＰ71・74からは227・228の土製管状土錘の出土が見られる。227は円柱状を呈し、228は紡錘状を呈する。229はＳＰ76出土の軟質須恵器椀である。230はＳＰ77出土の土師質土器小皿である。231はＳＰ108出土の土師器皿である。ＳＰ60・131からはサヌカイト製の凹基無茎式の石鏃が出土している。また、234はＳＰ120出土のサヌカイト製火打

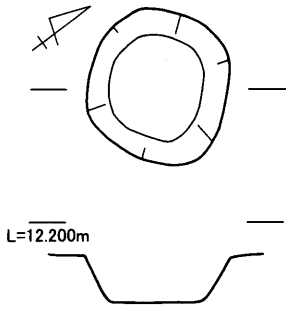


第30図　Ⅱ区　柱穴　出土遺物実測図

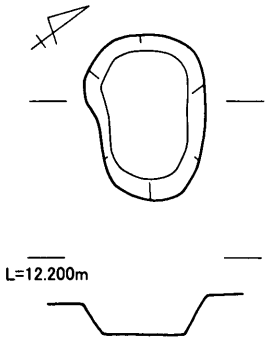


1 濁黄褐色粘質土　灰褐色混粗砂粘質土をﾌﾞﾛｯｸ状に含む
2 灰褐色混粗砂粘質土
3 灰色混粗砂粘質土
4 茶灰色混粗砂粘質土

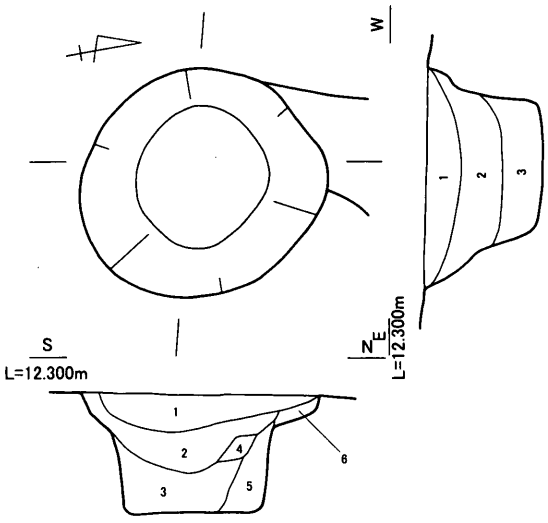
SK03



SK04



SK05



1 濁黄茶褐色混粗砂粘質土
2 灰色混粗砂極細砂
3 黄灰色混粗砂極細砂
4 橙黄褐色混粗砂極細砂
5 灰色粘性極細砂
6 濁黄褐色混粗砂粘質土

SK06

0　1m

第31図　Ⅱ区　土坑　平・断面図

石である。厚さ 1.50cm ほどの剥片を素材とし、そのほぼ全周を使用する。

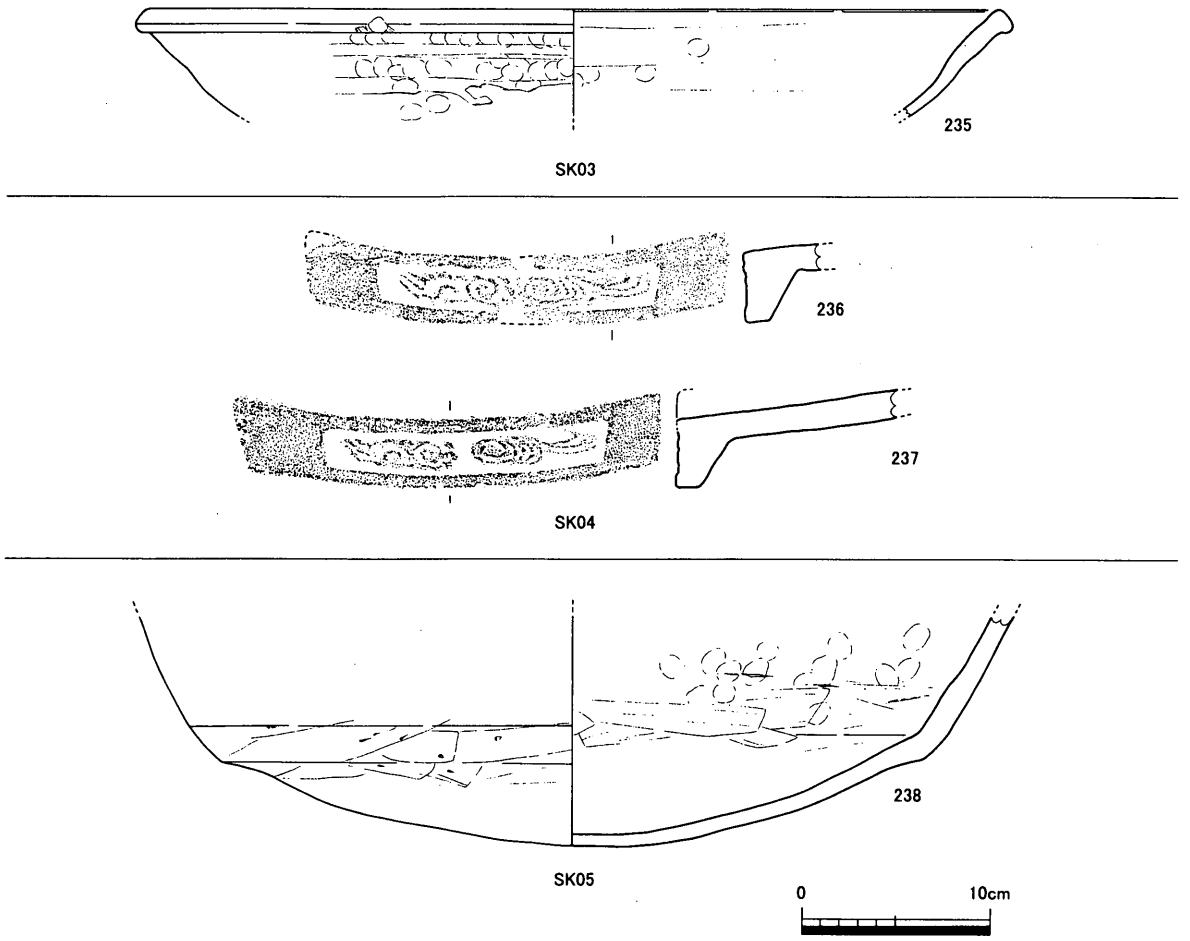
当調査区における各柱穴の時期は、出土遺物から概ね奈良時代から中世にかけてのものであると想定できる。

土坑

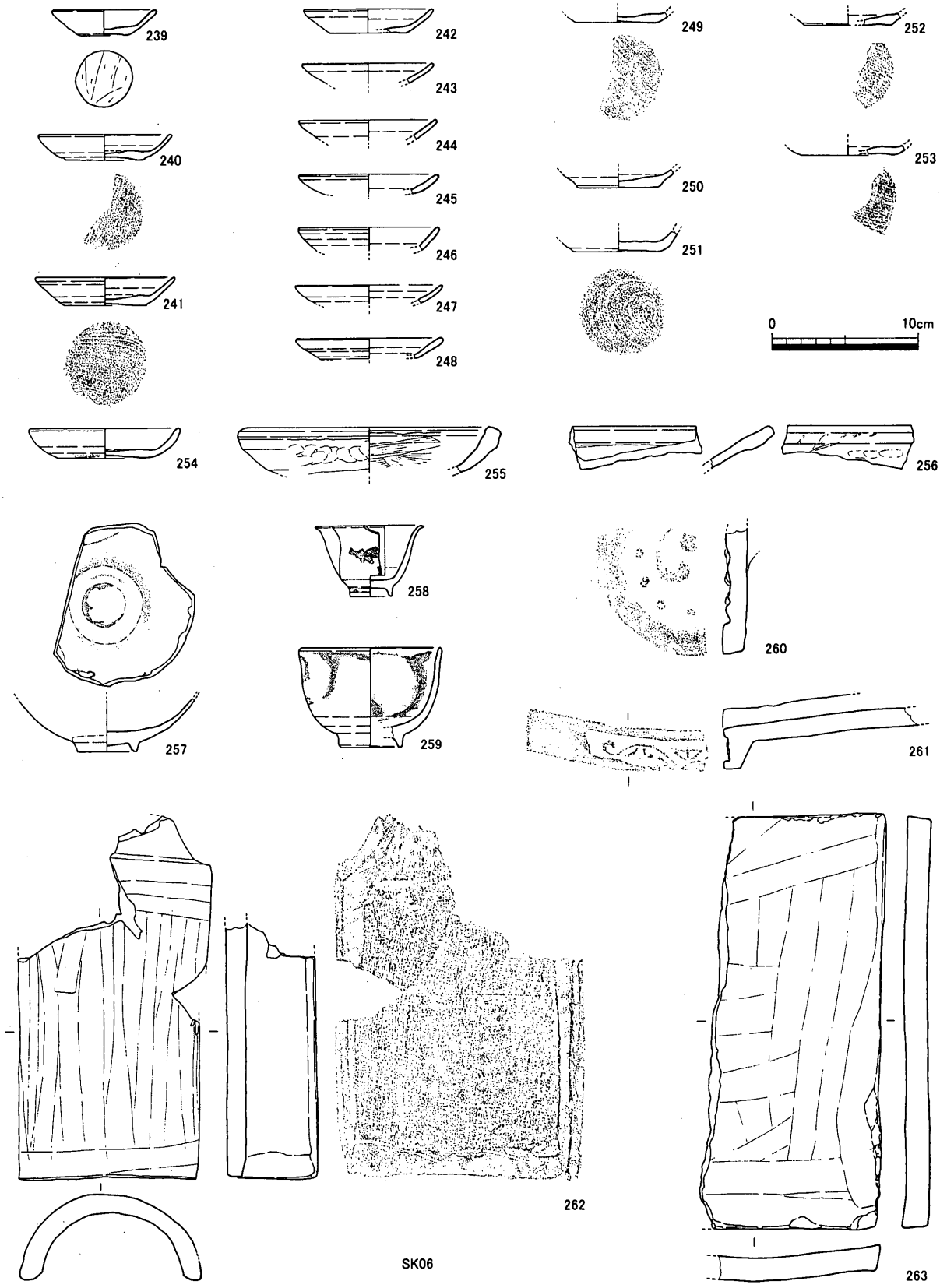
９基を当該遺構に分類したが、平面プランはほぼ円形を呈するものからなり、ＳＫ 04・05 が隅丸方形状を呈する。規模は直径が最小のＳＫ 02 で約 0.50 m、ほかのものは約 1.30 mである。深さは約 0.20 mのものが多いが、ＳＫ 03 で約 0.45 m、ＳＫ 06 で約 0.62 mであるように、やや深いものも認められる。これらのうち、出土遺物の認められたもので、ある程度遺物の器形が判別できるものを対象に報告する。ただし、これらのほとんどが調査時に撹乱として認識していたため、詳細な記録を行っていないものがある。

ＳＫ 03（第 31・32 図）

調査区南壁付近中央部で検出した遺構である。長軸約 1.24 m、短軸約 1.06 mの楕円形を呈するもので、深さは約 0.45 mを測る。断面形状は箱型を呈する。埋土は４層に細分できるが、①～③層は④層堆積後、再掘削された後に堆積したものと想定される。特に①層は本来上面に堆積していたと



第 32 図　Ⅱ区　土坑　出土遺物実測図（1）



第33図　Ⅱ区　土坑　出土遺物実測図（2）

想定される灰褐色粗砂混じり粘質土をブロック状に含むことから、埋め戻しに伴う堆積層と想定できる。出土遺物は235の土師質土器土鍋を認めるのみである。

ＳＫ04（第31・32図）

ＳＫ03東側１ｍのところで検出した遺構である。１辺約0.80ｍの隅丸方形状を呈する。断面形状は逆台形状を呈し、深さは約0.30ｍを測る。出土遺物は236・237の軒平瓦を挙げた。

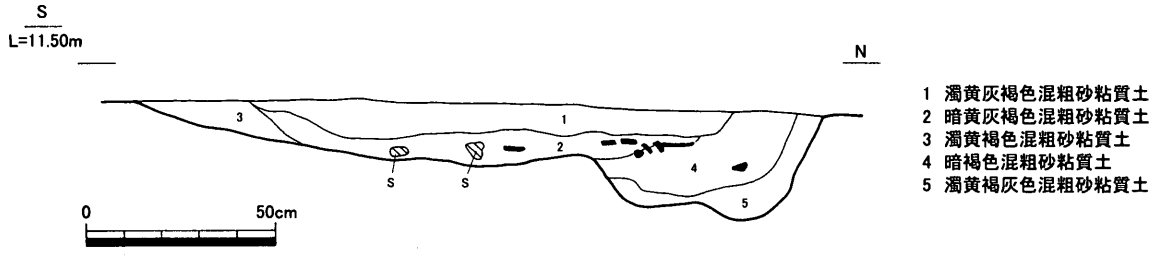
ＳＫ05（第31・32図）

ＳＫ04南側約１ｍのところで検出した遺構である。長軸約0.90ｍ、短軸約0.60ｍを測るやや不整形な楕円形を呈する。断面はやや不整な逆台形を呈し、深さは最深部で約0.20ｍを測る。底部に土師質土器甕（238）を据えていたと見られる。

ＳＫ06（第31・33図）

ＳＫ03東側約５ｍのところで検出した遺構である。直径約1.30ｍ、深さ約0.62ｍの規模で、平面形は円形、断面形は箱状を呈する遺構である。埋土は概ね６層に細分できるが、①層は濁黄茶褐色粗砂混じり粘質土で、濁黄色砂混じり粘質土の地山ブロックが多く含まれる。②・③層は灰色及び黄灰色の粗砂混じり極細砂で、この層から第33図に掲載した遺物のほとんどが出土しているほか、大型の礫の出土が認められる。239～253は土師質土器小皿に分類した。反転復元させたものが多いことから若干の差異が出てくる可能性はあるが、239を除くと口径９～10cm、底径５～６cmを測るものがほとんどで、器高も２cm前後に収まることから、比較的法量はそろっていると見ることができる。底部外面の調整は、板ナデによる239・240・249・253と糸切り後未調整の241・251・252が認められる。254は土師質土器坏に分類したが、小皿と法量が変わらないことから誤認の可能性がある。底部外面の調整はヘラ切り後板ナデが施される。255・256は土師質土器土鍋の口縁部である。257は肥前系磁器皿底部である。内面見込みは蛇の目釉ハギが認められ、底部外面は無釉である。17世紀後半頃のものと想定できる。258は肥前系磁器小坏である。体部外面にコンニャク印判による施文が施される。259は肥前系陶器椀である。258・259は共に18世紀前半頃のものと想定できる。260～263は瓦である。特に②層において多量に出土したが、各器形の残りの良いものだけを抽出した。260は軒丸瓦の瓦当部である。261は軒平瓦である。262は丸瓦、263は平瓦である。これらの遺物のうち、肥前系磁器・陶器の年代に準拠すると、当遺構の年代は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられると想定する。遺構の性格としては、遺物が遺構中・下層からまとまって出土し、最上層は地山ブロックを含む埋土であることから、廃棄土坑としての機能を想定しておきたい。

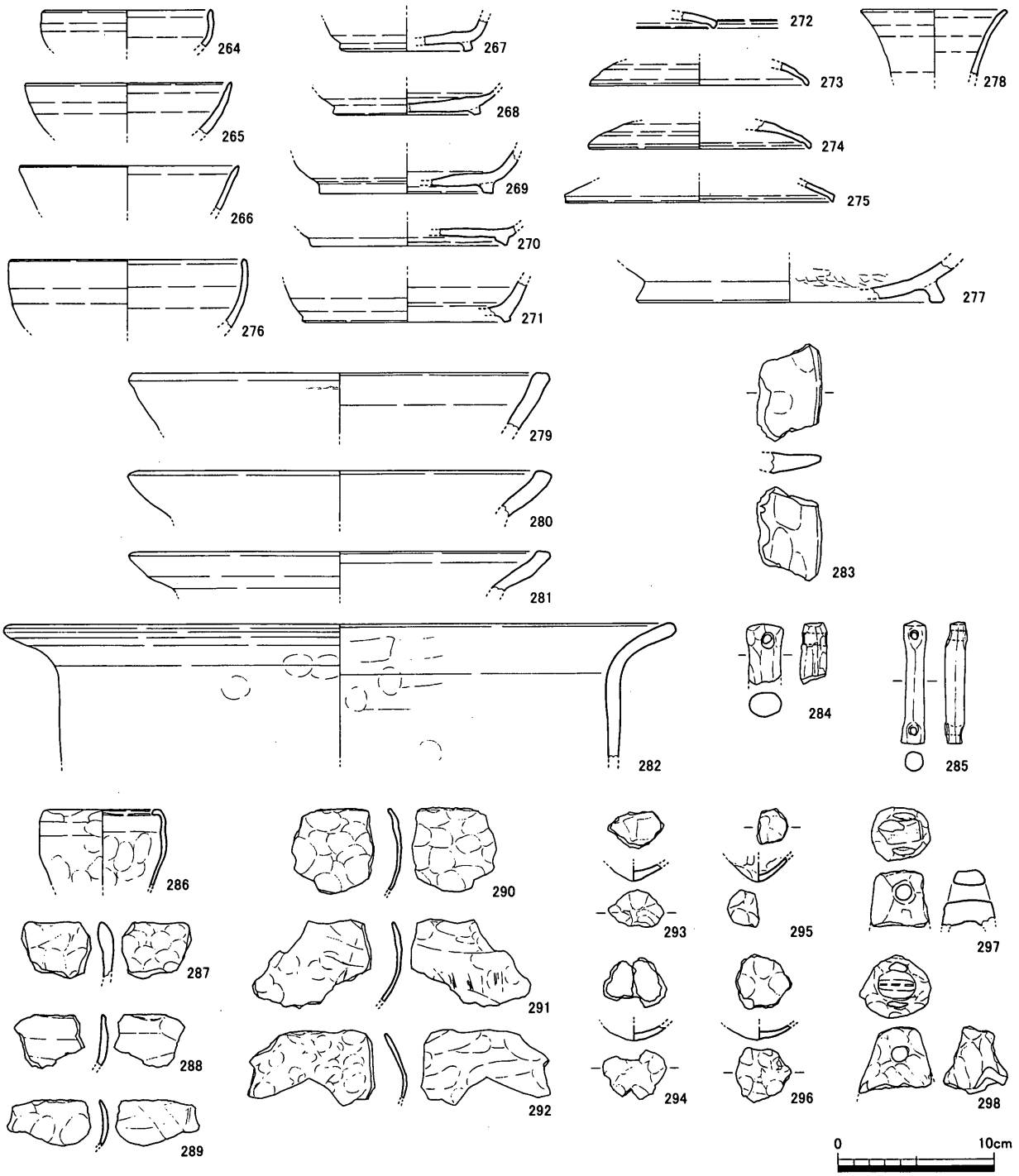
溝状遺構



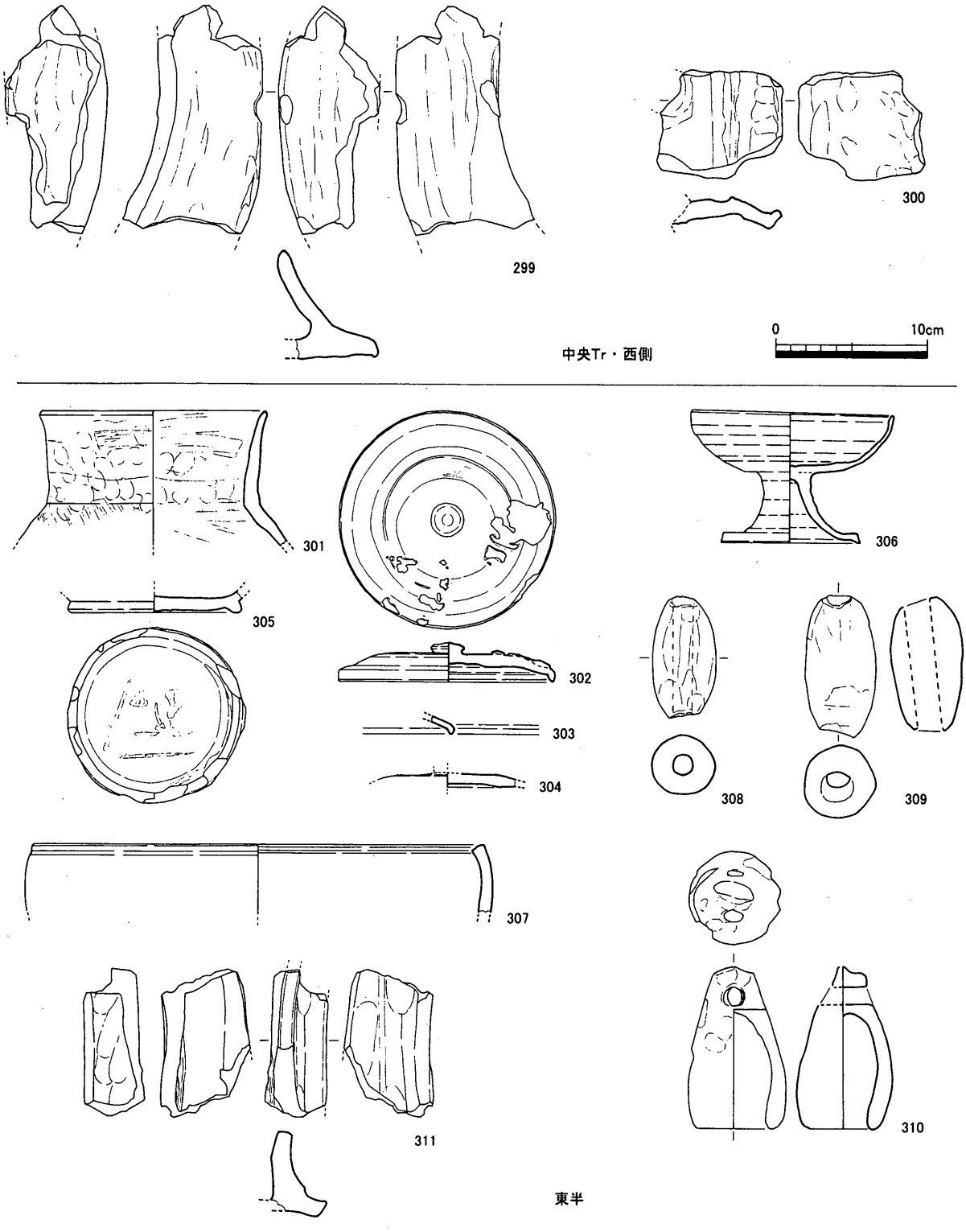
第34図　Ⅱ区　ＳＤ03　断面図

ＳＤ03（第34～38・44図）

調査区北西隅で検出した遺構である。中央付近で基盤整備前にあった農道の削平により中断するが、検出長は約19ｍを測る。幅は最大で約2.50ｍを測る。深さは最深部で約0.30ｍを測る。断面形状は浅い皿状を呈するものの、北側幅約0.60ｍは一段深く掘り下げられる。調査区西壁際から北東方向に流下した後、撹乱による中断部分で北北西にその方向を変える。西壁際から南南西に延伸させるとＩ区ＳＤ03のラインとつながることと、断面形状が北側で深く掘り下げられる点で共通することから、両遺構は同一のものと判断した。埋土は５層に細分できるが、大きく捉えると①～③



第35図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（1）



第36図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（2）

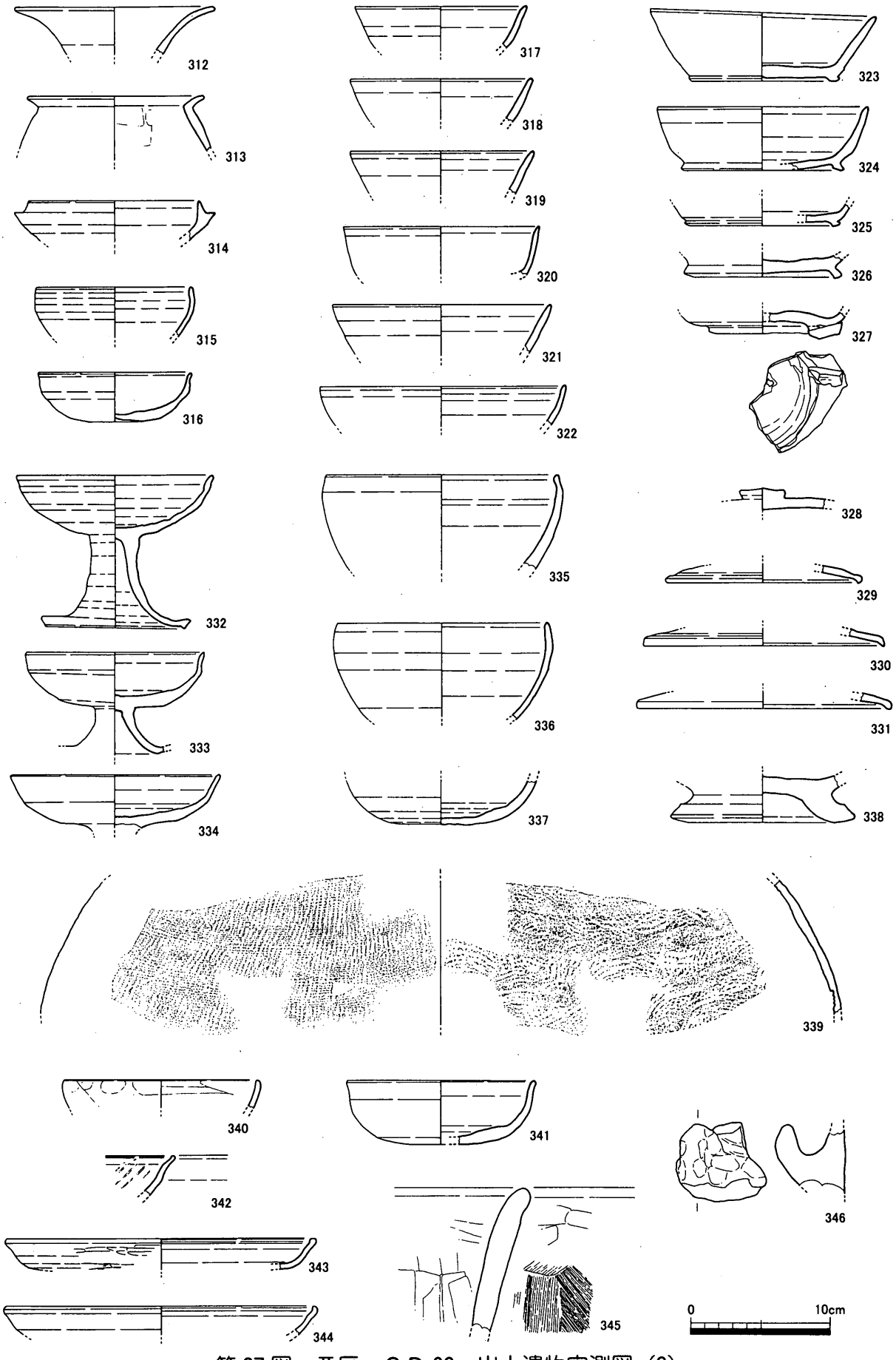
層の上層と④・⑤層の下層に分けられる。上層は浅い皿状の堆積で、土質は黄灰褐色系の粗砂混じり粘質土からなる。①・②層において遺物を比較的多量に包含する。下層は④層で暗褐色粗砂混じり粘質土、⑤層で濁黄褐灰色粗砂混じり粘質土である。④層でも若干遺物の出土は認められる。Ⅰ区ＳＤ03と異なる部分として、下層における埋め戻し痕が認められない点である。掘削時に数箇所で断面観察を行なったが、Ⅰ区で観察したほどは地山ブロックの混入が認められなかった。ただし、上層における多量の遺物の出土はⅠ区と共通し、また、下層でほとんど遺物が出土しない点も同じ

であることから、同一遺構であると見てよかろう。また、Ⅰ区でも触れたが、砂質土を主体とする埋土が認められないことから、ここにおいても流水する環境ではなく、滞水環境にあったものと想定しておく。

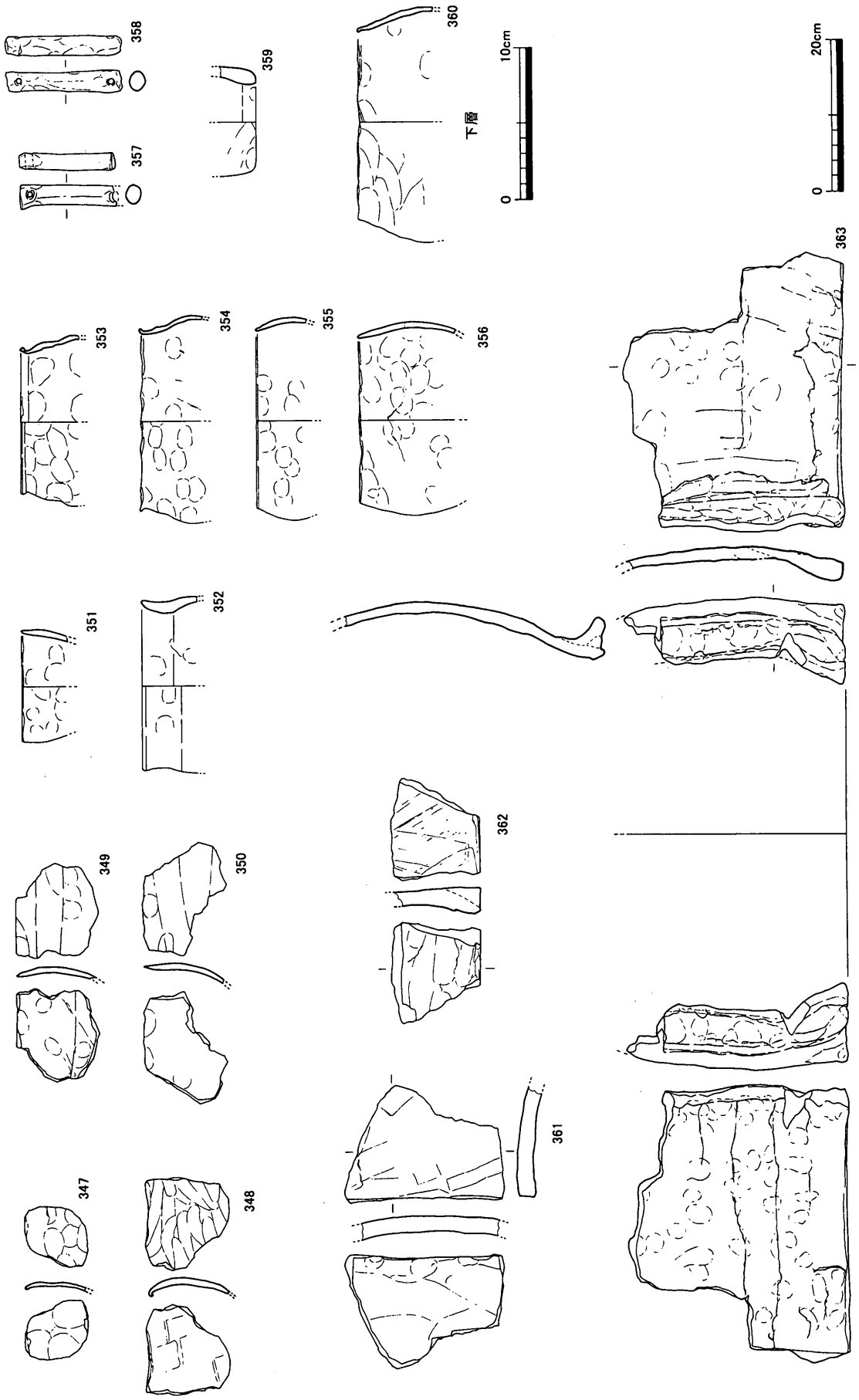
出土遺物の大半は、先述したとおり①・②層からの出土である。取上げ時に中断された部分を境に西と東に分けたので、まとまりの判別できるものから順に記載する。第35図及び第36図299・300は中断部より西側で出土した遺物である。264～278は須恵器である。いずれも小片であり、詳細な器形が判別し難い。264～266は坏口縁部である。264は口径がやや小振りで、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁は直立気味に作られる。267～271は高台付坏の底部である。高台の断面形状は、方形・逆台形とバリエーションが認められる。270は高台の内側が底部に近接する。272～275は蓋坏の蓋である。端部の屈曲が明瞭なものとやや弱いものが認められる。276は内湾気味の体部と直立する口縁部の形状から椀に分類した。277は底部の小片であり詳細不明であるが、壷底部に分類した。短頸壷の底部か。278は壷口縁部である。279～283は土師器である。279は体部から口縁にかけて直線的に延びるため鉢口縁部としたが、甕の可能性もある。280～283は甕である。口縁部付近を中心とした小片であり、全体の形状は不明である。283は有鍔の甕の鍔と判断した。284・285は土師質の棒状土錘である。286～296は製塩土器片である。ある程度形状が把握できるものは286のみである。破片資料を反転復元しているため正確な径が出ていない可能性はあるが、小型の鉢形を呈するものか。287～292は口縁部を集めた。287の例はほかのものに比べるとやや厚めの器壁を有する。288は口縁部が直立気味であるが、他例は内湾気味の口縁部である。293～296は底部を集めた。小片であることから詳細は不明であるが、293・295は比較的尖底を呈すると想定でき、294・296は丸底気味の尖底を呈すると想定できる。297・298はイイダコ壷である。299・300は土師質カマドの破片である。

第36図301～311は、中断部より東側の溝が北流する部分で出土した遺物である。この部分では西側に比べ、遺物の出土量はやや減る。301は弥生土器壷である。302～307は須恵器である。302～304は蓋坏の蓋である。302は外面に淡緑灰色の自然釉が一部に認められる。また、重ね焼きされていたためか、暗灰色の癒着物が認められる。305は高台付坏底部である。底部は平底を呈し、高台の断面形状は不整な台形を呈する。底部外面には、高台貼り付け前の底部調整に伴う工具痕と見られる、浅い沈線状の窪みが認められる。306は高坏である。307は口縁部のみの小片であることから詳細不明であるが、鉢に分類した。308～310は土製漁撈具である。308・309は管状土錘である。310はイイダコ壷である。311は土師質カマドの破片である。

第37・38図は詳細な出土位置が不明なものを一括して掲載した。調査時の所見から推定すると、ここに掲載したものの大半が、先述したように溝中断部西側の上層から出土した可能性が高い。第37図312・313は弥生土器である。前者は壷、後者は甕である。314～339は須恵器である。314は蓋坏の身である。やや直立気味の立ち上がりが短く延びる。古墳時代後期後半頃のものと想定できる。315～327は坏である。315は体部から口縁部にかけて内湾気味の形態をとることから、椀の可能性もある。316は無蓋の坏である。317～322はいずれも底部を欠損することから詳細な器形は不明である。322の例を除くと体部は比較的直線的に延びる。また、320の体部はやや直立気味に立ち上がるが、ほかの例は斜め上方に延びる。口縁部は体部から直線的に延びるものとやや外反気味に仕上げられるものがある。323～327は高台の付くものである。323は平底の底部に、短く断面形状が不整な矩形を呈した高台が踏ん張り気味に取り付く。体部から口縁部は直線的に延び、口縁端部は丸みを帯びる。324はやや丸みを帯びた平底に、やや長く断面形状が不整な五角形を呈する高台



第37図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（3）

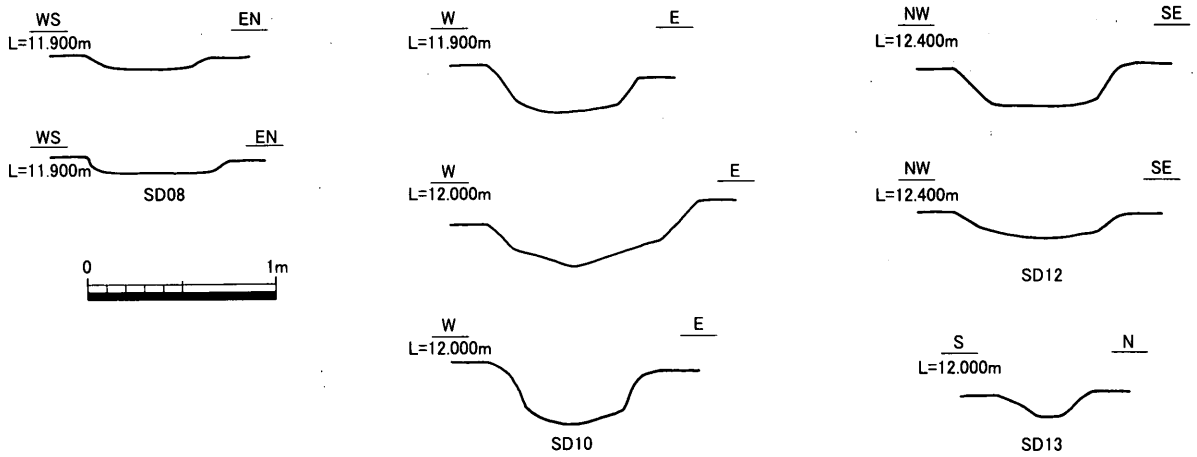


第38図　Ⅱ区　ＳＤ03　出土遺物実測図（4）

が踏ん張り気味に取り付く。体部から口縁部にかけてはやや内湾し、口縁端部は若干外反気味に仕上げられる。325～327は底部のみの破片である。高台はいずれも踏ん張り気味に取り付くが、短めの325とやや長い326の差が認められる。327は重ね焼きの痕跡が認められ、ほかの個体の高台が剥離して癒着する。328～331は蓋坏の蓋である。328は摘み部分のみの資料である。329～331は端部である。いずれも小片であることから詳細不明であるが、やや扁平な器形が想定できる。332～334は高坏である。やや脚部の長い332と短い333の差が認められる。335～337は鉢に分類した。335・336は底部を欠損することから詳細は不明であるが、体部から口縁部にかけてやや内湾し、深い器形を呈すると想定できる。335は口縁端部をやや肥厚させる。共に鉄鉢形を呈する可能性が想定できる。337は鉢の底部に分類した。内面見込みに回転指ナデの調整痕が明瞭に残ることから、平瓶か壷の底部の可能性も考えられるが、これらの器種が当遺跡では認められないことから、鉢とした。338は高台付壷の底部である。339は甕体部片である。340～346は土師器である。340・341は坏に分類した。340は口縁部のみの小片であることから詳細不明であるが、体部から口縁部にかけて内湾する形態をとるものと想定できる。341は平丸底の底部から、内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部は外反する形態をとる。口縁端部は丸く仕上げられる。やや粗い胎土をもち、暗赤褐色に発色することから土師器に分類したが、器形的には先述した316の須恵器坏あるいはⅠ区ＳＤ03出土遺物（103）等に類似するものが認められることから、341は須恵器の焼成不良品である可能性もある。342～344は皿に分類した。342はやや深い器形となり、ほかの２例と形態が異なる。坏の可能性も想定できる。やや摩滅が進んでいることから詳細な観察が困難であるが、内面はヘラミガキの後、一段の放射状暗文が施される。口縁端部は丸く仕上げ、口縁直下内面に一条の沈線状のくぼみが認められる。343・344はやや浅い器形である。共に口縁直下内面に一条の沈線状の凹みが認められる。343は外面にヘラミガキの痕跡が認められる。343・344共に内面の調整が極めて精緻に行われる。暗文は認められない。340・341とは異なり、342～344については精製された胎土が用いられる。345は土師質土器鉢、346は土師器甕把手に分類した。第38図347～356は製塩土器である。多くが直立ないしは内湾する口縁部を持ち、極めて薄い器壁である。例外的に352のように小型の甕形を呈し、やや厚手の器壁を持つものも認められる。口径は12cm前後を測るものが多いと見られるが、351はやや小さく約８cmである。大半の資料の内外面は指頭痕が多く認められるが、内面を板ナデしている例もある。357・358は棒状土錘、359はイイダコ壷である。361～363は土師質カマドである。360は数少ないＳＤ03下層出土遺物である。製塩土器であるが、器形・調整方法・法量等において上層遺物と顕著な差は認められない。第44図442～445はＳＤ03出土石器である。いずれも混入と想定できる。石材は全てサヌカイトである。442はＳＤ03下層出土の凹基無茎式石鏃である。かなり小型の製品で、両側縁がややくびれる形状である。脚部は短い。443はＳＤ03上層出土の石鏃未製品である。器体中央で縦に折れていることから詳細は不明であるが、折れ面で反転させた際の形状は平基無茎となる。裏面先端部に調整加工が認められないことから、未製品と判断した。444は楔形石器に分類した。全面がやや摩滅している。445は背面に原礫面を大きく残した剥片である。遺構の時期については、若干の混入は認められるものの出土遺物から概ね７世紀末～８世紀初頭の所産であると想定する。

ＳＤ08（第39・40図）

調査区西端中央付近で検出した遺構である。検出長約7.50ｍ、検出幅は天幅で0.65～0.75ｍを測る。深さは0.05ｍと浅く、著しい削平を受けているものと想定できる。一部東へ派生する部分が



第39図　Ⅱ区　溝状遺構　断面図

認められるが、後述する性格不明遺構により削平され、その先は不明である。また、ＳＤ03との関係も不明である。出土遺物は第40図364・365である。364は須恵器坏蓋である。365は製塩土器片である。これらから見るとＳＤ03と近接した時期のものと想定できそうであるが、確証は得られない。

ＳＤ09（第4・25図）

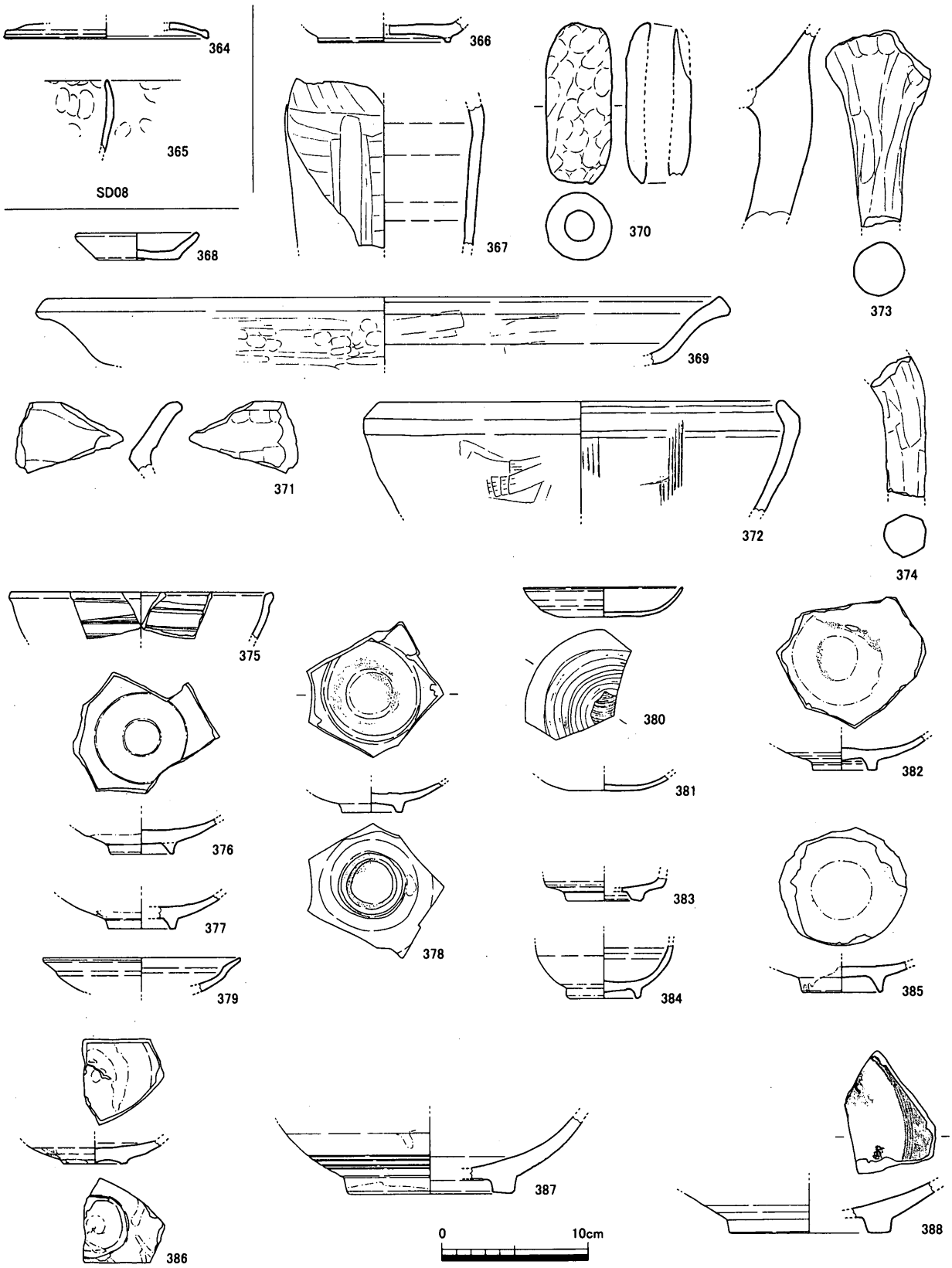
出土遺物がほとんど認められず、詳細な報告が行えないが、調査区西端中央付近で検出した遺構である。検出長は約7ｍ、幅は最大約1ｍを測るが、東へ延伸させると同遺構の軸と同じ方向の溝状遺構が僅かに遺存しており、これを含めると約17ｍの検出長となる。ただし、基盤整備が実施されるまで機能していた農道による撹乱で大きく分断されていることから、詳細は不明である。また、ＳＤ09と同じ軸に乗る遺構としてＩ区ＳＸ05が挙げられる。同一遺構として考えた場合、著しい削平により相互の距離が23ｍにわたって分断されており、その連続性を想定するには若干問題があるが、ほぼ同一軸線上に位置していることから可能性のみ指摘しておく。ＳＤ09からは形状が把握できる遺物の出土は見られない。遺構の切り合いから、ＳＤ08に後出する遺構であることがわかる。

ＳＤ10（第39～41・44図）

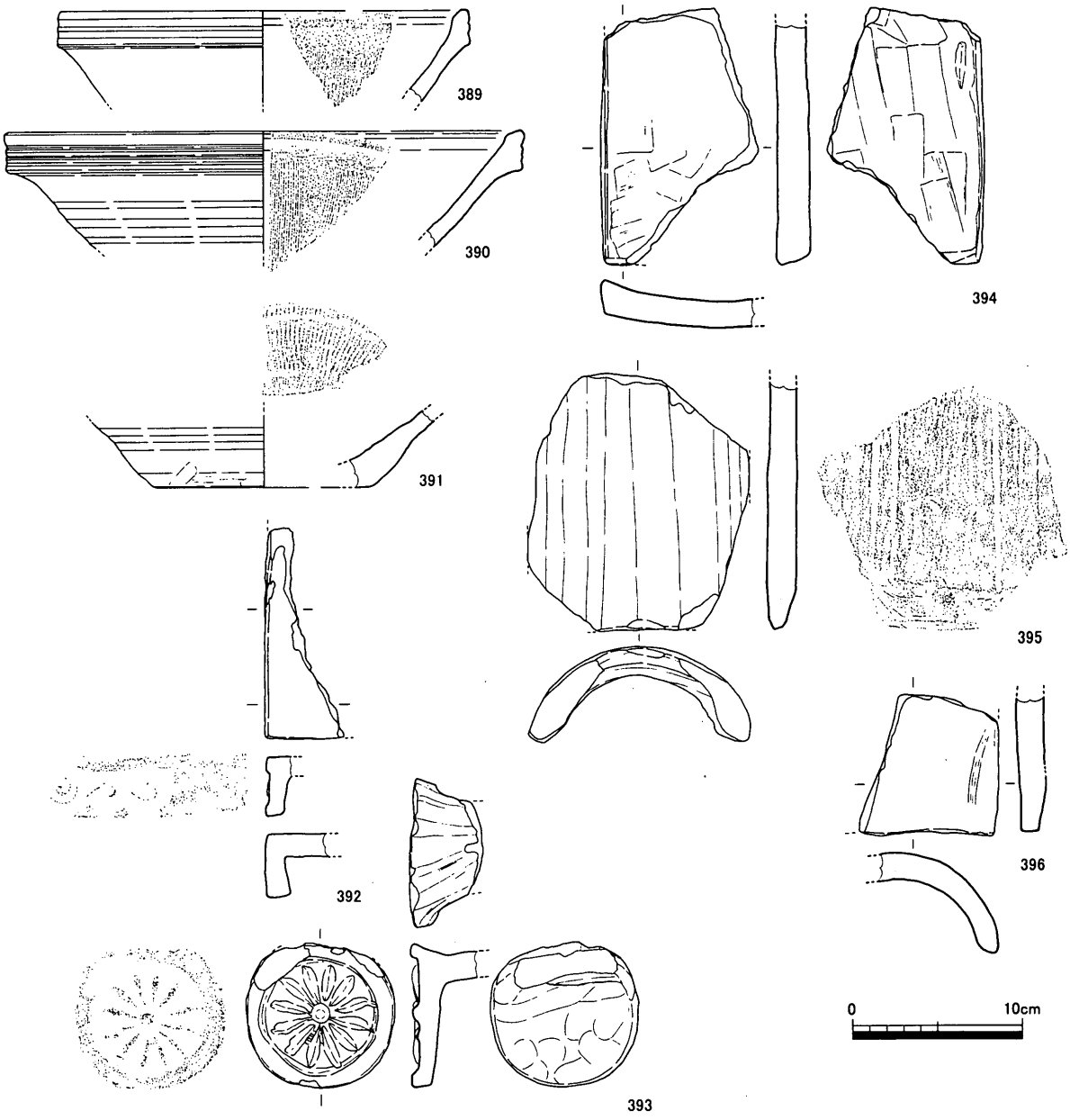
調査区西南隅付近で検出した遺構である。やや蛇行しているものの、検出長は約13ｍを測り、検出幅は最大約1.20ｍを測る。断面形状は浅い椀状を呈し、深さは約0.30ｍ程度である。北端を基盤整備前の農道により削平されており、どのように続いていたかは不明であるが、南から北へ流下する溝状遺構である。概ね基盤整備前農道と軸を同じくする方向で北へ流下していたものと想定する。検出した部位の北端付近でＳＸ12が取り付く。当遺構の詳細は後述するが、明瞭な切り合いが把握できなかったため、誤認の可能性はあるが、底部のレベルが連結部分で概ねそろうことから、共時性のある遺構であると想定しておく。

第40・41図に出土遺物を挙げる。遺物は比較的多量出土しているが、調査の精度が粗く、詳細な出土位置についての記録が取れていない。366は須恵器高台付坏である。断面方形の高台が短く直立して坏底部に取り付く。367は須恵器壷体部である。破片資料であることから詳細不明であるが、外面を回転ヘラ削りで調整し、その後、底部付近から肩部へ向けて一条の凹線状のくぼみを付ける。368は土師質土器小皿である。口縁端部に黒色付着物が認められ、灯明皿として機能していたもの

と想定できる。369 は土師質土器土鍋である。370 は管状土錘である。371 は土師質土器甕である。372 は土師質土器擂鉢である。373・374 は土師質土器土釜の脚部である。375・387・388 は肥前系陶器刷毛目鉢である。18 世紀後半頃のものと想定する。388 は内面に離砂の付着が認められる。376～379 は肥前系磁器皿である。いずれも内面見込みに蛇の目釉ハギが認められ、底部外面は無釉

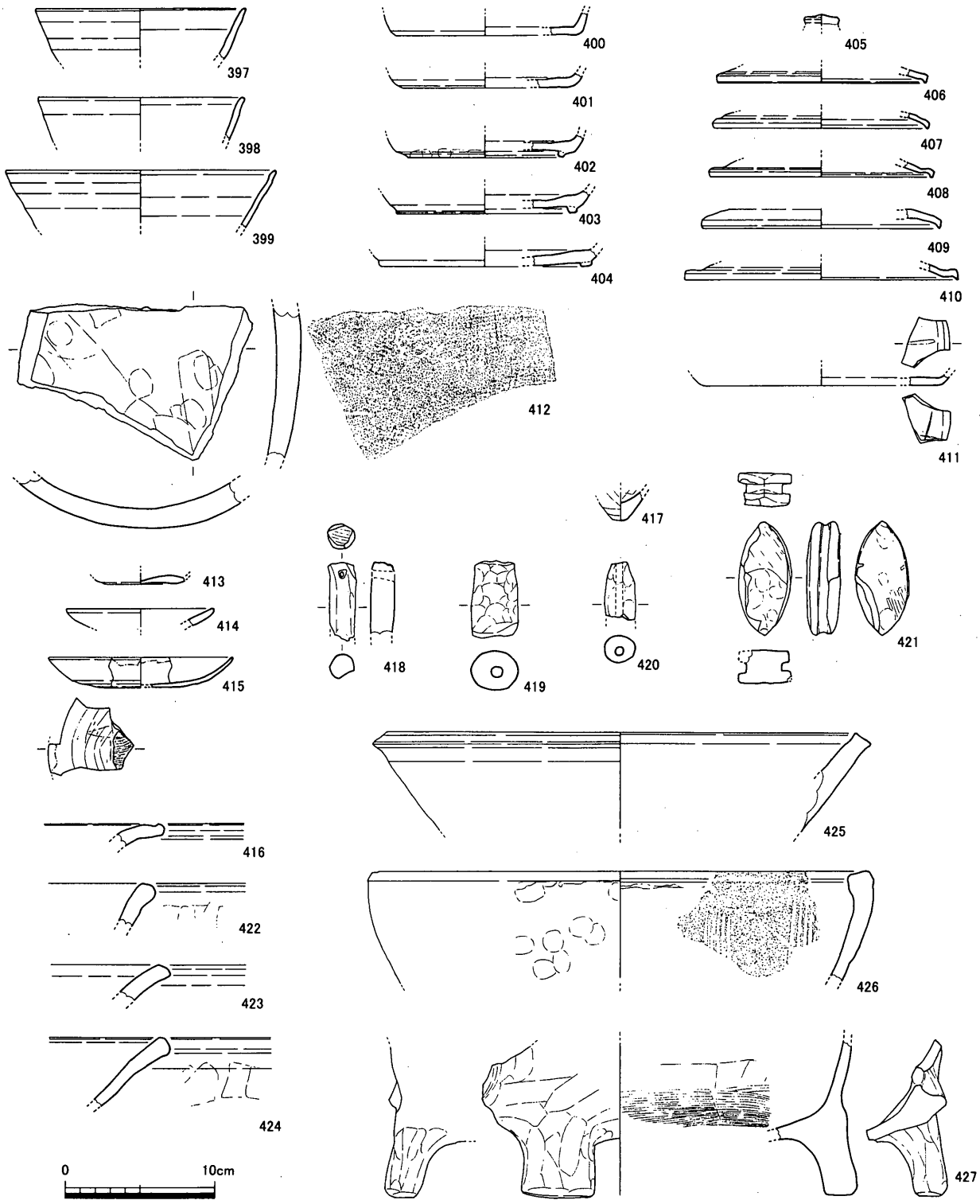


第 40 図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（1）



第41図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（2）

である。17世紀後半頃のものと想定する。378は底部内外面に離砂の付着が認められる。380・381は備前系陶器灯明皿である。380は底部を回転糸切りにより切り離した後、回転ヘラ削りによって整形した痕跡が認められる。18世紀後半頃のものと想定する。382・386は肥前系陶器皿である。17世紀中葉頃のものと想定する。382は内面見込み部分に蛇の目釉ハギが認められるほか、胎土目積の痕跡が認められる。386は砂目皿である。383は京・信楽系陶器袋物の底部である。蛇の目高台を有する。384は肥前系陶器油壺である。18世紀後半頃のものと想定する。385は中国産磁器の椀と想定できる。第41図389～391は備前系陶器擂鉢である。18世紀代のものと想定する。第41図392～396は瓦である。392は軒平瓦、393は菊丸瓦、394は平瓦、395・396は丸瓦である。第44図447～450は角礫凝灰岩製の五輪塔である。447は地輪、448・449は風輪、450は水輪である。遺跡南方の弥谷山産出の石材を用いたものと想定できる。これらの出土遺物のうち、搬入陶磁器の年代について見ると17世紀中葉～18世紀後半頃までと概ね1世紀の隔たりが認められる。遺構の時期については、新しい要素である18世紀後半頃の遺物の年代を当てておく。



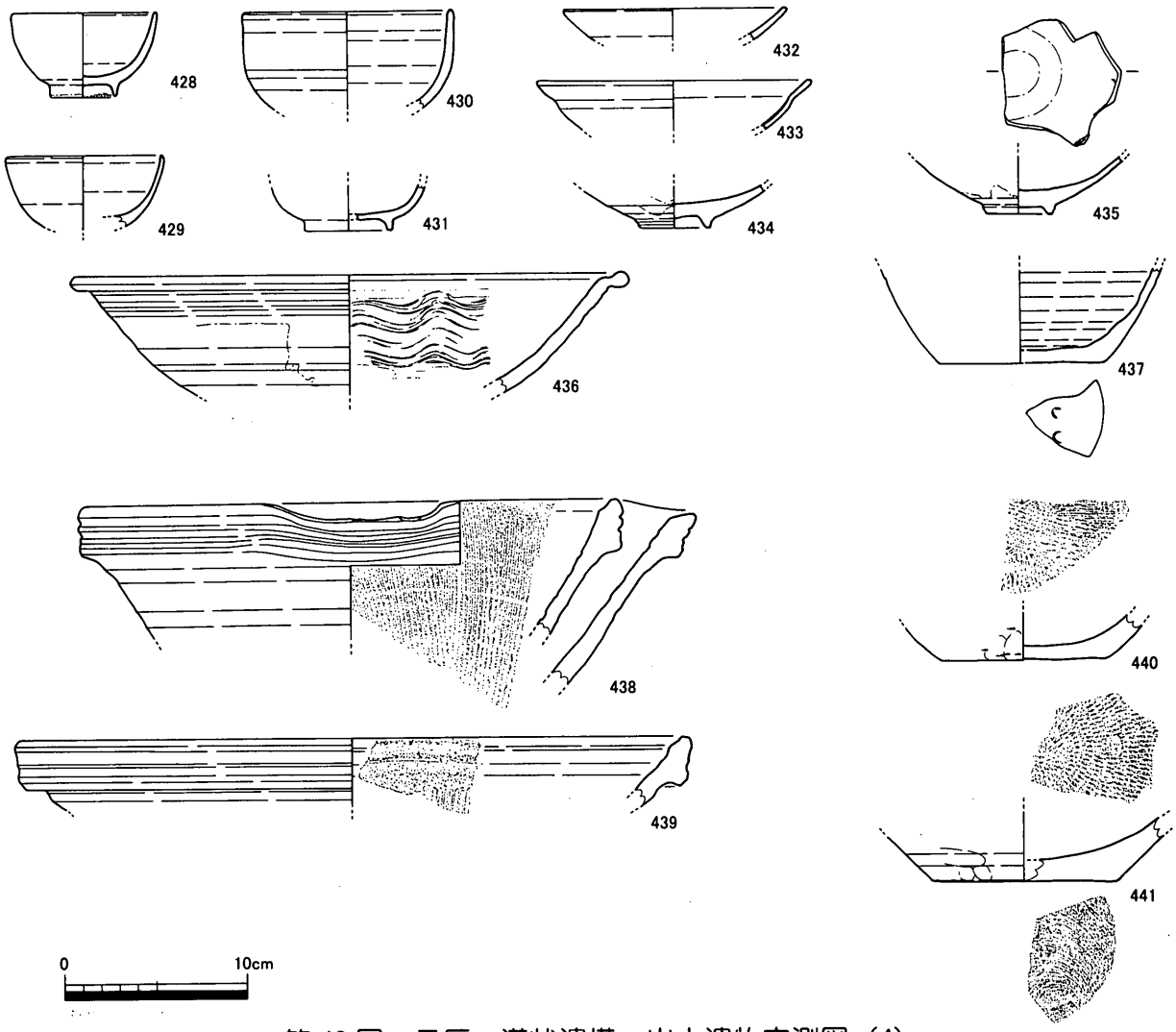
第42図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（3）

ＳＤ12（第39・42・43図）

調査区南端で検出した遺構である。検出長は25.50ｍ、幅約１ｍを測る。また、断面形状は浅い皿状ないし扁平な逆台形状を呈し、深さは0.15～0.20ｍを測る。基盤整備前農道により一部削平されて中断する。また、西側でＳＤ10をはじめ、ＳＰ101・122・125、ＳＸ13・溜池状遺構等による削平を受ける。

出土遺物は第42・43図に掲載した。397～412は須恵器である。いずれも小片を主体とし、詳細な器形は不明である。397～399は坏に分類したものの体部から口縁部の破片である。400・401は

無台の坏に分類した。底部は平底を呈し、体部はやや直立する器形が想定できる。402～404は高台付坏である。403は直立気味で断面逆台形状の高台が取り付くが、402・404はやや矮小化した高台が取り付く。405は蓋の摘み部である。406～410は坏蓋である。411は皿に分類した。412は甕体部片である。413・414は土師質土器小皿である。415は備前系陶器灯明皿である。ＳＤ10に類似資料が認められる。416は土師器甕口縁部である。417は製塩土器底部片である。418～421は土錘である。418は棒状、419・420は管状、421は有溝である。422～424は土師質土器土鍋、425は鉢、426は擂鉢、427は火鉢にそれぞれ分類した。428・429は肥前系磁器椀である。18世紀後半頃のものと想定する。430は肥前系陶器呉器手椀である。431は肥前系陶器刷毛目椀と想定する。18世紀前半のものか。432・435は肥前系磁器皿、433は肥前系陶器銅緑釉皿、434は肥前系陶器皿である。内面見込みに蛇の目釉ハギを認める。17世紀中葉頃のものと想定する。436は肥前系陶器刷毛目鉢である。18世紀後半頃のものか。437は備前系陶器壷と想定する。底部に円形スタンプ文を認める。438・439は備前系陶器擂鉢である。前者は18世紀後半頃、後者は18世紀前半頃のものである。440は堺・明石系陶器の擂鉢である。18世紀後半以降のものである。441は陶器擂鉢である。底部に回転糸切りの痕跡を認める。出土遺物を見る限りでは、8世紀中葉～後半頃の遺物と17世紀中葉以降のものが認められる。詳細な出土位置を記録していないので定かではないが、17世紀中葉以降のものについては当遺構と重複するＳＤ10出土遺物の様相と同一であることから、重複部分の遺物取り

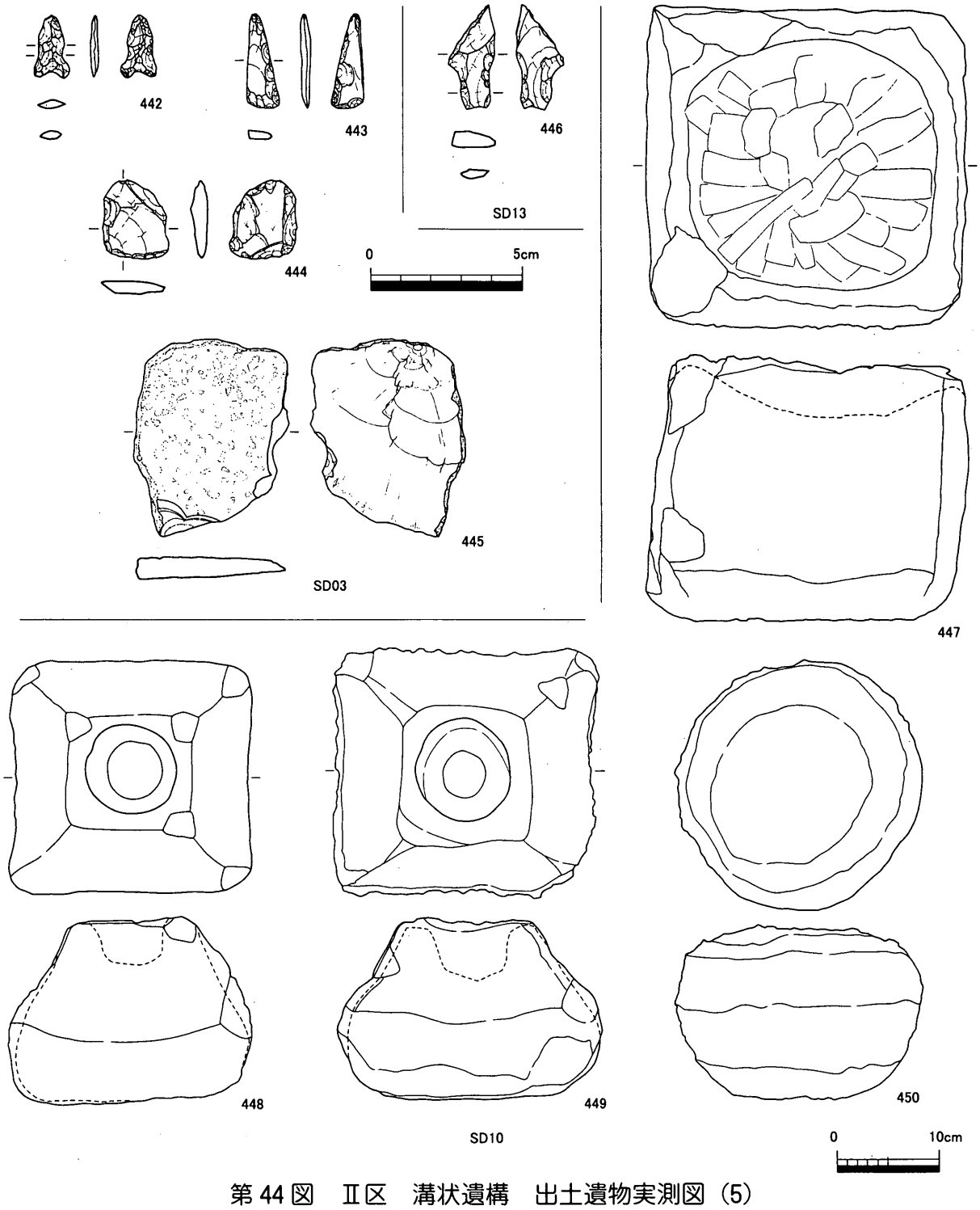


第43図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（4）

上げの際、十分に分離しきれなかったものが混入している可能性がある。また、遺構の主軸方位がＳＤ 09 や、Ⅰ区の古代に帰属すると想定できる遺構のものと近似することから、ＳＤ 12 の本来の時期は出土遺物から８世紀中葉～後半にかけてのものであると想定しておく。

ＳＤ 13（第 39・44 図）

調査区中央付近で検出した遺構である。検出長約４ｍ、幅最大 0.60 ｍを測る。深さは約 0.15 ｍであるが、先端部は浅くなる。後述する溜池状遺構のコーナー部に取り付き、本来的にはこの溜池からの取水用に掘削された可能性が想定できるが、定かではない。出土遺物は第 44 図 446 の二次加工



第 44 図　Ⅱ区　溝状遺構　出土遺物実測図（5）

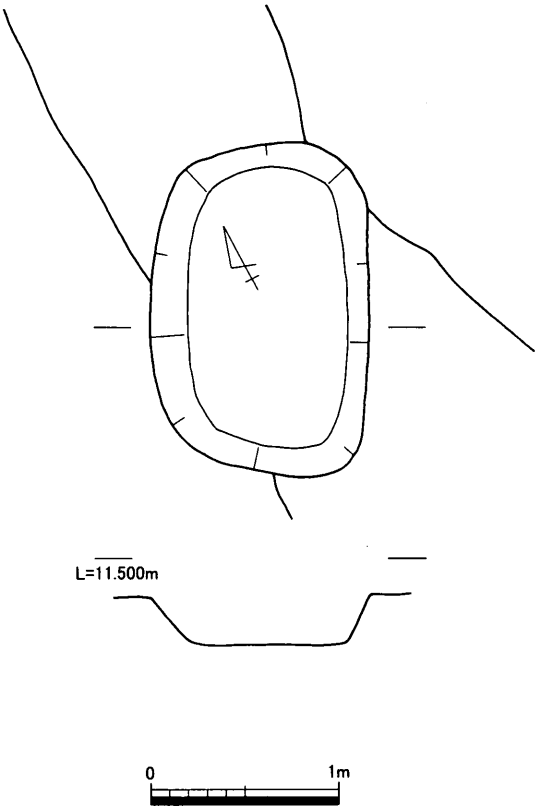
ある剥片のみである。左側縁上端に原礫面を留め、両側縁下端の表裏に二次加工が施される。石錐の未製品の可能性が想定できるが、未だ機能部の作出を意図する加工が明瞭でないため、当該器種にとどめておく。

性格不明遺構

9基を検出した。土坑としたものとの差はあまりないが、原則、調査時の遺構名を踏襲する。調査区中央付近を除き、ほぼ全面に散漫に分布する。調査区西半中央付近において4基重複して検出したのを含め、やや西半部に集中する傾向が見られる。

ＳＸ07（第45・48図）

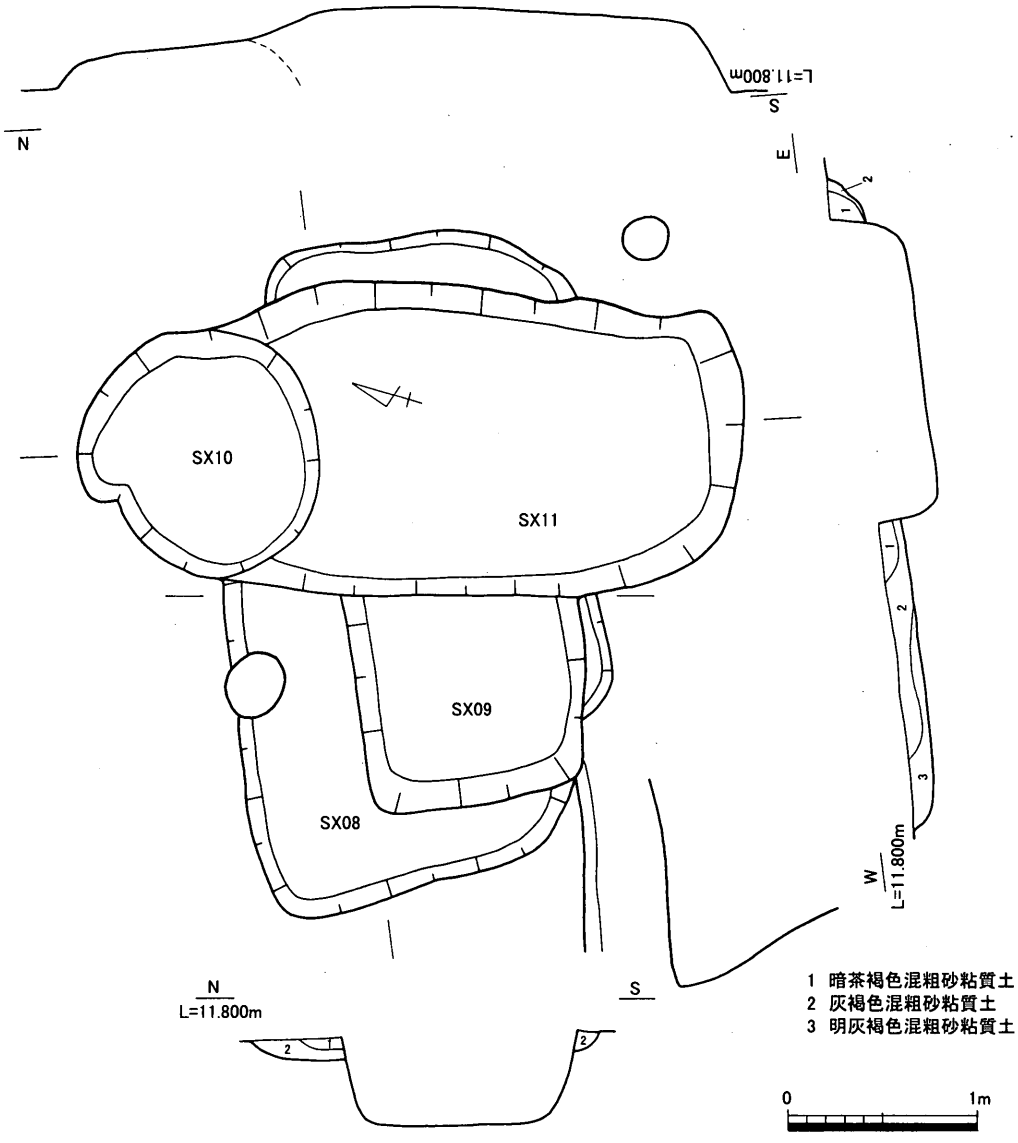
調査区北西隅で検出した遺構である。長辺約1.70ｍ、短辺約1.15ｍのやや不整な隅丸の長方形を呈する。断面形状はやや不整な台形を呈し、深さは約0.26ｍを測る。ＳＤ03を切っており、同遺構に後出する遺構である。埋土は淡茶灰色粗砂混じり粘質土の単層である。出土遺物は第48図451・452である。451は須恵器坏蓋である。452は土師器坏である。精製された胎土を用いたものである。やや摩滅が進むことから図示し得なかったが、底部外面は手持ちヘラ削りにより整形される。これらの土器は、下位にあるＳＤ03から巻き上げられたものと想定される。ほかに形状のわかる遺物が認められないことから、遺構の所属時期は不明である。



第45図 Ⅱ区 性格不明遺構 平・断面図(1)

ＳＸ08（第46・48図）

調査区西半中央付近で検出した遺構である。当遺構を含め、ＳＸ09～11の4基が著しく重複しており、各遺構の単位が把握し難いが、最下面の遺構である。後世の遺構による削平が著しいため詳細なプランは不明であるが、平面形は長辺約3.40ｍ、短辺約1.80ｍのやや不整形な長方形を呈し、深さは最深部で約0.18ｍを測ると想定する。埋土は暗茶褐色及び灰褐色の粗砂混じり粘質土を主体とする。埋土中に炭化物小片及び焼土の小塊を若干含むほか、焼けた礫を若干含む。床面及び壁体の被熱は確認できなかった。出土遺物は小片を主体に若干出土している。第48図に器形がある程度把握できるものについて掲載した。453～456は須恵器坏である。453は口縁部の小片であることから詳細は不明である。454～456は高台付坏の底部である。454は底径がやや小さいが、455・456は概ね同一サイズである。高台の断面形状は三者三様であるが、比較的長いものが踏ん張り気味に取り付く。457は土師器甕に分類した。外観は口縁部から体部へやや湾曲しながら下がり、頸部がやや不明瞭であるが、内部では頸部が明瞭に屈曲し稜線をなす。458は土師器鉢に分類したが、かなり厚手の器壁を持つ。製塩土器の可能性もある。これらの出土遺物から、同遺構は概ね7世紀末～8世紀初頭頃のものと想定する。



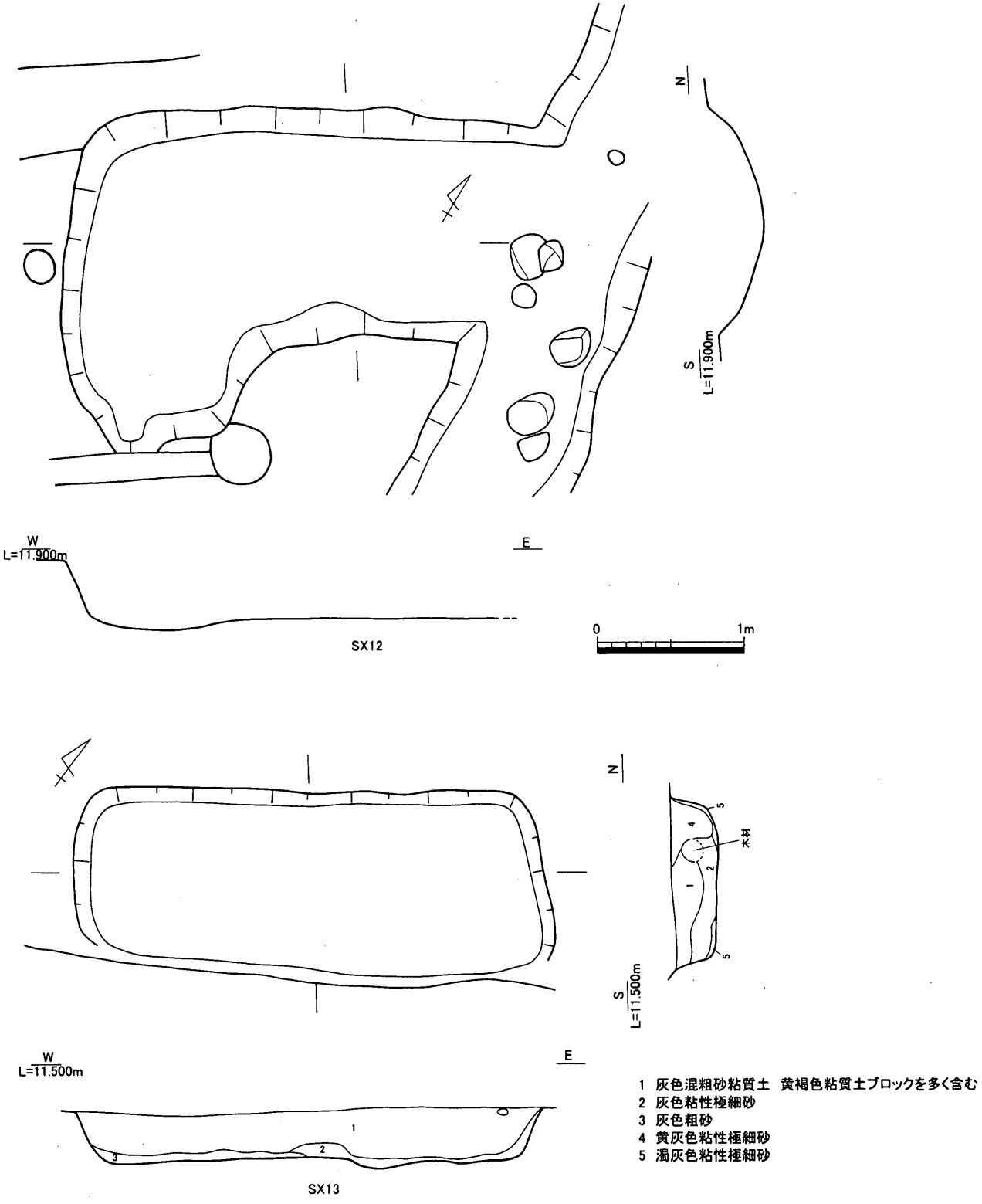
第46図　Ⅱ区　性格不明遺構　平・断面図(2)

ＳＸ09（第46・48図）

ＳＸ08と重複して検出した遺構である。東半分をＳＸ11により削平されており、詳細な規模は不明であるが、長辺約２ｍ前後、短辺約1.20ｍの長方形を呈していたと想定できる。断面形状は短軸方向でほぼ箱型を呈する。調査時に撹乱の認識で掘削したため詳細な埋土の記録が行なえていないが、茶褐色粗砂混じり粘質土を上面で確認している。出土遺物は第48図459・460である。459は須恵器高台付坏の底部、460はイイダコ壷片である。ほかに器形の判別できるものがないため詳細は不明であるが、ＳＸ08に後出すること、埋土の色調がＳＸ08と異なること、459の高台がやや長めで踏ん張った形状を取ることから出土遺物はＳＸ08から巻き上がったものと想定する。遺構の時期は切り合いからＳＸ08より新しいことが言えるのみである。

ＳＸ10（第46・48図）

ＳＸ11の北側を削平して掘削された遺構である。直径約1.30ｍの不整形な円形を呈し、断面形状は深い皿状を呈する。深さは最深部で約0.20ｍを測る。調査時に撹乱の認識で掘削したため図化していないが、この遺構の底部に厚さ0.03ｍ程の漆喰が貼り付けてあった。この漆喰の上面に薄い板が数枚折り重なって検出された。出土遺物は第48図461の磁器のみである。器種は蓋に分類してい

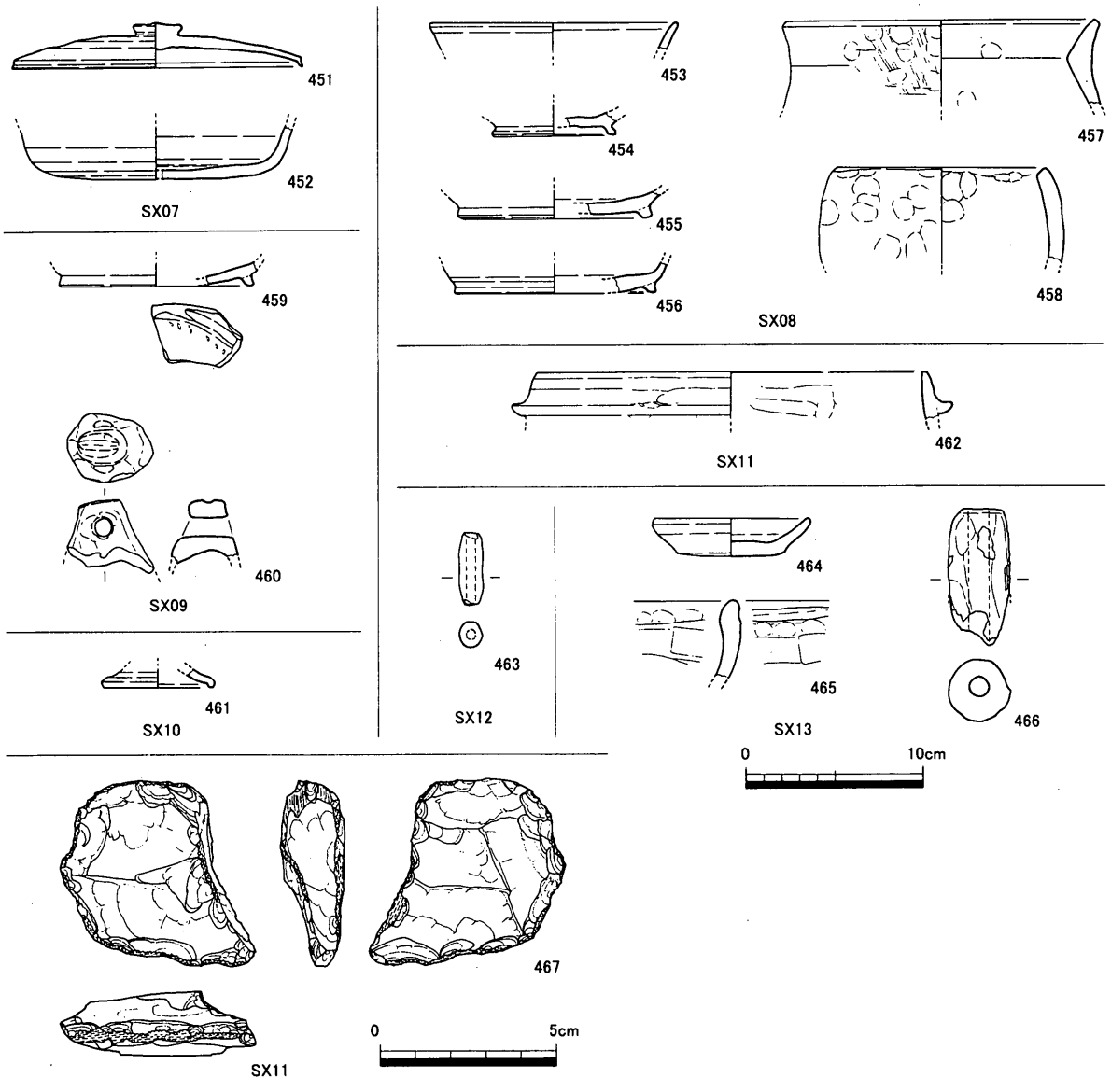


第47図　Ⅱ区　性格不明遺構　平・断面図(3)

るが、詳細は不明である。近世以降のものの可能性が高い。

ＳＸ 11（第 46・48 図）

ＳＸ 08・09 の東側を削平して掘削された遺構である。北側を削平されていることから詳細は不明であるが、長軸約 2.80 m前後、短軸約 1.50 mの隅丸の長方形を呈していたと想定できる。断面形状は短軸方向で概ね箱状を呈し、深さは約 0.30 mである。調査時に撹乱の認識で掘削したため詳細な記録を行なっていないが、埋土は概ねＳＸ 09 と類似した茶褐色粗砂混じり粘質土である。出土遺物は462 の土師質土器土釜口縁部及び467 のサヌカイト製火打石である。462 は小片であることから詳細不明であるものの、口縁端部がやや長く直立する形状であることから片桐編年のⅢ - ③期頃（片桐　1992）のものと想定する。467 は厚さ 2 cm 程の素材を用い、そのほぼ全周を使用する。素材各



第 48 図　Ⅱ区　性格不明遺構　出土遺物実測図

部位に形成された比較的鋭角な稜線は、ほぼ全て使用に伴う敲打痕に覆われる。出土遺物が少なく、この２点で時期を決定するのは危険であるが、462 の時期から 14 世紀後半以降の遺構である可能性を想定しておく。

ＳＸ 12（第 47・48 図）

調査区西半中央南寄りで検出した遺構である。ＳＤ 10 に対しＬ字状に付帯した状態で検出した。本来的にＳＤ 10 に伴う遺構かどうかは定かでないものの、底面のレベルが連結部において概ね揃うことからＳＤ 10 の付帯施設の可能性を想定しておく。Ｌ字状の先端部分は若干窪んでおり、水溜状になっていた可能性がある。当初撹乱の可能性を想定していたことから、詳細な記録が取れていない。形状の明らかな出土遺物は第 48 図 463 の管状土錘のみである。

ＳＸ 13（第 47・48 図）

調査区南半西寄りで検出した遺構である。長辺約 3.20 m、短辺約 1.20 mの長方形を呈する。断面形状は箱型を呈し、深さは約 0.40 mを測る。埋土は黄褐色粘質土ブロックを多く含む灰色粗砂混じり粘質土を主体とし、底部に灰色ないし黄灰色の粘性極細砂の堆積を認める。埋土中層位に長さ約 0.60 m、太さ約 0.10 mの木が遺構主軸と同じ方向に埋没しているのを確認したが、意図は不明である。出土遺物は第 48 図 464 ～ 466 である。464 は土師質土器小皿である。465 は土師質土器鉢である。466 は土師質の管状土錘である。所属時期は不明である。

溜池状遺構（第 49 ～ 51 図）

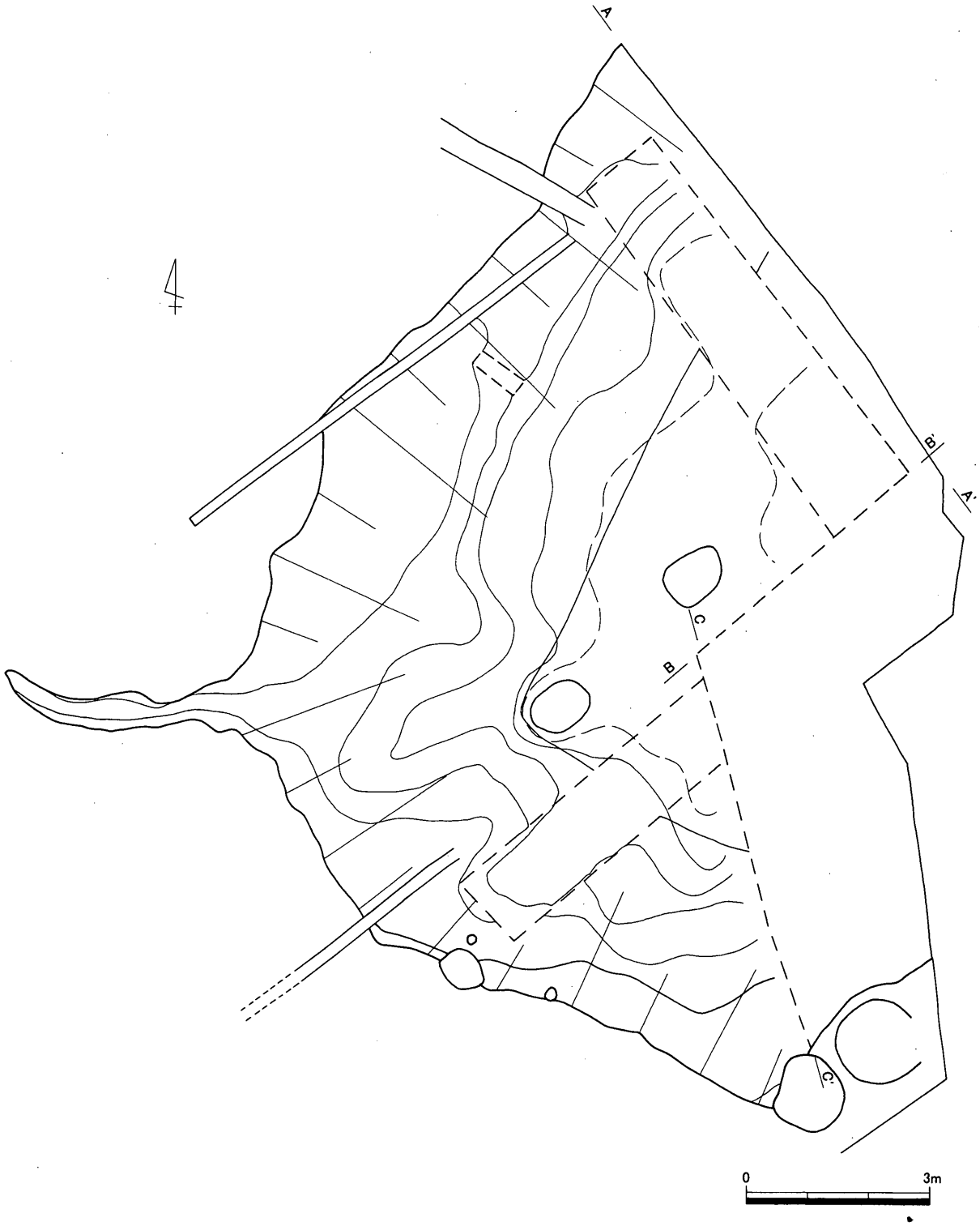
調査区南東隅で検出した遺構である。北及び東が調査区外へ延びるため、遺構の詳細は規模については不明である。ただし、遺構の南東にコーナー部と見られるクランクが認められるほか、南西隅においてもＳＤ 13 の派生が認められるものの、同部位においてコーナー部が見られる。また、遺構内部の等高線を見てもコーナー部を形成する等高線の折れが認められる。このことから、南辺が約 4.50 m、西辺で約５m以上を測る長方形の平面プランを想定しておく。深さは最深部で約 1.10 m を測るが、上面が基盤整備に伴い削平されていることから本来的な深さはもう少しあったと想定できる。基盤整備に伴う周辺地形の削平に伴い旧地形の形状が明らかでないことから、断言はできないものの、調査区内の地形が比較的平坦であることから、この溜池は谷を堰き止めて形成されたものではなく、平坦地に掘り込まれた天水溜め状のものであった可能性を想定したい。埋土は⑦層の灰黄色粘質土を主とする灰色系の粘質土である。基本的に滞水する環境であったと見られるが、南岸の一部において粘性細砂や粗砂混じり粘性細砂の堆積が認められる。周辺から水が流れ込んだ際に堆積したものか。

出土遺物は第 51 図に掲載した。468 は須恵器坏蓋である。頂部は平坦で、端部外面は明瞭な稜線を形成するものの、内面では弱い折り返しとなっている。469 ～ 472 は土師質土器土鍋の口縁部である。やや直立気味のもの・外側へ開く形状を取るもの等若干差が認められる。473・474 は土師質土器土釜の口縁部である。共に内湾気味の口縁部を持つ。口縁端部は 473 では面を持たせ、474 ではやや丸く仕上げる。475 ～ 477 は土釜の脚部である。478 は肥前系陶器皿である。内面見込み部に砂目積みの痕跡を認める。遺物は上層（470・471・478）・中層（472・474・475）・中層～下層（476）・ＳＤ 13 連結部（468・469・473）からの出土である。最下層からの遺物の出土は時期・器形の判別できるものが認められない。以上のことから最終埋没を 478 の時期に置くとすると、概ね 17 世紀中

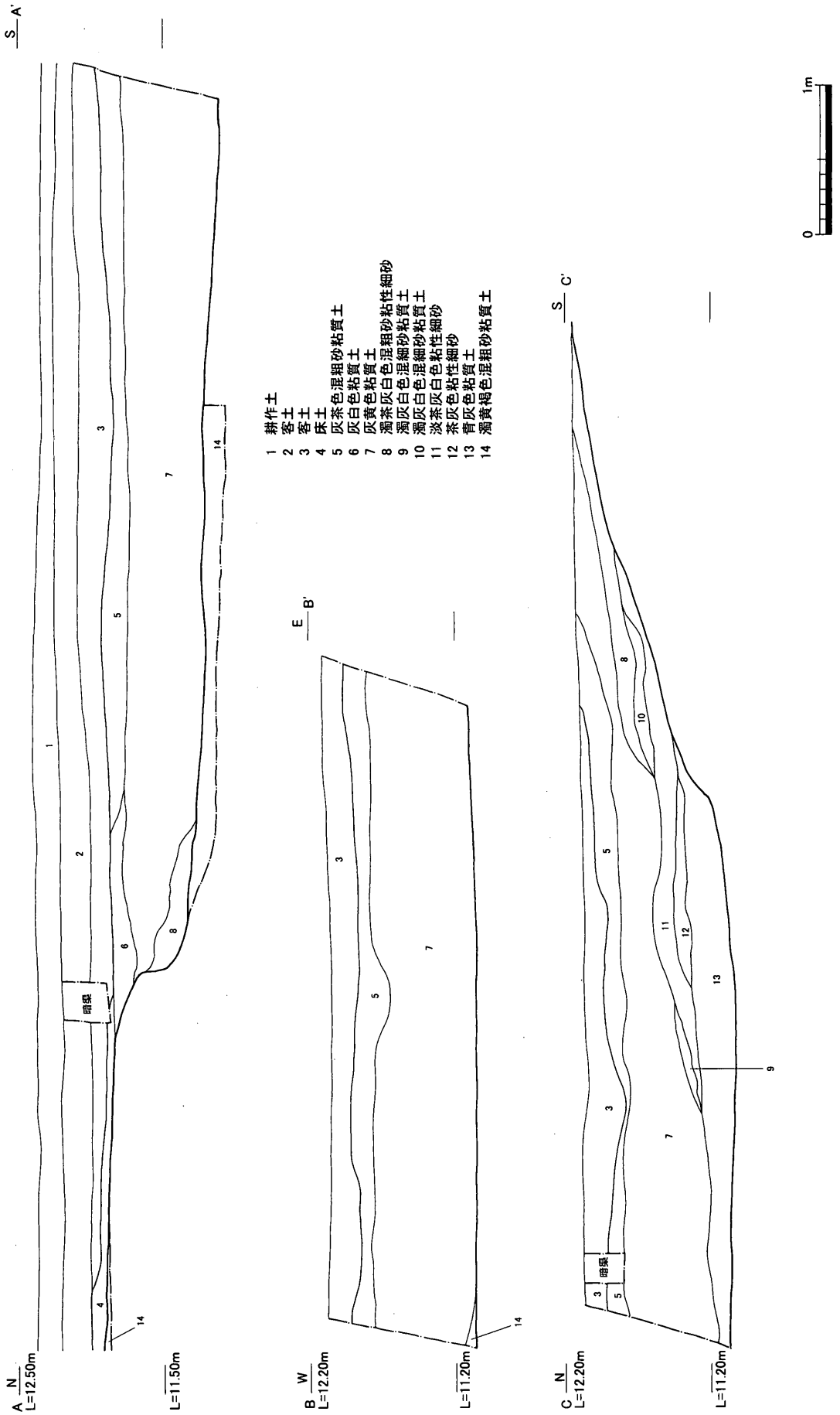
葉頃にはほぼ埋没していたものと想定できる。掘削時期については明らかにしがたいが、中層において土釜が比較的目立つことから考えると、少なくとも13世紀後半頃には掘削されていた可能性が想定できる。

包含層（第52～58図）

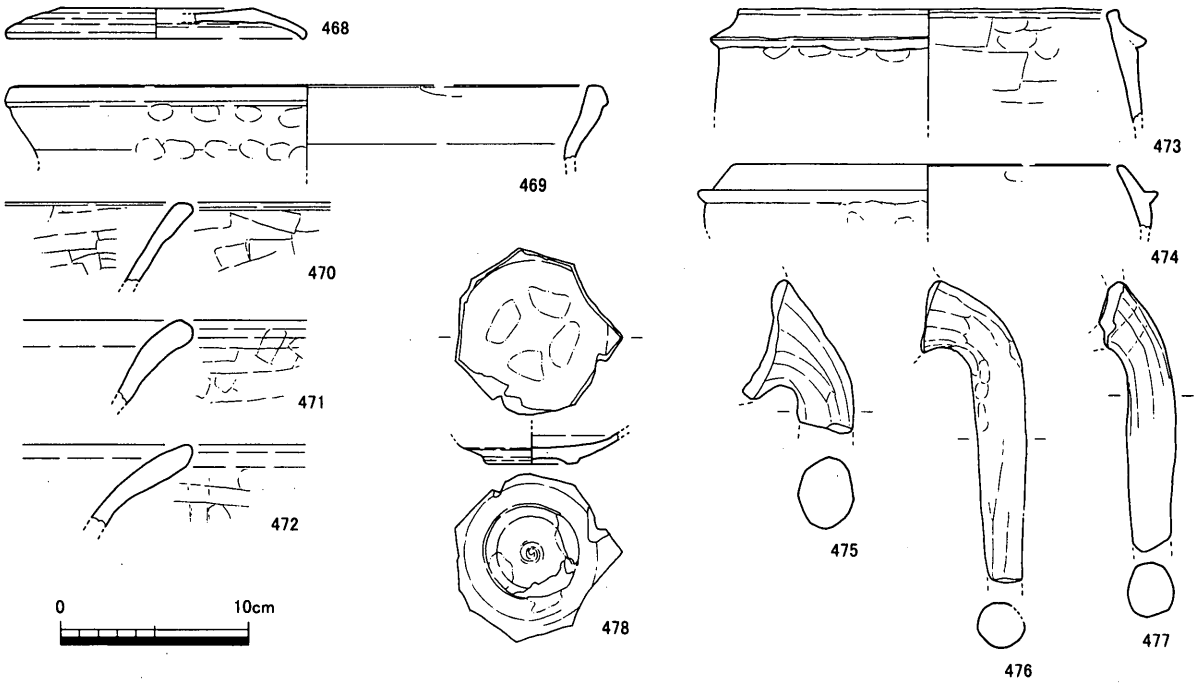
Ⅱ区の土層序で触れたとおり、当調査区においても遺構面のほぼ直上まで基盤整備に伴う削平が



第49図　Ⅱ区　溜池状遺構　平面図



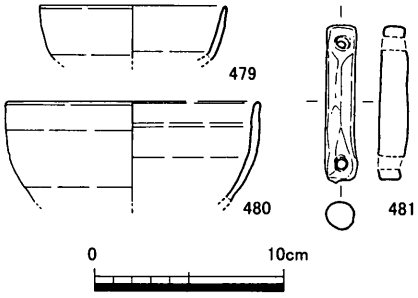
第50図　Ⅱ区　溜池状遺構　土層図



第51図　Ⅱ区　溜池状遺構　出土遺物実測図

及んでおり、本来形成されていた包含層は極わずかに遺存しているに過ぎない。以下、報告する遺物の大半は機械掘削・壁面精査・平面精査の際に得られたものである。

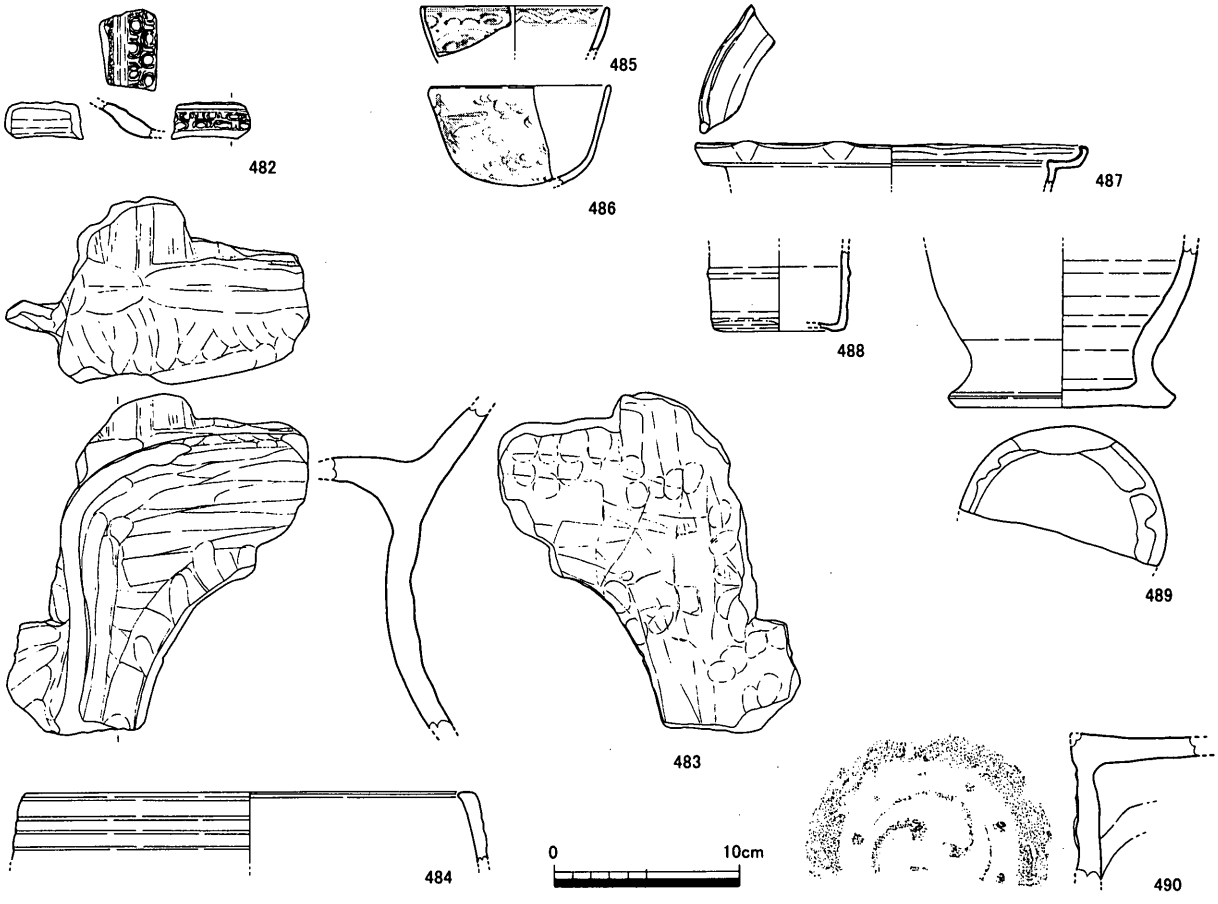
第52図は西壁側溝掘削及び精査時に出土した遺物である。調査時の記録から、ＳＤ03内の出土と見られるが、詳細不明であることからここに掲載した。479･480は須恵器坏である。479は底部を欠損し、詳細な器形は不明であるが、体部から口縁部にかけてやや直立するものである。480も底部を欠損することから詳細不明であるが、かなり深い器形を呈する。台付椀の可能性もある。481は土師質の棒状土錘である。



第52図 Ⅱ区 包含層出土遺物実測図（1）

第53図は北壁側溝掘削時及び精査中に出土した遺物である。調査時の記録から、北壁とＳＤ03の接する部分から基盤整備前農道による撹乱を受けた範囲で出土した遺物と見られる。482は瓦器香炉片に分類した。小片のため、詳細不明である。483は土師質カマドの炊き口付近の破片である。炊き口左隅部分のものと想定する。484は瓦器羽釜の口縁部である。485・486は肥前系磁器端反椀である。486には漆継ぎの痕跡が認められる。共に19世紀頃のものと想定する。487は施釉陶器鉢である。18世紀後半～19世紀前半頃のものと想定する。488は施釉陶器瓶である。近世末～近代のものか。489は信楽系陶器の袋物である。490は軒丸瓦瓦当である。

第54図は機械掘削時出土遺物を中心に掲載した。491は須恵器坏である。底部を欠損するため詳細不明であるが、かなり深い器形となる。体部から口縁部にかけてわずかに外反する。492は高台付坏の底部である。やや踏ん張った形状の高台が底部と体部の境界付近に取り付く。493は小片のため詳細不明であるが、須恵器の甕口縁部に分類した。494は備前系擂鉢の底部である。495は肥前

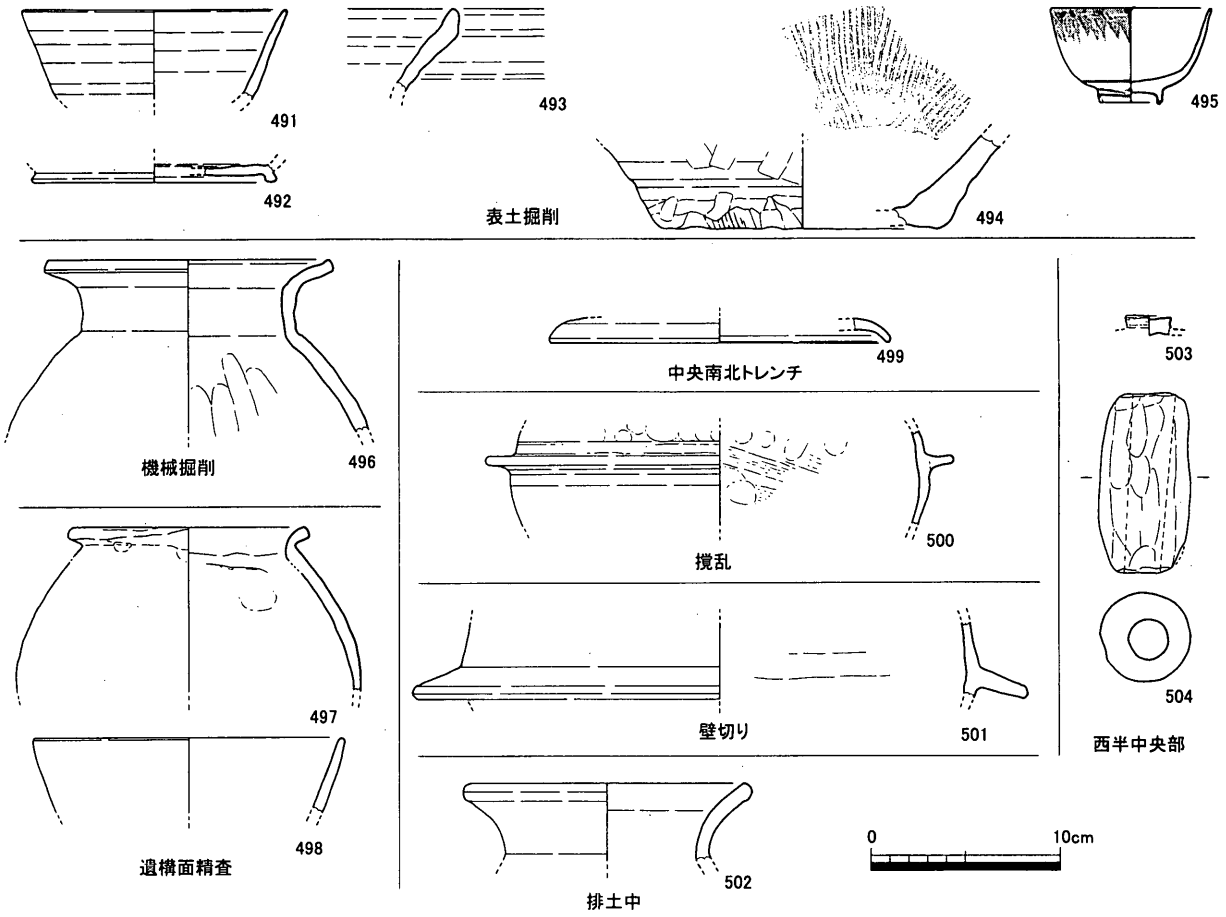


第53図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（2）

系磁器椀である。496・497は弥生土器である。496は壷、497は甕である。498は須恵器坏である。499は試掘トレンチ跡から出土した須恵器坏蓋である。500は撹乱出土の土師質土器羽釜、501は壁面精査時出土の瓦質土器羽釜である。502は排土中から回収した弥生土器甕である。503・504はⅡ区中央のＳＤ09・14付近に堆積していた包含層出土遺物である。503は須恵器坏蓋の摘み・504は土師質の管状土錘である。

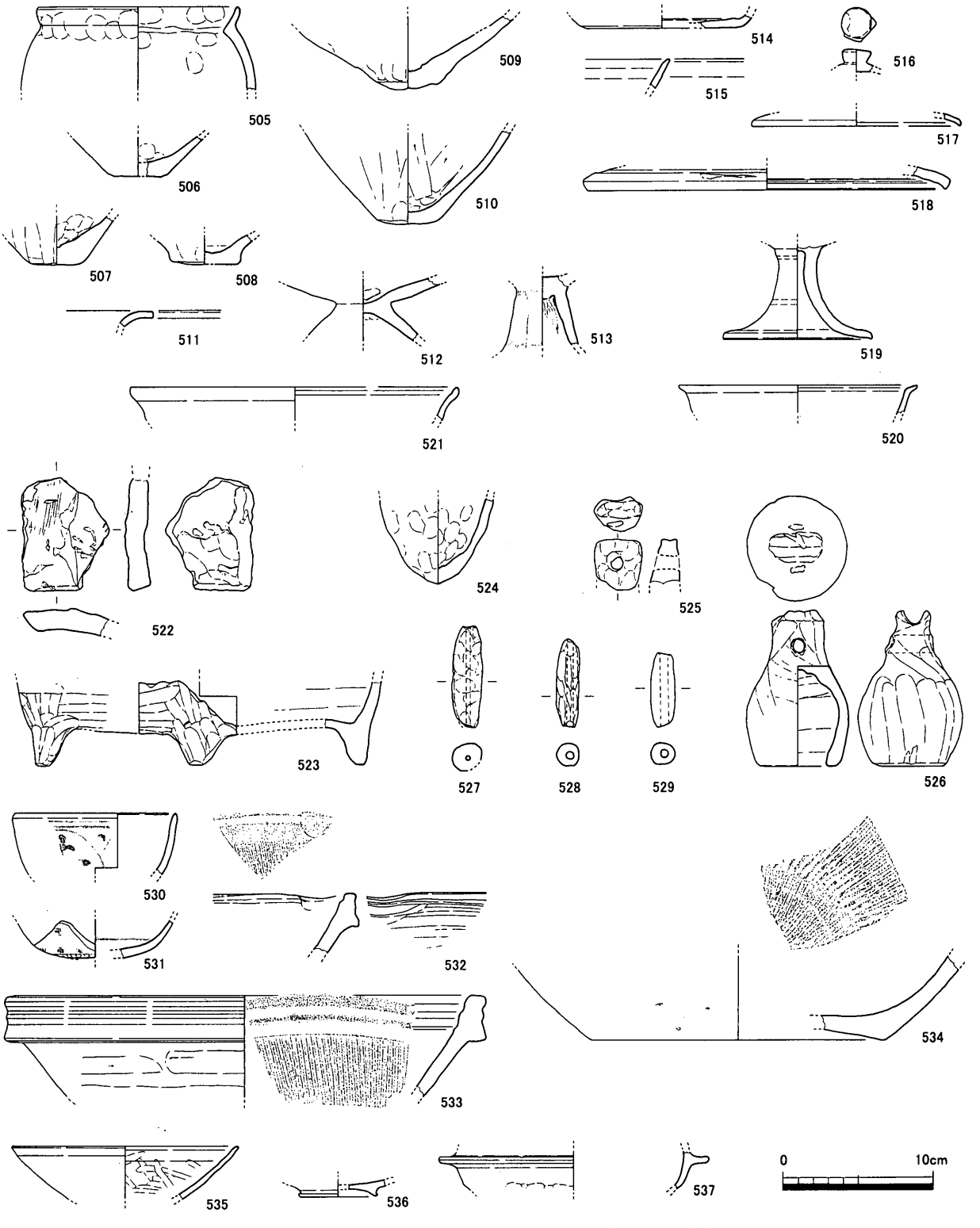
第55図は中央やや北寄りに堆積していた包含層出土の遺物である。505～513は弥生土器である。505～510は甕に分類したが、509は壷の底部の可能性がある。511は壷口縁部に分類した。512・513は高坏に分類した。514～520は須恵器である。小片が多いため詳細不明であるが、514・515は坏に、516～518は蓋に分類した。また、519は高坏脚部に、520は鉢にそれぞれ分類した。521は土師器皿である。口縁部を内側に軽く折り込み、端部を丸く仕上げる。比較的精製した胎土が用いられる。522は土師質カマド片、523は土師質土器火鉢に分類した。火鉢は本来三脚と想定できるが、図の展開上四脚のものと同じ展開になっていることを断っておく。524は製塩土器底部である。ＳＤ03等から出土したものと比べるとかなり厚い器壁を持つ。525～529は土製漁撈具である。525・526はイイダコ壷である。526はほぼ完形であるが、ＳＤ03から出土したものと比べると体部がかなり丸みを帯びる形状となる。527～529は管状土錘である。530・531は肥前系磁器椀である。532～534は堺・明石系擂鉢である。いずれも18世紀後半頃のものか。535は黒色土器椀、536は瓦器椀、537は瓦質土器羽釜にそれぞれ分類した。

第56図は平面精査等に伴って出土した石器を掲載した。全てサヌカイト製である。538～540は



第54図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（3）

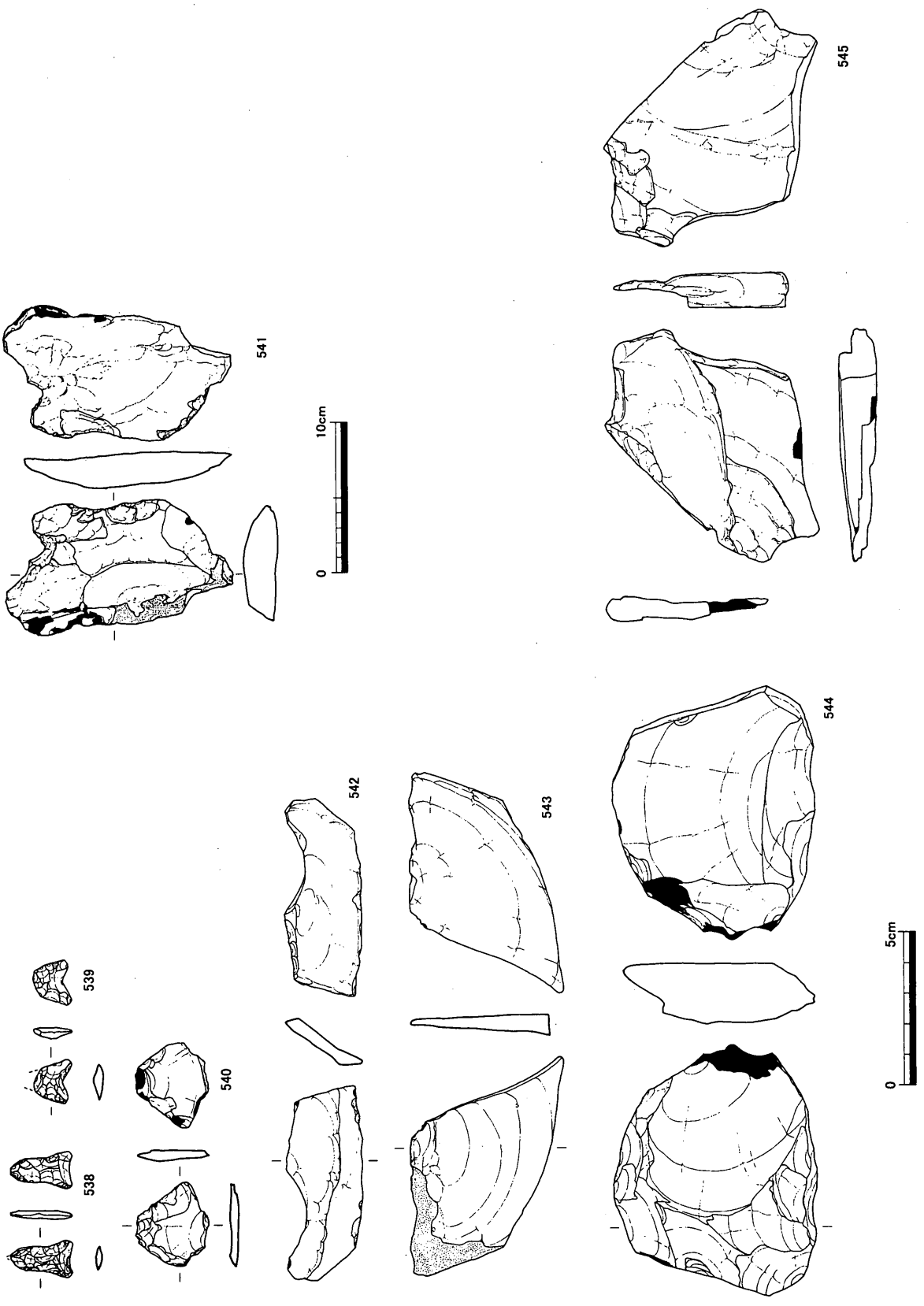
石鏃に分類した。540は両側縁の表裏に二次加工が入り、先端部を作り出そうとする意図があるものとして石鏃未製品の可能性を想定した。541は調査区北東隅のベース土中から出土した石核である。大型の縦長剥片の裏面に、わずかに剥離面が認められることから石核に分類した。542は溜池状遺構北側のベース土中から出土した剥片である。厚さ2㎝程度の剥片を素材とし、打面調整を施した打面から連続的に横長剥片を剥離したものと想定できる。剥片背面には石核の底面が付着する。瀬戸内技法による剥片の可能性が想定されるが、類例はこの1点のみであることから断言は困難である。543は剥片である。原礫面を一部背面に留める。調査時の所見から後述する石器集中部から遊離したものである可能性が想定できる。544は楔形石器である。横長剥片を素材とし、上下端及び左側縁を使用したと想定できる。正面に後世の剥離痕が残る。545は石核である。同資料も調査時の所見から後述する石器集中部から遊離したものと想定できる。第57図546・547は機械掘削時に出土した楔形石器である。両者は接合することが確認できており、大型の剥片を素材に上下端・両側縁を用い、挟み撃ちにしたものが、途中で分割され、更に作業が進められたものと想定する。これらについても調査時の所見から石器集中部から遊離したものと想定できる。第58図は特に中世以降のものと想定される石器・石製品を図化した。548・549は火打石である。いずれも分割礫の稜線のほぼ全面を用いる。548はサヌカイト製であるが、549は暗灰青色で節理を多く含むチャートである。550・551は五輪塔である。552は砥石である。緑色片岩製である。



第55図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（4）

石器集中部（第59～64図）

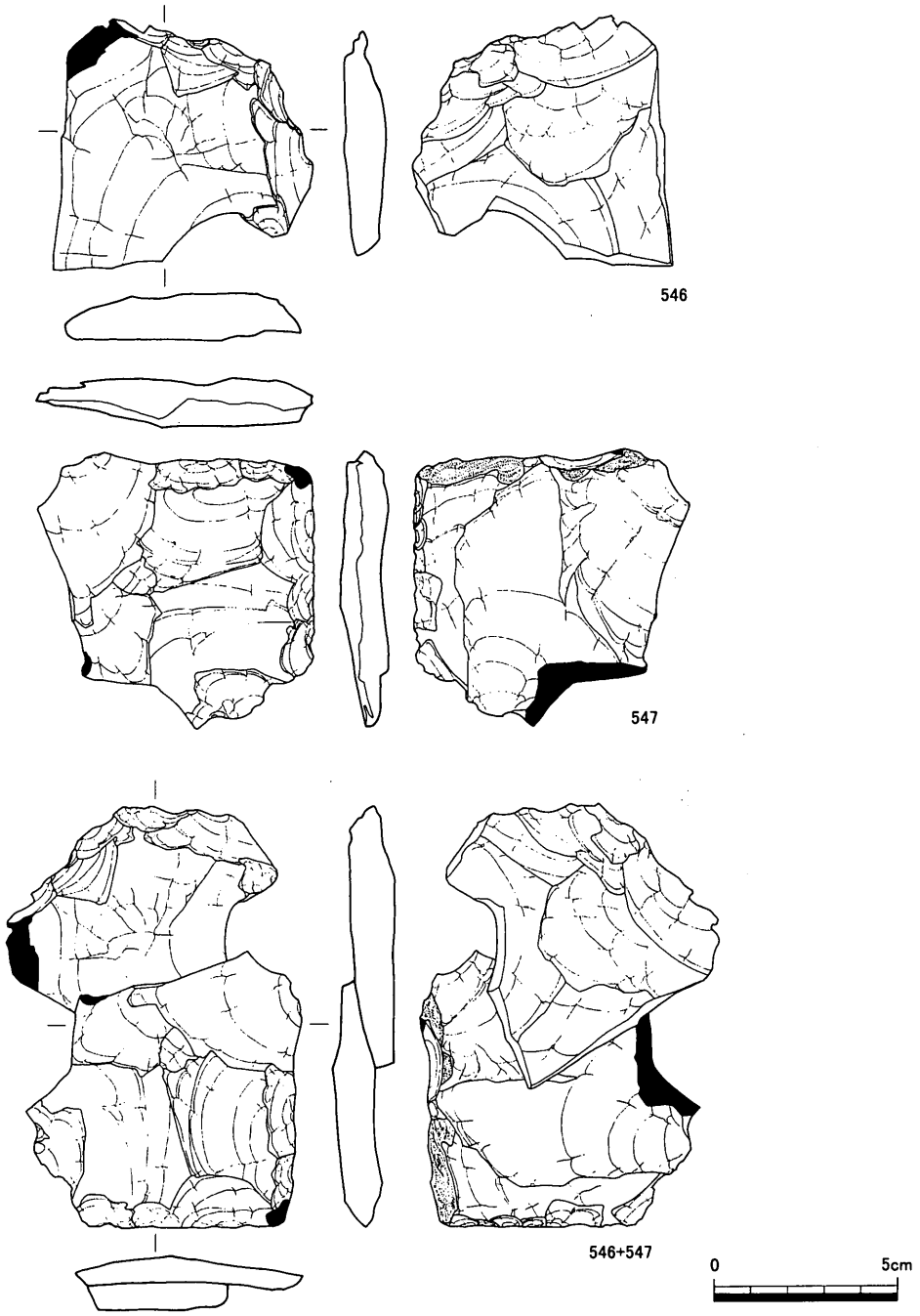
明瞭な遺構は捉えられなかったため、包含層扱いで報告する。調査区西壁中央付近で検出したものである。当初、機械掘削及び平面精査の段階で数点の剥片・楔形石器等がＳＤ03南岸付近の黄褐色粘質土中から集中して出土し、さらに土中にも数点の石器が見えていたことから、上面遺構の掘削がほぼ終了した段階で、下層遺構として調査を行なった。調査の方法は石器集中部東側に設置した基準杭（X=190.10、Y＝136.780）をもとに１ｍグリッドを設定した。グリッドの名称は基準杭を



第56図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（5）

基準とし、西へA．B．C．D、北へ１．２．３．４と記号を付け、その南東隅交点を持ってグリッド名とした。したがって基準杭の位置はＡ１となり、これを含むグリッドはＡ１となる。出土した遺物は原則として出土位置を記録した上で取上げた。対象となった遺物は40点であるが、この中に土器１点、礫１点、炭化物１点を含むため、石器の数は37点となる。石器はいずれもサヌカイトである。

石器の主たる分布範囲は第59図に示したが、Ｂ１～３・Ｃ１～３グリッドにまたがる南北2.50

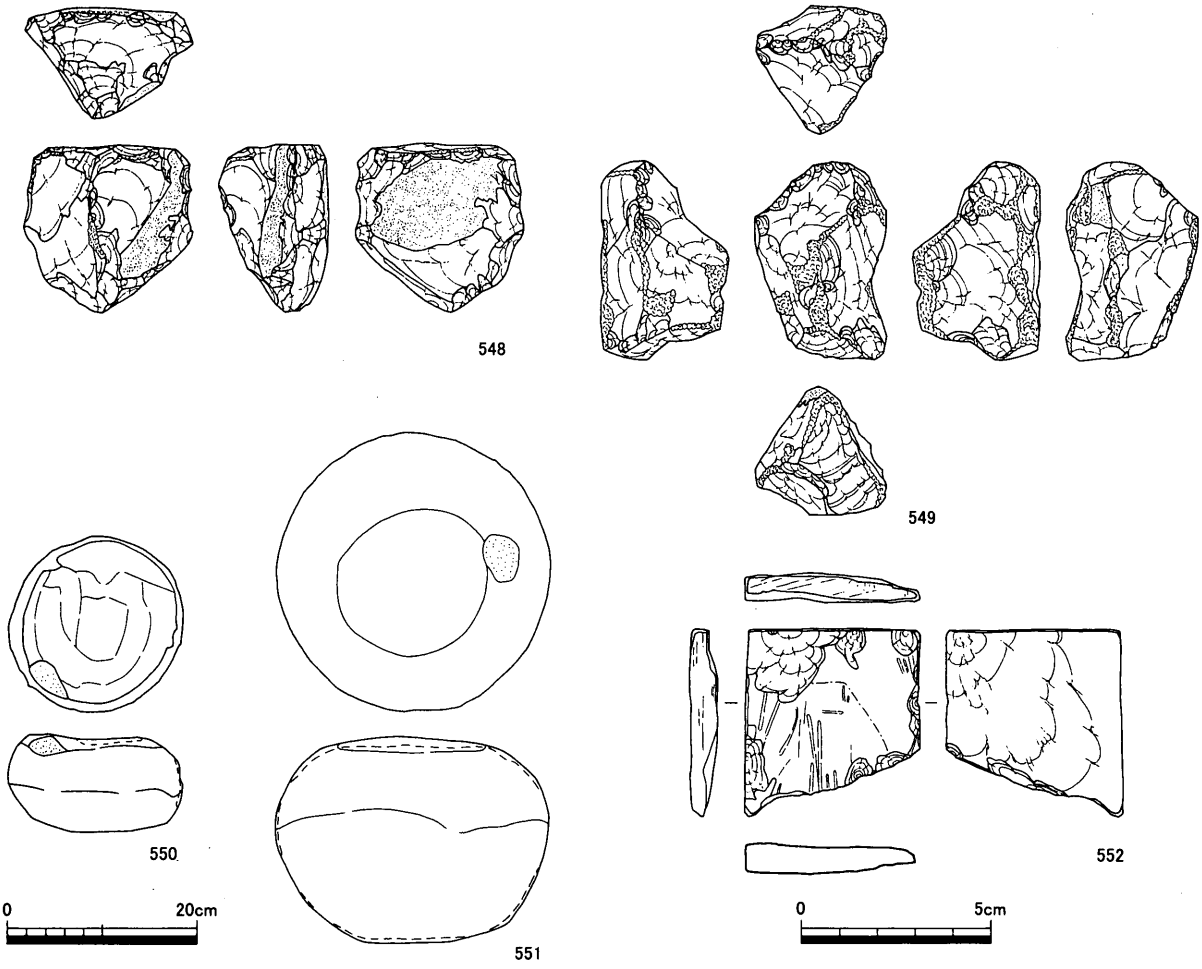


第57図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（6）

m、東西２mである。この主たる範囲から１mほど北西のＤ４・Ｅ４グリッドでもわずかに石器の分布を確認した。点数的にまとまるのは交点Ｃ２を中心とする半径１mの範囲である。細かく見ると、Ｂ１・Ｃ１グリッド出土のグループと、Ｂ２・Ｂ３・Ｃ２・Ｃ３グリッド出土のグループの間には約 0.50 mの空白が認められる。包含層の堆積状況は地形の傾斜に規制されるが、概ね水平堆積である（第 60 図）。２層に分層できる。石器の包含されていた範囲の地形は南から北、東から西へそれぞれ緩やかに傾斜する。遺物の出土レベルは11.231 m～11.565 mの範囲で出土している。あくまでも絶対高での比較になるが、最上位と最下位の差が 0.33 mを測る。

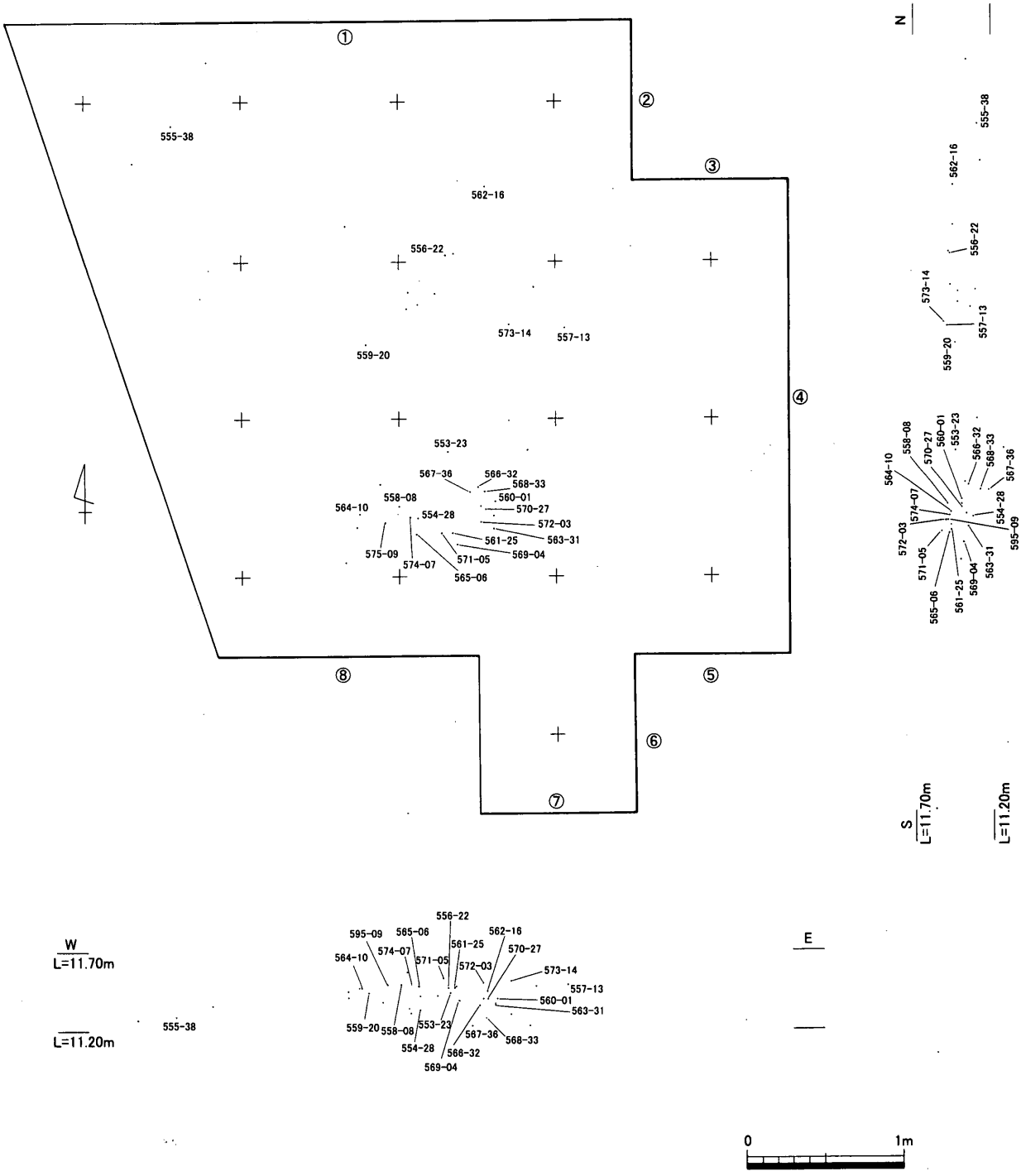
ここで検出した土器は１点のみであるが、第 61 図 553 に図化した。やや摩滅が著しいことと、小片であることから詳細は不明であるが、深鉢の口縁部の可能性を想定する。口縁部と見た場合、端部は丸く仕上げる。口縁部内面には明瞭な平坦面が形成される。器壁は約 1.8㎝ と厚手である。胎土はやや粗く、１㎜ 前後の石英を中心とする砂粒が多く含まれる。未報告資料ではあるが、隣接する詫間町本村で平成 12 年度に調査が行なわれた本村中遺跡において検出された縄文時代早期押型文土器に類似することから、本遺跡出土例も縄文早期の所産の可能性が想定できる。

石器の大半は剥片で 31 点、石核に分類したものは２点、砕片が４点である。定型石器は確認できなかった。代表的な資料を第 61 ～ 63 図に掲載した。554 ～ 563 は剥片に分類した。大半が不整形で、厚みのあるものが多い。打点が明瞭に確認できるのは 555・558 ～ 563 であるが、打面は不明瞭であ



第 58 図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図（7）

る。打面部を図示していないためわかりにくいが、打面が観察できる場合は、558・560・562・563例のように原礫面である場合がほとんどである。ほかのものは点打面ないしは線打面である。また、打点を観察できないものにおいても、剥片の背面の一部ないしはほぼ全面に原礫面を留める例が多い。なお、554・556・557のように打面を持たず、主要剥離面側に打点が観察できない例が若干散見され、本来は石核に分類する必要があるのかもしれないが、いずれにおいても折れ面を観察できる場所が認められることから、打面側を欠損している可能性を想定し、剥片に分類した。564は石核

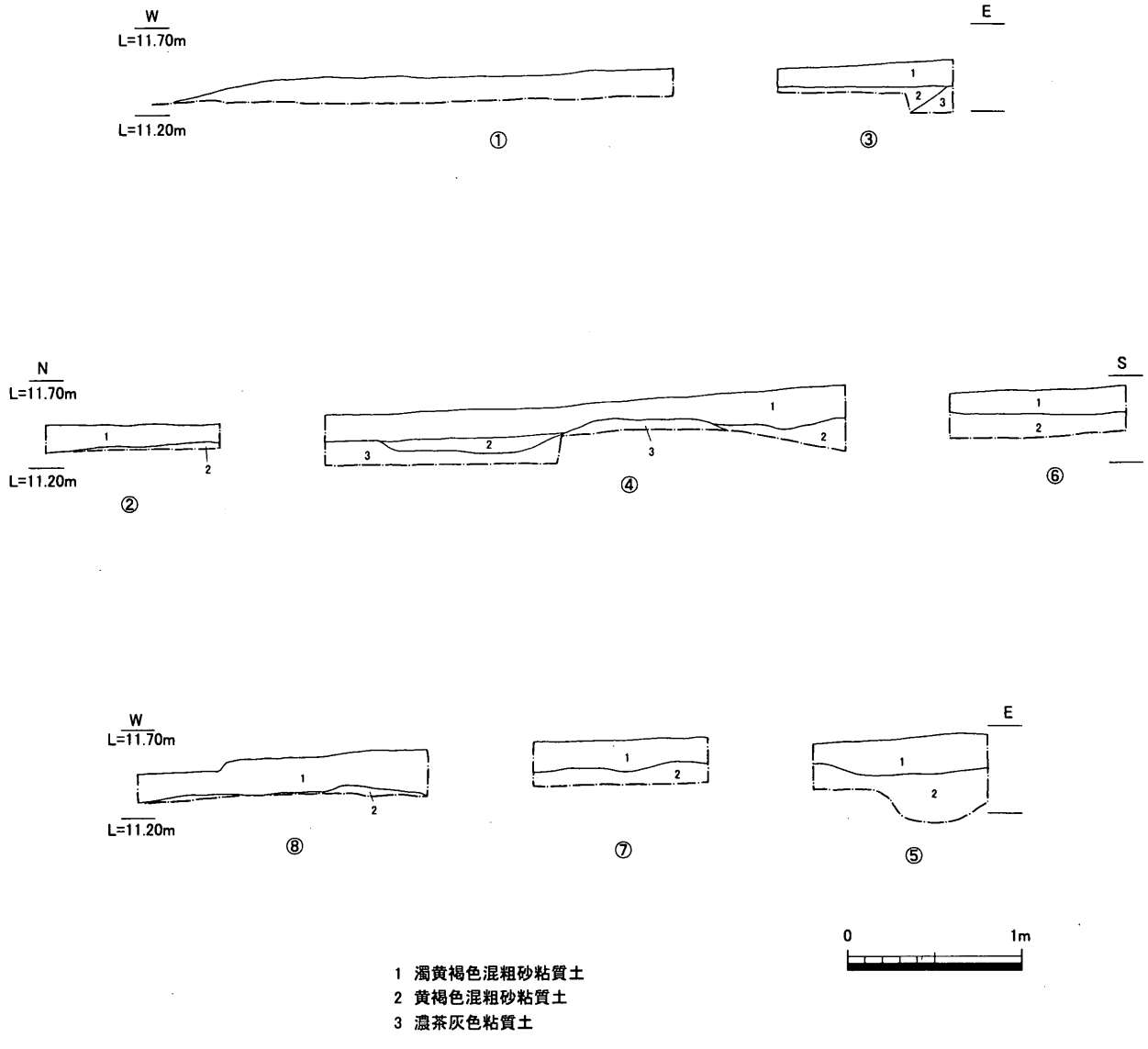


第59図　Ⅱ区　石器集中部遺物出土平面図

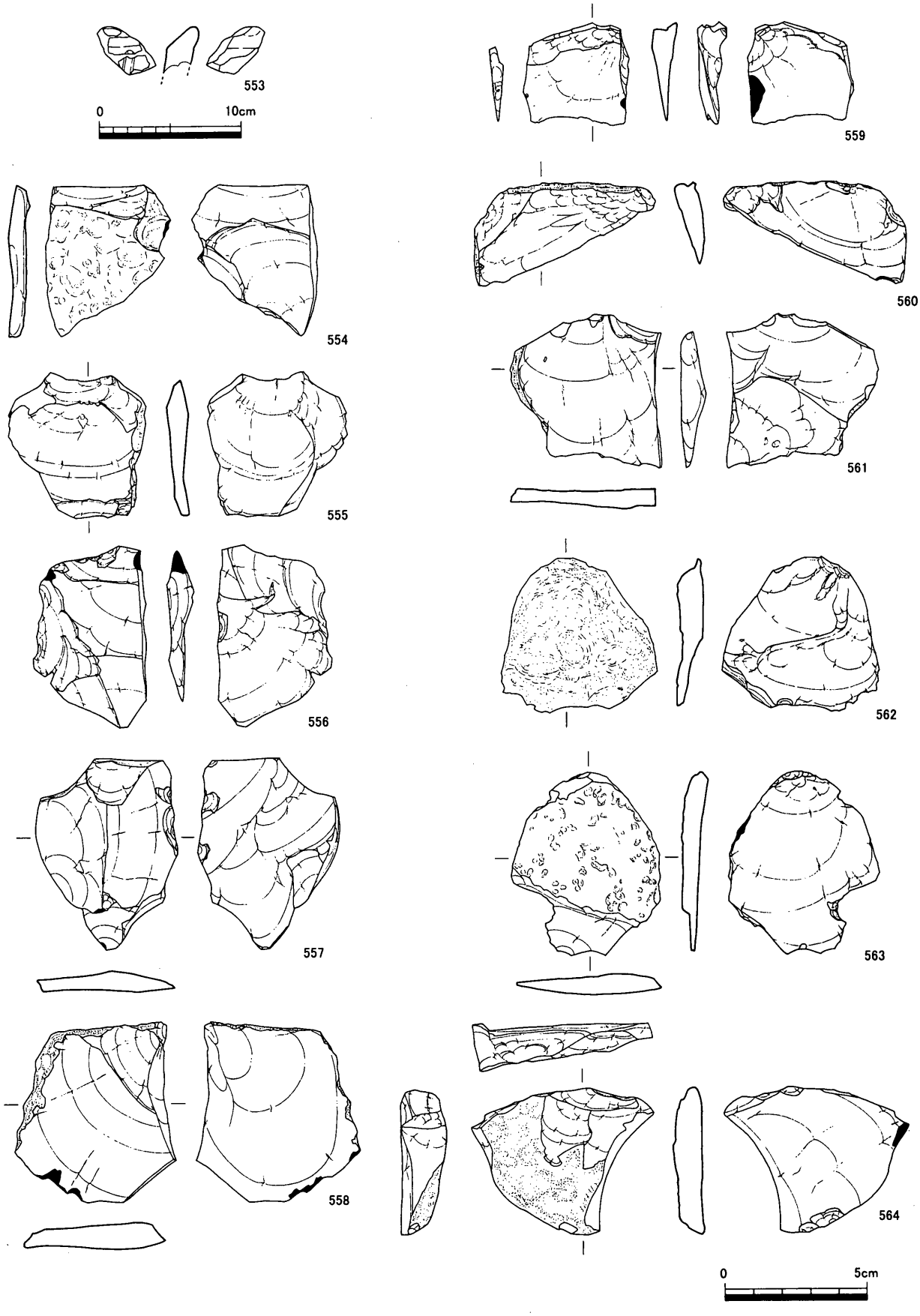
に分類した。厚さ２㎝前後の剥片を素材とし、図上端及び下端にわずかではあるが、加撃に伴うと見られる複数の小剥離痕が認められることから、台石等の上に置いてハンマー等で挟み撃ちにする、両極打法により剥片を得ようとしたものと想定する。ただし、明らかにこの作業に伴って剥離できた剥片は認められないことから、未遂に終わり放棄されたものと判断した。

第62図565～570は剥片である。比較的大型で打面が観察できるものを掲載している。566例を除くと厚手のものが主体となる。また、568例を除くと背面の一部ないしはほぼ全面に原礫面を留める。打面は点打面・線打面・礫面打面のものが認められる。線打面のものについては、バルブが複数確認できるものや、異なる方向からの加撃に伴うリングが取り込まれたものが認められる。570例はその顕著なものであるが、先行する石核への加撃によって生じた傷が主要剥離面に取り込まれているものと想定できる。第63図571は石核に分類した。564例と同じく、両極打法によるものと想定する。572～575は剥片である。

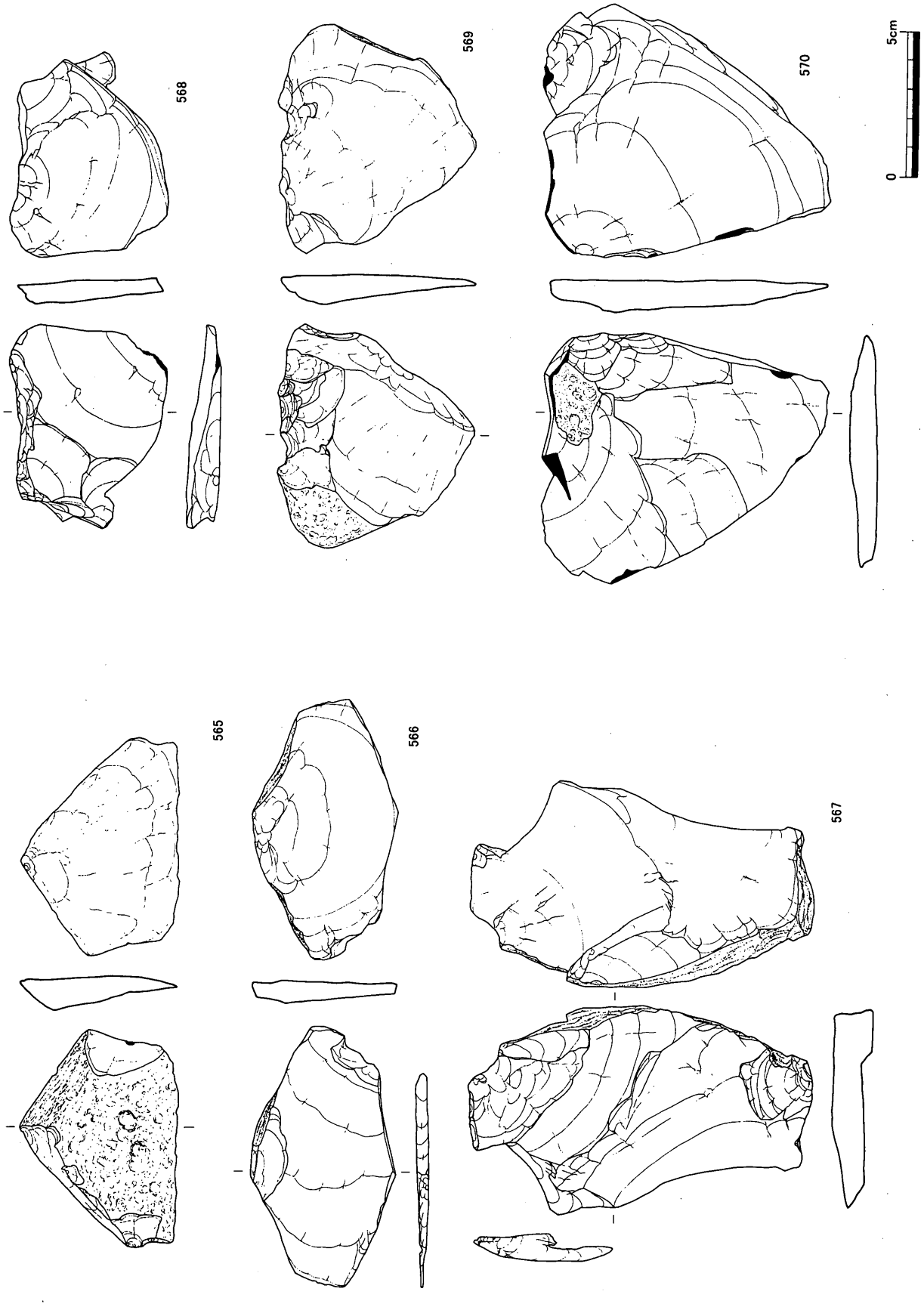
なお、この石器集中においては８点４群の接合例が確認できた。572・573と574・575は接合し、それぞれ１点の剥片（第63図　接合群①・②）に復元できる。共に剥片剥離時におけるねじれに伴



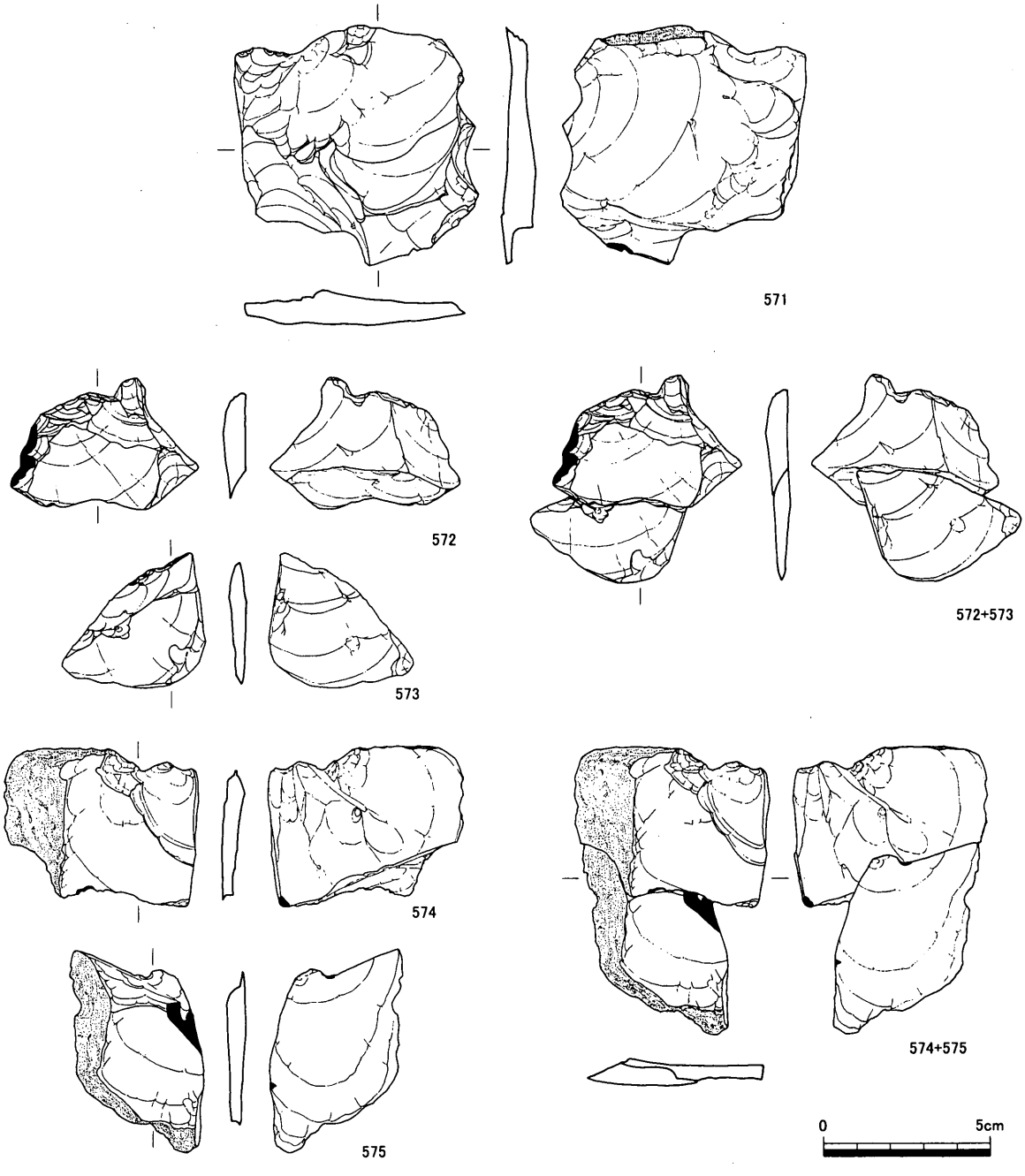
第60図　Ⅱ区　石器集中部土層図



第61図　Ⅱ区　石器集中部出土遺物実測図（1）



第62図　Ⅱ区　石器集中部出土遺物実測図（2）



第63図　Ⅱ区　石器集中部出土遺物実測図（3）

い折れた例であると判断する。ほかに、遺物接合図は図示していないが、小型の剥片が折れたものの接合例（接合群③）が認められるほか、571と小型剥片の接合例（接合群④）が認められる。出土したサヌカイトについては、砕片のため詳細観察不明なものを除き、肉眼観察の結果から概ね5個体程度に分類できる。個体群毎にその特徴を略記しておく。

個体群A

15点確認できた。接合群①・②・④を含む。暗灰色を基調とし、幅0.1～1㎜程度の灰白色の筋が複数、石理に平行して認められるものである。灰白色の筋はそれぞれ比較的間隔があくものと、基調となる暗灰色との縞模様を構成するものが認められる。暗灰色部分の多いものと少ないものの

差が認められるが、同一母岩の中での差異か。特に多いものを個体群Ａ´とした。

個体群Ｂ

８点確認できた。接合群③を含む。灰白色を基調とし、幅 0.1 ～ 1 ㎜ 程度の暗灰色の筋が複数、石理に平行して認められるものである。暗灰色の筋は、それぞれ比較的間隔をあけて入る場合が多いが、基調となる灰白色の縞模様を呈するものも認められる。

個体群Ｃ

３点確認できた。接合群は認められない。灰白色を基調とし、幅１㎜ 程度の白色の筋が、石理に平行して認められるものである。

個体群Ｄ

２点確認できた。接合群は認められない。灰白色を基調とするが、個体群Ｃよりも白色の度合いが強く、筋は見えない。風化が著しい個体である。従来、「白色風化サヌカイト」として報告されているものである。

個体群Ｅ

４点確認できた。接合群は認められない。暗灰色を基調とする。個体群Ａとほぼ同じ様相を呈するが、灰白色の筋の幅が広く認められる。

これらの個体群のうち、Ｃ・Ｄの２群を除くＡ・Ｂ・Ｅの３群については比較的似通った特徴を有することから、同一母岩の部位の差によって生じている可能性も想定される。

さて、当石器集中部についての特徴を簡単にまとめると、以下のようになる。

○石器の平面分布について

石器集中部は大きな目で見ると概ね南北 2.50 ｍ、東西２ｍの範囲におさまる規模である。細かく見るとこの中でさらに二分することが可能である。南側がややまとまりが明瞭で、24 点からなる。北側のまとまりは、やや散漫で 12 点からなる。ほかにこのまとまりから離れたところで２点の出土が認められる。以上から南北それぞれのまとまりを南群・北群と呼ぶ。群間の距離は約 0.50 ｍであるが、無遺物の空間が認められる。

○石器組成について

37 点からなる石器群の大半は剥片で、定型石器の存在は認められない。石核が２点出土しているが、機械掘削時に出土した 546・547 の楔形石器も石核の可能性がある。砕片の出土量は４点と少ない。調査中に掘削土の水洗選別を実施しなかったため定かではないが、微小遺物の回収に失敗している可能性がある。

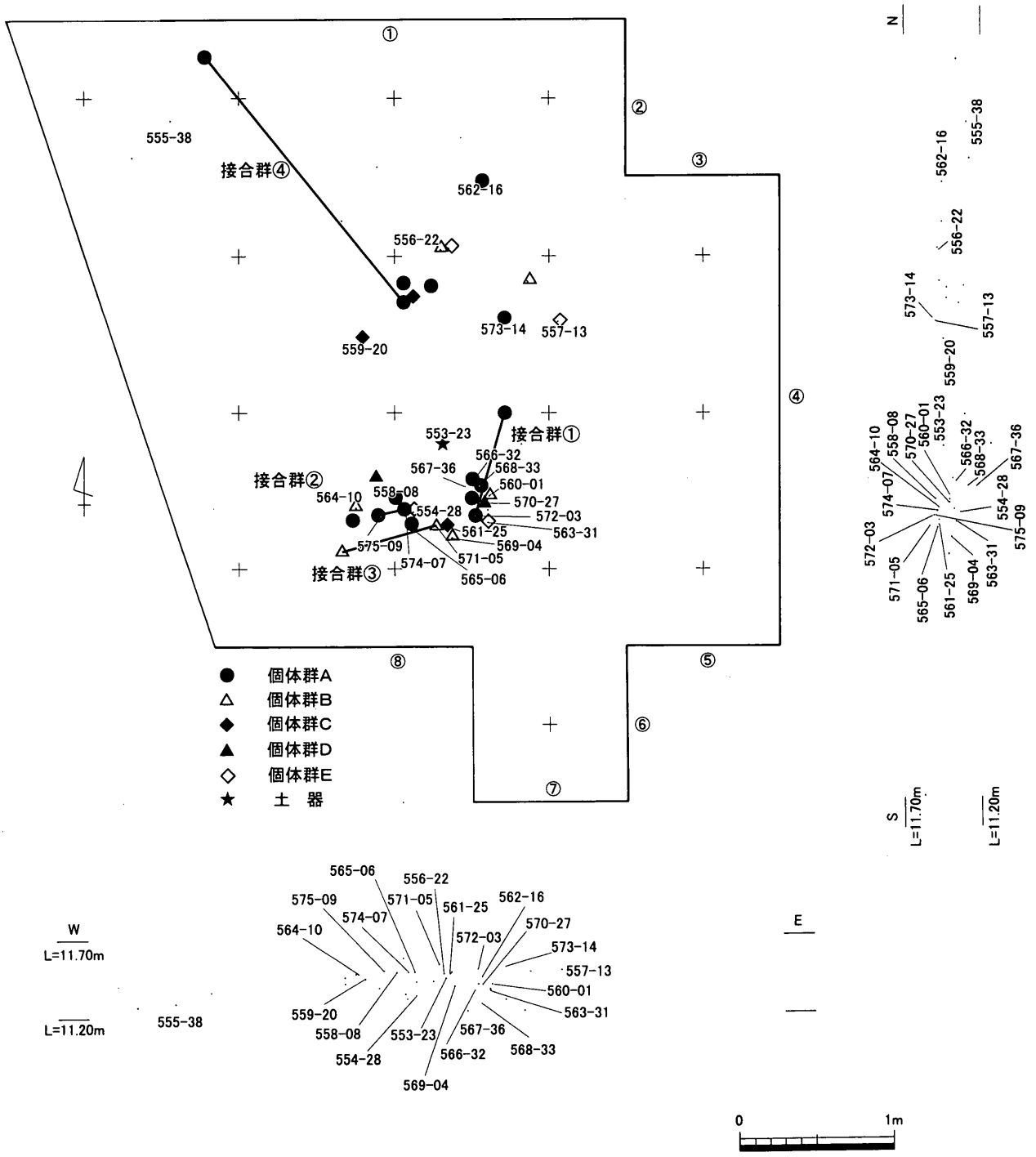
○石器の特徴

剥片・石核共に、一部あるいは背面の全てで原礫面の付着したものが多く認められる。剥片については線打面・点打点のものが一定量認められる。また、線打面のものは背面側に小さな剥離面が並列して多く認められる。同様のものは石核あるいは楔形石器の縁辺でも観察でき、縁辺稜線上には連続的な加撃に伴う潰れ痕が認められる。

○接合資料について

先述したとおり、８点４群の資料が確認できた。接合群③を除くと、いずれも剥片剥離時の捩れに伴い折損したものである。③は先行して剥離された剥片の先端が折れたものと石核との接合資料である。

①～③群は南群の中でまとまるが、④群は北群とさらに北の散漫な分布域との接合であり、まとまりを成さない。この④群で接合遺物間の距離が約２ｍである。①～③群は0.17 ～ 0.70ｍと遺物間



第 64 図　Ⅱ区　石器集中部個体識別資料分布及び接合関係図

の距離は短い。個体群との関連でみると、５群にグルーピングしたもののうち、接合資料が認められるのは構成資料の多いＡ・Ｂの２群に限られる。

上記の内容から、この石器集中部の性格は、比較的狭い範囲の中に少数ながら石器が集中し、剥片が主体を占めつつも枯渇しきったと見られる石核が遺存することから、小規模の剥片剥離作業が行なわれた場であると想定しておきたい。これを裏付けるものとして８点４群の接合資料の存在が挙げられる。また、礫表の付着した資料が比較的多く認められることから、作業工程の中でも最初期の段階の工程が行われていた可能性がある。細かい視点で見た際に、分布域が２ヶ所認められる点については、平面分布と接合資料のあり方から見ると、個体群の分布からは同一のまとまりである可能性をうかがわせるものの、北群と南群は有意なまとまりを形成しているように見える。

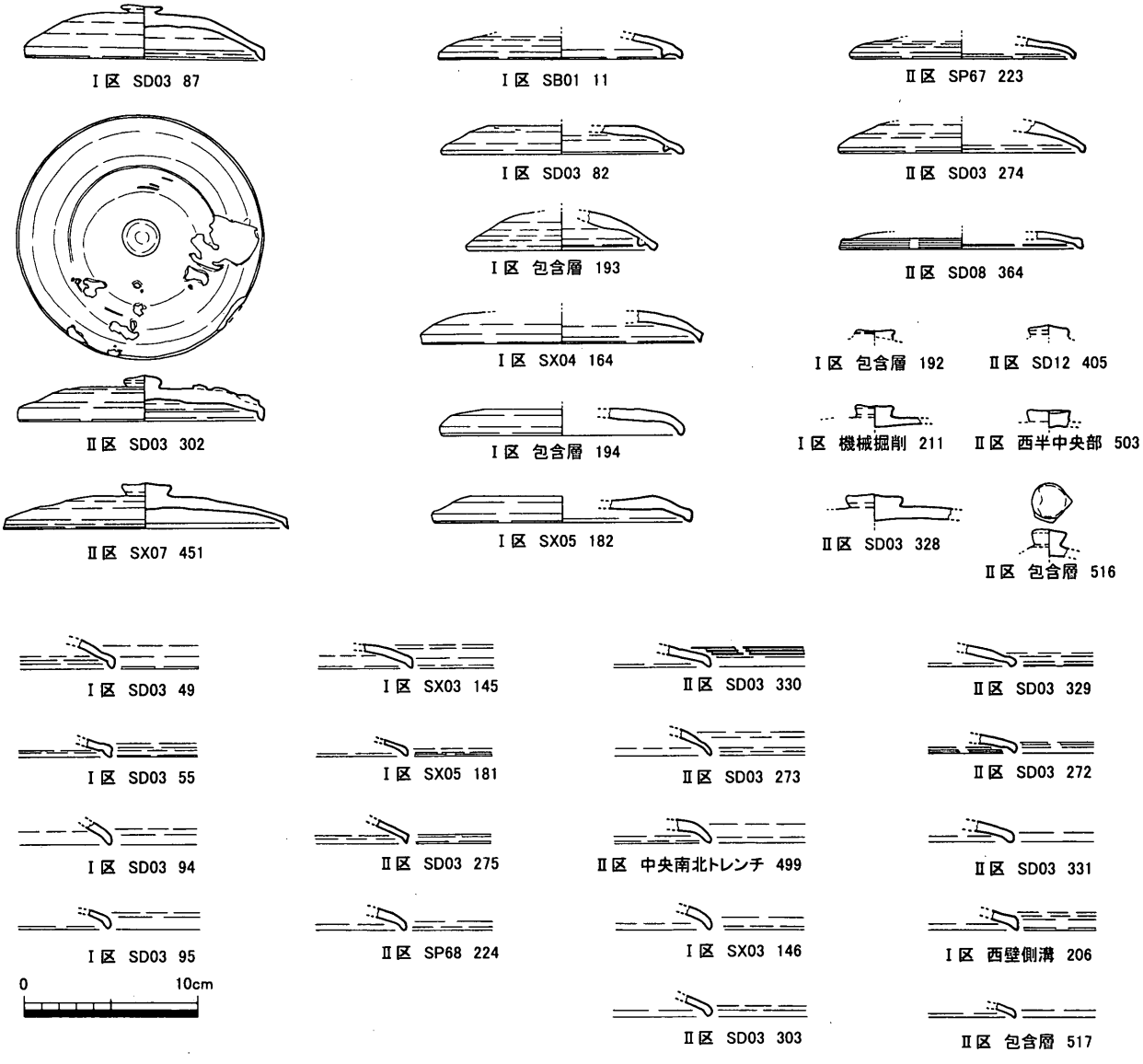
しかし、出土点数が少なく、特に砕片の出土量が剥片剥離作業を行なっていたにしては少なすぎることから、ほかの性格についても想定しておく必要があるのかもしれない。あるいは１点のみ土器の小片が出土していることを考えた場合、本来の剥片剥離作業の場から遊離したものが再堆積した、あるいは上面が著しく削平・削剥されたことも想定できよう。

第４章　まとめ

第１節　出土遺物の検討

当遺跡から出土した遺物について、特徴的な器種の概略を簡単にまとめておく。器種ごとに形態を把握するため、各遺構出土遺物を抽出した。ただし、残念ながら破片資料が中心であることから、正確な法量等のデータを得ることができないため、数値データによる比較方法ではなく、視覚的な特徴に頼っている点についてあらかじめお断りしておく。また、各挿図の番号は第Ⅲ章で用いた遺物の番号をそのまま用いた。

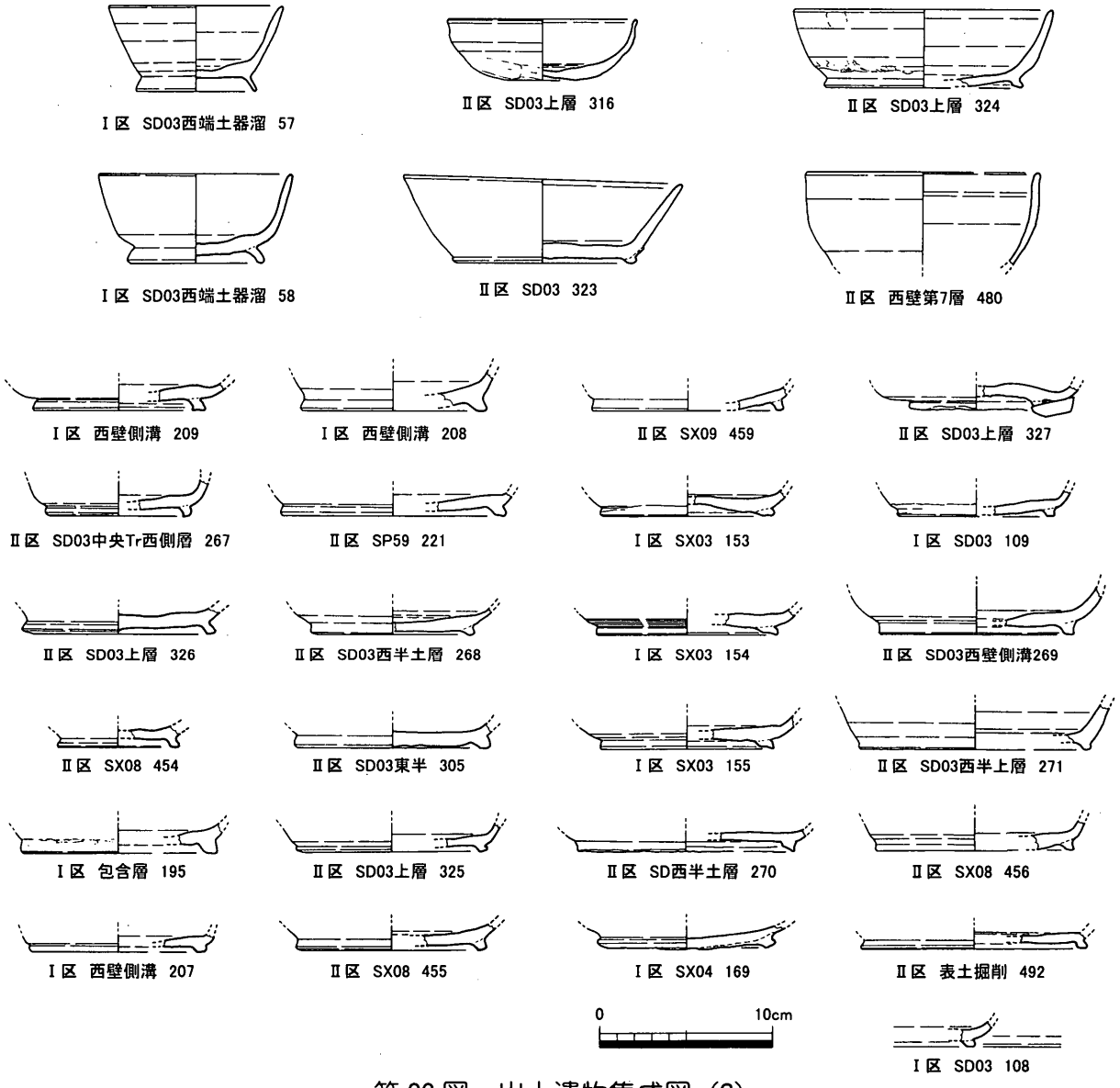
各遺構出土資料を概観する。第 65 図は須恵器坏蓋を集成した。87・302 はＳＤ 03 出土資料である。451 はⅡ区ＳＸ07出土資料であるが、ＳＤ03との重複が認められることから同資料はＳＤ03の



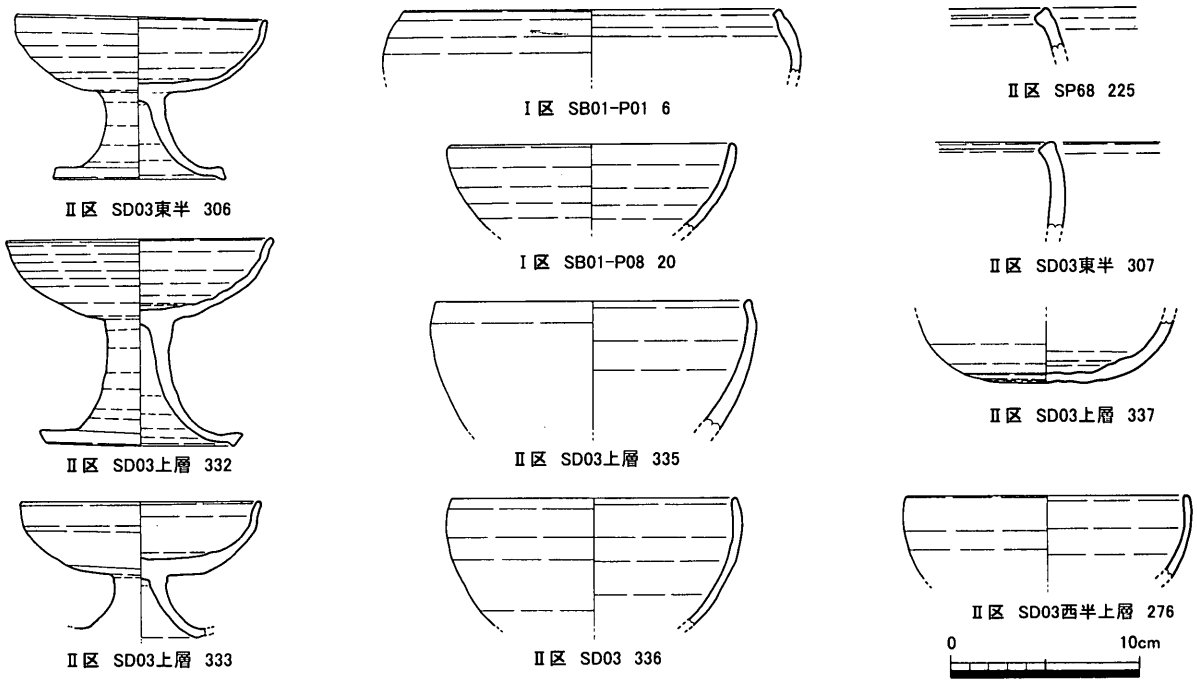
第 65 図　出土遺物集成図（1）

ものとみなすと言える。いずれも完形か完形に復元できる資料である。形状はやや甲高で傘状に盛り上がる87、傘状を呈するがやや扁平な451、扁平で天井部の平坦面が広い302に分けられる。口縁端部はいずれも明瞭に折り返し、内外面共に稜線が形成される。451はやや端部が外側へ広がる。摘みの形状は扁平である。ほかのＳＤ03出土資料に目を向けると、49・55・82・94・95・272～275・303・328～331が挙げられる。小片が中心であるが、ある程度完形資料で認められた特徴を備える。328例では451とほぼ同じ形状の摘みが認められる。そのほかの資料についても概ね類似した形状を取るが、516についてはやや小型で甲高の形状である。口縁端部の形状は比較的明瞭に折り返されるもの（49・55・94・95・275・330）が多いが、折り返しの不明瞭なもの（273）、折り返すが短いもの（329・272・331）等も認められる。そのほかの遺構出土遺物についても、同じ傾向が見て取れる。ここで注目しておきたいのが、内面にカエリの付いた事例（82）がＳＤ03において認められる点である。同様のタイプがＩ区ＳＢ01からも出土している（11）。また、Ｉ区包含層からは径の異なる古手のものと見られるもの（193）も認められる。

第66図は須恵器坏である。316の事例を除くと明瞭な無台のものが認められず、圧倒的に高台付のものが主体である。ただし、破片資料を主体とし、器形がほぼ確実なものを主として抽出したこ



第66図　出土遺物集成図（2）

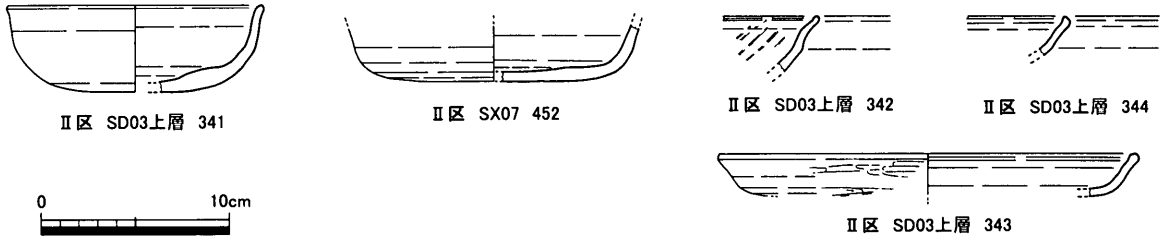


第67図　出土遺物集成図（3）

とから、皿と判断したものの中に無台坏が混入している可能性はある。ここでは概ね器形が確実と見られる高台付坏の特徴を見ておく。完形あるいはほぼ完形に復元できる事例は57・58・323・324の4例のみである。57・58はやや小型で深い器形を呈するのに対し、323・324は大型で相対的に見ると浅い器形を呈する。前者は比較的高く華奢な高台を有するが、当遺跡内ではこの2例のみがこのような高台の形状を取る。一方、323・324はやや低く外側へ踏ん張った高台を有し、大半のものが同様の形状を取る。この中で細かく見ると、高台の取り付く位置・高台の断面形状等で細分できそうであるが、全体の器形との関連が不明瞭であることから、ここでは細分は行わない。

480についても坏に分類はしたものの、台付椀の可能性が残る。

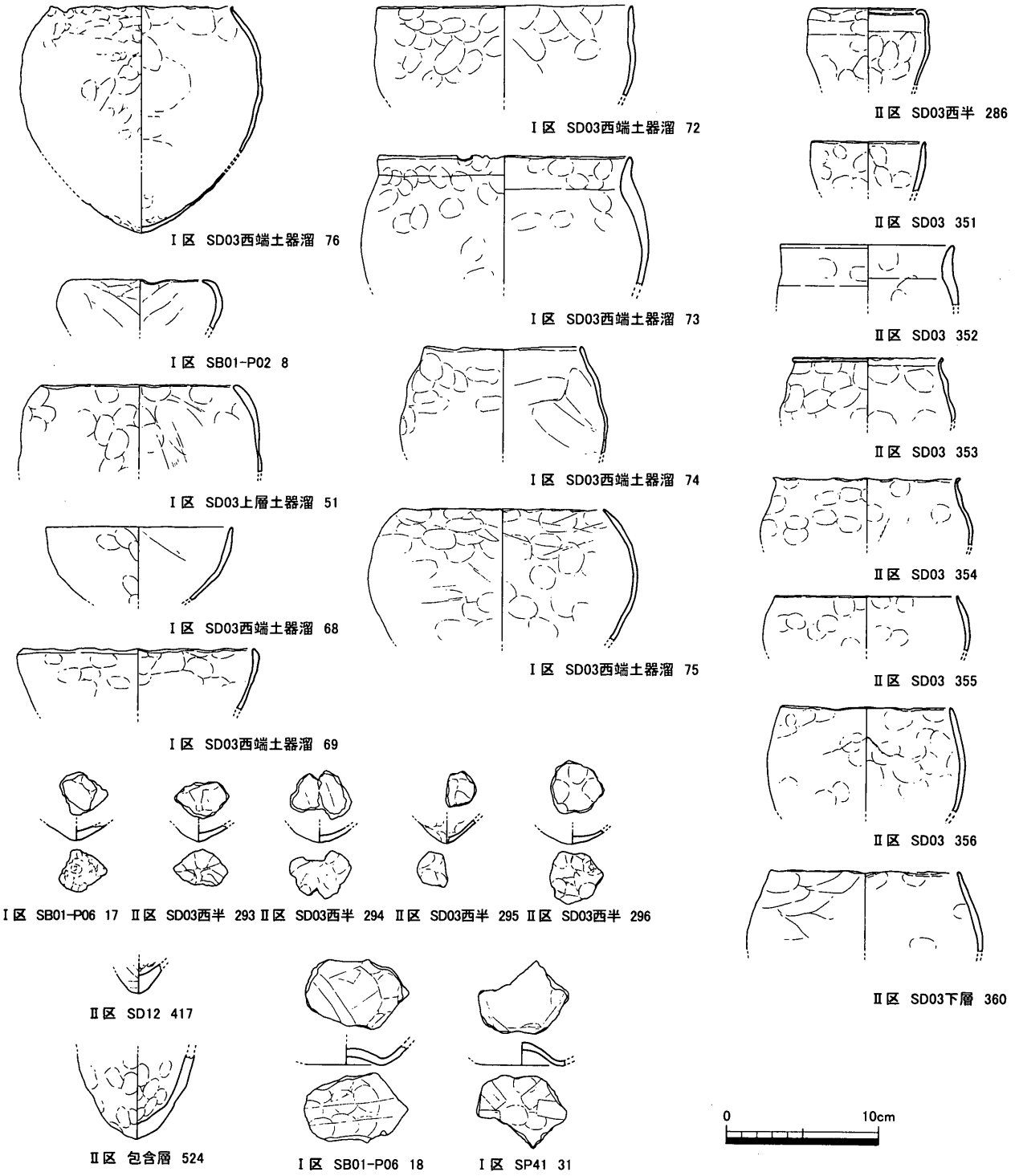
そのほかの器形について若干触れておく。器形がある程度判別できたのは高坏、鉢（第67図）である。高坏は短脚のもの（333）とやや長めの脚を持つもの（306・332）が認められる。鉢は比較的小型で深めのもの（335・336）が認められるが、底部が遺存しない。337は平瓶あるいは壷底部の可能性もあるが、当該器種の例がほかにないことから、鉢の底部と想定した。6は口径が大きく、内湾する形状をとる。鉄鉢形を呈するものと想定できる。225・307も小片ではあるが、口縁端部の形状から同じ器形が想定できる。



第68図　出土遺物集成図（4）

第68図は土師器供膳具を集成した。図化に耐え得るものが限られていたせいもあるが、須恵器供膳具と比べるとその数は圧倒的に少ない。粗い胎土を持ち、須恵器無台坏と器形の類似する341と、精製された胎土を持ち、外面の調整方法がいわゆる畿内産土師器に類似する342～344・452とに大別できる。ただし、後者は小片化しており、詳細不明である。また、出土遺構が基本的に包含層を除くとⅡ区ＳＤ03に限定される。唯一ＳＸ07からの出土が認められるものの、ＳＤ03を削平して掘削された落ち込みであることから、本来ＳＤ03に帰属していた遺物である可能性もある。

第69図は製塩土器を集成した。本遺跡から出土した遺物で最も数量が多く、中でもＳＤ03からの出土が顕著である。ただし、小片化が著しく、全体の器形を把握し難い。唯一ほぼ完形に復元で



第69図　出土遺物集成図（5）

きた資料が76である。尖底で口縁部が大きく内湾する形状を取る深鉢形を呈する。内外面共に指頭痕が目立つが、指オサエによる整形後、内面は指ナデや板ナデにより比較的平滑に仕上げられる。外面は指ナデで仕上げは粗い。ここで図示した破片資料の多くは、この器形に復元されると見ても差し支えないだろう。これらの口縁端部を観察すると、著しく波打っていたり、内面あるいは外面に捲れかえるものが多い。これは器壁が極めて薄いものが多く、著しい器形の変形を防ぐため内外面のいずれかに調整のウエイトを置いた結果、生じたものと見られる。大浦浜遺跡で出土した例と比べると、外面調整にタタキを用いた例が認められない点に差があるといえる。上記以外のものについても、口縁部の形状にバリエーションが認められ、内湾する体部を持ちながら大きく口縁を開く形状のもの（68・69）、直立気味の口縁を持つもの（72・286・351）が認められる。また、器壁が厚く、甕を思わせる器形を持つもの（73・352）もある。前２種については調整方法や器壁の厚さ等から76のパターン内に収まるものと想定できる。

底部の形状は基本的に76例同様、尖底を呈するものと考えられる。同じく尖底の形状を取るものの、器壁の厚さの点で異なる417・524例が認められるが、これは先述したものに後出する器形、大浦浜編年のⅥ類に相当すると考えられる。また、これとは別に上げ底の形状を取る18・31例も認められる。全体的に見た場合、主たる製塩土器の形状は大浦浜編年のⅣ－３類に相当するといえる。

第２節　遺構の帰属時期

全体的に見て、先述したＳＤ03を除くと、多量に遺物の出土を見た遺構は少ない。また、圧倒的に小片化したものが多く、全体の器形を窺い得るものが少ない。さらに、遺構の遺存状況もあまり良好とは言えない。これらは全て、後世の削平・削剥により著しく旧状が改変されていることに起因すると見られる。したがって、各遺構の時期を比定し得るだけの材料が乏しく、遺構の変遷についての検討は困難である。ある程度把握できる内容のみで、当遺跡内の変遷を概観しておく。

①弥生時代後期以前

古墳時代後期に先行する時期の遺構については、明確なものが認められない。柱穴や溝状遺構、包含層等で弥生土器の出土が見られるものの、古代以降の遺物との共伴であることから、混入であると判断している。なお、出土遺物から判断するのは困難ではあるものの、Ⅱ区西壁中央付近で、縄文時代早期に帰属する可能性のある石器集中部が確認できている。この周辺の包含層や、遺構内からもサヌカイト製石器の出土が認められるが、この石器集中部に起源するか否かについては、接合関係が認められないことから、否定的に見ておく。上記の石器集中部で行われた可能性のある剥片剥離作業は、残核や剥片の特徴から見ると、両極打撃によるものである。

②古墳時代後期

当遺跡内で時期の特定できた最も古い遺構は、６世紀後半以降の竪穴住居跡ＳＨ01・02である。調査区Ⅰ区西端で検出したものであるが、調査区西側に認められる谷、さらに基盤整備に伴う撹乱によって著しく削平されていることから本来的には調査区西側へ若干集落が広がっていた可能性が想定できる。また、谷の規模も往時は現状よりも小規模であったものと想定できる。Ⅱ区ではこの時期の遺構であると積極的に評価できるものはない。ただし、調査区が全体的に削平されている状況を考えると、本来は東の方へもある程度集落が広がっていた可能性が想定できる。２棟の竪穴住居跡は重複して検出されたが、ＳＨ02が先行することがわかった。この２棟はそれぞれ主軸方位を違えるが、両者に近似する主軸方位を持つものが認められる。ＳＨ01の主軸方位はＮ38°Ｗを測る

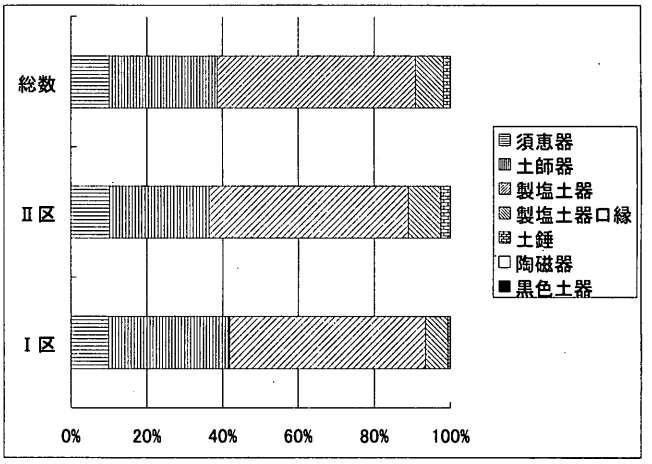
が、これに近似する主軸方位を持つ遺構は、[iii]ＳＢ01・02、ＳＤ09・12、ＳＸ05である。これらは主軸方位が概ねＮ34°Ｗ～Ｎ42°Ｗを測る。これに対し、ＳＨ02の主軸方位はＮ13°Ｅを測り、これとほぼ同じ軸を持つのはＳＨ03である　。これら軸のそろう遺構が必ず共時性を持つとは限らないことと、裏付けるためのデータが不足していることから、やや躊躇を覚えるものの、少なくとも、ＳＨ02・03については共時性のある遺構と見ておきたい。ＳＨ01とそのほかの遺構の関係については、少なくともＳＨ01は古墳時代後期に属するのに対し、ＳＤ09・12は古代以降の所産と想定できることから、溝は後出する遺構であるといえる。

	須恵器	土師器	製塩土器	製塩土器口縁	土錘	陶磁器	黒色土器
Ⅰ区	167	532	861	99	9	1	0
Ⅱ区	244	628	1258	204	60	0	2
総数	411	1160	2119	303	69	1	2

第２表　ＳＤ03出土遺物器種別点数一覧

③古代

当遺跡で主体をなすのは、明瞭な遺構に乏しいものの概ね７世紀末～８世紀にかけての時期である。この時期に概ね帰属させることが可能な遺構の分布はⅠ区北半及びⅡ区西半に集中し、Ⅱ区東半にはほとんど認められない。代表的な遺構はＳＤ03である。出土遺物に若干の幅があるものの、主体となる時期は概ね７世紀末～８世紀初頭のものと想定する。また、ＳＢ01も出土遺物からこの時期のものと想定できる。



第70図　ＳＤ03出土遺物器種別比率グラフ

ＳＤ03は上層と下層に分かれるが、下層は人為的に埋め戻されたような痕跡があり、遺物の出土はほとんどない。一方、上層は流水の痕跡が不明瞭な幅広で浅い落ち込み状を呈し、当遺構出土遺物の大半はここから出土した。遺物の出土点数[iv]を第２表に示した。破片数の単純な比較であることから、当時使用されていた器物を反映しているとは限らないし、各器種の詳細な内訳も反映されていないものの、圧倒的に製塩土器が多い。単純な比率だけ見ると、総数では須恵器10％・土師器約30％に対し、製塩土器は約60％を占める。調査区単位で見ても状況は差ほど変化しないことから、出土遺物の比率は総数で見ているものが、ＳＤ03の出土遺物の傾向を反映しているといっても差し支えなかろう。

では、このＳＤ03はいかなる性格として位置づけるべきか。本来の溝の機能については、丘陵の稜線に対して直交して掘削されている点と、溝全体を通じて埋土中に流水環境にあったことを示す砂質土の堆積が認められない点から、何らかの導水施設としては想定し難い。この溝の北側は標高が若干下がるが、この部位に近い時期に建てられていたＳＢ01が存在することを考えると、ＳＤ03はより標高の高い南側からの雨水等を排水するために掘削されたものの可能性が想定できる。その後、数箇所において製塩土器片を主体とする土器溜りが形成されていたことを考えた場合、本来の

ii　ＳＤ09･12、ＳＸ05はいずれも東西方向に主軸を持つが、ＳＢ01･02の主軸を南北方向で設定したため、前者の各遺構については本来の主軸に直交した軸で表記している。

iii　共に依存状況が不良であることから定かではないが、東壁の軸を遺構の主軸として扱った。

iv　遺物点数の計上は、１cm角以上の破片を対象に行った。

溝としての機能を失った後に、ゴミ捨て場として再利用された状況を想定しておきたい。

ところで、このＳＤ03を主体として大量に出土した製塩土器の存在から、当遺跡が製塩関連の遺跡である可能性がある。調査区全体、特にⅡ区のＳＤ03や周辺包含層等において被熱痕を留める礫が多く認められ、遺跡周辺で火を用いる行為がなされたことが窺えるが、これに伴う遺構が認められない。唯一、ＳＸ08が炭化物・焼土片等を多く含む埋土を持つが、床・壁面等に被熱の痕跡は認められない。もっとも、遺跡の立地が丘陵上にあることから、ここで煎熬の工程を行ったとは考え難く、せいぜい行っていても焼塩を生産する工程程度であろう。丘陵裾の海岸で煎熬の工程が行われた後、生成された塩付きの土器を丘陵上へ搬入し、そこで生成塩を土器から遊離させる等の作業が実施されたと想定しておく。ＳＤ03出土の製塩土器片はこの作業の残滓であろう。

当遺跡は令制の三野郡に嵩しており、「和名類聚抄」の編纂された時期には三野郡高瀬郷に属していた。これよりも古い時期には「阿麻郷」が郡内に存在したことが、平城京左京二条二坊・三条二坊出土の木簡から知られる 。この「阿麻郷」が記載された木簡は２例確認されており、１点はＳＤ5100出土の「讃岐国三野郡阿麻郷戸主佐伯直赤猪調塩三□〔斗〕」の記載が見られる荷札木簡、もう１点はＳＤ5300出土の「讃岐国三野郡阿麻郷○丸部・宮目戸同丸部古君塩三斗」の記載が見られる荷札木簡である。これらの木簡が出土した溝は、ほかの記年銘木簡から８世紀初頭の時期のものであることがわかっている。この時期はＳＤ03出土遺物の時期と近いことから、何らかの関連をも想定できよう。ただし、上記の「阿麻郷」についての遺称地は判明しておらず、９世紀代にはいずれかの郡に併合・吸収された可能性が想定できる。この「阿麻郷」はほかの表記例から、「海人」・「海部」・「海士」・「海」に通ずると考えられ、三野郡でも海浜部を取り込んだ郷であったと想定できる。西久保谷遺跡の立地は海浜部に位置することから、平城京へ搬出するための塩業の一端を担っていた可能性がある。ただ、ここでの土器製塩は生業の主体であったとは現状では想定し難い。出土遺物の比率の６割を占める製塩土器片の出土を見たとは言え、消耗品である製塩土器の出土量としてはあまり多いとは言えない。出土遺物中にイイダコ壷・土錘といった漁撈具が若干認められることから、塩業・漁業を併せて生業としていた可能性もある。いずれにしても、これらの遺物を遺した人々の集落の姿が想定し難いのが現状である。

④中世

当遺跡においてこの時期の遺構はやや不明瞭である。現状ではⅠ区には当該期の遺構は遺存しない。Ⅱ区は東半を中心に、概ね中世後半期のものと見られる遺構が散見される。主たる遺構は溜池状遺構である。最終埋没は近世中葉と見られる。

⑤近世

Ⅱ区南壁際中央付近を中心に、当該期のものと見られる遺構が点在する。建物跡等の存在は不明瞭であるが、18世紀代に瓦葺の建物が存在したようで、ＳＫ04・06、ＳＤ10等からこの時期の瓦・陶磁器等が比較的多量出土している。先述した溜池状遺構の最終埋没層に同時期のものと見られる瓦が包含されていたことから、近世中頃以降には周辺は更地になっていたものと想定できる。

---

v 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995　奈良県教育委員会

引用・参考文献

三野町誌編集委員会編　『三野町誌』 1980　三野町役場

渡部明夫　「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』 1980

香川県教育委員会編　『新編　香川叢書　考古編』 1983　香川県教育委員会

松本敏三・岩橋孝　「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅰ」
『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要　第１号』 1984　瀬戸内海歴史民俗資料館
「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」
『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要　第２号』 1985　瀬戸内海歴史民俗資料館

真鍋昌宏他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二冊　大門遺跡・矢ノ岡遺跡・利生寺遺跡・利生寺古墳・北条遺跡・道免窯跡』 1987
香川県教育委員会・日本道路公団

片桐孝浩　『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』 1992　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

西村尋文・塩崎誠司　『埋蔵文化財試掘調査報告ⅩⅡ　香川県内遺跡発掘調査』 1999
香川県教育委員会

大山眞充　『瀬戸大橋建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　大浦浜遺跡』 1988
香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団

白川雄一　『三野町埋蔵文化財発掘調査報告　第１集　宗吉瓦窯跡』 2001
三野町教育委員会

信里芳紀　『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小谷窯跡・塚谷古墳』 2002　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

谷若倫郎・楠真依子・山崎友紀編　『糸大谷遺跡―来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第２集―』
1996　財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

毛利光俊彦編　『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告―長屋王邸・藤原麻呂邸の調査―』 1995　奈良県教育委員会

報告書抄録

ふりがな	けんどうたかまつしどせんおよびけんどうまるがめたくまとよはませんけんせつにともなう まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく はないけじりきたいせき・にしくぼたにいせき
書名	県道高松志度線および県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告 花池尻北遺跡・西久保谷遺跡
副書名	
巻次	平成16年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小野秀幸
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762－0024　香川県坂出市府中町南谷5001-4　　TEL　0877-48-2191
発行機関名	香川県教育委員会
発行年月日	2005(平成17)年10月31日

総頁数	目次等	本文	表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数
150	11	54	2	－	115	450（全てCD内）	2

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
花池尻北遺跡（はないけじりきたいせき）	香川県さぬき市志度	37306		34°18′48″	134°10′25″	19991001～20000131	2,017㎡	県道高松志度線建設に伴う調査
西久保谷遺跡	香川県三豊郡三野町大見	37423		34°13′59″	133°42′23″	20000401～20000731	2,400㎡	県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花池尻北遺跡	集落跡	弥生時代後期	自然河川	弥生土器	
		平安時代後期	掘立柱建物跡・土坑・土器溜り	須恵器・土師器	
		鎌倉～室町時代	掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝状遺構	須恵器・土師質土器 瓦器・黒色土器・陶磁器 火打石・鉄製品・鉄滓	
西久保谷遺跡	集落跡	縄文時代	石器集中部	縄文土器・石器	
		古墳時代後期	竪穴住居跡	須恵器・土師器・石製品	
		奈良時代	掘立柱建物跡 溝状遺構 性格不明遺構	須恵器・土師器 製塩土器 漁撈具	
		鎌倉～室町時代	溜池状遺構	土師質土器・陶磁器	
		江戸時代	土坑・溝状遺構	土師質土器・陶磁器・瓦・五輪塔など	

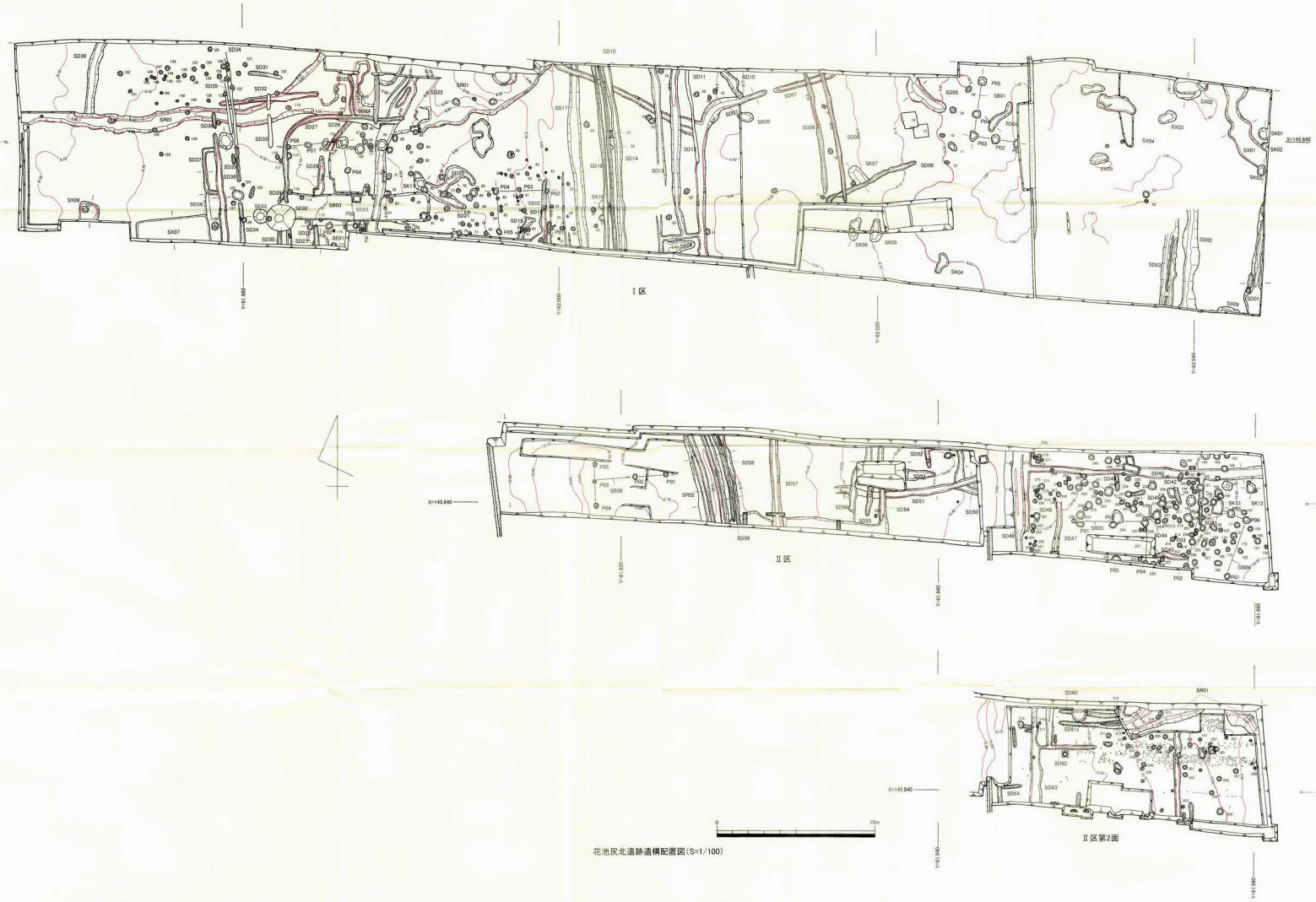
県道高松志度線及び県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

花池尻北遺跡
西久保谷遺跡

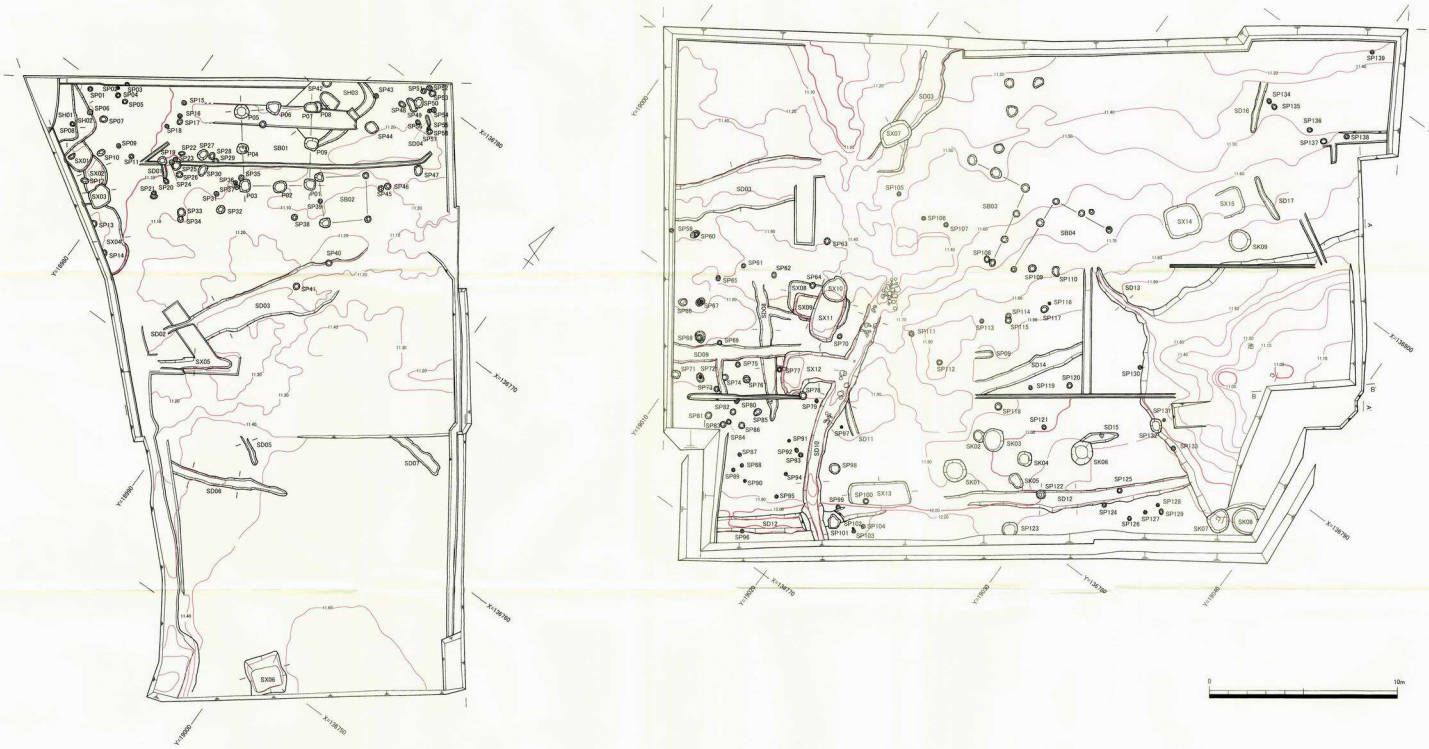
平成 17 年 10 月 31 日発行

編集　香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024　香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
電話　(0877) 48 − 2191 (代表)

発行　香川県教育委員会
印刷　ナカハタ印刷株式会社



花池尻北遺跡遺構配置図(S=1/100)



西久保谷遺跡遺構配置図(S=1/100)